大宰府史跡

平成2年度発掘調査概報



平成3年3月

九州歴史資料館

大宰府史跡

平成2年度発掘調査概報

平成3年3月

九州歴史資料館

序

大宰府史跡の発掘調査は、本年第4次5ケ年計画の第4年次を迎えた。第4次5ケ年計画は、史跡観世音寺境内および子院跡を発掘調査の対象として進めてきた。今年度は、講堂跡など中心伽藍の堂塔の発掘調査を実施する計画で着手したが、諸般の事情から予定どおり進行できていない。為に本書では、東面築地推定地・南面築地推定地の調査結果を中心に報告する。

これまでご指導を賜っている大宰府史跡調査研究指導委員会の委員各位、また、境内地の発掘調査に理解を示された観世音寺御住職石田琳圓氏に深甚の謝意を表する次第である。

平成3年3月31日

九州歴史資料館長　田　村　圓　澄

例　言

1．本概報は平成２年度に福岡県が国庫補助を受けて九州歴史資料館が実施した大宰府史跡発掘調査の概報である。ただし第121次調査は平成元年度に実施した調査であるが、未報告であるので報告する。また、第127次・128次調査については顕著な遺構が検出されなかったので報告は割愛した。

さらに、第126次調査については現在出土遺物整理中であるので、報告については次年度にゆずる。

2．遺構実測図は国土調査法第II座標系をもとに基準点を設けて作成した。(昭和51年度発掘調査概報参照)

3．検出遺構および出土遺物については大宰府史跡調査研究指導委員の指導と教示を得た。

4．検出した鋳造遺構については須恵中学校の遠藤喜代志教諭の教示を得た。

5．遺構・遺物の写真はすべて学芸第一課の石丸洋の撮影による。

6．本概報の執筆、編集は調査課の栗原和彦、橋口達也、横田賢次郎、赤司善彦、吉村靖徳、学芸第一課の倉住靖彦が行った。また遺物の整理については齋部麻矢、田崎道子、大田千賀子、小西恵子の協力を得た。

目　次

序
I　調査計画……1
II　調査経過……2
1　概要……2
2　第121次調査……5
検出遺構……5
出土遺物……12
小結……36
3　第122次調査……39
検出遺構……39
出土遺物……45
小結……73
4　第123次調査……75
検出遺構……75
出土遺物……76
小結……77
5　第124次調査……78
検出遺構……78
出土遺物……79
小結……87
6　第125次調査……91
検出遺構……92
出土遺物……92
小結……93

挿 図 目 次

第１図　大宰府史跡発掘調査地域図……折込
第２図　第121次調査遺構配置図 ……折込
第３図　第121次調査　掘立柱建物掘形断面図 …… 7
第４図　SE3645実測図 …… 9
第５図　SE3658実測図 ……10
第６図　SX3640実測図 ……11
第７図　SD3630出土土器・陶磁器実測図(1) ……13
第８図　SD3630出土土器・陶磁器実測図(2) ……14
第９図　SD3619・3629・3637・3649出土土器・陶磁器実測図 ……16
第10図　SK3644出土土器実測図 ……18
第11図　SK3614・3634・3643・3646・3657出土土器実測図 ……20
第12図　SX3618・3632・3635・3639出土土器・陶磁器実測図 ……22
第13図　SX3638・3652出土土器実測図 ……23
第14図　SX3650出土土器・陶磁器実測図 ……24
第15図　SX3655出土土器実測図(1) ……26
第16図　SX3655出土土器実測図(2) ……27
第17図　SX3655出土土器実測図(3) ……28
第18図　茶褐色土層出土土器実測図……29
第19図　濁茶色土層・黄灰色土層出土土器・陶磁器実測図……31
第20図　SX3635出土軒瓦拓影 ……33
第21図　SX3650出土木製品実測図 ……34
第22図　各遺構・層位出土金属製品・鋳型実測図……34
第23図　銅銭拓影……35
第24図　各遺構・層位出土土製品・石製品実測図……35
第25図　ガラス玉実測図……36
第26図　Ⅰ期遺構配置図……37
第27図　第122次調査遺構配置図 ……折込
第28図　第122次調査　SB3660・3665柱掘形断面図……41
第29図　SE3680実測図 ……43
第30図　SE3685実測図 ……44

第31図　SE3690実測図 ……45
第32図　SB3675出土土器・土製品実測図 ……45
第33図　SD3663・3664・3666・3667・3668・SE3685・3690出土土器・陶磁器実測図 ……46
第34図　SE3680出土土器・鞴羽口実測図(1) ……48
第35図　SE3680出土土器実測図(2) ……49
第36図　SK3672出土土器・陶磁器実測図(1) ……51
第37図　SK3672出土土器・陶磁器実測図(2) ……52
第38図　SK3678・3697出土土器実測図 ……53
第39図　SX3682出土土器実測図 ……55
第40図　最下層・暗褐色土下層・茶褐色土層・暗褐色土層出土土器・陶磁器実測図……56
第41図　SE3680出土軒丸瓦拓影・実測図 ……59
第42図　SE3680出土軒平瓦拓影・実測図 ……60
第43図　SE3680出土丸瓦拓影・実測図(1) ……61
第44図　SE3680出土丸瓦拓影・実測図(2) ……62
第45図　SE3680出土平瓦A拓影・実測図 ……64
第46図　SE3680出土平瓦B拓影・実測図 ……65
第47図　SE3680出土平瓦C拓影・実測図 ……66
第48図　SE3680出土平瓦D拓影・実測図 ……67
第49図　SE3680出土木製品実測図(1) ……70
第50図　SE3680出土木製品実測図(2) ……71
第51図　各遺構・層位出土土製品・石製品・金属製品実測図……72
第52図　観世音寺伽藍配置想定図……74
第53図　第123次調査遺構図 ……75
第54図　SB3700柱掘形断面図 ……75
第55図　SX3701・SX3702出土土器・陶磁器・塩壺実測図……76
第56図　出土軒瓦拓影……77
第57図　第124次調査遺構図 ……78
第58図　SD2340土層断面図 ……79
第59図　SD2340出土土器実測図(1) ……80
第60図　SD2340出土土器実測図(2) ……81
第61図　SD2340出土土器・陶磁器実測図(3) ……82
第62図　出土軒瓦拓影……83
第63図　SD2340出土木製品実測図 ……87

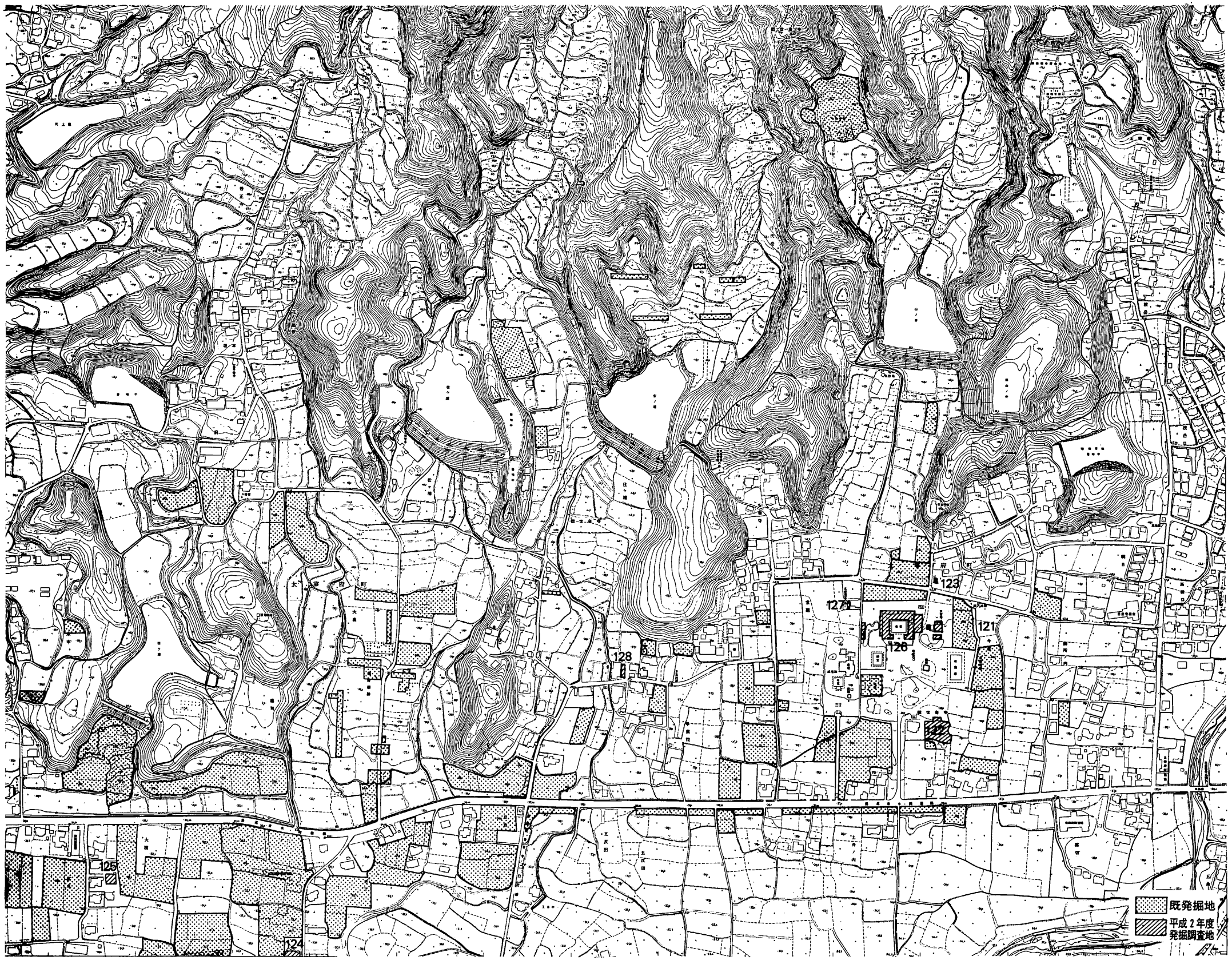
第64図　不丁地区遺構配置図……88
第65図　第125次調査遺構配置図 ……91
第66図　SK3705・3707・3708・3709・茶灰色土層出土土器・陶磁器実測図 ……93

図　版　目　次

図版 1　第121次調査区全景（空中写真）
図版 2　第121次調査区中央部（空中写真）
図版 3　（上）　掘立柱建物SB3610（空中写真）
　　（下）　掘立柱建物SB3615・柵SA3623（空中写真）
図版 4　（上）　第121次調査区全景（北から）
　　（下）　掘立柱建物SB3610（東から）
図版 5　（上）　掘立柱建物SB3615（西から）
　　（下）　掘立柱建物SB3620（南から）
図版 6　（上）　柵SA3625（南から）
　　（下）　柵SA3623・3622（東から）
図版 7　掘立柱建物SB3615・3620柱掘形
図版 8　（上）　溝SD3630（南から）
　　（下）　井戸SE3645（北から）
図版 9　（上）　井戸SE3658（西から）
　　（下）　土壙SX3626（南から）
図版10　（上）　鋳造遺構SX3640（東から）
　　（下）　同上近影
図版11　（上）　鋳造遺構SX3640断面（東から）
　　（下）　鋳造遺構SX3640（遺構切り取り後）
図版12　第122次調査区と観世音寺境内（空中写真）
図版13　（上）　第122次調査区全景（空中写真）
　　（下）　掘立柱建物SB3660・3665（空中写真）
図版14　（上）　第122次調査区全景（東から）
　　（下）　同上（北から）
図版15　（上）　掘立柱建物SB3660・3665（北から）
　　（下）　第122次調査区北側拡張区（南から）
図版16　掘立柱建物SB3660・3665柱掘形

図版17　（上）　溝SD3666・石列遺構SX3662（北から）
（下）　井戸SE3680（西から）
図版18　（上）　井戸SE3680　上層の投棄された瓦の状況（北東から）
（下）　同上近影
図版19　（上）　井戸SE3680からの甕の出土状況（南から）
（下）　井戸SE3685（東から）
図版20　（上）　井戸SE3690（南から）
（下）　井戸SE3695（東から）
図版21　（上）　井戸SE3690・3695・土甕SK3677（東から）
（下）　土壙SK3677（北から）
図版22　（上）　第123次調査掘立柱建物SB3700柱根（北から）
（下）　同上近影
図版23　（上）　第124次調査区全景（東から）
（下）　溝SD2340（北から）
図版24　（上）　第125次調査全景（南から）
（下）　土壙SK3710（西から）
図版25　（上）　第127次調査区全景（南から）
（下）　第128次調査区全景（南から）
図版26　第121次調査　SD3630出土陶磁器
図版27　第121次調査　SD3629・3619・3637・3649出土土器
図版28　第121次調査　SK3644出土土器
図版29　第121次調査　SK3614・3634・3643・3657出土土器
図版30　第121次調査　SX3618・3639出土土器・陶磁器
図版31　第121次調査　SX3635・3652出土土器
図版32　第121次調査　SX3650出土土器・陶磁器
図版33　第121次調査　SX3655出土土器(1)
図版34　第121次調査　SX3655出土土器(2)
図版35　第121次調査　茶褐色土層・濁茶色土層・黄灰色土層出土土器・陶磁器
図版36　第121次調査　SX3635出土軒瓦
図版37　第121次調査　出土鬼瓦
図版38　第121次調査　出土木製品
図版39　第121次調査　出土金属製品・銭貨・土製品・瓦製品・石鍋・石製品
図版40　第122次調査　SB3675・SD3664・3666・3667・3668・SE3690出土土器・陶磁器

図版41　第122次調査　SE3680出土土器・鞴羽口
図版42　第122次調査　SK3672出土土器
図版43　第122次調査　SK3672出土陶磁器
図版44　第122次調査　SK3678出土土器・陶磁器
図版45　第122次調査　SX3682出土土器
図版46　第122次調査　暗褐色土下層・暗褐色土層出土土器・陶磁器
図版47　第122次調査　SE3680出土軒瓦
図版48　第122次調査　SE3680出土丸瓦
図版49　第122次調査　SE3680出土平瓦
図版50　第122次調査　SE3680出土平瓦
図版51　第122次調査　SE3680出土木製品
図版52　第122次調査　SE3680出土木製品
図版53　第122次調査　出土土製品・石製品・金属製品
図版54　第123次調査　出土土器・陶磁器・塩壷
図版55　第124次調査　SD2340出土土器・陶磁器・鞴羽口
図版56　第124次調査　SD2340出土木簡
図版57　第124次調査　SD2340出土木簡
図版58　第124次調査　出土木製品



第１図　大宰府史跡発掘調査地域図

I 調 査 計 画

平成２年度、大宰府史跡の発掘調査は、第４次５ケ年計画（史跡観世音寺境内および子院跡の調査）の第４年次にあたる。

昭和62年度に始まったこの計画は、観世音寺伽藍の発掘調査ばかりでなく、境内地の北側谷地形の部分に存在した子院跡群についても発掘調査を実施する計画であった。

調査計画は、種々の事情から予定より遅れながら今日まできたが、第４次計画は平成３年度が最終年度にあたる。この為平成２・３年度の実施計画について、どのように計画変更を行うべきかが問題であった。

平成２年５月23日・24日に開催した大宰府史跡調査研究指導委員会議に於いて、この点について諮問したところ、観世音寺主要伽藍について究明すべきであるとの御指導を得た。

このことにより、第４次計画では、平成２年度東面および南面の築地跡推定地・金堂・講堂跡の調査を、平成３年度に子院推定地の調査を予定していたが、今後２年間の発掘調査計画の主眼を観世音寺主要伽藍の究明に置くこととした。

昭和43年、福岡県教育委員会が特別史跡大宰府跡の発掘調査に着手して以来、前九州歴史資料館長鏡山猛氏が方三町と推定された観世音寺域内の発掘調査は30次を越えた。しかし、その多くは史跡地内の現状変更に伴っての発掘調査であり、調査面積も狭いものであった。

昭和62年度以降の第４次５ケ年計画の実施により、第４次計画以前に実施した僧房跡の調査等４件、調査面積約4500㎡を加えれば14000㎡を越え、寺域全体の10数パーセントの発掘調査が終わったことになる。

観世音寺中心伽藍の発掘調査は、昭和27年九州文化綜合研究所による金堂跡・回廊跡等が、昭和32年福山敏男氏などによる中門・講堂・東回廊跡等の調査があるが、未公表の部分が多い。

これ等未公表の資料についても、大宰府史跡調査研究指導委員会の先生方から資料を提供して頂いたり、資料の所在についての情報を頂くなど資料収集に務めてきた。この資料をもとに今後観世音寺伽藍中心部の計画調査を推進したい。

なお、大宰府史跡調査研究指導委員会議において了承を得た本年度調査の計画は下記のとおりである。

調査次数	調査地区	地区面積(㎡)	調査期間	備考
122	6KKZ－B	580	5月～7月	観世音寺南辺東半部
123	6KKZ－B	2000	8月～10月	観世音寺講堂
124	6KKZ－B	1000	11月～2月	観世音寺金堂

II 調 査 経 過

1．概要

平成2年度の発掘調査は、昨年11月から調査を継続している第121次調査(観世音寺東面築地推定地）から始まった。

「延喜5年（905）観世音寺資財帳」の記載から北面築地と南面築地の長さ57丈（171m）を伽藍中軸線によって東西に2等分すれば85.5mとなり、この地点が東面築地・西面築地の推定位置にあたる。

第121次調査区は、伽藍中軸線の東側で、築地跡の推定地にあたる地点である。

発掘調査の結果、調査区の東半を中世の南北溝（SD3630）などの新しい遺構によって古い遺構は削られていたが、伽藍中軸線の東側85.5mの近くでSA3625が検出された。この柵列は、築地寄柱とするには対応すべき位置に柱穴が検出出来なかったことや、築地版築の痕跡などが検出出来なかったことで、東面築地とは認めがたいものであった。

しかしながらSD3630より古いこと、東面築地推定位置に検出されていることから、東面築地と同様の役割を果たした遺構と推定している。

また同調査で注目されるのは掘立柱建物が3棟検出され、いずれも伽藍中軸線に対して平行または直角に建てられていることから、奈良時代まで遡り得る可能性のある建物跡と考えられた。このことは「延喜5年資財帳」に記載された建物の可能性もあるものといえよう。

出土遺物関係では、SX3635から、巴文軒丸瓦を含むものの、老司式軒瓦のセットを中心とした多量の瓦の出土があった。「延喜5年資財帳」によれば観世音寺には当時37の堂宇があったことが知られるが、瓦葺の堂宇は主要建物の12に限られている。このことからSX3635は、これまでの調査結果からは、大房跡に最も近いことから大房に葺かれた瓦である可能性も生じてきた。

第121次調査を5月中旬に終了し、引き続いて第122次調査（南面築地推定地）に入った。礎石を残している南門跡の東側である。

第70次補足調査によりSX1831～35の土管を埋没した暗渠遺構上が北面築地の位置と考えられるようになった。

「延喜5年資財帳」に東面築地・西面築地の長さ65丈（195m）を北面築地から南へ計ると南門の位置よりも南になる。南面築地は南門にとりつくはずであるから「延喜5年資財帳」の記載とは一致しないことになる。第122次調査の目的は、この南面築地の検出にあった。

調査では、築地遺構は検出されていないが、南門の真東にあたる発掘調査拡張区の状況から、この位置に築地が存在した可能性が高いものと思われた。

この調査で検出された遺構で注目されるのは、SB3660・3665が重なって見つかっているが、両者ともやゝ棟方向を東に振っていること、検出された遺構では最も古い時期のものと考えられることから、伽藍堂塔とはやゝ性格を異にするものと考えられた。

この建物の東側で検出されたSE3680は、この建物と同時平行して存在したとも考えられるが、その埋没過程で多量の瓦が投棄されていた。軒瓦を含む丸瓦・平瓦で完形に復元出来たものも多く、出土土器からも観世音寺創建の時期にのぼらせ得るものと考えられ注目された。

第123次調査は、第70次調査（小子房および北面築地想定地）と日吉神社の参道を挟んだ東側にあたる地点で実施した。

8月には第122次調査の途中で、史跡現状変更の申請に伴っての立会調査で浄化槽の埋設箇所から径45cmをはかる柱根が発見された。この柱根がどのような施設にともなうものかは、発掘面積が小規模であることから明らかには出来ないが、今後、家屋の建て替えなどの時期に発掘調査を行う必要がある。

9・10月には、史跡筑前国分寺塔跡の環境整備事業に伴っての園路の付け替え場所の発掘調査を福岡県文化課の依頼により実施した。

この間10月には、特別史跡大宰府跡南側未指定地区、観世音寺地区区画整理事業地内で、住宅建設の事前の緊急調査を2件実施した。第124次・第125次調査である。

この地区は大宰府政庁官衙域が所在していた場所である。九州歴史資料館と太宰府市教育委員会とのとりきめで、この地区の調査は九州歴史資料館が実施することとなっている。

第124次調査は「天平6年（734）」の紀年銘を持つ木簡が出土したSD2340の南延長部分にあたる。今回の調査でもSD2340を検出し、木簡10点余りが出土している。

続いて実施した第125次調査区は、官衙地区の西側に所在する官人居住区と推定している遺跡のさらに西側にあたる地点で、土壙、溝などが調査されている。

第126次調査（観世音寺講堂跡）は、史跡筑前国分寺跡・第124次調査・第125次調査など当初計画にはなかった調査が終了した11月からの着手となった。

観世音寺講堂は、すでに鏡山猛氏や福山敏男氏等諸先学によって部分的に発掘調査されていた。今年度当初から、当時の発掘調査の記録類を探索した結果、大宰府史跡調査研究指導委員小田富士雄氏から、昭和32年の調査時点の遺構実測図など記録類を提供して頂くことが出来、又、九州大学所蔵のガラス乾板を複写することも出来た。さらに、この記録類の使用についても、調査団長福山敏男氏からお許しを頂くことが出来ている。

調査は、先学の調査されたトレンチの探索から始め、現在、東回廊と北回廊の折れ曲り部分の検出まで進んでいる。

第126次調査に入った11月、観世音寺大房跡西端に近い場所の現状変更申請に対し、発掘調査を実施するよう指示があった。

この指示に従って実施した発掘調査が第127次調査である。

大房跡については、第43次調査（昭和51年）に調査を実施して「延喜５年資財帳」に記載された状況に近い礎石建物（SB1080）を検出している。

今回の調査では、この建物の西端部分の検出が期待されたが、地山直上まで中世の遺物包含層であった。

12月には、学校院跡西北部で現状変更申請に対して第127次と同様の発掘調査を実施するよう指示があったのでこれを第128次調査として実施した。

この近くでは過去に、第18次調査（昭和47年）・第37次調査（昭和50年）・第112次調査（昭和63年）などを実施したが、第37次調査では礎板に使用された文様塼が出土したり、第112次調査では、規模が大きいと想定される掘立柱建物（SB3320）などが検出されていた。

発掘調査の結果では、第112次調査と比較して地山が2.3mも低く、すでに遺構は削平を受けたものと判断された。

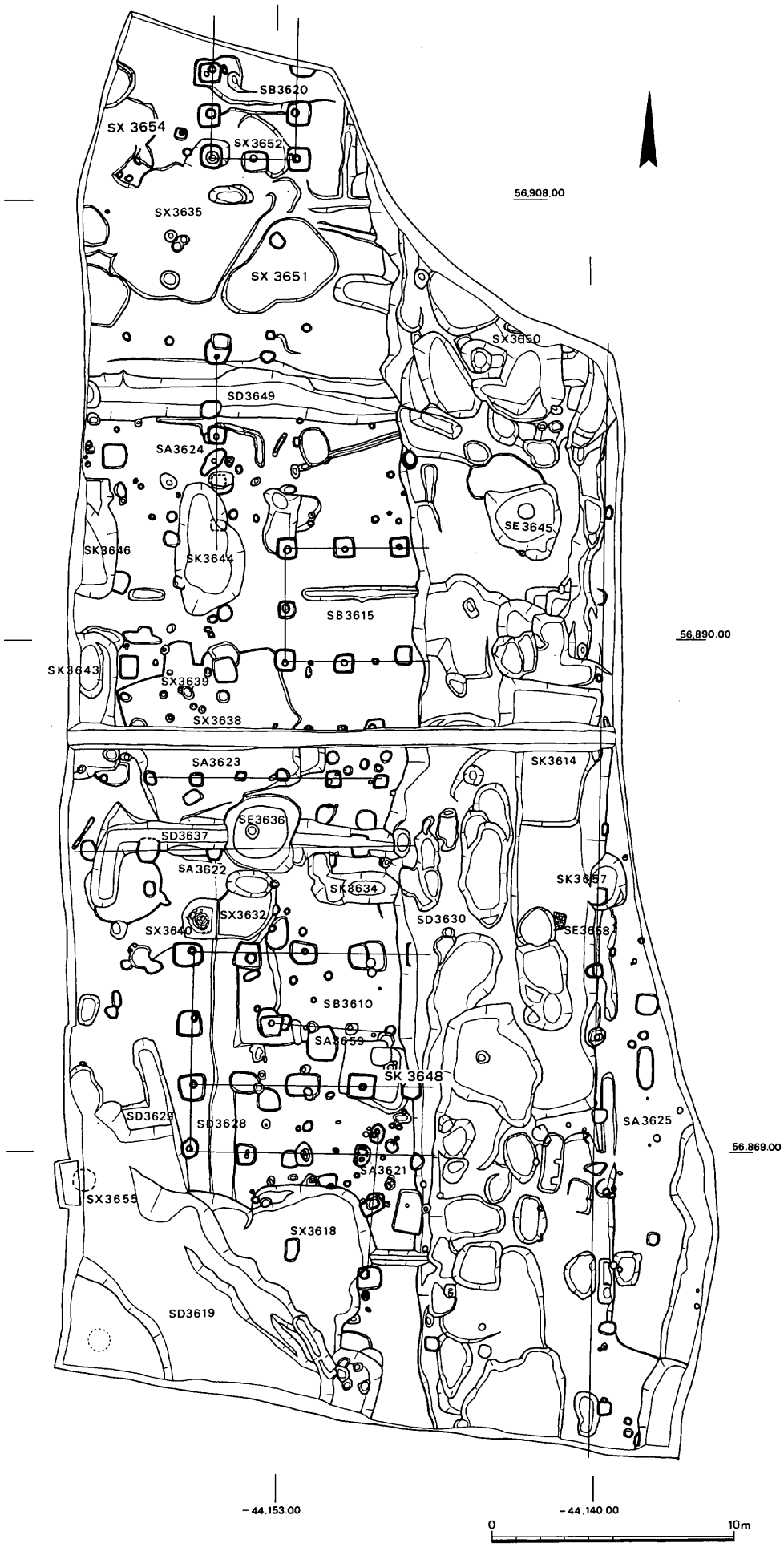
以上が平成２年度の発掘調査の経過である。

これ以外では、平成１・２年で大宰府史跡地内での現状変更の許可申請が約40件あるが、文化庁の指示に従ってこのうち約25件の立会調査を実施している。

立会調査のうち福岡県建築都市部都市計画課が主体となって実施した大宰府政庁前面景観整備事業は、県道関屋－吉木線の大宰府政庁前面の電柱を撤去し、電線・電話線・有線放送等の線を地下埋設する工事であった。

大宰府政庁前面の県道は、故鏡山猛氏による大宰府の条坊復原の１つの重要な根拠となっていたことから、いつの時点で現在の道路が作られたものか知る手懸りが得られるのではという期待があったが、確証的な資料は得られていない。

調査次数	調査地区	地区面積(㎡)	調査期間	備考
121	6 KKZ－B	1235	891127～900514	観世音寺東北部
122	6 KKZ－B	630	900514～900901	観世音寺前面東半部
123	6 KKZ－B	7	900810～900811	観世音寺北辺東半部
124	6 AYM－B	102	901013～901023	大宰府政庁官衙域
125	6 AYM－C	130	901029～901031	〃
126	6 KKZ－B	730	901105～	観世音寺講堂跡
127	6 KKZ－A	10	901114～901116	観世音寺大房跡
128	6 ZGK	19	901212～901217	学校院北西部



第２図　第121次調査遺構配置図

第121次調査

本調査地は観世音寺宝蔵の北に接する場所で、旧観世音寺の推定寺域内の東北部にあたる。調査地番は太宰府市観世音寺字今道48－３。調査面積は1235㎡である。

これまでにおこなわれた観世音寺の調査は、主要伽藍である金堂・講堂・回廊・僧房、寺域の北限(北面築地)、寺域に接する周辺地域にわけられる。このうち、今回の調査に深く関わる第43次・第70次・第70次補足・第120次の各調査について触れておきたい。第43次調査では講堂背後の僧房（大房）推定地の調査をおこなった。その結果、梁行４間×桁行19間以上の東西に長い礎石建物を確認している。この建物は位置・規模から大房にあたる。第43次調査区の北に接する第70次調査区は僧房（小子房）推定地であるが、建物を検出するには至っていない。しかし、調査区北半部で南北方向の暗渠施設数条を確認し、築地との関わりが考えられた。その後、第70次補足調査・第120次調査において、検出された東西溝が先の暗渠施設に伴うことがわかり、これらの遺構が北面築地と密接な関係にあることが指摘できた。なお、第120次調査区は延喜５年『観世音寺資財帳』によれば、北面築地の推定地を含む地域であったが、さきの遺構を築地関連の施設とすれば築地の位置が約20mほど南にずれることになる。このような調査状況のなかで、今回は東面築地の推定地を調査対象地とした。『観世音寺資財帳』によれば築地長は南・北とも「五十七丈」であり、講堂中軸線から東にとると発掘区の東辺部にあたり発掘区のほとんどは寺域となる。こうしたことから、今回の調査は東面築地の検出および寺域内の付属建物の検出を目的として調査を実施した。

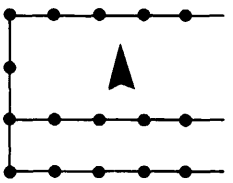
調査は11月27日より表土剝ぎを開始した。北半部はバラスを含む整地土で覆われていたため、その除去作業にかなりの期間を費やした。翌年１月22日より遺構検出にはいる。上層遺構検出作業を終えた３月16日には掘立柱建物SB3620の柱掘形を確認し、建物跡の確認作業にはいった。４月19日には個別の写真撮影・空中写真撮影をおこない、遺構実測・建物の柱掘形等の精査を５月16日までに終了した。なお６月11日に鋳造関係遺構SX3640の遺構切取り作業をおこなった。

検出遺構

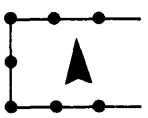
検出したおもな遺構は掘立柱建物３棟・柵６条・溝５条・井戸３基・池状遺構１基・鋳造関係遺構１基などである。遺構面は北から南に傾斜している。発掘区東半部では遺構面を黄灰色の砂質土が覆っており、包含層除去後に南北溝SD3630を検出した。西半部では灰褐色土が薄く堆積し、これを除去すると遺構面となる。発掘区西南隅部での表土下の層序は灰褐色土→SX3618→濁茶色土→SD3619となる。濁茶色土は掘立柱建物SB3610廂部の掘形の一部を覆っている。発掘区北部では表土・床土除去後にSX3635を検出した。なお溝SD3619の下層には黒灰色の粘土層が広がっており、弥生時代の遺物を包含している。

掘立柱建物

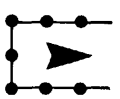
SB3610　発掘区の中央部やや南よりで検出した梁行3間(8.1m)×桁行4間以上の東西棟の建物で、南面に廂をもつ。西側から広がる濁茶色土が廂部西側隅柱掘形を覆っていた。東側はSD3630によって切られているが、桁行は5間あるいは7間になるものと考えられる。また、SD3628・SD3629にも柱掘形の一部を切られている。建物の方位はN1°15′Wにとる。柱掘形は方形で、身舎部掘形は一辺0.9～1.5m。廂部は一辺0.65～0.9mであり、身舎部に比してやや小さい。身舎部において確認した柱痕跡の径は30cm、廂部では径15～30cmをはかる。梁行は2.7m等間、桁行は2.35m等間である。梁行9尺等間、桁行8尺等間の企画であろう。



SB3615　発掘区の中央部やや北よりで検出した梁行2間(4.7m)×桁行2間(4.7m)以上の東西棟建物で、東側はSD3630によって切られている。溝の東側では柱掘形を検出していないため、桁行は5間と考えられる。西妻の柱列はSB3620の東側柱列と筋を合せる。建物の方位はN1°15′Wにとる。柱掘形は0.7×0.7m～0.85×0.95mの方形を呈する。深さは残りのよいもので、0.4mである。柱間は梁行・桁行とも2.35m等間であり柱筋は通っている。柱痕跡の径は16～26cmをはかる。柱痕跡はほとんどが掘形の底面よりも5cm程度下がっている。底面のレベルは10cmほどの高低差があるがほぼ一定である。



SB3620　発掘区の北壁際で検出した梁行2間(3.4m)×桁行2間(3.6m)以上の南北棟建物で、北側はさらに調査区外にのびる。建物の方位はN1°15′Wにとる。西側柱の柱列はSB3610の東妻の柱列に通る。また、東側柱の柱列はSB3615の東妻柱列に通る。柱掘形は一辺0.8～1.0mの方形で棟柱の掘形のみ0.9×1.2mの長方形となる。深さはもっとも残りがよいもので0.9mである。柱間は梁行が1.7m等間、桁行1.8m等間で、それぞれ柱筋は通っている。柱痕跡はすべてに認められ、径20～30cmをはかる。柱痕跡は掘形の底面にまで達しないものもある。この場合、柱下層の埋土は貼床状に突き固めており、上層の埋め土とは区別される。掘形の埋土は黄褐色あるいは茶褐色の粘質土である。掘形の底面レベルはSB3615とほぼ同じである。ただし2・3は他のものにくらべ約30cmほど低い。SX3635・SX3652に切られている。



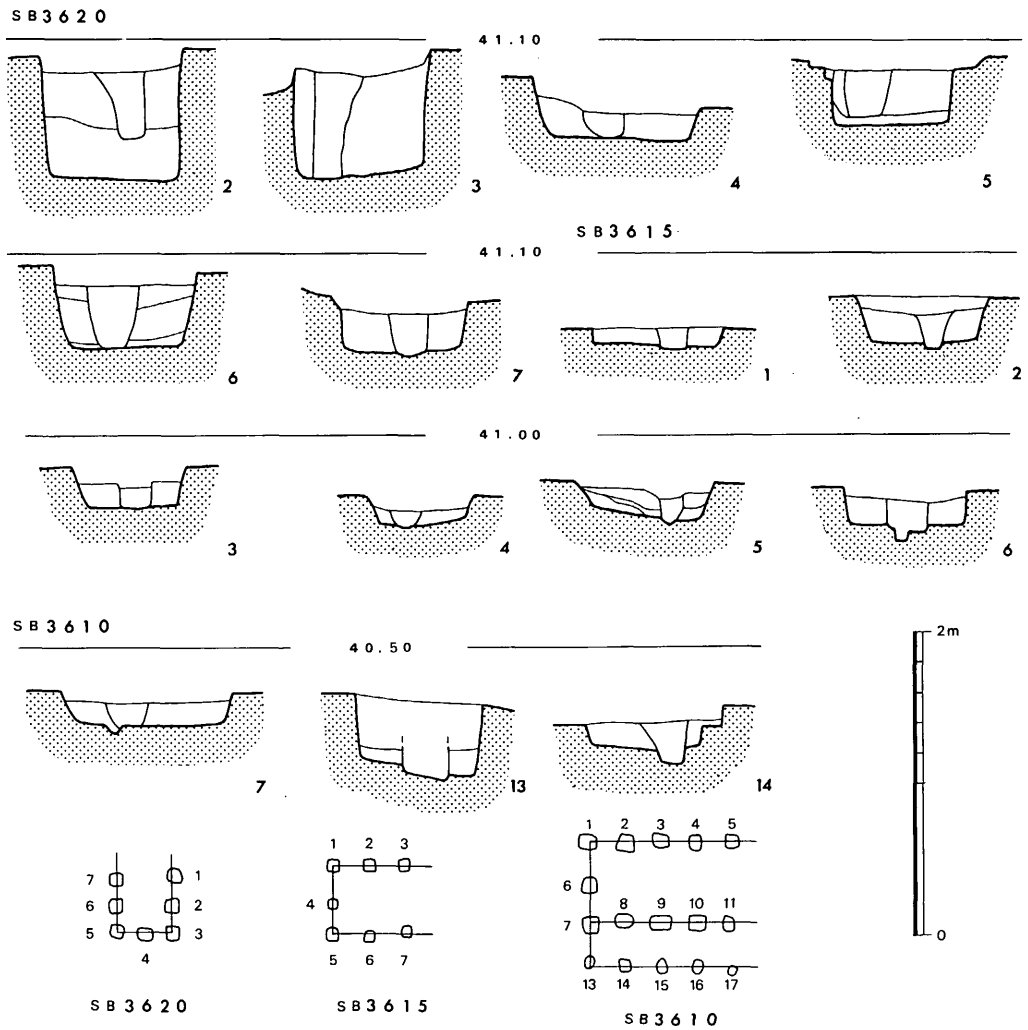
柵

SA3621　発掘区の南半部で検出した南北方向の柵で2間分を確認した。方位をN4°15′Wにとる。柱掘形は0.3～0.5mの円形で柱間は南から2.9m等間で柱筋は通っている。

SA3622　発掘区の中央部、SB3610の北側で検出した東西方向の柵である。4間分を確認した。方位をN1°0′Eにとる。東側の延長はSD3630により削平をうけており、西側についてはさ

らに調査区外に延びる可能性がある。柱掘形のプランは楕円形・隅丸方形・方形と様々であり、規模は0.6～1.0mをはかる。東から二つのみに柱痕跡が認められ、柱間は2.52mをはかる。径は18～20cmであり、深さは残りのよいもので0.4mである。

SA3623　SA3622の北側で検出した東西方向の柵で方位をＮ1°15′Ｗにとる。6間分確認した。東西の延長部分についてはSA3622と同様にさらに東西方向にのびる。柱掘形のプランは方形で、規模は0.4×0.4m～0.7×0.7mをはかる。比較的残りのよい柱掘形の深さは0.2mをはかる。各掘形の底面はほぼ同レベルである。柱痕跡は確認できなかった。掘形の心々距離は1.7～



第3図　第121次調査　掘立柱建物柱掘形断面図

2.2mとなるが2.1m（７尺）がもっとも多い。

SA3624　発掘区の北半部東寄りで検出した南北方向の柵で方位を真北にとる。３間分確認した。もっとも北の柱間は3.25mと広い。この部分はSD3649によって切られ検出面がさがっているため、この間に柱掘形がある可能性がある。柱痕跡の径は20cmをはかる。

SA3625　発掘区の東壁際で検出した南北方向の柵で、30.1m分確認した。柱列は削平により確認することはできなかったがさらに調査区外の南北にのびる可能性がある。方位はＮ１°15′Ｗにとる。柱掘形は東側がSD3630に切られ、また上面の削平も著しく、残りはひじょうにわるい。平面プランは方形を呈する。規模は0.75×0.45m、もっとも残りのよいもので深さ0.35mをはかる。柱痕跡が残っていないため柱間は不明であるが、掘形の心々は2.70～3.20mとやや幅がある。確認した総長30.1mの平均をもとめると柱間はほぼ10尺となる。

SA3659　発掘区の南半部、SB3610の身舎部中央で検出した東西方向の柵である。方位をＮ４°15′Ｗにとる。３間分確認し、柱間は1.55m等間である。SA3621と一連の造作かもしれない。

溝

SD3619　発掘区の西南隅部を西北から東南にむかって流れる溝状遺構である。濁茶色土層除去後に検出した。上端幅4.7～5.3m、下端幅2.6～4.1m、深さは0.7mほどである。溝の埋土は粘質土で、上層から百済系単弁軒丸瓦が出土している。

SD3628　発掘区の東側を北から南に流れる溝である。溝長は13mで上端幅0.8～1.15m、下端幅0.65～1.0mをはかる。北と南の溝底のレベル差は0.2mほどである。SD3637に切られる。

SD3629　発掘区の西南部で検出した南北溝で6.5m分確認した。上端幅1.0m、下端幅0.6mで深さは0.2mをはかる。北から南に向かって流れるものである。

SD3630　発掘区の東半部で検出した南北溝で約40m分を確認した。溝の上面は黄灰色の砂質土層が覆っていた。溝はさらに南北の調査区外にのびる。上端幅7.5～8.4m、下端幅は6.9～7.1mをはかる。溝底面は凹凸が著しい。埋土は灰色の粘性の強い粘質土である。SB3610・SB3615の東側を切る。

SD3637　発掘区の中央部で検出した東西溝で、西端で南に折れ2.6m延びたところで終息する。東側はSD3630に接続する。上端幅1.0～1.2m、下端幅0.6m、深さは0.4～0.5mで断面は逆台形状となる。溝底のレベル差は0.3mほどであり西から東に流れる。

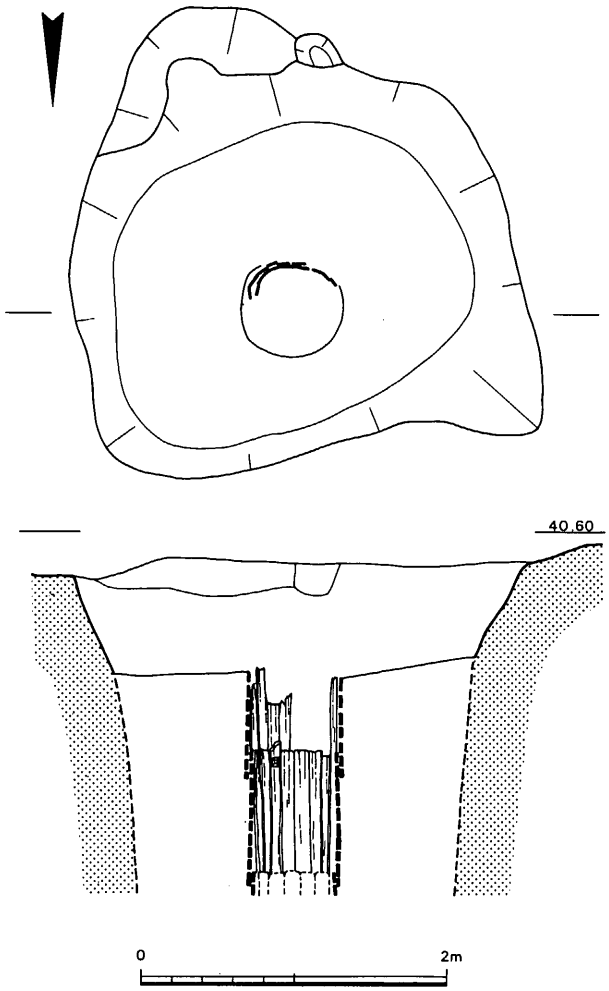
SD3649　発掘区の北部で検出した東西方向の溝で13m分検出した。西側はさらに調査区外にのびる。東側はSX3650によって切られているがSD3630の東には延びていない。上端幅は0.9～1.9m、下端幅は0.5～0.9mをはかり、上端の北辺中央部が膨らんでいる。深さは0.15～0.25mをはかる。溝底面はほぼ同レベルである。

井戸

SE3636　発掘区の中央部で検出した井戸である。掘形は径3.2mの円形を呈し、底面に径0.6

m、深さ0.15mの掘込みをもつ。検出面からの深さは1.2mをはかる。井戸枠は残存していなかった。SD3637に切られる。

SE3645　発掘区の東北部で検出した桶側構造の井戸である。掘形は不整円形を呈し、径3.0×3.2mをはかる。深さは1.95m以上。井戸枠は桶側を二段分検出し、三段目は確認のみ行った。上段・中段とも残りがひじょうにわるい。中段には板材が8枚分残っており、うち1枚には方6cmの孔が穿たれていた。桶側の径は60cmほどに復元できる。板材は長さ81cm以上、幅9～10cm。桶側は土圧のためか裾開きにはなっていない。SD3630によって上面を削平されている。Ⅳ類。



第4図　SE3645実測図

SE3658　発掘区の中央部東側で検出した石組構造の井戸である。掘形は一辺1.3mの方形を呈すると考えられるが、SD3630によって大きく削られているため定かではない。花崗岩自然石の石積みを二段分確認した。底面からは平瓦と鉄滓が出土した。Ⅴ類。

土壙

SK3614　発掘区の中央部東壁際で検出した逆台形の土壙で、上面をSD3630に削平されている。南北長5.9m、北辺長4.3m、南辺長2.6m、深さは0.5mをはかる。底面はフラットである。埋土は暗灰褐色の粘質土。

SK3634　発掘区の中央部で検出した楕円形の土壙である。東西長3.7m、南北長1.2m、深さ0.5mをはかる。西側にテラスをもつ。

SK3643　発掘区の中央部西壁際で検出した土壙でさらに西にひろがる。南北長6.0m、深さ0.

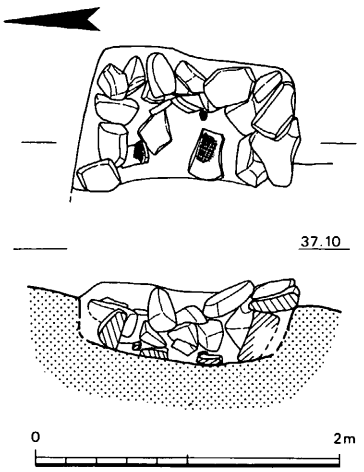
4mをはかる。

SK3644　発掘区の中央部やや北西寄り、SB3615の西で検出した長円形の土壙である。南北長5.4m、東西長2.9m、深さ0.5mをはかる。底面はやや南に傾斜する。

SK3646　発掘区の西壁際で検出した土壙でさらに西側にひろがる。南北長4.9m、深さ0.7mをはかり、北側にテラスをもつ。底面はほぼフラットである。

SK3648　発掘区の南半部で検出した方形の土壙でSB3610の掘形に切られる。底面は凹凸が著しい。埋土中より鉄滓が出土。

SK3657　発掘区の中央部東壁際で検出した長円形の土壙である。SA3625の柱掘形を切っており、また、SD3630に西半を切られる。南北径2.4m、東西径1.4mをはかる。



第5図　SE3658実測図

その他の遺構

SX3618　発掘区の西南隅部で検出した不整形の落込みである。埋土は灰褐色の粘質土である。SD3628によって切られている。

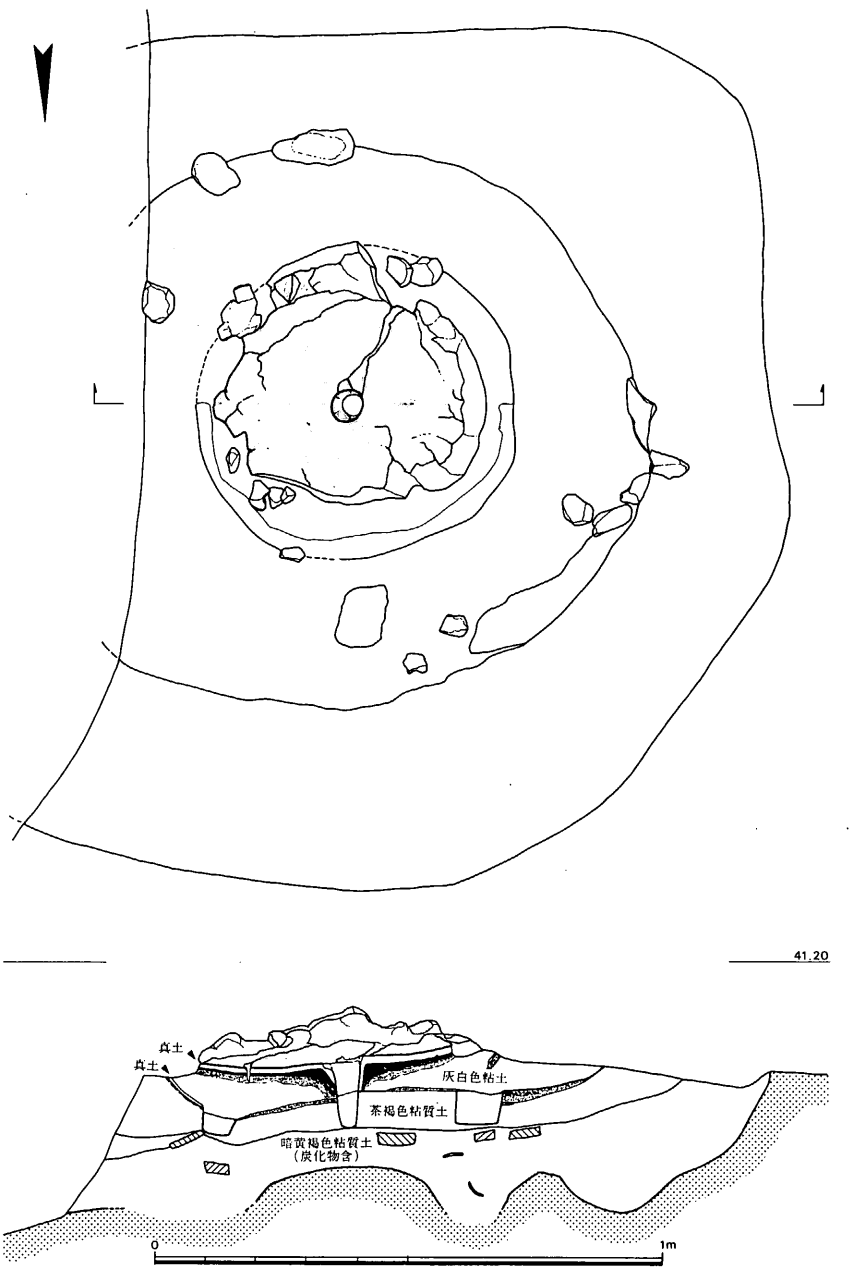
SX3632　発掘区の南側西寄り、SB3610の北で検出した瓦溜りでSX3640によって掘り込まれている。この遺構の埋土の一部はSB3610の柱掘形を覆っている。

SX3635　発掘区の北部で床土除去後に検出した。茶褐色土層を掘り込んでいる。径6mほどのひろがりをもつ浅い凹地に多量の瓦が投棄されていた。この瓦層は西南部から東北部に向かって傾斜する。老司Ⅰ式軒瓦のほかにも忍冬唐草文軒平瓦・鬼瓦などがまとまって出土した。SX3651・SX3654と一連のものと考えられる。

SX3638　発掘区の中央部東寄りで検出した6.7×6.1mの長方形の竪穴状遺構である。上面をかなり削平されており、壁は5cm前後しか残っていない。床面はほぼフラットである。竪穴式住居の可能性もあるため床面を精査したが、柱穴等は確認できなかった。遺構の埋土は黄褐色の粘質土である。SB3615・SA3623に切られる。埋土中より古墳時代の土器片が出土。

SX3639　発掘区の中央部西寄りで検出した楕円形のピットである。径0.6×0.4m、深さ0.2m。

SX3640　瓦溜りSX3632に掘り込んだ鋳造遺構である。壙の中央に長径57cmの円形に近い真土様の固い粘土を貼る。上面は浅い凹状を呈し、幅1cmの厚さを有す。周囲に一回り大きく同様の粘土が下方に重なっている。これら真土様の粘土の底は火燃を受け黒く炭化している。断面観察ではこれを取り巻くように粘土の下方を別の粘質土で充填している。上方粘土を固定しているようである。左右の二ケ所に枕木痕跡かと思われる落ち込みが認められる。また、上面粘土の中心部分は上面径8cm、下面径3cmのすぼまり気味の孔が深さ18cm穿たれ、孔の周囲にも



第6図　SX3640実測図

粘土をまわしている。仮にこの孔が上部に予想される中子を支える為のものであれば、残存する円形状の粘土は鋳型外型の真土と判断できる。ただし、この粘土は製品の鋳型と断定しうる形跡がなく、また湯がまわった状況にもない。ここでは地金溶解炉の可能性も指摘しておく。

SX3650　発掘区の東北隅部で検出した池状遺構である。遺構の南側部分を確認した。北は調査区外となるため全体の形状は不明である。底面は凹凸が著しい。埋土は暗青灰色粘土で、上層には近世の遺物もふくまれている。ここは以前「猿沢の池」があったとされる所であり、それに相当する可能性がある。SD3630を切る。混入であるが二彩の盤の小片が出土している。

SX3652　発掘区の北側で検出した溜り状の浅い落込みである。SX3635の埋土除去後に確認した。SB3620の柱掘形のひとつを覆うもので、掘形の直上にのるようにして須恵器甕が正位の状態を保って出土した。

SX3655　発掘区の南半部西壁際で検出した土器溜りである。濁茶色土層中よりまとまった土師器杯が出土したが、掘り込みは認められなかった。土師器杯は数個～10個を重ね、幾列にも集積していた。またそのほとんどは油煙が付着しており、灯火器であったことが知れる。

出土遺物

SD3630出土土器・陶磁器（第７・８図・図版26　別表）

須恵器

蓋（１～３）　１は壺蓋である。口端部は外反し、内面に稜をもつ。２・３は杯蓋である。２は天井部が低い。重ね焼きのためか天井部のみは黒灰色を呈する。３は口端部が長めのもので、やや内弯する。すべて外天井部は回転ヘラ削り調整する。

杯（４）　体部は直線的で開きが大きいものである。底部はヘラ切りをおこなった後、ナデ調整を施している。通有のものに較べて胎土には砂粒を多く含む。

鉢（５）　鉄鉢形で口縁外面にゆるい段をもつ。復元口径21.6cm。

壺（６）　高台付の壷で高台部は「ハ」の字に開く。内底部には成形時に接合部を密着させた際についた櫛状工具による押圧痕が残る。

土師器

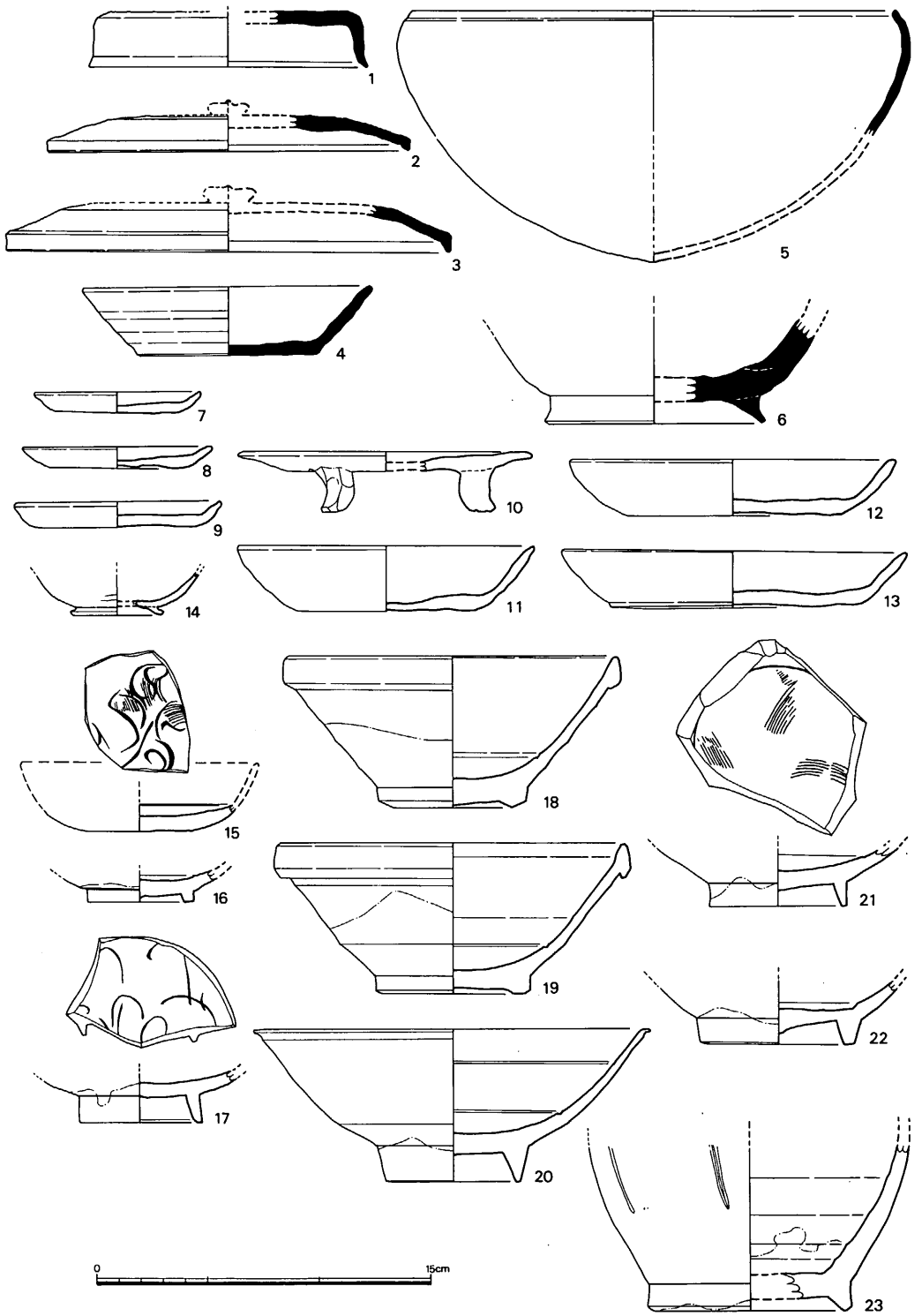
皿a（７～９）　口径7.6～9.3cm、底径5.9～7.0cm、器高0.9～1.2cm。底部はすべて糸切りで、板状圧痕を伴う。

脚付皿（10）　獣脚付の皿で一脚のみ残存する。爪先には二ケ所に幅２㎜ほどの凹みがあり足指を表現しているものと考えられる。あるいはのちの欠損か。また、足裏には２本の線がはいる。胎土は灰白色で、焼成は堅緻。

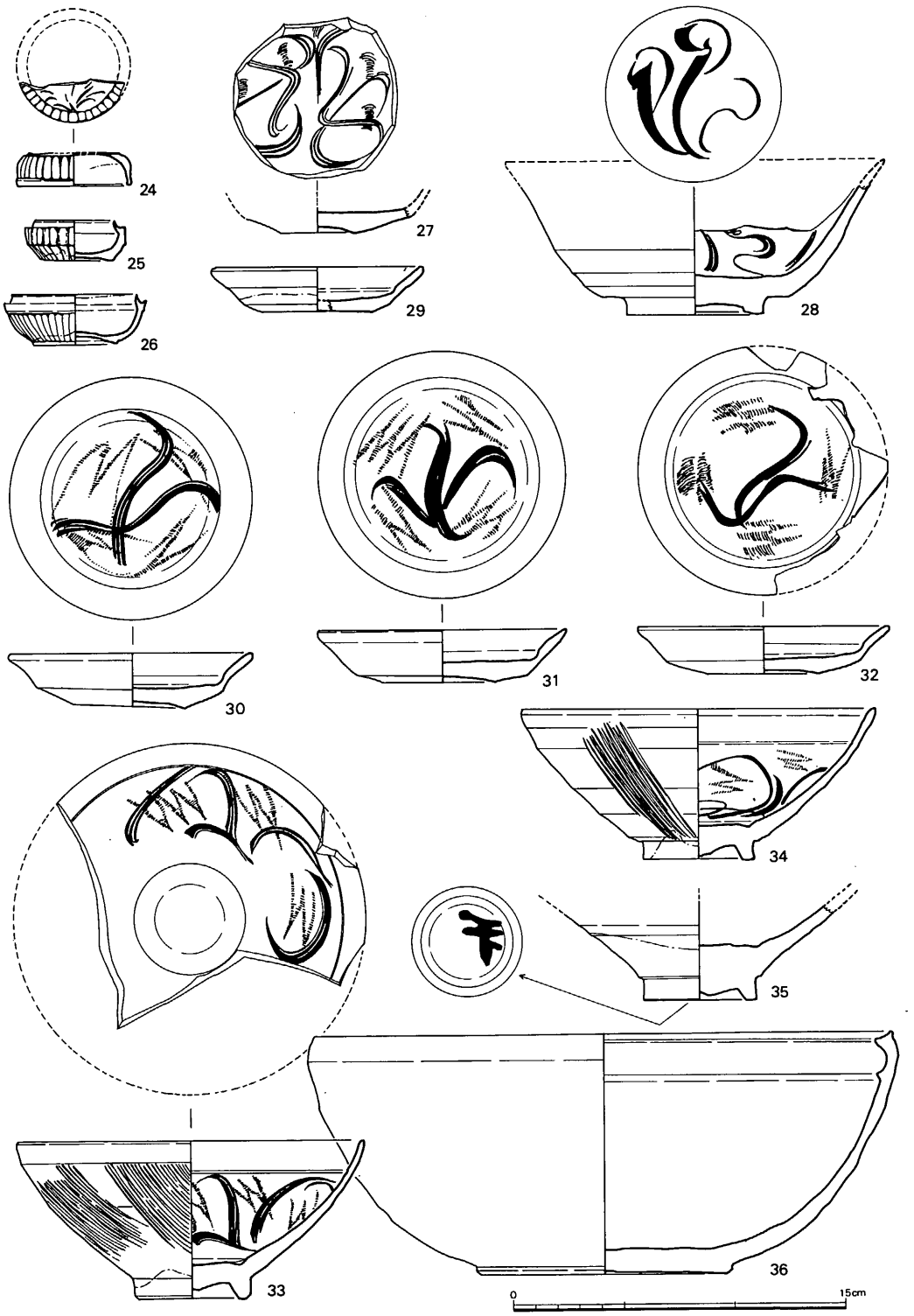
杯a（11～13）　口径13.4～14.6cm、底径8.1～11.2cm、器高2.5～3.0cm。すべて糸切り。

瓦器

椀（14）　体部にくらべ高台部径が小さいものである。高台は低く「ハ」の字にひらく。色調は灰色を呈し、胎土は精良である。器壁は均一で薄く、内外面ともミガキを施す。



第７図　SD3630出土土器・陶磁器実測図(1)



第8図　SD3630出土土器・陶磁器実測図(2)

中国陶磁器

白磁

皿（15・16）　15の胎土は灰白色で透明度のある釉を施す。見込にはヘラと櫛状工具により、草花文を施す。内面の体部と底部との境に沈線が巡る。底部は露胎となる。16は見込を輪状にカキ取るものでIII類。カキ取り部には重ね焼き時の白化粧土が残る。胎土は白色で釉は灰色味のある白色。

椀（17～22）　17は見込にヘラ先による花文状の文様を施す。胎土は白色で、釉は薄く黄白色を呈する。18はやや灰色味のある白色の胎土に灰白色の釉がかかる。口径14.6cm、高台径6.8cm、器高6.8cm。19は淡灰白色の胎土に灰色の強い白色の釉が施される。口縁内面には段をもつ。口径15.4cm、高台径7.0cm、器高6.8cm。18・19とも内面に沈線がまわる。Ⅳ類。20は灰白色の胎土に灰色の強い白色釉が薄く施される。口径17.6cm、高台径6.0cm、器高6.9cm。Ⅴ類。21は白色の緻密な胎土に、薄い灰色味の強い白色の釉を施す。内面見込に櫛描きがある。22は白色の胎土に濁白色の釉がかかる。見込は輪状にカキ取っている。Ⅷ類。

水注（23）　灰白色の胎土に、濁白色の釉がやや厚めにかかる。胴部外面にはヘラ押えによる凹線が縦方向にはしっている。底部は露胎となる。高台径9.3cm。

青白磁

合子（24～26）　24は蓋で灰白色の胎土にくすんだ灰白色釉をかける。口縁の内面は露胎である。口縁外面には型造りの蓮弁をもち、天井部には草花文のスタンプがある。25・26は蓋受けの返りをもつ。25の体部外面には蓮弁が二段に施される。緻密な白色の胎土に空色味のある白色釉をかける。完形品で口径3.3cm、底径3.4cm、器高1.8cm。26は白濁色の緻密な胎土に、淡青味の強い釉をかける。底部は上げ底である。25・26とも底部は露胎。

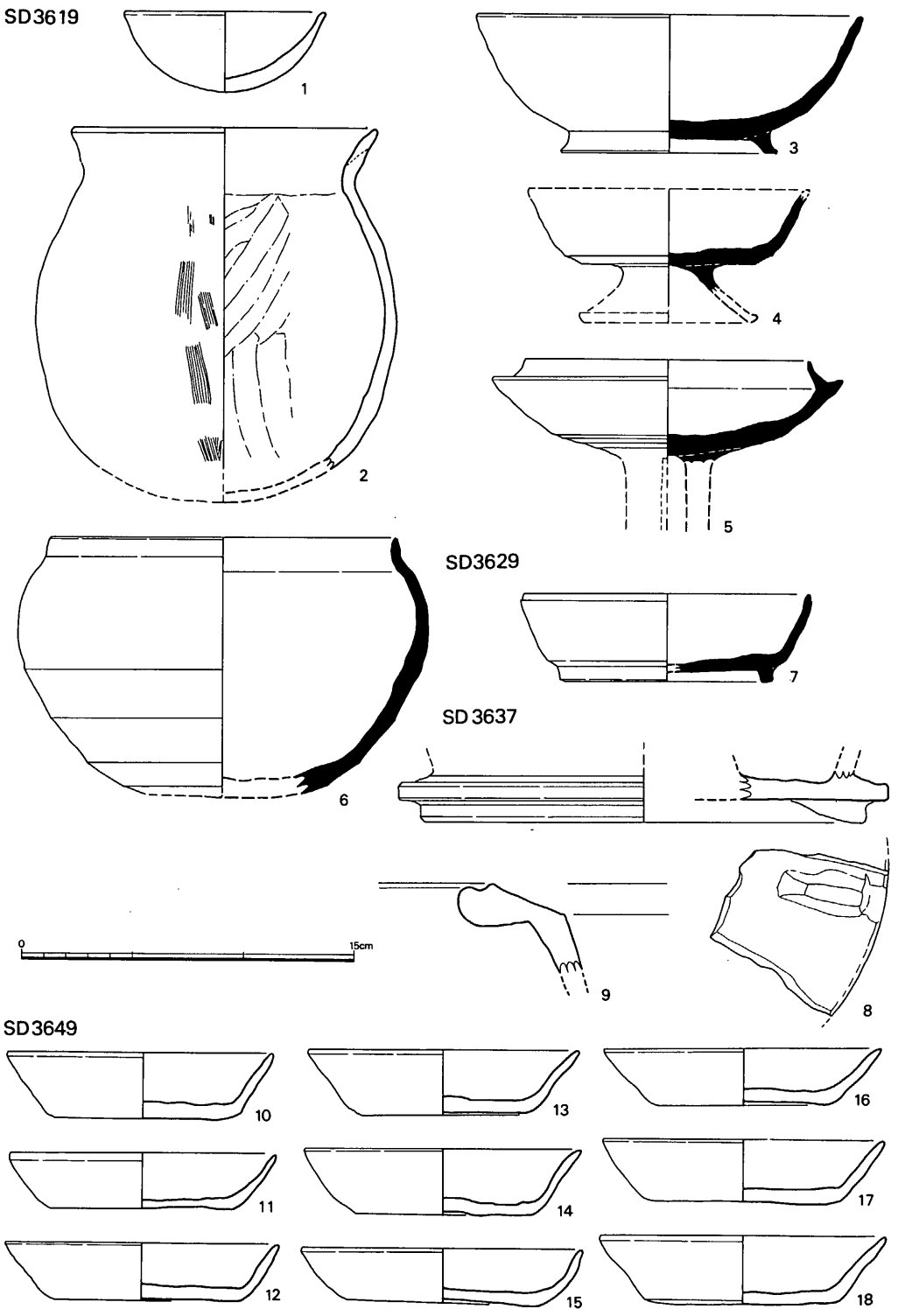
青磁

皿（27・29～32）　27は龍泉窯系で灰白色の緻密な胎土に淡緑色の釉をかける。内面見込にはヘラ先と櫛状工具により花文を施す。底部はカキ取り、露胎となる。29は淡茶色の胎土に淡茶色気味の緑色の薄めの釉を施す。体部にはケズリの段をもつ。30～32はいずれも同安窯系で見込に櫛とヘラ状工具により草花文を施す。30・32は灰白色の胎土に淡緑色の釉がかかる。31の胎土は暗灰色で灰緑色の釉がかかる。底部はいずれもカキ取る。

椀（28・33～35）　28は龍泉窯系で灰白色の胎土に灰色味のつよい緑色の釉がかかる。貫入が著しい。見込と体部には片切彫の草花文と割花がある。33・34は同安窯系で内面にヘラ状工具と櫛により草花文が描かれる。外面は24～25本単位の櫛目が施される。33は口径15.8cm、器高7.1cm。34は口径16.0cm、器高6.8cm。35の外底部には墨書が認められるが判読できない。

陶器

鉢（36）　胎土は橙色がかった茶色を呈し、白色の粒子を多量に含む。底は上げ底気味にな



第9図　SD3619・3629・3637・3649出土土器・陶磁器実測図

る。内面の下半は器面が滑らかである。

SD3619出土土器（第９図・図版27　別表）

土師器

鉢（１）　黄白色を呈する。内外面とも丁寧なナデである。外面から口唇部にかけて黒化する。胎土には砂粒を多く含む。

甕（２）　体部外面は縦方向の細かなハケ目、体部内面はヘラ削り、口縁部はヨコナデ調整を施す。暗黄褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。口径13.9cm。

須恵器

椀（３）　体部は丸みをもって斜め上方に立ち上がる。底部はヘラ切りののち、ナデをおこなう。高台端部は外方にひろがる。暗青灰色を呈し、胎土に黒色粒子を含む。

高杯（４・５）　４は脚部を欠失する。低脚になるものである。杯底部は回転ヘラ削りが施される。暗青灰色を呈する。５も脚部を欠くが、長脚になるものである。欠損面の観察により三方に長方形の透かしをもつことがわかる。杯内底部はナデ。暗青灰色を呈する。

鉢（６）　底部を欠失するが平底気味になるものと考えられる。口縁部は内弯気味にややすぼまる。外面の体部下半から底部にかけて回転ヘラ削り調整を施す。

SD3629出土土器（第９図・図版27　別表）

須恵器

杯（７）　体部はやや内弯気味にたちあがる。外面の口端部近くに段を巡らせる。

SD3637出土土器・陶磁器（第９図・図版27）

土師器

鉢（８）　底部に脚を貼付した鉢状の底部片である。底部には外傾気味になる体部の貼付痕があるが器形については不明である。底部の復元径22.0cm。

中国製陶器

甕（９）　胎土は赤褐色で白色粒子を多く含む。外面の屈曲部下には発色のわるい灰黄色の釉がかかり、他は露胎となる。小片であるが口径は50cm前後に復元できる。

SD3649出土土器（第９図・図版27　別表）

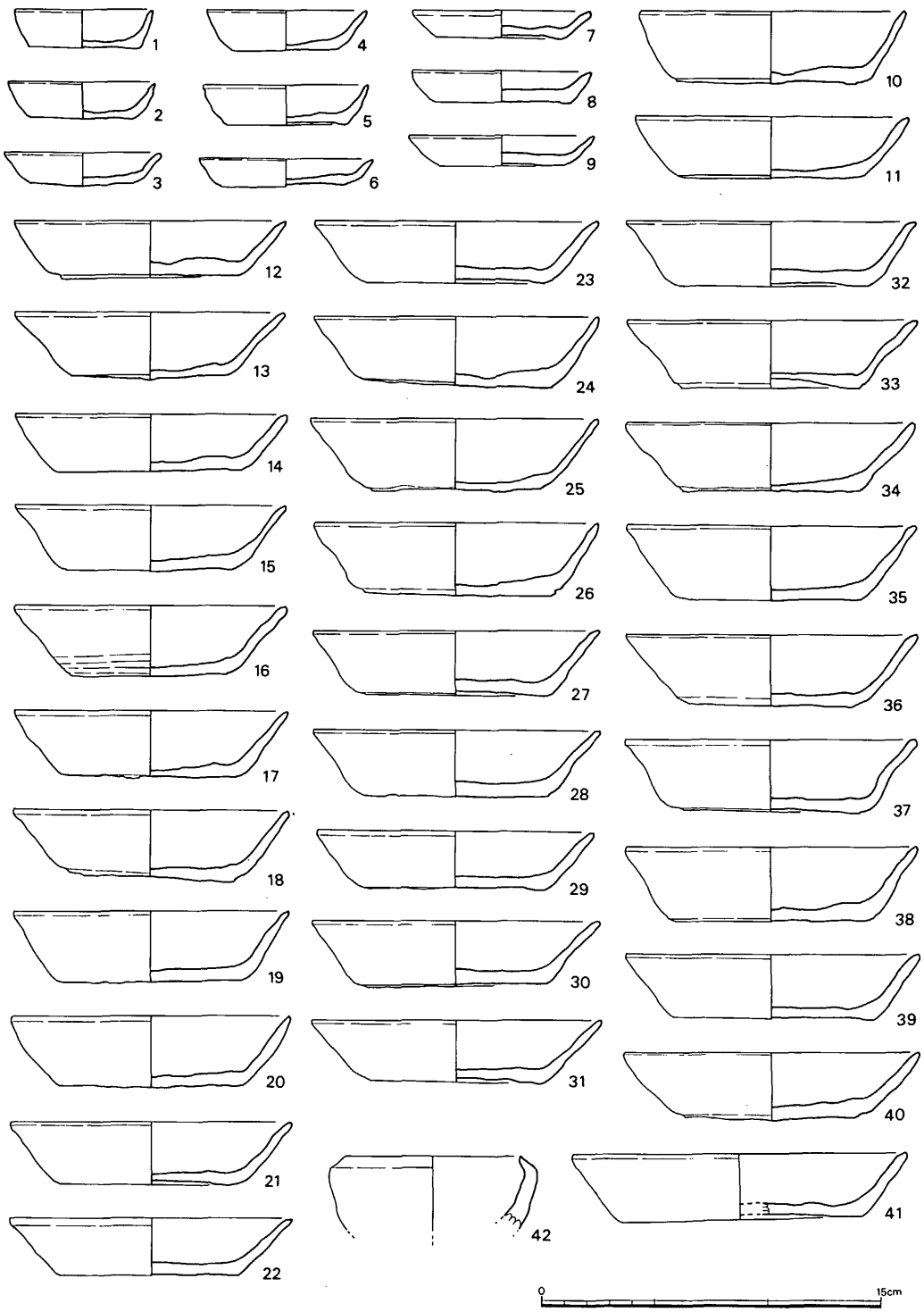
土師器

杯a（10～18）　口径12.0～12.9cm、底径7.3～9.0cm、器高2.5～3.1cm。すべて糸切りで板状圧痕を伴う。13の内面には煤が付着する。

SK3644出土土器（第10図・図版28　別表）

土師器

皿a（６～９）　口径7.7～8.2cm、底径5.4～6.0cm、器高1.2～1.4cm。すべて糸切りで内底部はナデ、板状圧痕を伴う。



第10図　SK3644出土土器実測図

皿b（1～5）　口径6.1～7.4cm、底径4.6～5.2cm、器高1.5～1.8cm。すべて糸切りで内底部はナデ、板状圧痕を伴う。

皿（42）　底部を欠くが皿形になるものと考えられる。希少な器形で口縁部を内弯させる。口径7.6cm、最大径9.2cmをはかる。

杯a（10～41）　口径12.0～13.1cm、底径7.0～10.3cm、器高2.5～3.3cm。すべて糸切りで12・41以外はすべて板状圧痕を伴う。

SK3614出土土器（第11図・図版29　別表）

須恵器

蓋（1）　天井部と体部の境は不明瞭である。口縁部の屈曲は弱く、口端部は丸みをおびる。天井部は回転ヘラ削り調整。天井部内面はナデる。

杯（2）　蓋受けの返りをもつものである。口縁部の立ち上がりは低い。底部外面は回転ヘラ削り調整を施し、ヘラ記号をもつ。

SK3634出土土器（第11図・図版29　別表）

土師器

壷（3）　口縁部の外面に段をもつものである。蓋受けのためのものか。内面の口縁部と体部の境には凹線を巡らせる。色調は明黄褐色を呈する。調整は風化が著しいため不明である。口径11.8cm、底径11.6cm、器高5.8cm。

須恵器

蓋（4・5）　ともに天井部を回転ヘラ削り調整し、天井部内面はナデ。4の焼成はやや不良である。

皿（6）　底部から体部下半にかけては回転ヘラ削り調整を施す。底部内面はナデ。

杯（7・8）　ともに体部と底部との境がやや不明瞭である。7は体部が直線的に立ち上がる。明灰色を呈する。8の胎土は精良で体部下半にはミガキが施される。7・8とも内面の底部はナデ。

甕（9）　外面は横方向の平行タタキの後、丁寧にナデ消している。内面もわずかにナデているが、当て具痕が残る。口縁部はヨコナデ。胎土はきわめて精良で白色粒子を含む。

SK3646出土土器（第11図　別表）

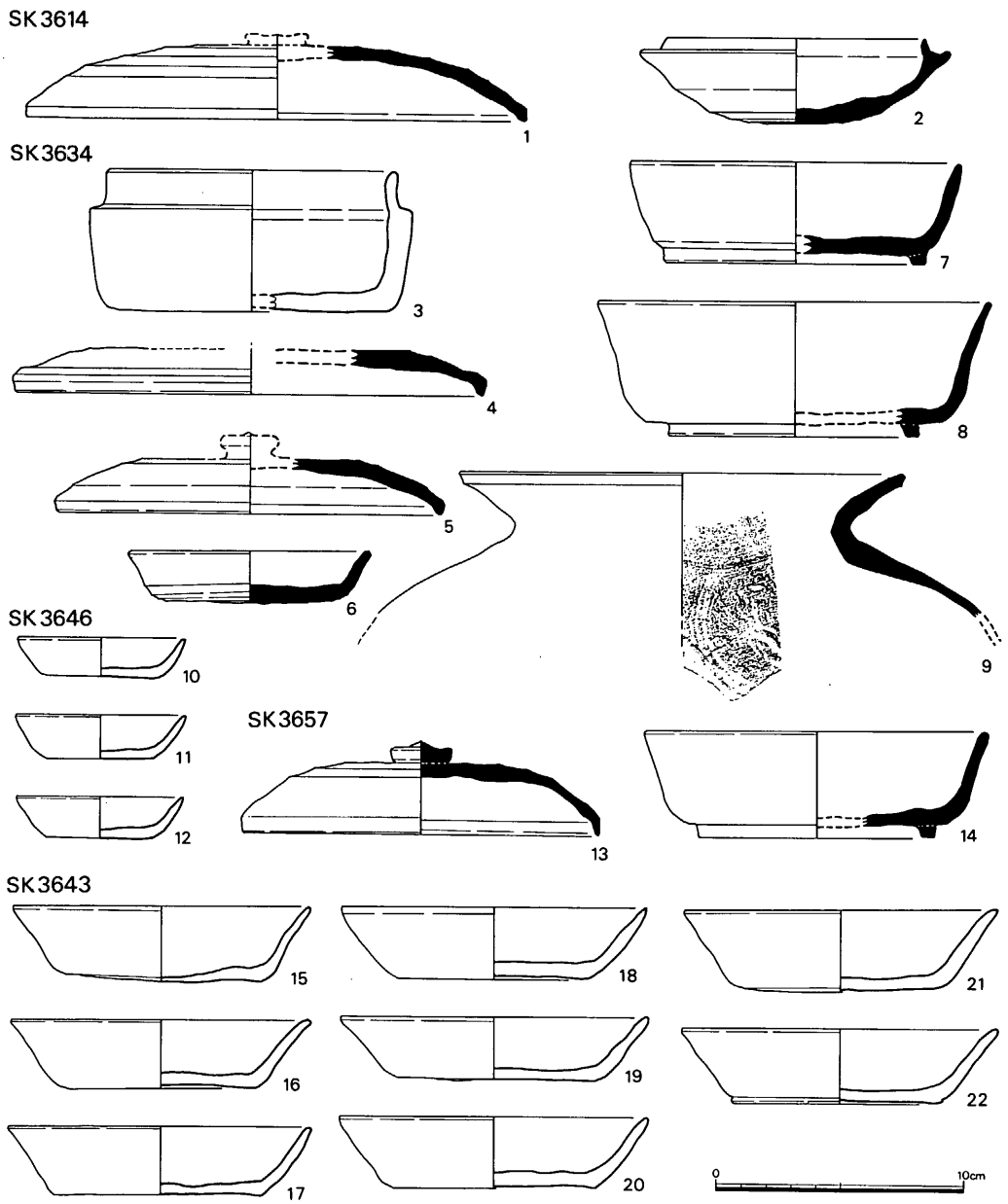
土師器

皿b（10～12）　口径6.8cm、底径4.4～4.8cm、器高1.6～1.7cm。すべて糸切りで10・11には板状圧痕を伴う。

SK3657出土土器（第11図・図版29　別表）

須恵器

蓋（13）　体部は丸味をもち、天井部は高い。口縁部の屈曲は強く長い。天井部は回転ヘラ



第11図　SK3614・3634・3643・3646・3657出土土器実測図

削り調整。つまみ部の径は2.6cm、高さ0.9cm。天井部内面の器壁は平滑でわずかに墨痕がのこり、硯として使用されている。

杯（14）　体部はやや外反気味である。底部はヘラ切り未調整。

SK3643出土土器（第11図・図版29　別表）

土師器

杯（15～22）　口径12.1～12.8cm、底径7.5～8.5cm、器高2.6～3.3cm。すべて糸切りで、13以外は板状圧痕を伴う。

SX3618出土土器（第12図・図版30　別表）

土師器

杯（1～6）　1～3・5・6の平底と、4のように底部が丸味をおびるものに分かれる。口径10.1～12.9cm、底径6.0～6.9cm、器高2.8～4.4cm。すべてヘラ切りで6には板状圧痕を伴う。1以外は油煙が付着する。

皿（7）　ヘラ切りで内底部はナデ、板状圧痕を伴う。

須恵器

壺（8）　体部外面は回転ヘラ削りのちヨコナデ。底部は回転ヘラ削りのちナデ。

灰釉陶器

瓶（9）　精選された淡灰色の胎土で、口縁部内面および胴部外面に灰色釉がかかる。口縁部は強く外反し、口端部は丸味をもつ。口径3.7cm、胴部最大径7.6cm。焼成は良好で硬質。

緑釉陶器

椀（10）　精選された淡茶色の胎土で、全面に施釉される。底部は回転ヘラ削り。体部の器肉はひじょうにうすく、0.3cmほどである。高台径は7.3cm。土師質。

SX3632出土土器（第12図　別表）

土師器

皿（11）　底部はヘラ切り未調整で、橙褐色を呈する。

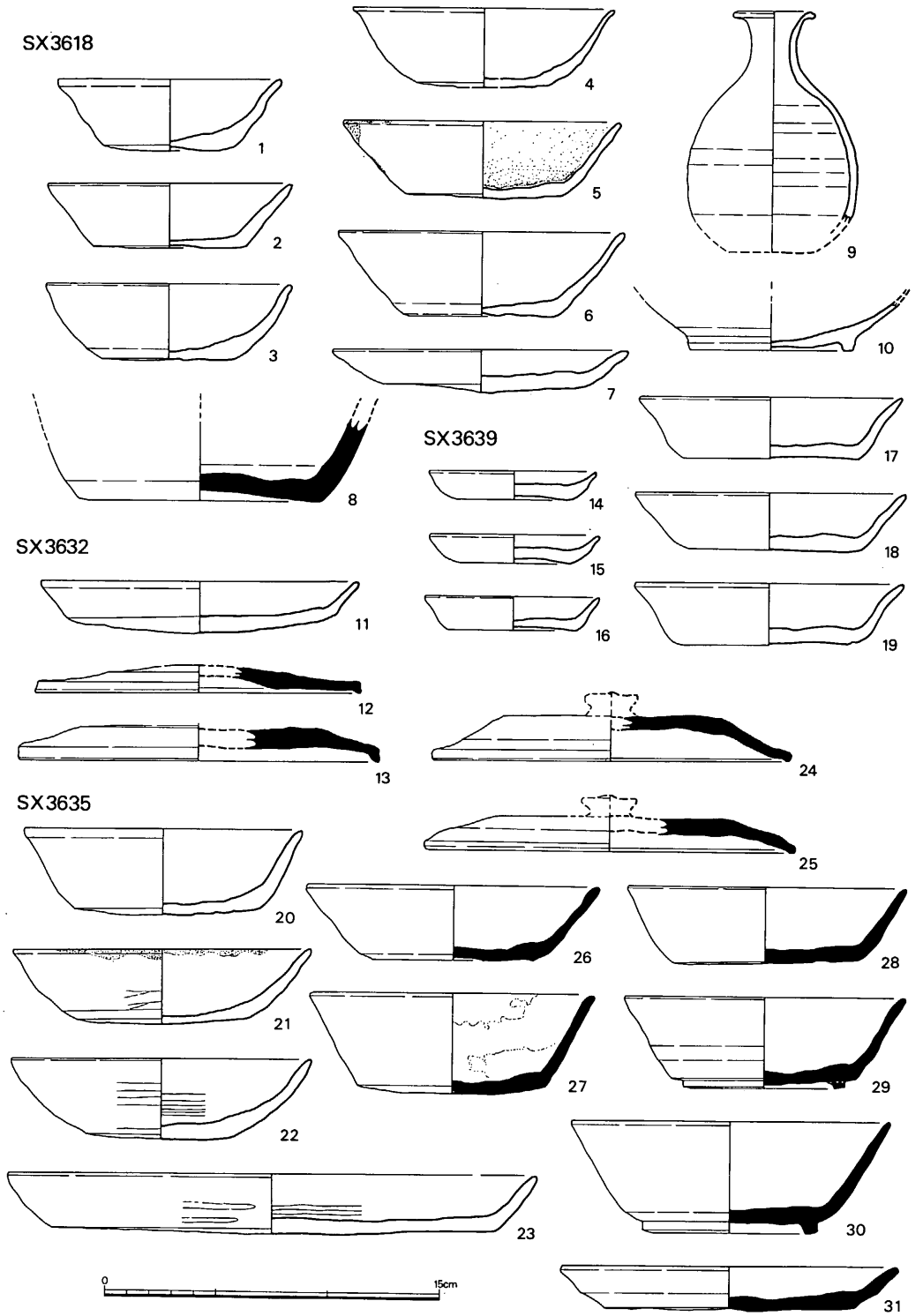
須恵器

蓋（12・13）　12は天井部と体部の境が明瞭である。天井部は回転ヘラ削り調整。歪みが著しい。13も天井部は回転ヘラ削り調整する。

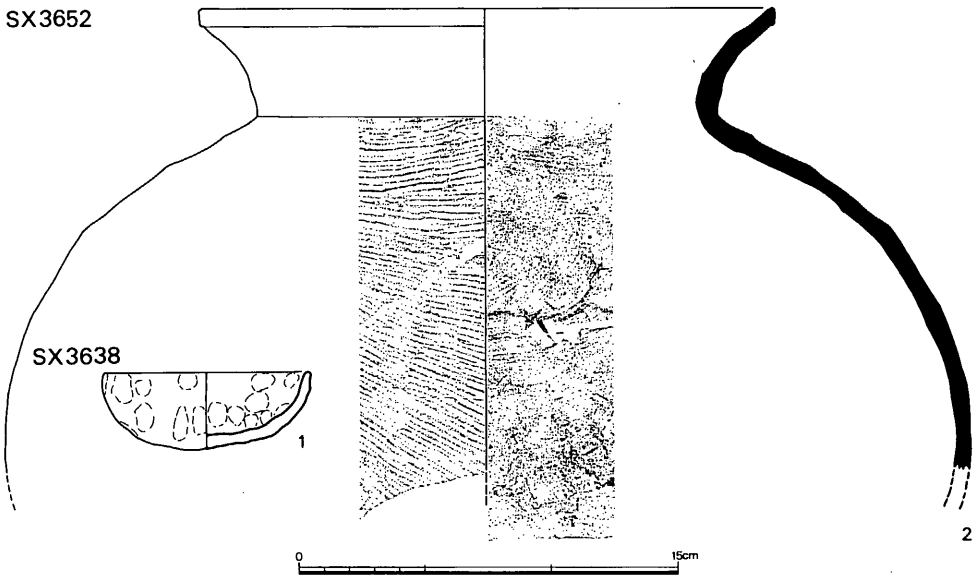
SX3635出土土器（第12図・図版31　別表）

土師器

杯（20～22）　口径12.4～13.5cm、底径5.6～8.3cm、器高2.9～3.9cm。形態から21と20・22・23に分かれる。20は黄灰色を呈し、底部はヘラ切り未調整である。内外面に油煙が付着する。22の外面（内面は風化により不明）、23の内外面に横方向のミガキが施される。ともに底部から体部の一部にかけて回転ヘラ削り調整される。色調は赤褐色。22には油煙が付着する。



第12図　SX3618・3632・3635・3639出土土器・陶磁器実測図



第13図　SX3638・3652出土土器実測図

皿（23）　口径23.6cm、底径20.0cm、器高2.7cm。淡赤褐色を呈する。底部は回転ヘラ削り調整され、体部には内外面とも横方向のミガキがある。

須恵器

蓋（24・25）　24の天井部と体部との境は明瞭である。天井部はヘラ切り未調整。口端部は丸味をもっている。25の天井部はヘラ切りのちナデ。口端部は丸くなる。

杯（26～30）　器高の高いものと低いものがある。底部はすべてヘラ切り未調整。27の底部には板状圧痕を伴う。また内面には墨が付着する。30は高台付で底部はヘラ切り未調整。体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。体部と底部との境は明瞭である。

皿（31）　底部はヘラ切り未調整で板状圧痕を伴う。

SX3638出土土器（第13図　別表）

土師器

椀（1）　手捏ねによる小型の椀で内外面とも指頭圧痕が顕著。口径8.3cm、器高3.0cm。

SX3639出土土器（第12図　別表）

土師器

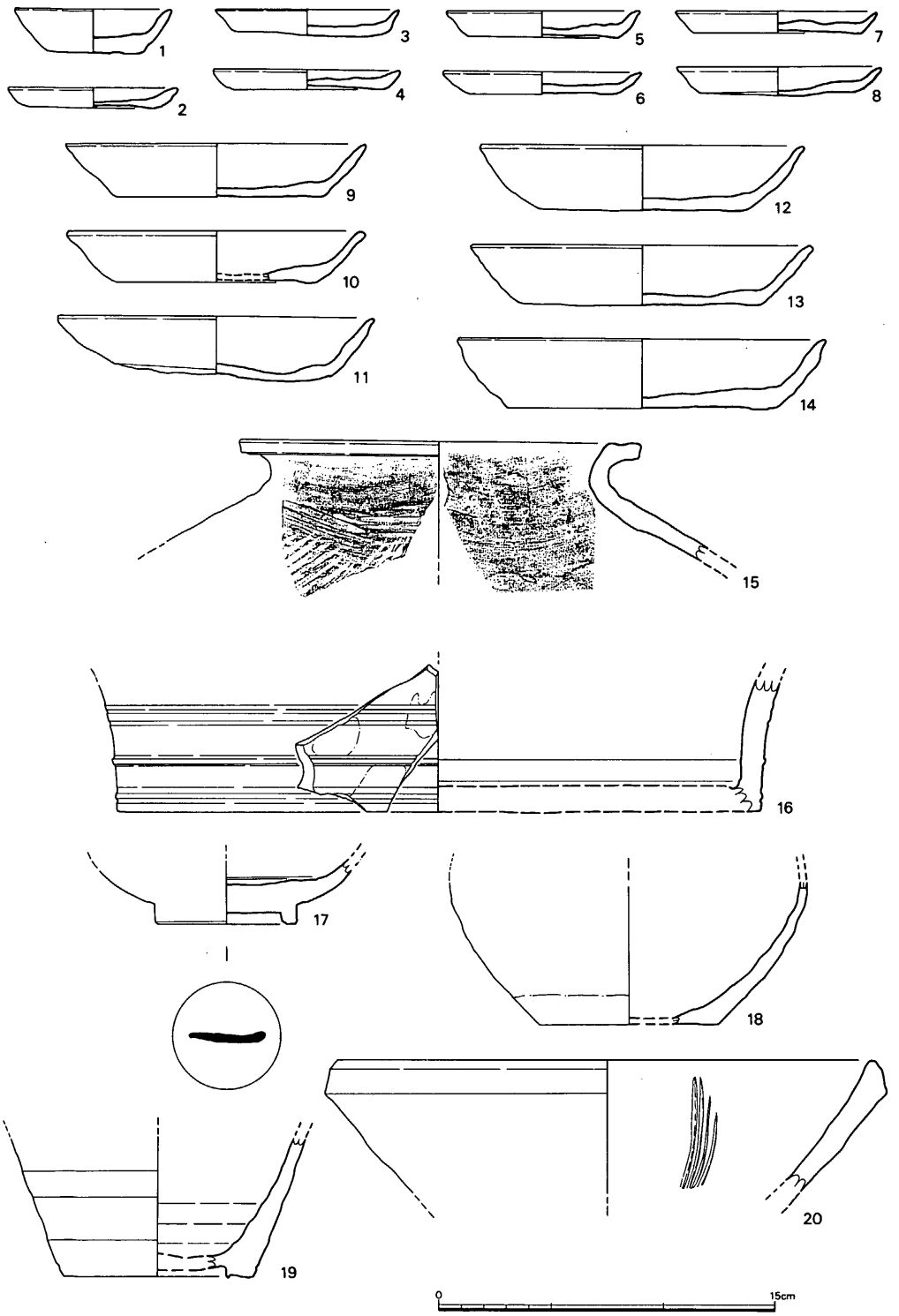
皿b（14～16）　口径7.6～7.8cm、底径5.2～5.7cm、器高1.3～1.6cm。糸切り。

杯（17～19）　口径11.8～12.1cm、底径7.1～7.4cm、器高2.6～2.7cm。糸切り。

SX3652出土土器（第13図・図版31　別表）

須恵器

甕（2）　外面は若干右下がりの細かな平行タタキが残り、内面は当て具痕をなで消す。



第14図　SX3650出土土器・陶磁器実測図

SX3650出土土器・陶磁器（第14図・図版32　別表）

土師器

皿a（２～８）　口径7.6～9.2cm、底径5.8～7.5cm、器高0.9～1.3cm。すべて糸切りで４以外は板状圧痕を伴う。

皿b（１）　口径7.0cm、底径4.3cm、器高2.0cm。糸切りで板状圧痕を伴う。

杯a（９～14）　口径13.6～16.5cm、底径9.3～12.0cm、器高2.3～3.1cm。すべて糸切りで、板状圧痕を伴う。

須恵質土器

甕（15）　外面は平行タタキ、内面は当て具痕をナデ消している。色調は暗青灰色で胎土に黒色砂粒を含む。口縁部は横に引出し、上面には凹線がまわる。

鉢（20）　復元口径23.8cmの摺鉢で内面に筋目を入れる。外面茶褐色、内面暗灰色。胎土に砂粒、砂礫を含む。

陶器

二彩盤（16）　小片のため器形は定かではないが、盤の底部近くと考えられる。淡茶白色の胎土に淡緑色とやや黄味がかかった白色の釉を内外面に施す。焼成は軟質。白釉緑彩か。

中国陶磁器

青磁

椀（17）　灰白色の胎土に緑色釉を施す。見込に一条の沈線がめぐる。外底部には「一」の墨書がみられる。

陶器

壺（18）　淡茶色の緻密な胎土に暗茶褐色の釉をかける。釉の発色はわるい。底部から体部下半にかけて回転ヘラ削り調整を施す。底径7.8cm。

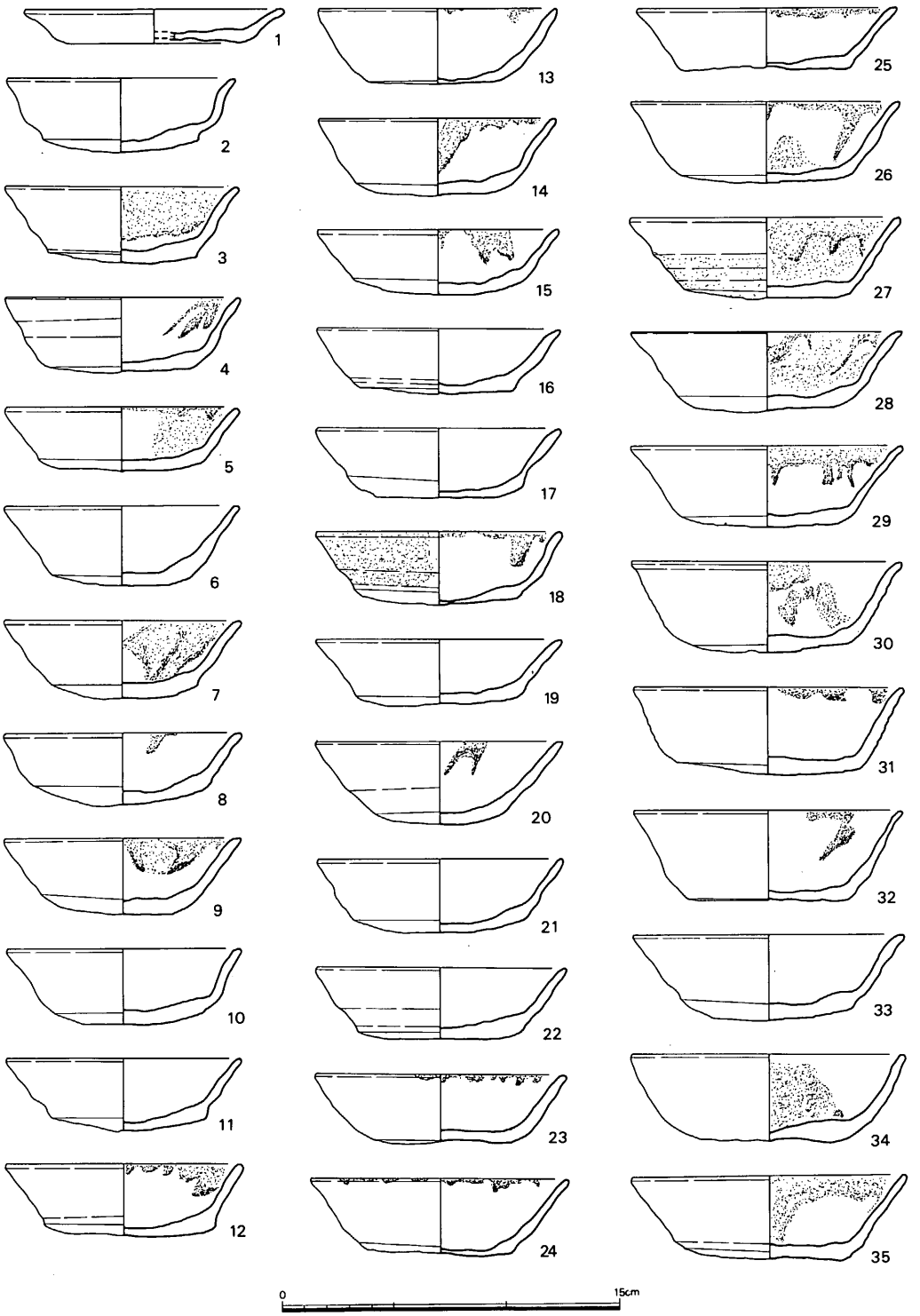
鉢（19）　灰白色の胎土に緑がかった褐色の釉をかける。体部外面は回転ヘラ削りのちヨコナデ。上げ底である。

SX3655出土土器（第15～17図・図版33・34　別表）

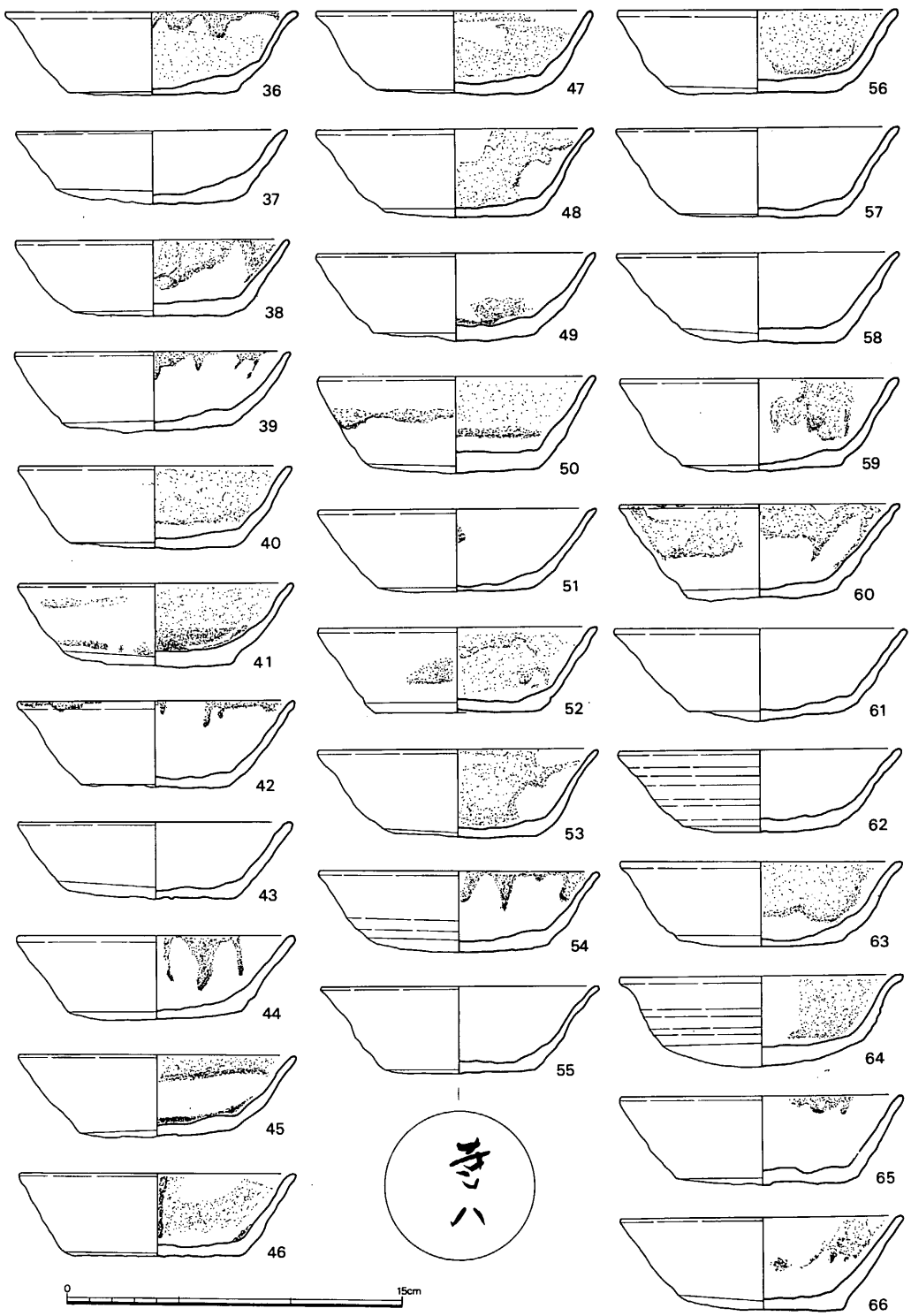
土師器

皿（１）　口径11.5cm、底径7.6cm、器高1.6cm。ヘラ切り。

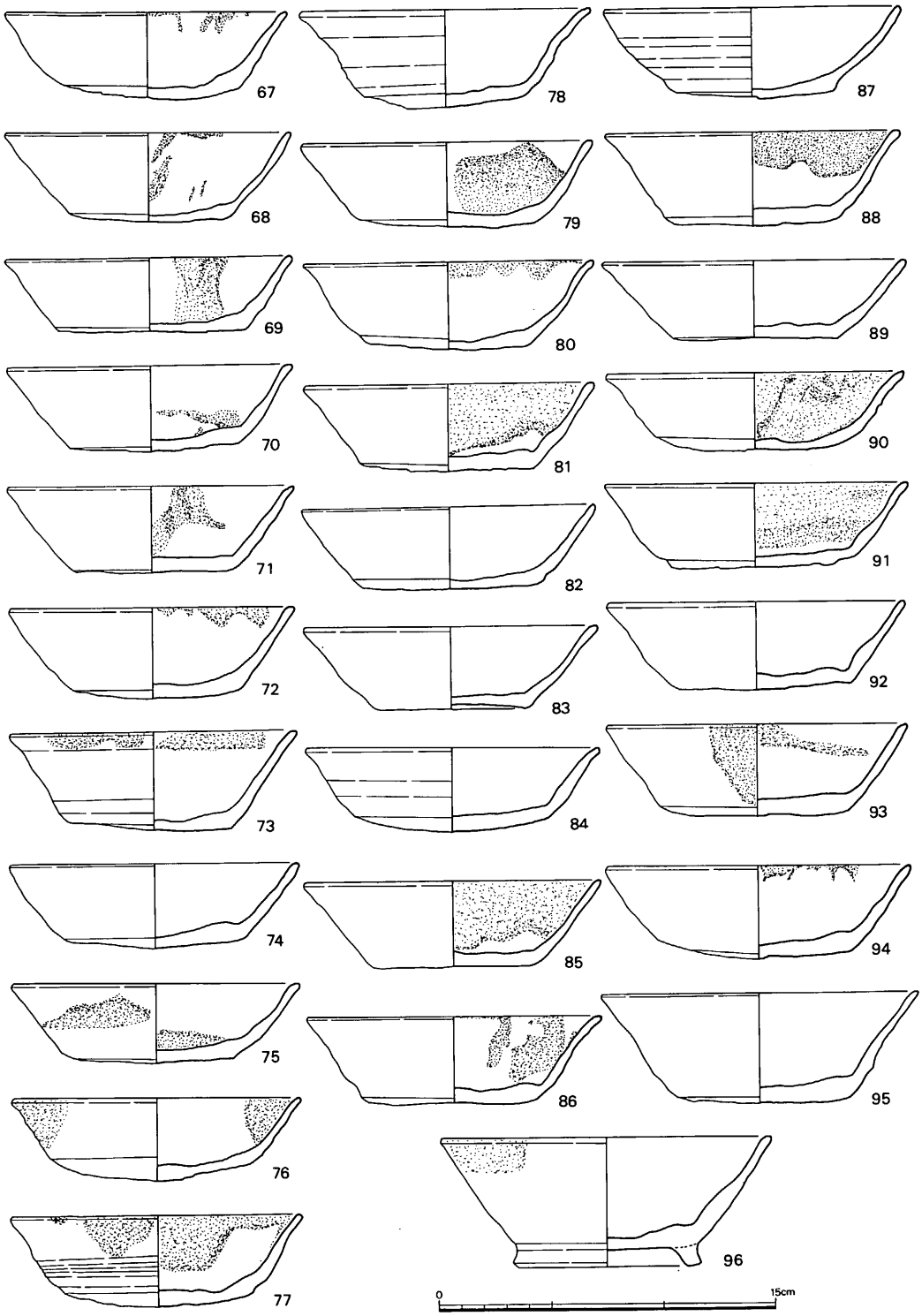
杯(２～95)　すべてヘラ切り。多くは油煙が付着している。口径10.2～14.0cm、器高2.8～4.9cm。底部は平底のものと、丸味をおびたものとがある。55は外底部に「寺八」の墨書がある。64は口縁の外反がきつい。色調はほとんどが灰白色であるが、56は暗黄褐色、62・89はやや赤味をおびた黄褐色～黄白色を呈する。56の内面の体部中位には沈線がまわる。62は外面体部の凹凸が著しく、外底部はナデる。56・62・64・89の胎土は精選されており他のものにくらべ丁寧なつくりである。



第15図　SX3655出土土器実測図(1)



第16図　SX3655出土土器実測図(2)



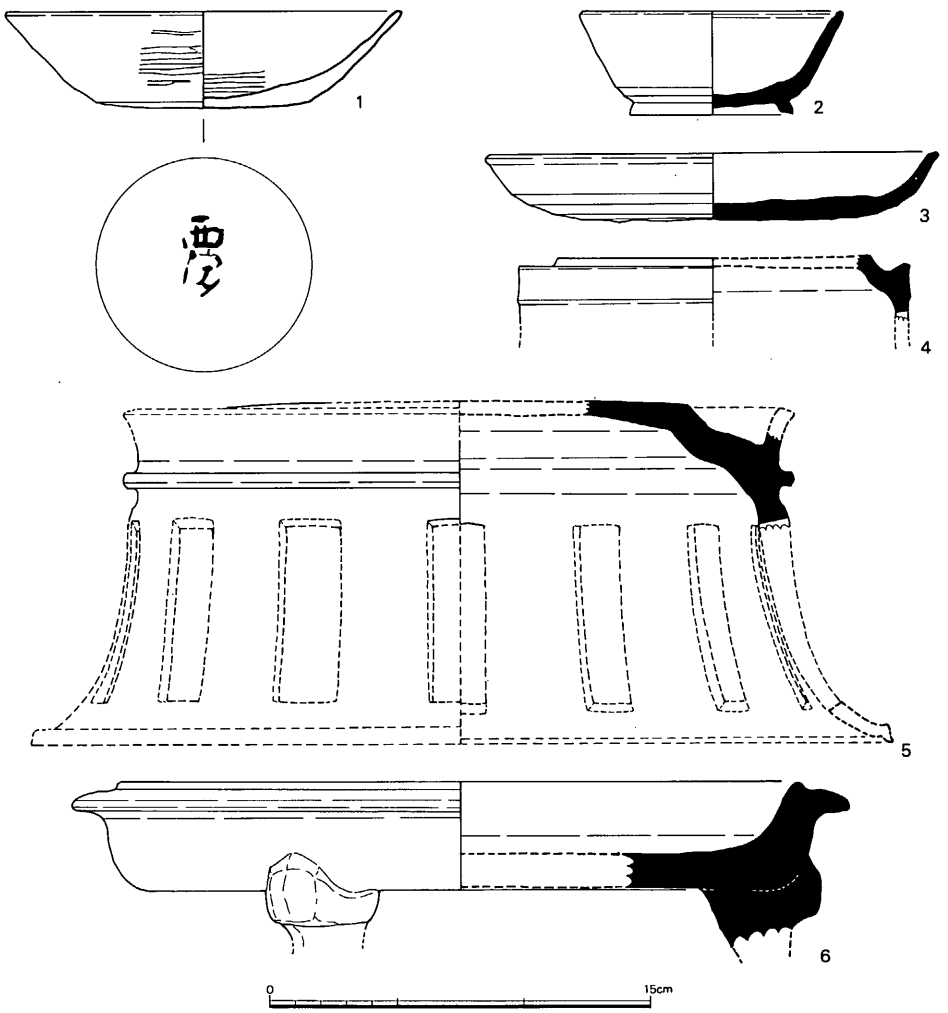
第17図　SX3655出土土器実測図(3)

椀（96）　口径14.8cm、高台径8.1cm、器高5.8cm。ヘラ切りで板状圧痕を伴う。外面に油煙が付着する。

茶褐色土層出土土器（第18図・図版35　別表）

土師器

杯（1）　口径15.6cm、底径8.4cm、器高3.9cm。底部から体部下半にかけて回転ヘラ削り調整される。その後、内外面とも横方向のヘラミガキが施される。外底部には「西院」と墨書される。色調は明黄褐色で、胎土は精選されている。なお、昭和52年度におこなった第45次調査出土の「東院」の墨書をもつ須恵器皿とともに建物の呼称を示すものとして興味深い。



第18図　茶褐色土層出土土器実測図

須恵器

杯（２）　小型の杯で体部と底部の境は不明瞭である。口縁部内面に浅い溝状の段をもつ。外底部は回転ヘラ削り調整。

皿（３）　体部下半から外底部にかけて強い回転ヘラ削り調整を施しているため、体部と底部の境は丸味を帯びる。内底部には火襷がある。茶褐色を呈す。

円面硯（４・５）　４は小片のため不確実ではあるが、硯面径12.2cmほどに復元できる。陸部・圏台部を欠失する。欠損面を観察すると長方形の透かしを入れていたことがわかる。外堤部は陸部よりも低い。突帯部は退化してわずかに段をなす。５は硯面径17.0cmほどに復元できる。圏台部は欠失する。残存部から透かしは長方形のものが16個前後まわるものと考えられる。外堤部も端部を欠くがわずかに外傾する。色調は灰色を呈する。

獣脚付盤（６）　蓋受けの返りをもつもので、口径26.4cmに復元できる。獣脚は一ケ所にのこるが、下部は欠失する。脚は残存部から考えるとそれほど高くはならない。内外面とも横方向にミガキを施し、底部は削りによる再調整を加えている。内底部はわずかに黒変している。淡青灰色を呈し、胎土には砂礫を多く含む。

濁茶色土層出土土器（第19図・図版35　別表）

土師器

皿（１）　口径に比して器高が著しく低いものである。ヘラ切り。口縁部の内側に浅い沈線状の段をもつ。

杯（２～７）　口径9.8～10.4cm、器高2.4～3.1cmの小型のものと、口径12.5～12.7cm、器高3.7～4.0cmのものがある。すべてヘラ切りである。６の体部は直線的で全体に古期の様相をもつ。３・５～７には油煙が付着する。

椀（８）　口径14.3cm、高台径8.0cm、器高6.5cmをはかる。内底部はナデで板状圧痕を伴う。

須恵器

杯（９・10）　９は口径11.6cm、高台径6.8cm、器高3.6cm。底部はヘラ切り未調整である。10は体部と底部の境が不明瞭で、口縁はやや外反する。焼成は不良。

壺（11）　長頸壺で体部下半は回転ヘラ削り調整する。最大径21.4cm、高台径10.8cm。

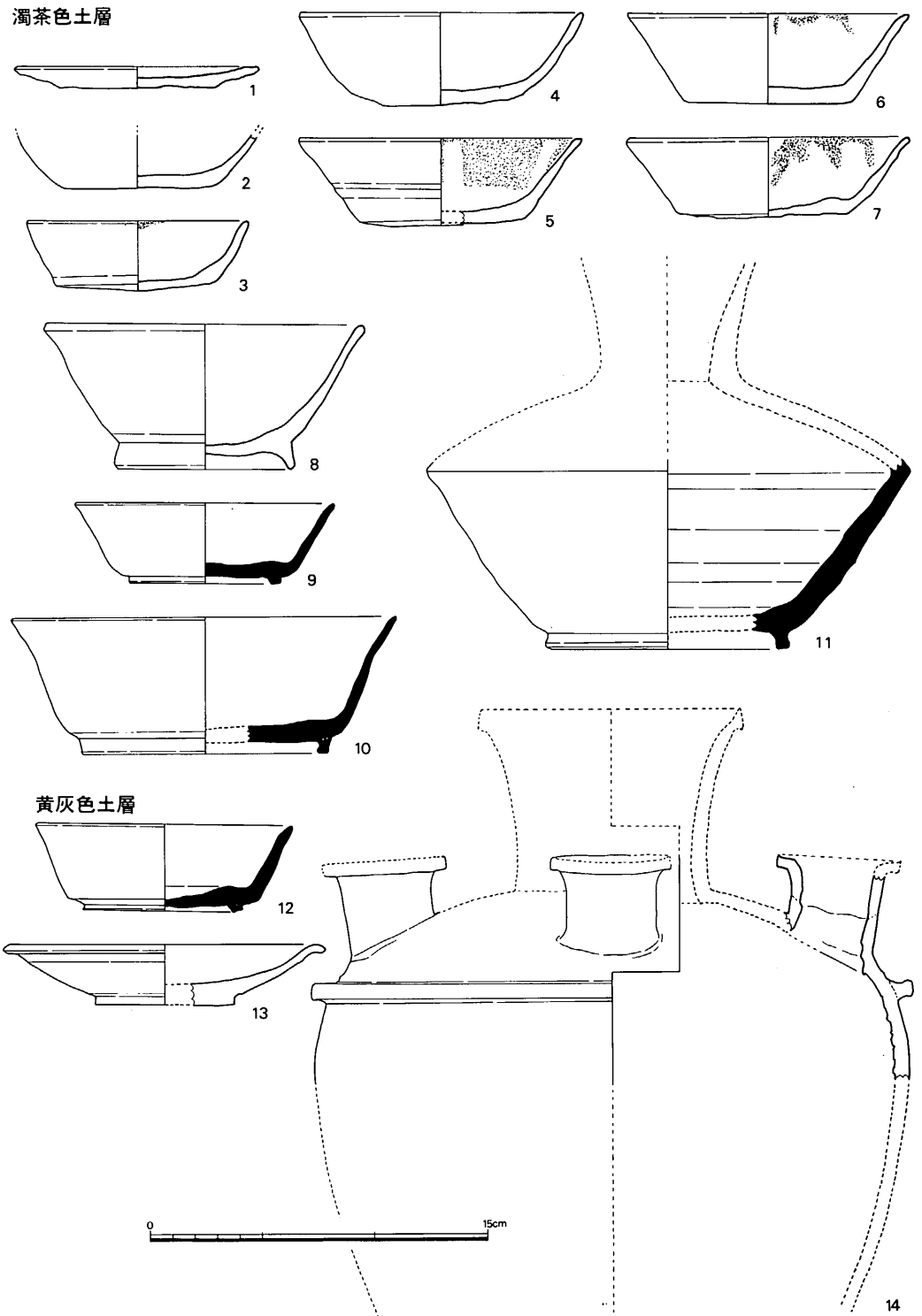
黄灰色土層出土土器（第19図・図版35　別表）

須恵器

杯（12）　体部と底部の境は明瞭で、胎土には黒色粒子を含む。

緑釉陶器

皿（13）　灰色の胎土に淡緑色の釉を全面にかける。釉の発色はよい。口縁部は垂下気味に外反し、口端部は丸味をおびる。内底部には施釉前に暗文風のミガキを施す。須恵質。口径14.4cm、底径6.2cm、器高2.7cm。



第19図　濁茶色土層・黄灰色土層出土土器・陶磁器実測図

灰釉陶器

多口瓶（14）　仏器の一つ浄瓶の一種で、長頸壺の肩部に注口をとりつけたもの。肩部の残片で注口は一つしか残っていない。胴部は卵形に復元でき、注口下に一条の凸帯を巡らす。胎土は精良で灰白色を呈す。釉は遺存していない。胴部は、外面ヨコナデ・内面に孤状の当具痕。

瓦類（第20図・図版36・37）

軒丸瓦19種310点（うち４種14点は、中世以降）、軒平瓦15種127点（うち３種９点は、中世以降）、鬼瓦７点、熨斗瓦３点、文字瓦９点の出土があった。

調査区全体の軒丸瓦の出土傾向を見ると、老司Ⅰ式は237点で最も多く、中房が１＋８・８弁単弁・外区珠文24の平安時代の観世音寺を代表する軒丸瓦11点、第20図１の単弁軒丸瓦８点、第20図２の外区内縁に唐草文が配された軒丸瓦６点などが出土点数の多い例である。

軒平瓦でも、老司Ⅰ式が63点と最も多く、次いで鴻臚館Ⅱ式11点、鴻臚館Ⅰ式５点という出土点数である。

鬼瓦は、７点のうち奈良時代のもの（図版37－１）は１点である。政庁および大野城大宰府口出土の鬼瓦よりやゝ小型で大宰府政庁出土中形例[註1]と同笵であり、鴻臚館出土例や筑前国分寺出土例、長安寺廃寺出土例などと同笵関係を調査する必要が生じた。図版37－２は、型によらず直接レリーフされたもので、平安時代以降のものと思われる。この他５点は小破片で全体の姿を知ることは出来ない。

熨斗瓦３点は、２枚割１点、３枚割２点の破片である。３点とも凸面に第122次調査SE3680出土平瓦A類の叩打痕を残している。

文字瓦では「平井」「佐」が平瓦に１点ずつ、「観世音寺」の左右逆字が丸瓦で５点、平瓦で４点出土している。

出土瓦類のうち最も注目されたのは、SX3635からの出土状況である。

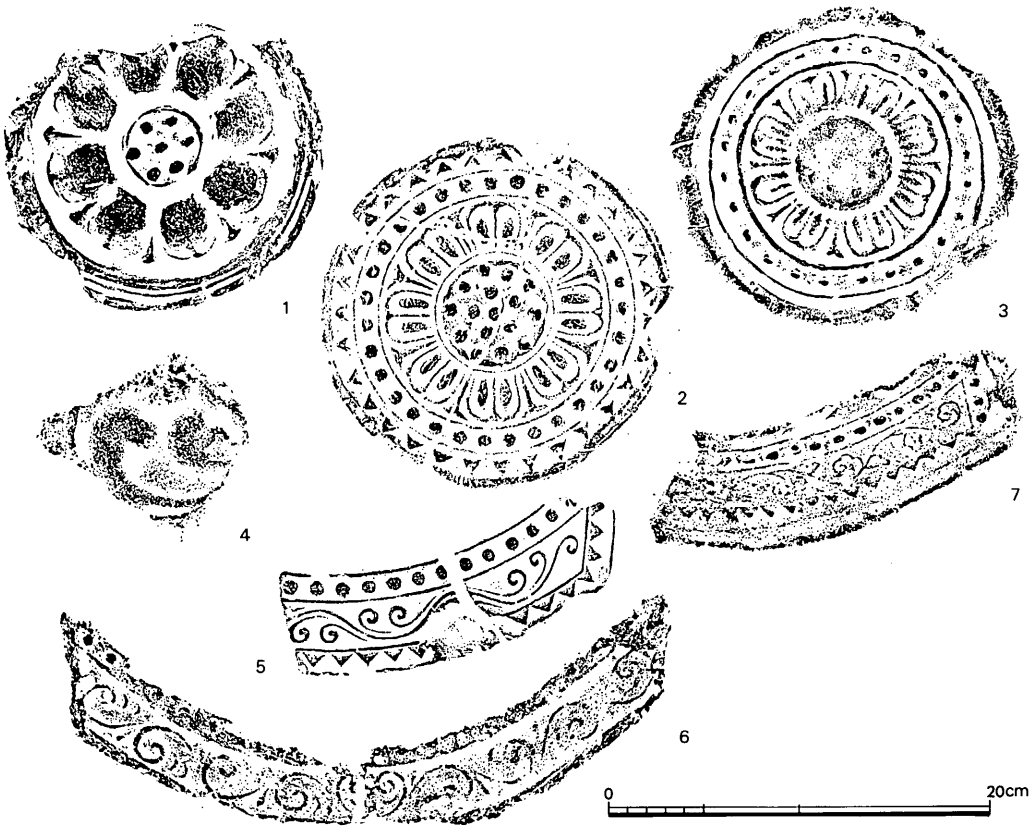
軒瓦類では、第20図に示したとおり、軒丸瓦４種、軒平瓦３種が出土している。これ等について出土点数での比較をすると、軒丸瓦では２が106点、１・２・４は各１点にすぎない。また軒平瓦では５が23点、６が４点、７が２点出土している。

また奈良時代の鬼瓦（図版37－１）や熨斗瓦もこの遺構から出土している。

SX3635は９世紀初頭の整地層を掘り込んでいるが、４の巴文軒丸瓦は、より新しい時期のものと考えるべきである。

このようにSX3635は第20図２と５の組合せ、すなわち老司Ⅰ式軒瓦セットを主体とした瓦の出土状況であった。老司Ⅰ式軒瓦セットは観世音寺創建期の軒瓦である。

「延喜５年資財帳」によると、観世音寺には、37の堂宇があったと記されているが、このうち瓦葺と記されている堂宇は主要伽藍の12堂宇にすぎない[註2]。また老司Ⅰ式軒丸瓦では、31点の破片がそれぞれ接合出来、結果的に13点となったし、同式軒平瓦でも接合できたものがあった。



第20図　SX3635出土軒瓦拓影

このことから、SX3635に投棄された瓦は、この遺構から近い場所にあった建物に使用されていたものと思われる。近い建物をあげれば、東面築地、大房、鐘楼、SB3615・3620などがあげうる。

SB3615・3620は第121次調査の結果からは瓦葺であった可能性は小さい。「延喜５年資財帳」では、大房・鐘楼は瓦葺であり、東面築地は板葺となっている。もっとも東面築地にしても、南面・西面築地が瓦葺と記されてていることから、創建の時〔天平18年（746）〕から延喜５年までには160年ほど経過していることを考えると、当初は瓦葺であった可能性は充分あるものと考えられる。また鐘楼そのものについては、遺構が調査できていないことなど不確定な要素は多々あるが、出土軒瓦が点数が多いこと、また数多く接合できたことを考えるとこの瓦が使用された場所は近くであろう。SX3635に最も近い瓦葺建物は、大房（SB1810）である。断定できるような資料はないが、大房に葺かれていた瓦がSX3635に投棄されたのではあるまいか。

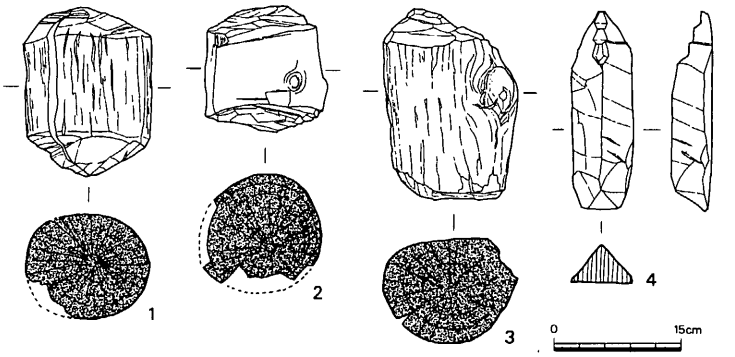
なお第20図の４、巴文軒丸瓦を除けばいずれもSX3635出土の軒瓦は奈良時代のものである

が、大房が焼失したのが、康平７年（1064）と考えられている。また出土瓦にも二次的な火の痕跡を留めたものと思われるものはないようだ。

木製品（第21図・図版38）

毬（１～３）　広葉樹心持材の樹皮を剝ぎ、両端を粗くはつったもの。１には無数のクラックが入る。

舟形状製品（４）　スギかヒノキの征目材を削って舟形状に整えたもの。舟形一般は通常舟槽を刳りぬいてつくるが、この製品の場合は上面を粗く平坦に削っているだけである。船首は尖らせ、船尾は隅丸方形状につくる。舳の稜線を欠損している。全長7.8cm。幅2.4cm、厚さ1.6cm。



第21図　SX3650出土木製品実測図

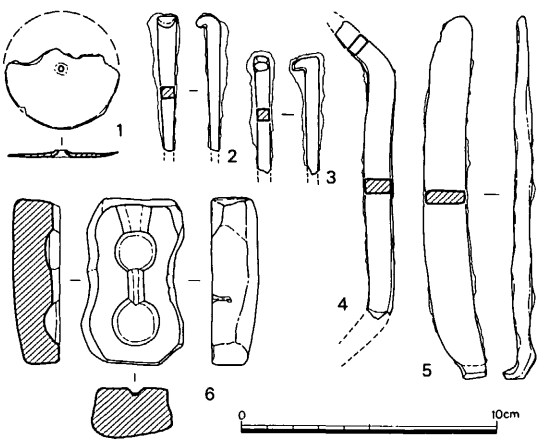
金属製品（第22図・図版39）

有孔円盤（１）　径4.6cmの円盤中央部に径2.6cmの孔を穿つ。下面から上面にむかって穿孔したため、孔の周辺は盛り上がっている。円盤の厚さは0.2cmで、周縁に近づくにしたがい薄くなる。紡錘車か。SX3635出土。

釘（２・３）　ともに頭部を折り返し、先端部は欠失する。２は現存長5.3cm、中央部で身幅0.55cm、身厚0.5cmをはかる。SK3644出土。３は現存長4.7cm、中央部で身幅・身厚とも0.5cmをはかる。SK3643出土。

鎹（４）　両端部を欠失する。現存長11.9cm、中央部で身幅1.1cm、身厚0.6cmをはかる。SX3654出土。

不明鉄製品（５）　長さ13.3cm、中央部での幅1.6cm、厚さ0.6cmをはかる。背・腹とも反っており、上端部付近で幅を減じ、上端部は丸くおさまる。下端部は返り状に折り返し、幅1.0cm、厚さ0.2cmである。端部は鋭角に切られる。両側縁部は鍛造時の凹凸が著しい。未製品か。黄灰色土層出土。



第22図　各遺構・層位出土金属製品・鋳型実測図

鋳型（第22図・６）

合わせ型の外型の一方である。長さ6.6cm、幅4.1cm、厚さ1.9cm。略半球形の二つの彫り込みは溝（上端幅0.6cm）によって連結している。半球形の彫り込みの中位には不明瞭な稜がまわる。一方の径は1.7cm、鋳型の合わせ面からの深さ0.45cm。他方は径1.8cm、深さ0.5cmである。合わせ型のもう一方が同形であれば、製品は球形とはならない。上端部に切られた溝は湯口であろう。側縁部には一ケ所合い印を刻む。鋳型土は黄白色で堅くしまっており、湯口と鋳面の周囲は部分的に赤化する。SB3610北の層位中より出土。

銅銭（第23図・図版39）

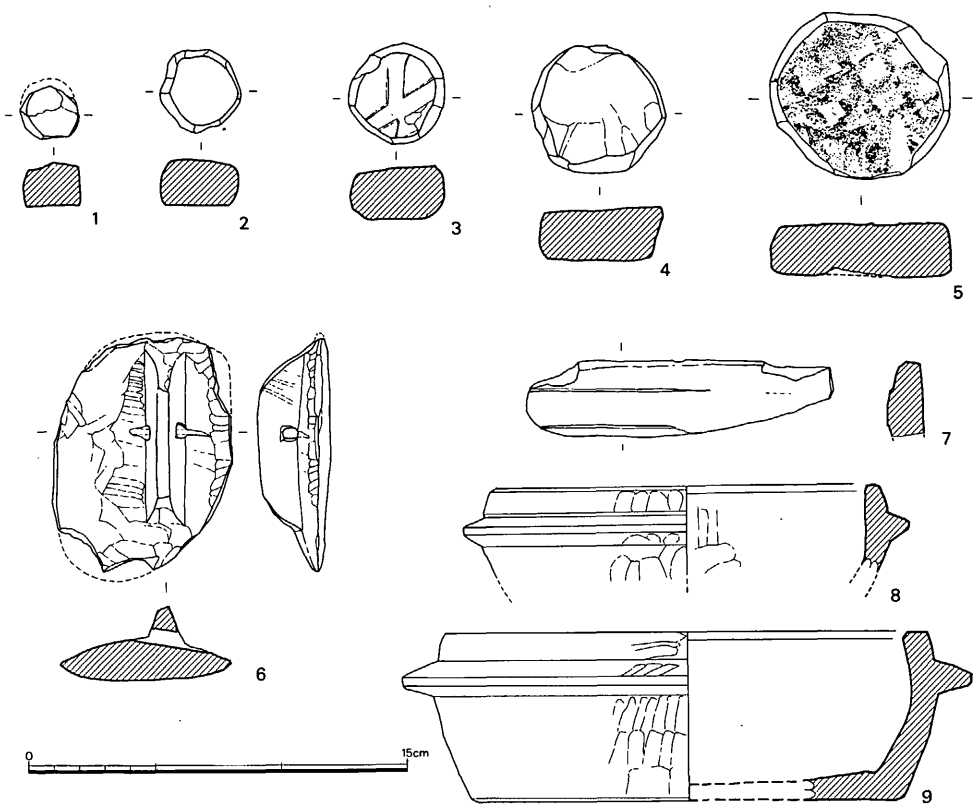
１は天聖元寶(1022年初鋳)、２は元符通寶(1098～1100年)。



第23図　銅銭拓影

土製品（第24図・図版39）

円盤状土製品（１～５）　平瓦の再加工品である。周縁を打ち欠き、あるいは削って円形に整えている。大きさは径1.7～7.1cmまで様々である。それ



第24図　各遺構・層位出土土製品・石製品実測図

ぞれ茶褐色土層、SD3630、SE3636、SX3654、SX3618より出土した。

石製品（第24図・図版39）

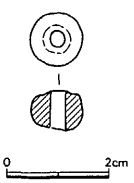
滑石製スタンプ状製品(6)　滑石製石鍋の再加工品で上・下端部をわずかに欠失する。現存最大長9.4cm、最大幅7.0cm、最大厚3.0cm。石鍋の鍔部を利用して長さ6.0cmの把手をつくりだす。把手の中央部には径0.4cmの孔が穿たれる。両側縁部は0.1～0.2cm幅で面取りされる。表面には横方向の細かいノミ痕を残す。裏面は凸状で平滑にみがかれる。SD3630から出土した。

滑石製品（7）　滑石製石鍋の再加工品で、周縁を削った後、みがいている。本来の石鍋のカーブは残っている。黄灰色土層から出土した。

滑石製石鍋（8・9）　8は口径15.4cmに復元できる。外面は縦方向のノミ痕が残る。内面は上半が縦方向の削りのちミガキ、下半は横方向に削る。鍔の上部の付根には溝状の削りがまわる。底部は欠失する。9の体部はやや内弯気味に立ち上がる。復元で口径19.0cm、底径17.1cmで、器高は6.7cmをはかる。外面は口縁部が横方向、鍔部・体部は縦方向にノミ痕が残る。内面は磨いて平滑になる。ともに外面には煤が付着する。8はSD3630、9は灰褐土層から出土した。

ガラス製品（第25図・図版39）

径1.0cmのガラス玉で下方から上方に向けて穿孔する。このため上方の孔の周辺が若干もり上がっている。孔径は0.25cmである。色調は白色～透きとおった緑色を呈する。SD3679より出土した。



第25図　ガラス玉実測図

小結

今回の調査では、古墳時代から中世にわたる遺構を検出した。主な遺構として、掘立柱建物・柵・溝・土壙・鋳造関係遺構などがある。検出した各遺構は、整地層を単位として明確に峻別できるものではないが、ここでは出土遺物・遺構の切り合い関係によって、便宜的に5期にわけて述べていく。なお、I期以前の遺構としてはSX3638があげられる。これは6世紀代の遺構かと思われ、規模・平面形態等より竪穴式住居の可能性がないとは云えない。

I期の遺構としてはSK3634・SK3648・SD3619がある。SK3634は8世紀前半代の土壙で、埋土中より鉄滓が出土している。SK3648はSB3610の柱掘形に切られている。この遺構からは時期を示すような遺物は出土しなかったが、遺構相互の関係から、この期に入れた。SD3619は発掘区の西南隅部にある溝である。この遺構の埋土中には7世紀後半代～8世紀前半代の遺物を多く含んでいる。これらのことからI期の遺構は観世音寺伽藍造営に関わる一連の地業として捉えることも可能である。

II期の遺構としてはSB3610・3615・3620、SA3623・3625がある。これらは方位を同じくし、SB3610の西妻柱列はSB3620の西側柱列と同一線上にある。またSB3620の東側柱列はSB3615の西妻柱列と同一線上にある。以上のことから、これらの建物・柵は一連のものと考えられる。

建物の時期については、SB3610の西南部を覆う濁茶色土層と西北部の柱掘形を覆うSX3632がともに9世紀前半・中頃代であり、柱掘形から出土した遺物の上限は8世紀後半代に位置づけられるものである。またSB3620は棟柱が9世紀初頭の瓦溜りSX3652に切られており、これにより、建物の下限をおさえることができる。したがって、これらの建物・柵は8世紀後半代には造営され、9世紀初頭にはすでに廃絶していたものと考えられる。なお、SA3525の時期を確定できるような遺物はないが、II期の建物・柵と方位を同じにとることや、SA3525の東側には建物が延びていないことから、建物の東を区画する一連の施設として考えて大過ないであろう。

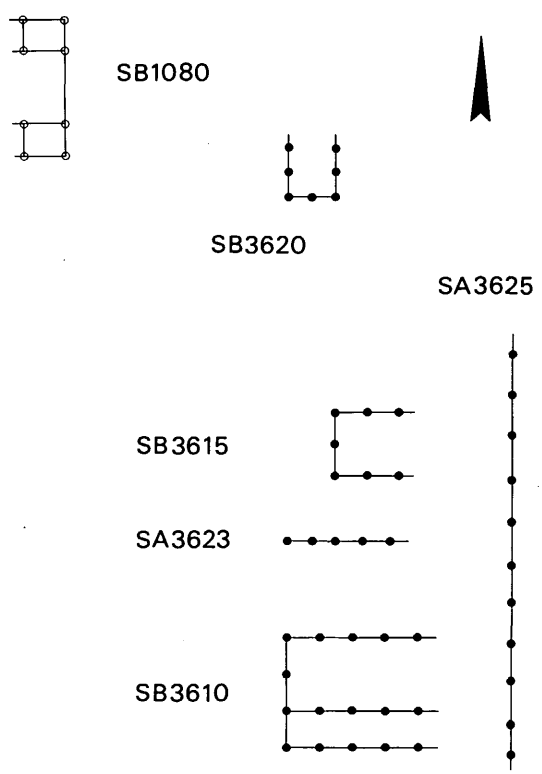
III期の遺構としてはSX3632・SX3652・SX3655があげられる。SX3632はSB3610の柱掘形の一部を覆う土壙状の瓦溜りである。ここにSX3640が構築されている。SX3640の営まれた時期は不明であるが、SX3632と同時もしくはそれ以降とすることができる。出土遺物よりIII期はその上限を9世紀前半から中頃に比定できる。

IV期の遺構は発掘区東半部で検出したSD3630・SE3645・SE3658・SK3614である。後三者はSD3630の掘削前の遺構である。SD3630の西側ではこの時期の遺構は検出しておらず、この溝がどの遺構に伴うものか明確でない。IV期は13世紀代。

V期になると発掘区の西側に土壙・溝などの遺構がひろがってくる。IV期まではSD3630によってなんらかの規制を受け、その西側には遺構が営まれなかったが、SD3630が埋没したV期には観世音寺の寺域内に遺構が存在し始める。SD3630は東面築地の推定線と重なっており、寺域の区画との関連が示唆できる。V期は14世紀代に比定できる。

また、SA3621・SA3622・SA3624・SA3659からは遺物は出土しておらず、時期の決め手には欠く。しかし、位置関係や方位から考えるとSA3621・SA3659、SA3622・SA3624がそれぞれ一連のものとして捉えられよう。ただ、これらが何を限る施設であったのかはわからない。

ここで、掘立柱建物と柵についてさらに文献との関連で検討する。これらは主要伽藍の一つである大房と方位をほぼ同じにしており、しかも観世音寺の推定寺域内で検出した掘立柱建物ということで延喜五年



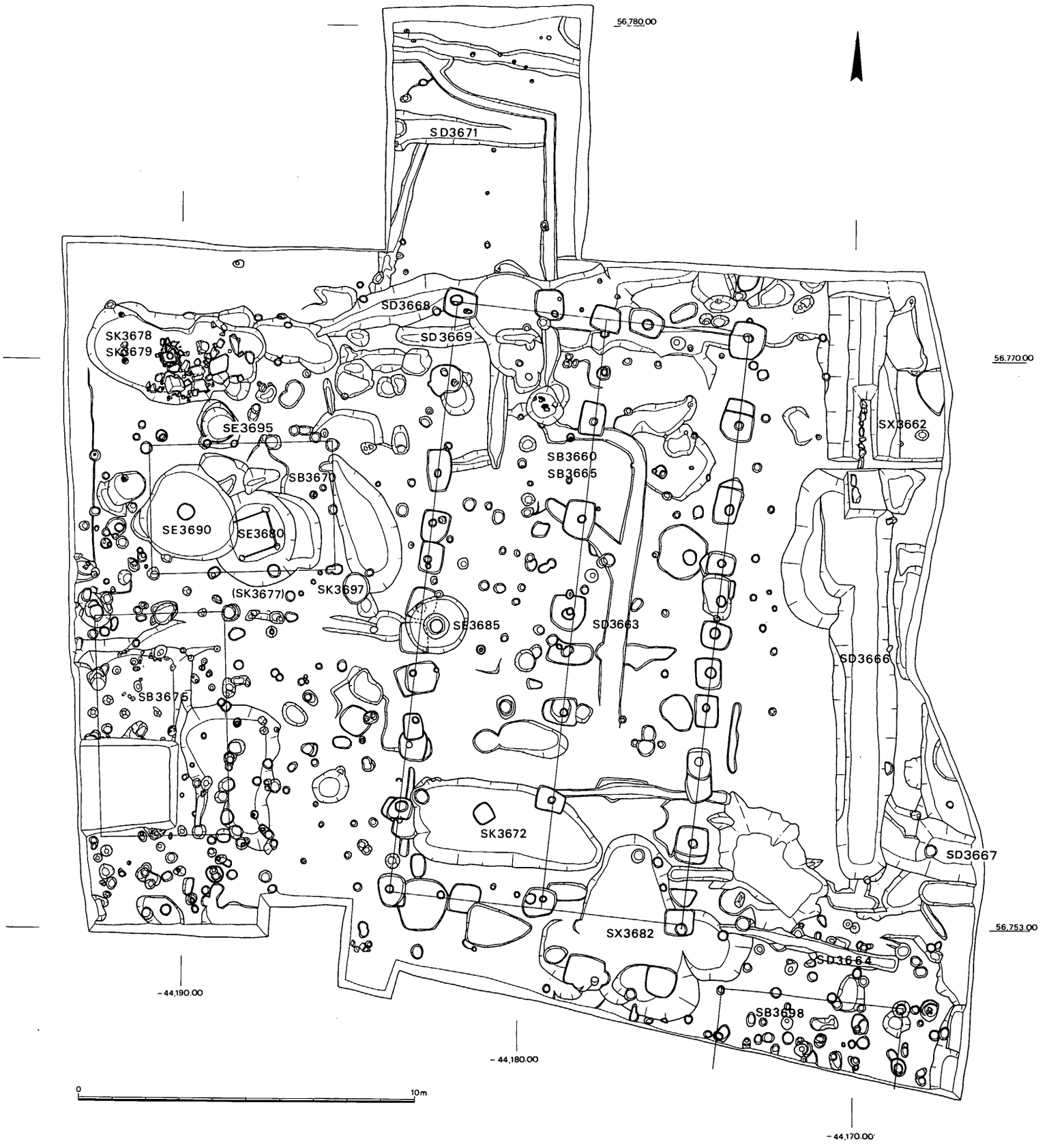
第26図　I期遺構配置図

(905年)『観世音寺資財帳』(以下、資財帳)に載る付属の建物との関連が考えられる。資財帳によれば、主要伽藍以外に、寺務を執行する政所院(北屋・東板倉・第二板倉・亀甲倉・西方厠・西第北板倉・西方問屋)と日常生活を支える大衆院(温室・北厨・西厨・竈屋・水屋・備屋・碓屋・東板倉・南板倉・造瓦屋)が存在している。しかしこの中に、今回検出した建物と規模が一致するものは見あたらない。今回、「西院」銘の可能性のある墨書土器が出土し、さらに、昭和52年度に「東院」銘のものが出土している。これらから、東院・西院の存在は裏付けられたが、これが具体的な建物の呼称であるのかについては今後に残された課題である。次にSA3525について触れてみたい。SA3625は推定中軸線から東に約84mの所で検出した。資財帳に記載の南・北の築地規模57丈(約171m)の半分にきわめて近い数値である。この柵は築地の寄柱の可能性もあるが、対応すべき位置で柱穴を検出することはできなかった。これを仮りに築地関連のものとしてみた場合、北面築地に推定した第70次調査検出の溝・暗渠施設とは構造的に異なっており、問題が残る。しかし、資財帳には「□□陸拾伍丈板葺(東長)」と記されており、他の三面の築地が瓦葺であるのに対し、延喜5年段階では東面のみ板葺となっている。そうしたことから、あるいは東側は別の構造を考えることも不可能ではない。このことについては東北隅部及び南面・西面築地の調査結果を俟って今後さらに検討していきたい。

期別＼主要遺構	建物、柵、井戸、溝、土壙等
I 期	SD3619、SK3634、SK3648
II 期	SB3610、SB3615、SB3620、SA3623、SA3625
III 期	SX3632、SX3652、SX3655
IV 期	SE3645、SE3658、SD3630、SK3614、SK3657
V 期	SD3637、SD3649、SK3643、SK3644、SK3646、SX3617、SX3639

註1　大宰府出土の創建期の鬼面鬼瓦については、高さ45cm最大幅40cmのものを最大とし、これより小型のもの2種がある。小型のもの2種についても大小があるが、計測値を示せる資料はない。この3種については『九州古瓦図録』図版6に示されている。石松好雄氏の教示による。

註2　「延喜5年資財帳」で瓦葺とされている建物は、大門(南門)、中門、金堂、講堂、塔、鐘楼、経蔵、戒壇院東門屋、大房、小子房、馬道屋、竈屋の12堂宇である。この他に南面築地と、西面築地が瓦葺であったことが知られる。回廊については、記述がない。



第27図　第122次調査遺構配置図

第122次調査

本調査地は観世音寺前面の東半部にあたり、推定南面築地跡を含む約630㎡について実施した。本調査の目的は当調査地域が鏡山猛氏復元案による南面築地推定位置の南側に接すること、また、昨年実施した第120次および第70次補足調査結果から、北面築地の位置が従来推定された位置より約20m程南へずれる可能性が考えられるようになった事などから南面築地に関する知見を得ることにあった。

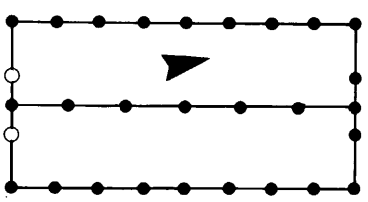
調査は平成2年6月1日に着手し、表土、床土の除去を終了し6月19日には本格的な遺構検出を開始した。当初、対象にした地域の調査をほぼ終了した段階で従来の築地推定部分を幅6.0m、長さ7.0mで拡張し調査した。7月の下旬には拡張区を含め遺構検出を終了し、7月27日に写真撮影（空中写真を含む）を行ない、7月31日より実測を開始し、8月6日には実測を終了した。そして8月下旬には柱穴・井戸等の補足調査を終了し、8月30日より、埋め戻しを開始し、9月17日には全作業を終了した。

検出遺構

第122次調査では掘立柱建物5棟、井戸4基、溝7条、土壙5基それにピット群等の遺構を検出した。発掘区の北半部では床土除去後に地山面が露出し、遺構はその地山面に切り込まれている。この地山面は南側に向かってゆるやかに傾斜し、南西部分で最も下がる。この部分では暗褐色土層の整地層が最も厚くなる。この暗褐色土層に切り込まれる遺構は中世以降のもので、掘立柱建物SB3670・3675・3698や溝SD3666・3668・3669、井戸SE3690、土壙SK3672・3679それにピット群等がその時期のものである。SE3685等の平安期にあたる遺構は少なく、それは暗褐色土下層とした整地層に切り込む。SB3660・3665それにSE3680は奈良期の遺構で今回検出した遺構中最も古期に属する遺構である。

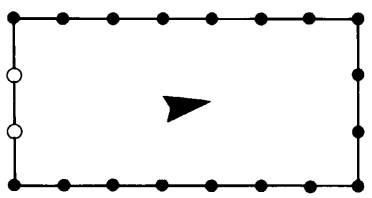
掘立柱建物

SB3660　発掘区のほぼ中央部に位置する3間×8間の南北棟掘立柱建物である。この建物には梁間の中心距離に桁方向に合わせた柱列が伴なう。これは、その後同位置に構造的には若干異なるものの同規模のSB3665に建て替えられている。その為に多くの柱掘形が重複し柱位置を確認できるものは少ない。梁間中央の柱列39～45（第28図右隅部の柱位置を参照。以下、番号はこれによる）には重複はなく、SB3660とSB3665のいずれに伴なうのかは層位、切り合いの関係等から確定する根拠がないが、この柱列の中央の柱穴42とSB3660の桁柱列中央の9・30のみが柱筋を合わせていることからSB3660に伴



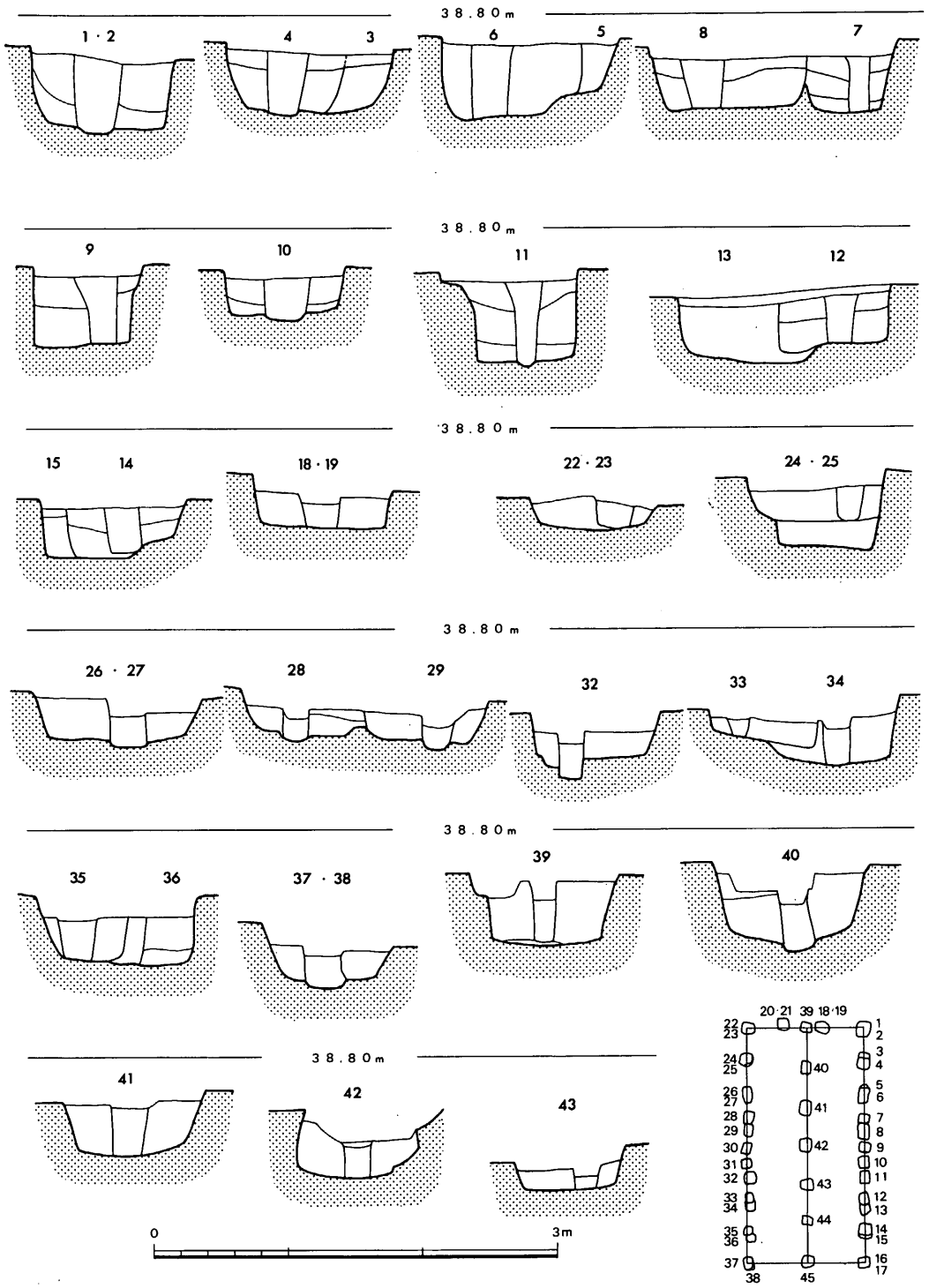
なうものとの判断をした。柱間寸法については柱位置が確認できるものが少ないが、東側の桁行柱間寸法（7・9・11）は心々で2.15m・2.15m、西側（28・30・32・34・36）は2.50m・2.00m・2.20m・2.30mである。また、中央の柱列の柱間寸法（39・40・41・42・43・44・45）は3.20m・2.90m・2.80m・2.60m・2.90mである。桁および中央柱列とも等間ではなく、さらに東・西の桁柱と中央柱列の柱筋も合致していない。柱筋を合わせているのは両端と中央のみである。すなわち、全体と東西・南北の中心線は正確に合わせているが、他は緩慢である。柱掘形のプランは方形もしくは長方形を呈し、大きいもので1m前後で、深さは良好なもので0.7m残存している。柱痕跡も径25cm前後で必ずしも大きい柱を使用していない。建物の方位はN－6°－Wであり、これまで観世音寺周辺で検出もしくは確認した建物には類のない大きな振れをもっている。また、建物の中心に柱列を有する点、床張りであったと考えられるが、柱筋が合っていない事から、やゝ特異な構造の建物とも考えられる。

SB3665　SB3660と同位置にあり、ほぼ同規模の3間×7間の掘立柱建物である。柱掘形の多くが重複しており、切り合い関係からこのSB3665が先述のSB3660より新期に築造された事を確認できる。SB3660と同様に柱間寸法も一定しておらず、また、東・西の両桁柱も対応した位置に必ずしもない。しかしながら四隅の妻柱2・23と16・37（第28図参照）は正確に合致させている。柱間寸法は東側の桁行柱間寸法（2・4・6・8・10・12・14・16）は2.65m・2.50m・2.70m・2.20m・2.70m・2.45m・2.60mで、西側の23・25・27が2.10m・3.00m・2.65m、33・35・37が2.60m・2.45mである。梁行の柱間寸法については南側の中央間2個の柱掘形が残存していないが、北側（2・18・20・23）は3.00m・2.75m・2.90mである。柱掘形の大きさや、柱痕跡の径もSB3660ときわだった差異はみられず、建物の方位や建物の全体の規模もほぼ同一とみて差支えなかろう。しかしながら、この建物には中央の柱列はなく、内部の構造には異った点がみられる。



SB3670　発掘区の西北部で、SB3660・3665の西側にある2間×3間の東西棟掘立柱建物である。柱掘形は径0.35～0.40mの円形を呈し、深さは0.30～0.50mである。1個所に柱痕が残存しており、それは径12cmを測る。柱間寸法は梁行1.90m等間、桁行1.80m等間である。建物の方位はN－1°－E。SE3690と同時もしくはそれ以降のものである。

SB3675　SB3670の南側で検出した2間×3間の南北棟掘立柱建物である。柱掘形は0.40～0.70mの円形のもので、深さは0.40～0.70mが残存している。柱穴の形状や大きさは先述のSB3670と類似するが、建物の主軸はN－1°－Wで方位を異にする。柱間寸法は梁行2.00m等間、桁行2.20m等間である。柱穴から14世紀後半代の土師器杯が出土している。この建物の年代として、上限をこの時期に考えることができる。



第28図　第122次調査　SB3660・3665柱掘形断面図

SB3698　発掘区の東南隅部で検出した掘立柱建物で、東西３間、南北１間分を確認した。南側については発掘区域外であるため全体の規模は不明であるが、先述のSB3670・3675例からすると、発掘区域外へさらに１間分延びた梁間２間、桁行３間の東西棟建物の可能性が強い。柱掘形は径0.25～0.50mの円形で、深さ0.20～0.30mが残存する。柱間寸法は東西方向で1.80m等間、南北１間分が1.40mである。建物の主軸はN－６°－Wである。建物の年代としては明確でないが、柱穴の埋土の状況や層位の関係等からみて、SB3670・3675に近接した時期か、もしくはそれ以降のものと判断した。

溝

SD3663　発掘区のほぼ中央部に位置し、南北に大きく蛇行する溝である。溝幅は一定しておらず0.35～0.65m、深さ0.15mで浅く残存状況は良好でない。

SD3664　SB3698の北側で検出した東西方向の溝である。幅0.40～0.60m、深さ0.30mで、長さ5.50m分を確認した。東端部は明瞭であるが、西端部は後世の撹乱により、不明である。ここからは平安後半期の遺物が出土しているが、性格等については明らかでない。

SD3666　発掘区の東辺部で検出した南北方向の溝で、南端はほぼ直角で東折しSD3667に連続する。北端は発掘区域外へ延びており、その行方については不明であるが、今回17.50m分を検出確認した。溝幅は1.60m前後、深さ0.50～0.60mで、若干であるが北から南へ向かって底面は傾斜しており、北から南への流路をとる。溝の断面形態は「U」字状を呈しており、一部溝肩が崩壊している。杭等による護岸の施設はみられない。

SD3667　SD3666と連続する溝である。更に発掘区域外の東側へ延びている。溝幅は1.40mであるが、深さは約0.80mでSD3666よりやゝ深くなっている。溝の屈曲点にあたり、溝肩および底面は凹凸が著しく不整形となっている。年代についてはSD3666出土の若干の土師器から判断して、14世紀後半代を遡らないとみられ、先述のSB3670・3675・3698等の遺構と何らかの関係をもつものと考えられる。

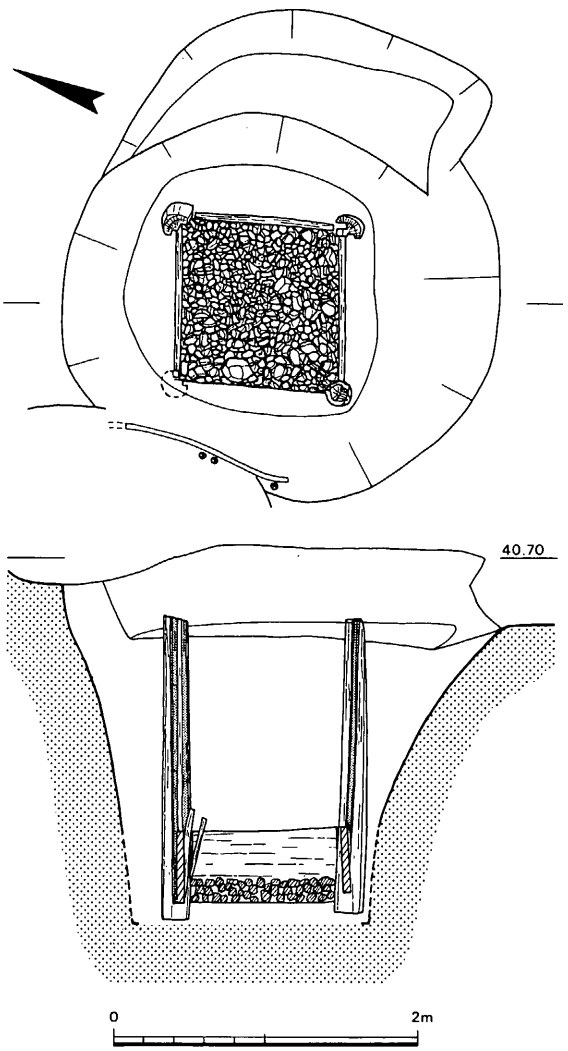
SD3668　発掘区の北辺部の東西方向の溝である。後述のSD3669とはプラン的に必ずしも明瞭に判別できず、埋土もほぼ似ており、同時期かもしくは近接した時期に存在したとみられる。溝幅も明瞭でないが1.20m前後、深さ0.25～0.30mを測る。西端はSK3679と連続し、東側は発掘区域外へ延びている。

SD3669　SD3668と接し、一部合流している。先述したように溝肩は明瞭でなく、深さも0.15～0.20mで浅く、SD3668の氾濫により生じた流路かもしれない。14世紀代に存在した溝と考えられる。

SD3671　北側の拡張区で検出した東西方向の溝である。溝幅0.90m前後で、深さも0.10～0.15mと浅く、東端では溝肩も消滅している。少片であるが中世の遺物が出土している。

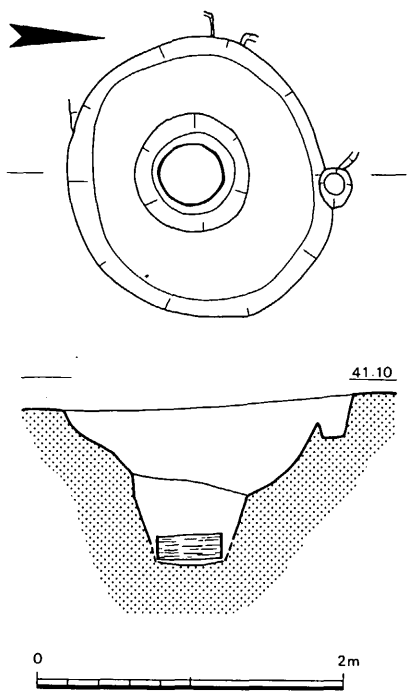
井戸

SE3680　SB3660・3665の西側で検出した方形の横板材の枠を有する井戸である。井戸掘形の上面プランは径2.90m前後の円形を呈しているが、下面は1.60mの隅丸方形を呈する。掘形の上面がやゝ大きい円形のプランとなっているのは井戸廃棄時に枠材を抜き取るために掘られた為であろう。井戸の掘形は遺構面から約1.50m深さが底面となっており、枠材を支える柱をその底面に埋め込んでいる。支柱は3本が残存し、ほぼ原位置を保っているが、上部は腐蝕もしくは切断されたためか、約2.00mしか残存していない。支柱は径20.0cmの丸太材を使用し、横板の枠材と接する二面を面取りし、その面に幅5.0cm強、奥行3.0cmの溝を入れている。枠材は最下段の3面しか残存していないが、それは、幅43.0cm、長さ94.0cm前後、厚さ5.0cmである。井戸枠の構築方法としては、支柱を四隅に立てた後、支柱二面に掘り込んだ溝にほぼ同規格の板材を下方から順次落し込んでいったとみられる。支柱一本と枠材の一面が欠失しているが、現状から判断すると内法1.20mのほぼ正方形の井戸枠が推定できる。枠内の底部には厚さ約0.05mで礫を敷き濾過施設としている。この井戸は廃棄される時点で枠材のほとんどが抜き取られたとみられ、最下段部の3枚を残すのみで、その残片も残っていなかった。さらに、掘形上部には瓦が多量に投棄されており、これが人為的かつ意図的になされた事が、状況から判断された。

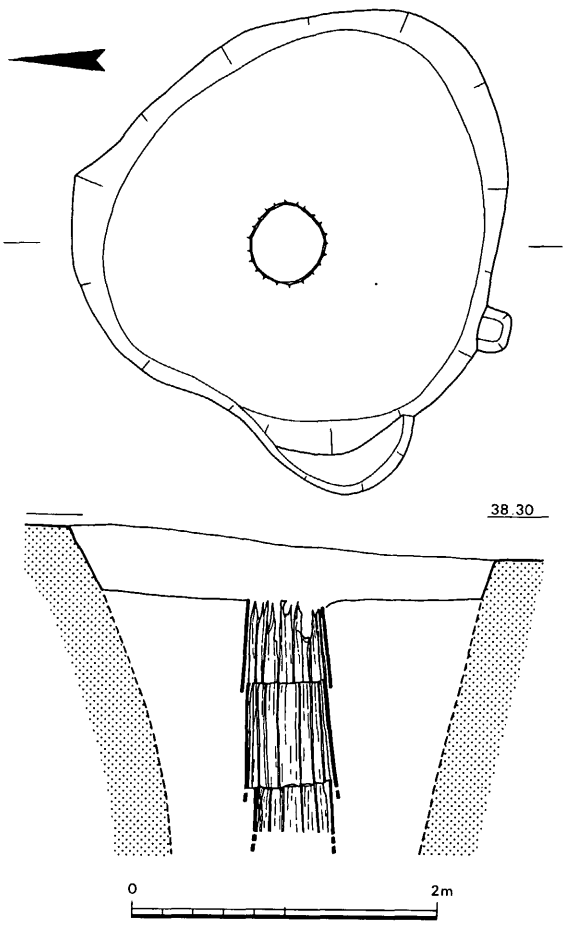


第29図　SE3680実測図

SE3685　SB3660・3665の西側桁柱列のほぼ中央に位置する井戸である。この建物の柱掘形はこの井戸によって切られる。すなわち、SB3660・3665より後出する井戸である。掘形は径1.80m前後の円形を呈し、深さ1.10mを測る。掘形の中位には段を有し、底部には曲物を据えている。



第30図　SE3685実測図



第31図　SE3690実測図

曲物は径40.0cm、高さ18.0cmで、上部は欠失し完存していない。この曲物はいわゆる「目玉」と称されるものと考えられ、井戸枠の上部構造については枠材が残存していないため不明である。

SE3690　SE3680の西側に接してある桶側の枠を有する井戸である。この井戸の掘形は一部SE3680の掘形を切っており、構築時にSE3680の軟弱な埋土が崩壊したとみられ、掘形の重複部分に杭をたて板を張って崩壊を防いでいる。井戸の掘形のプランは不整円形で、長径2.90m、短径2.60mを測る。掘形の深さについては完掘していないので不明である。桶側については三段分を確認した。桶側の上端で径50.0cm、下端で径60.0cmである。桶側一段分の高さは確認していないが、80.0cm前後とみられる。井戸枠内は約1.60m掘り下げた時点で、崩壊が予想されたため完掘するのを断念した。

SE3695　SE3690の北側で検出した井戸である。井戸枠は残存していないが、掘形の状況からみて、井戸と判断した。1.30mの円形プランで、深さ約0.8mを測る。

土壙

SK3672　発掘区中央の南側寄りに位置する長円形を呈する土壙である。長径5.80m、短径2,60m、深さ0.25～0.40mを測る。底面は平坦である。ここからは14世紀中頃、後半代の土師器が多量に出土した。

SK3677　SE3680とほぼ同位置の上層で検出した隅丸方形の土壙である。一辺2.30m、深さ約0.70mを測る。底面からは箕縁木１点が出土している。この土壙の底面ではSE3680の支柱がみえ、井戸埋土と接する。そのため、この木製品は井戸に伴うのかもしれない。

SK3678　後述するSK3679の下位にある土壙で、SK3679によって撹乱されているため、プランについては明瞭でない。深さもSK3679の底面より約0.2mほど下がった位である。

SK3679　SK3678より後出する不整の長円形を呈する土壙である。長径5.20m、短径2.00m、深さ0.40mを測る。土壙内には多量の自然石と、瓦片が投棄されている。自然石の中には原位置にあり、池の護岸様のものがいくつかみられるが、積極的にこれを池とし得る根拠に今一つ乏しいため、今回は単なる土壙として報告する。

SK3697　SK3677とSE3685の間にある円形プランの小土壙である。径0.80m、深さ1.50m前後を測る。

その他の遺構

SX3662　SD3666の上層で検出した南北方向の列石遺構である。SD3666が完全に埋没した後に造られたものである。20cm前後の石を一列に並べたもので、面は西側にあり、列石の東側にある何らかの遺構を画するようにみえるが、現状ではそれに伴なうような遺構はない。長さ約２m分を検出した。

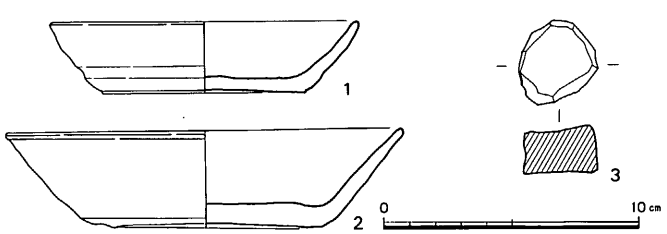
SX3682　発掘区中央の南辺部で検出した落ち込みである。プラン的には明瞭ではないが約4.0mの円状の範囲でなだらかに落ち、最も深いところでは0.40mを測る。整地土ともみられるが、ここからは周囲とは異なり、小片であるが土器の出土が目立っているため遺構として取り上げた。これを完掘した段階でSB3660・3665の東南隅の柱掘形が検出される。

出土遺物

SB3675出土土器・陶磁器・瓦製品（第32図・図版40別表）

土師器

杯a（１・２）　１は口径12.2cm、器高2.8cm、底径8.0cm。糸切りで板状圧痕を有



第32図　SB3675出土土器・土製品実測図

する。２はやゝ大形で、口径15.7cm、器高3.8cm、底径8.8cm。糸切りで板状圧痕を有する。

瓦製品

３は瓦を円形に打ち欠いたものである。径3.0cmの不整円形を呈し、側面は打ち欠いたままで未調整である。上面には瓦製作時の叩きと下面には布目痕が残る。遊技具として使用したものであろう。

SD3663出土土器（第33図　別表）

土師器

皿a（３）　口径6.9cm、器高1.1cm、底径4.8cm。糸切りで、口縁部の内外面には油煙が付着する。

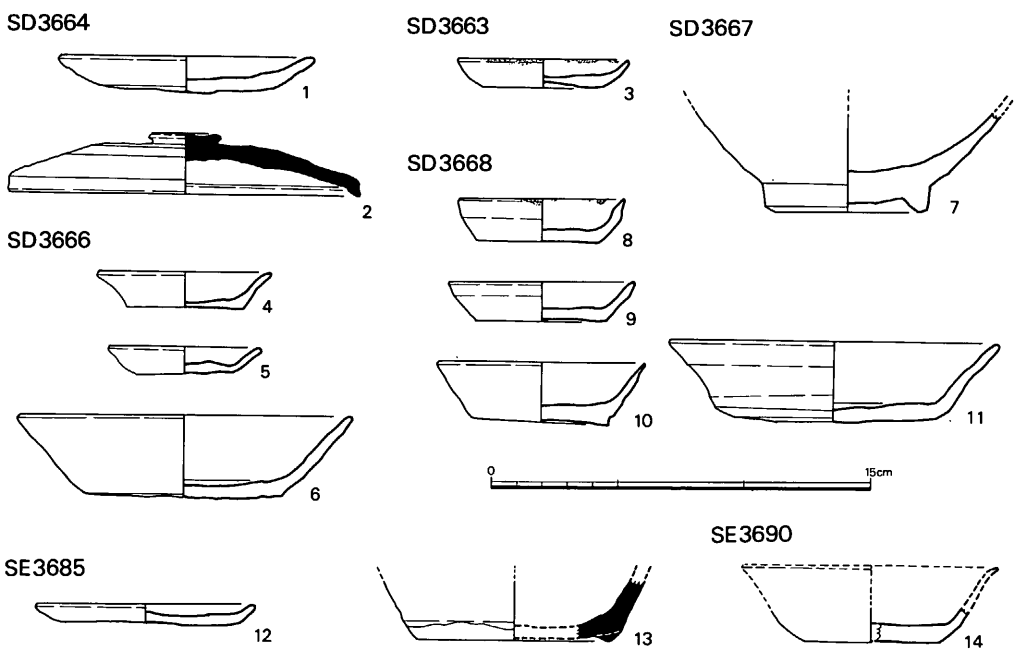
SD3664出土土器（第33図・図版40　別表）

土師器

皿a（１）　口径10.2cm、器高1.5cm。底部はヘラ切り未調整で、板状圧痕を有する。

須恵器

蓋（２）　口径6.7cm、器高2.4cm。断面三角形の口縁部は高く、内外面の屈曲部は明瞭である。天井部の外面はヘラ削り調整、内面はナデ調整する。胎土はやゝ砂粒を含むが、比較的精良である。



第33図　SD3663・3664・3666・3667・3668、SE3685・3690出土土器陶磁器実測図

SD3666出土土器（第33図・図版40　別表）

土師器

皿a（5）　口径6.1cm、器高1.1cm、底径3.7cm。糸切り。内底はナデ調整せず、板状圧痕はない。

皿b（4）　口径7.0cm、器高1.5cm、底径4.6cm。糸切り。4同様内底はナデ調整を施さず、板状圧痕もない。

杯b（6）　口径13.2cm、器高3.2cm、底径7.7cm。口径が底径に比して大きく、開く形態。糸切りで板状圧痕を有する。

SD3667出土陶磁器（第33図・図版40）

白磁

椀（7）　内面の見込みを輪状に釉をカキ取るⅧ類である。やゝ青味のある白色釉をうすく施す。外面の体部下位以下は露胎である。

SD3668出土土器（第33図・図版40　別表）

土師器

皿b（8～10）　口径6.6～8.3cm、器高1.5～2.4cm。糸切り。8・9の口縁部には油煙が付着。

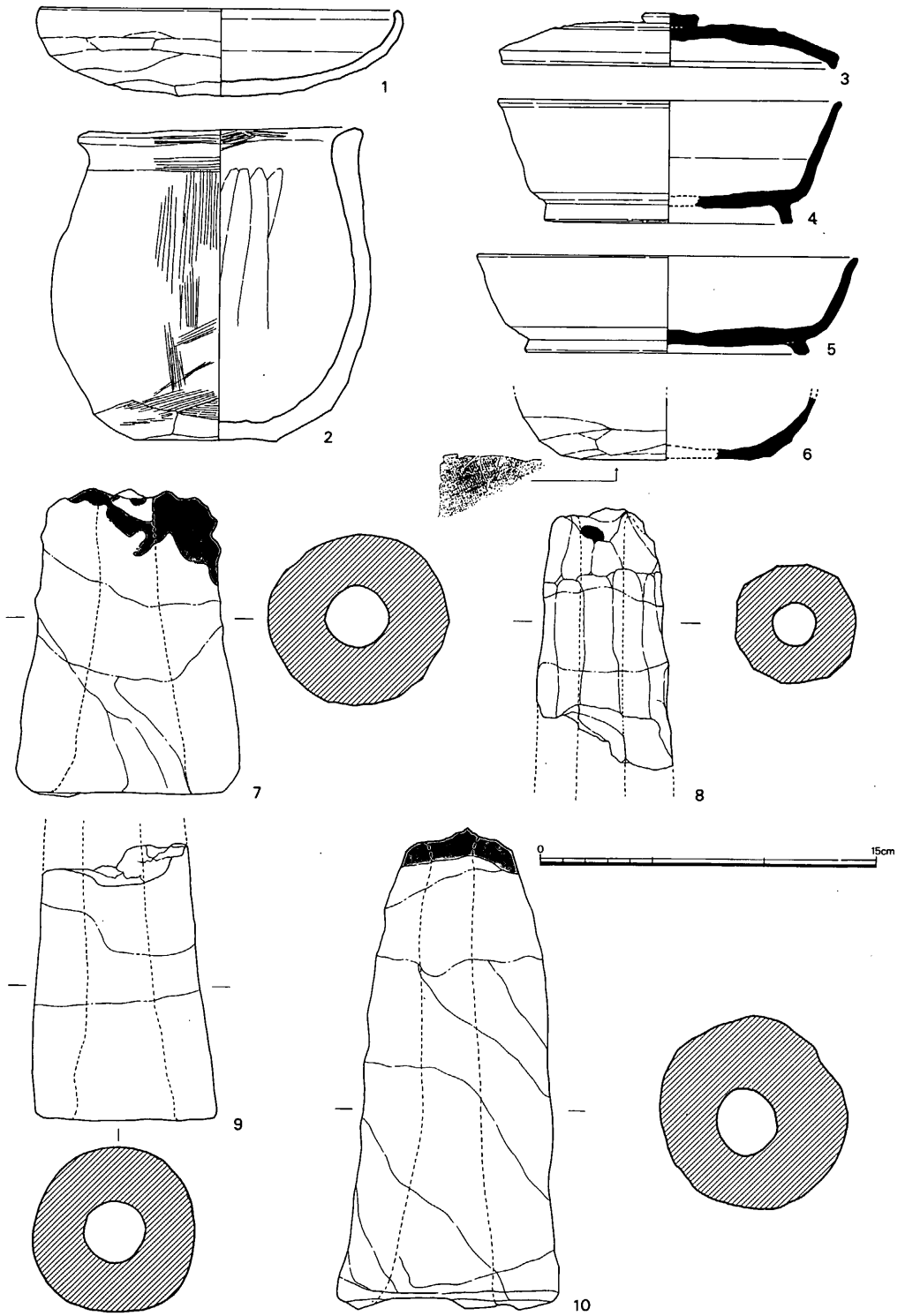
杯a（11）　口径13.0cm、器高3.2cm、底径7.0cm。底部は糸切りで板状圧痕を有する。

SE3680出土土器・鞴羽口（第34・35図・図版41　別表）

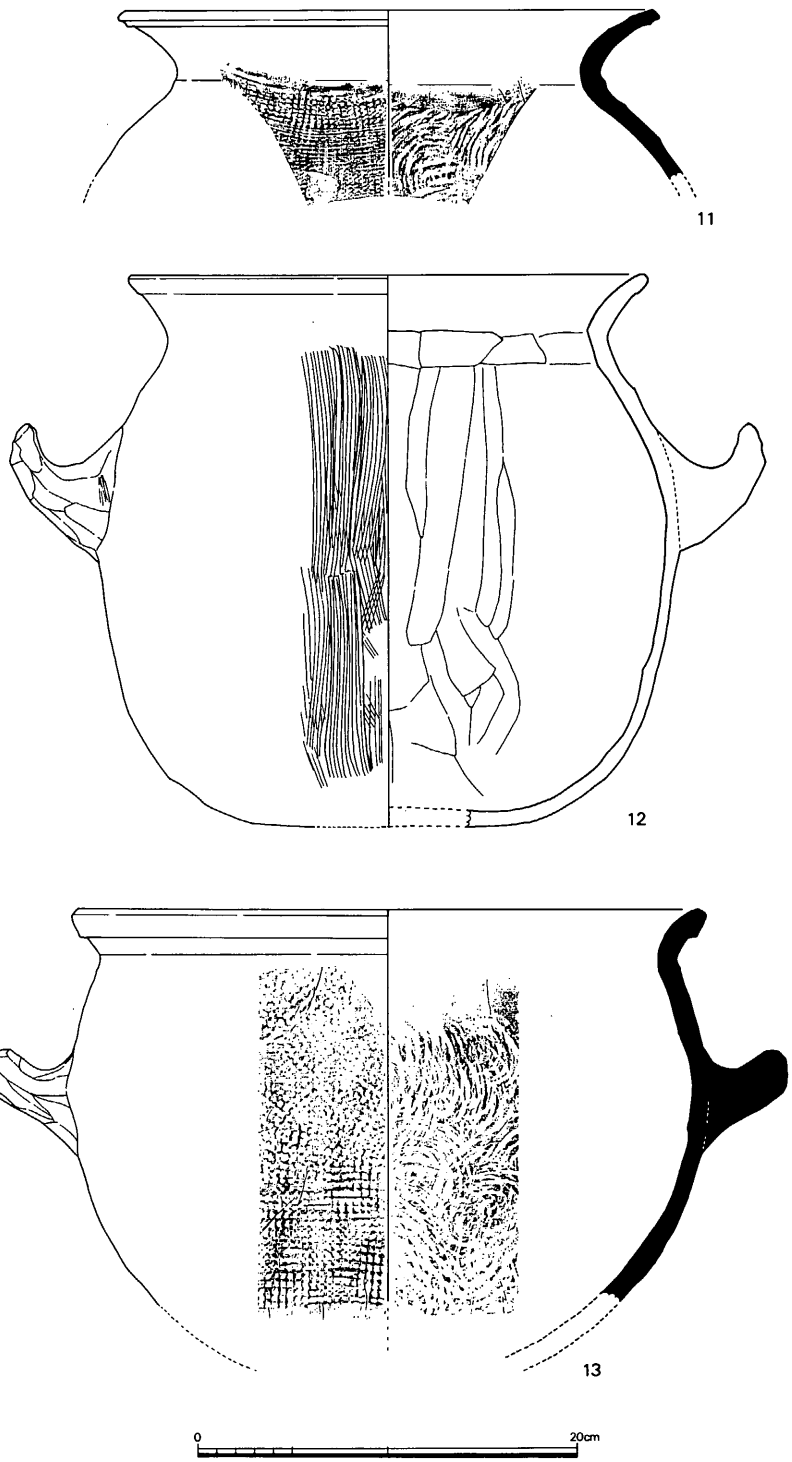
土師器

皿（1）　口径16.0cm、器高4.0cm。口縁部はわずかに内弯気味で、端部は丸味をもつ。底部と体部はなだらかなカーブをもち、その境は明瞭ではない。外面は丁寧な手持ちヘラ削りを施し、器壁は全体に薄く仕上げられている。内底はヨコナデ後ナデ調整し、体部と口縁部はヨコナデ調整である。胎土は若干の砂粒を含むが精良で、焼成も良好である。井戸枠内の底面近くから出土している。この種の土器はこれまでの調査でも出土点数は10数点で、非常に少ない。

甕（2・3）　2は約3分1が残存しており、復原口径は12.7cm、体部最大径は中位にあり復元径14.7cm。外面の底部は手持ちのヘラ削りの後、部分的にヨコ方向の刷毛目調整する。また、体部はタテ方向の刷毛目調整であるが部分的にヨコ方向の刷毛目もみられる。口縁部は内外面ともヨコ方向の刷毛目調整を施す。内面はタテ方向に強いヘラ削りを行なう。胎土には砂礫の混入が目立ち粗いが、焼成は硬質に仕上がっている。暗茶褐色ないし赤褐色を呈する。12は約3分1が残存し、復元口径27.4cm、器高29.1cm。最大径は体部上位にあり、復元径30.6cm前後であり、その部分に把手を貼付している。丸くなった体部と底部は境界が明瞭ではなく、底部は平底気味である。口縁部を除いた外面はタテ方向の細かい刷毛目調整するが、底部は摩滅のため部分的にしか残っていない。内面はタテ方向のヘラ削りであるが、口縁部との境はヨコ方向のヘラ削りを行なう。口縁部はヨコナデである。外面には黒斑がみられる。胎土には砂粒を多く含むが比較的精良で、調整・焼成とも良好である。



第34図　SE3680出土土器・鞴羽口実測図(1)



第35図　SE3680出土土器実測図(2)

須恵器

蓋（3）　復元口径15.0cm、器高2.4cm。天井部の外面は回転ヘラ削り、内面はナデ調整する。ヨコナデされた断面三角形の口縁部は明瞭な稜をもつ。砂粒の混入が目立つが、焼成は良好である。転用硯として使用されたため内面には墨痕があり、中心部分は摩滅している。

杯（4・5・6）　4は約3分1が残存し、復元口径15.4cm、器高5.5cmである。底部から斜め外方に立ち上がる体部はほぼ直線的であるが、口縁部は若干外反させ、端部を丸くする。回転ヘラ削りされた底部は高台貼付時にナデ消されている部分もあるが、体部との境界は明瞭である。断面四角の高い高台はやゝ開き、安定感がある。胎土は精製され、焼成調整とも良好である。内面の底部と体部の一部に墨痕がみられる。5はほぼ完形に近く、口径17.0cm、器高4.5cm。底部から体部は丸味をもち、口縁部はわずかに外反させる。内底はヨコナデ後ナデ調整する。胎土には若干の砂粒を含むが、調整・焼成とも比較的良好である。6は小片で全体の形状は不明であるが、杯と思われる。外底は手持ちヘラ削し、内面はヨコナデで、底部はナデ調整する。胎土は精製され緻密で、焼成も良好である。内底に一部ヘラ記号が認められる。

甕（11・13）　11は復元口径28.4cmで、外面は正格子の叩き、内面には青海波の叩き目を有する。13は体部下位と底部を欠失するが他は約3分2が残存する。口径33.6cm、体部最大径は上位にあり、径33.8cm。把手はこの最大径のところに貼付されている。肥厚させた口縁の端部は平らにする。外面には正格子の叩き目、内面には青海波の叩き目を有する。焼成はやゝ甘いが、胎土・調整とも良好である。

鞴羽口（7～10）　いずれも丸形のものであるが、8はわずかに稜がつき面取り風になっている。7・10はほぼ完形で7は長さ13.0cmで短かく、10は21.5cmと長く大形である。7・8・10の先端には溶解した付着物がありいずれも先端近くは青灰色に変色している。

SE3685出土土器（第33図　別表）

土師器

Ⅲa（12）　口径8.7cm、器高0.8cm、底径6.9cm。底部は糸切り、板状圧痕を有する。

須恵器

杯（13）　小片であるため器形は不明であるが、ここでは杯として報告した。底部端に低い高台を貼付している。

SE3690出土陶磁器（第33図・図版40）

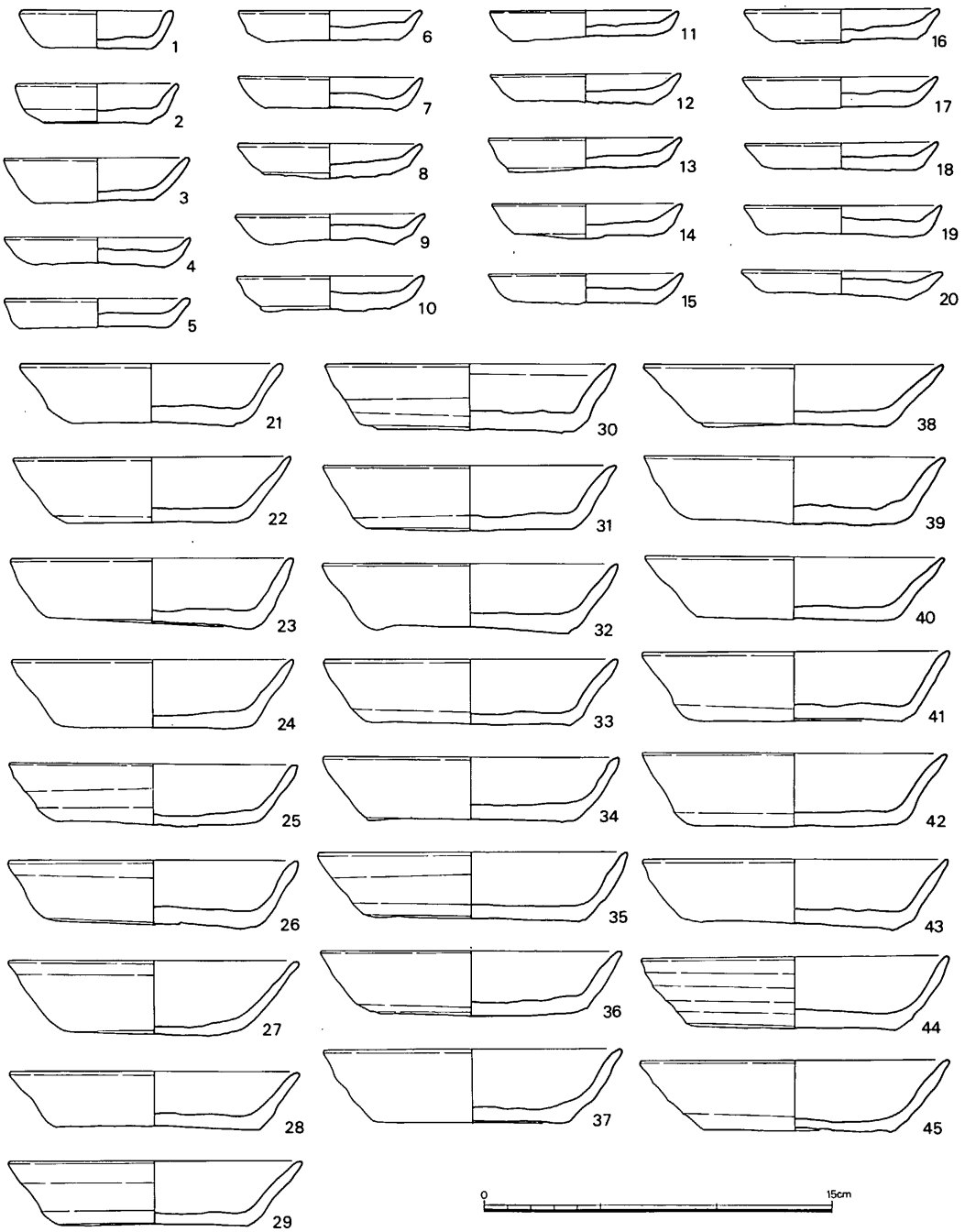
白磁

Ⅲ（14）　口縁の端部を口禿とするⅨ類である。

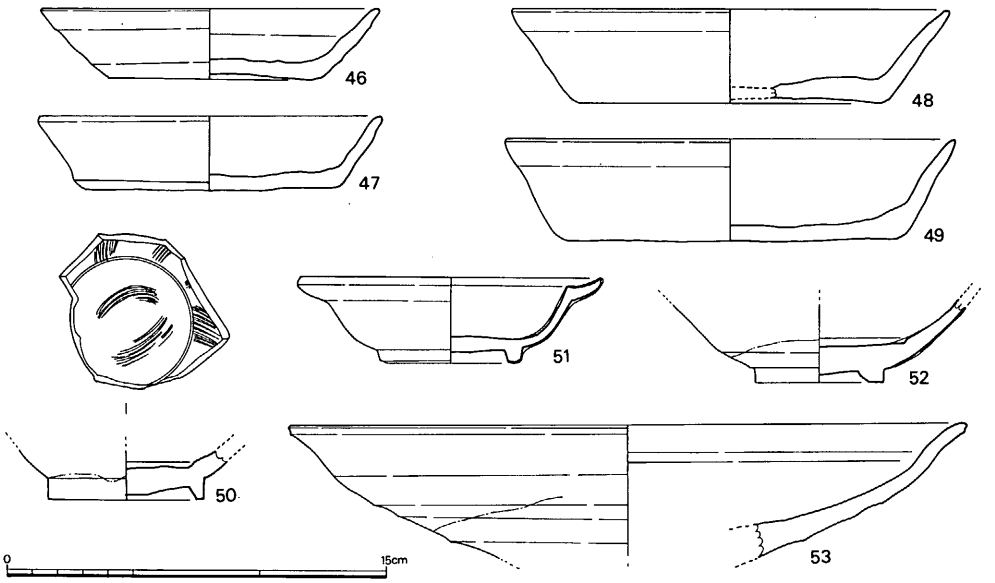
SK3672出土土器・陶磁器（第36・37図・図版42・43　別表）

土師器

Ⅲa（4～20）　口径8.0～8.6cm、器高1.1～1.5cm。いずれも底部は糸切り、板状圧痕を有す



第36図　SK3672出土土器・陶磁器実測図(1)



第37図　SK3672出土土器・陶磁器実測図(2)

る。内底はナデ調整する。

皿b（1～3）　口径6.6～8.0cm、器高1.1～2.0cm。すべて糸切りであり、1・2には板状圧痕を有する。3の口縁部には油煙が付着する。

杯a（21～49）　口径11.3～13.6cm、器高2.4～3.1cmの21～47と、大形の口径17.3～17.8cm、器高3.7～4.0cmの48・49がある。いずれも糸切りで28・29・43を除いた他は板状圧痕を有する。23の内底にはわずかに煤が付着する。

白磁

椀（50）　内面に櫛描文を入れたV類である。やゝ青味のある白色釉を薄く施すが、外底高台部は露胎である。

青磁

杯（51）　龍泉窯系の杯III－3類である。淡緑色の釉は厚目に施すが、高台畳付および底部は露胎である。

椀（52）　同安窯系の椀である。淡灰白色を呈する緻密な胎に、茶色味の強い緑色釉がやゝ厚目に施される。体部下位と高台部は露胎である。

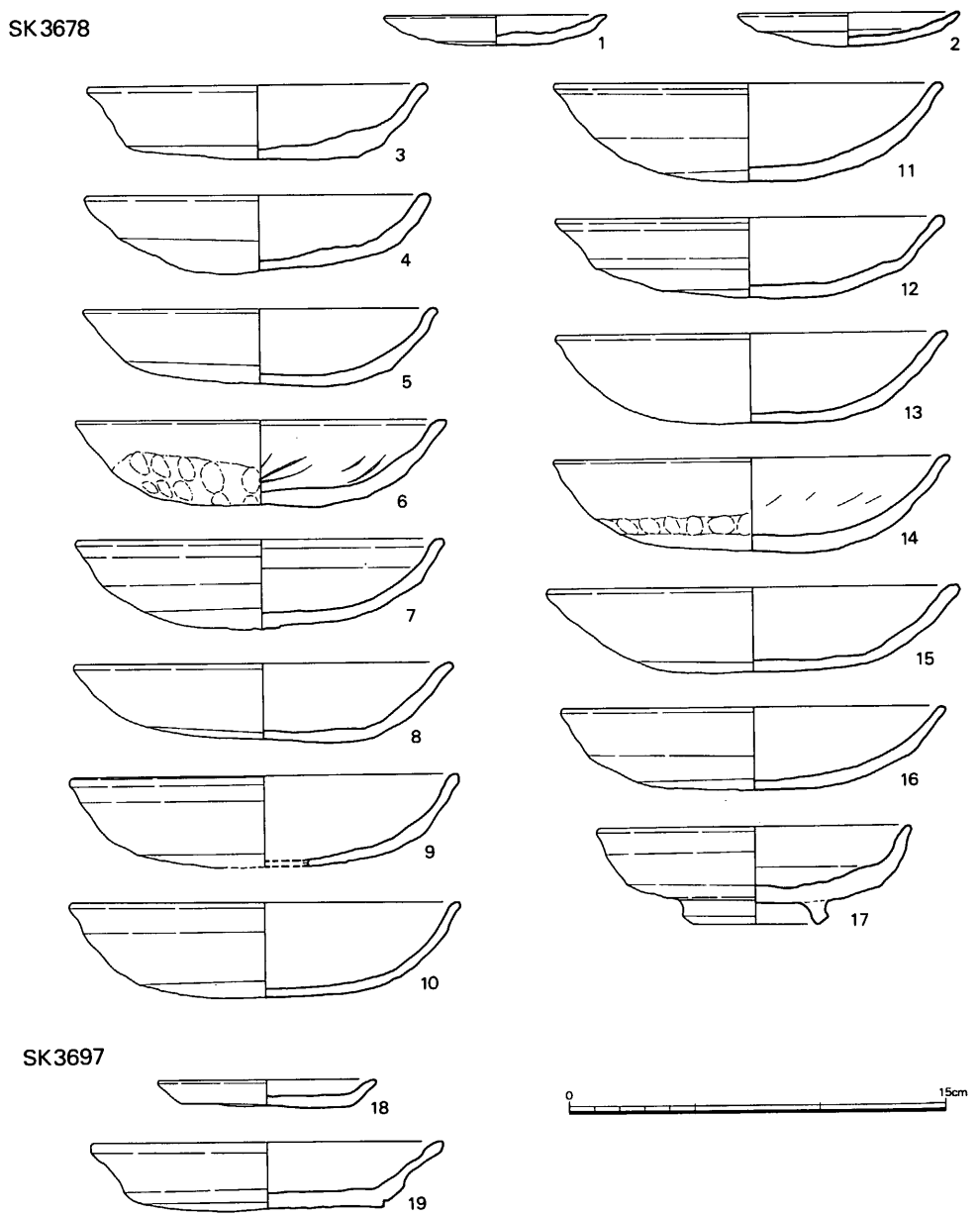
陶器

盤（53）　復元口径25.6cmの盤形を呈する陶器の小片である。口縁部はわずかに外反させ、端部には沈線状の凹線を入れる。淡灰白色の粗い胎で、外面の体部下半を露胎とする他は灰色味のある緑色の釉を全体に薄く施す。出土例がなく、生産地については不明である。

SK3678出土土器（第38図・図版44　別表）

土師器

皿a（1・2）　口径8.7～8.9cm、器高1.2～1.4cm。底部はヘラ切り、板状圧痕を有する。内底はナデ調整する。



第38図　SK3678・3697出土土器実測図

丸底の杯（３～16）　口径13.6～17.4cm、器高2.9～4.0cm。底部はヘラ切りした後に押し出し丸くするが、６・14にはその時の指頭痕が残っている。いずれも内面はヨコナデ後ヘラナデにより器面調整を施している。６・14には成形時の器具の痕跡がみられる。また、８・10・14～16を除いた他は板状圧痕を伴なう。

杯（17）　口径12.6cm、器高3.9cm。丸底の杯に径5.8cmの低い高台を貼付する。

SK3697出土土器（第38図）

土師器

皿a（18）　口径8.8cm、器高1.0cm。底部は糸切りで板状圧痕を伴なう。

杯a（19）　口径14.1cm、器高2.7cm。底部は糸切り、板状圧痕を有する。内底はナデ調整する。

SX3682出土土器（第39図・図版45　別表）

土師器

甕（13）　復元口径25.4cmの長胴形の甕である。外面は刷毛目調整し、内面はタテ方向のヘラ削り調整する。胎土中には砂粒を含むが、焼成は良好である。

須恵器

蓋（１～４）　復元口径14.0～14.8cmである。２を除いた他は天井部を回転ヘラ削り調整する。２の内面には墨痕があり、摩滅によって平滑になっており、硯として使用している。

杯（５～９）　５は無高台で、復元口径13.2cm、器高3.0cm。底部はヘラ切り未調整である。６～９は高台付である。６は体部から口縁部にかけて丸く内弯する特異な形態を示す。復元口径8.6cm、器高4.9cm。胎土は精製され焼成・調整も良好である。７・８・９は復元口径12.0～13.1cm。いずれも低い高台は底部端に貼付される。９の体部下位は回転ヘラ削り調整し、口縁部は細く引き出す。

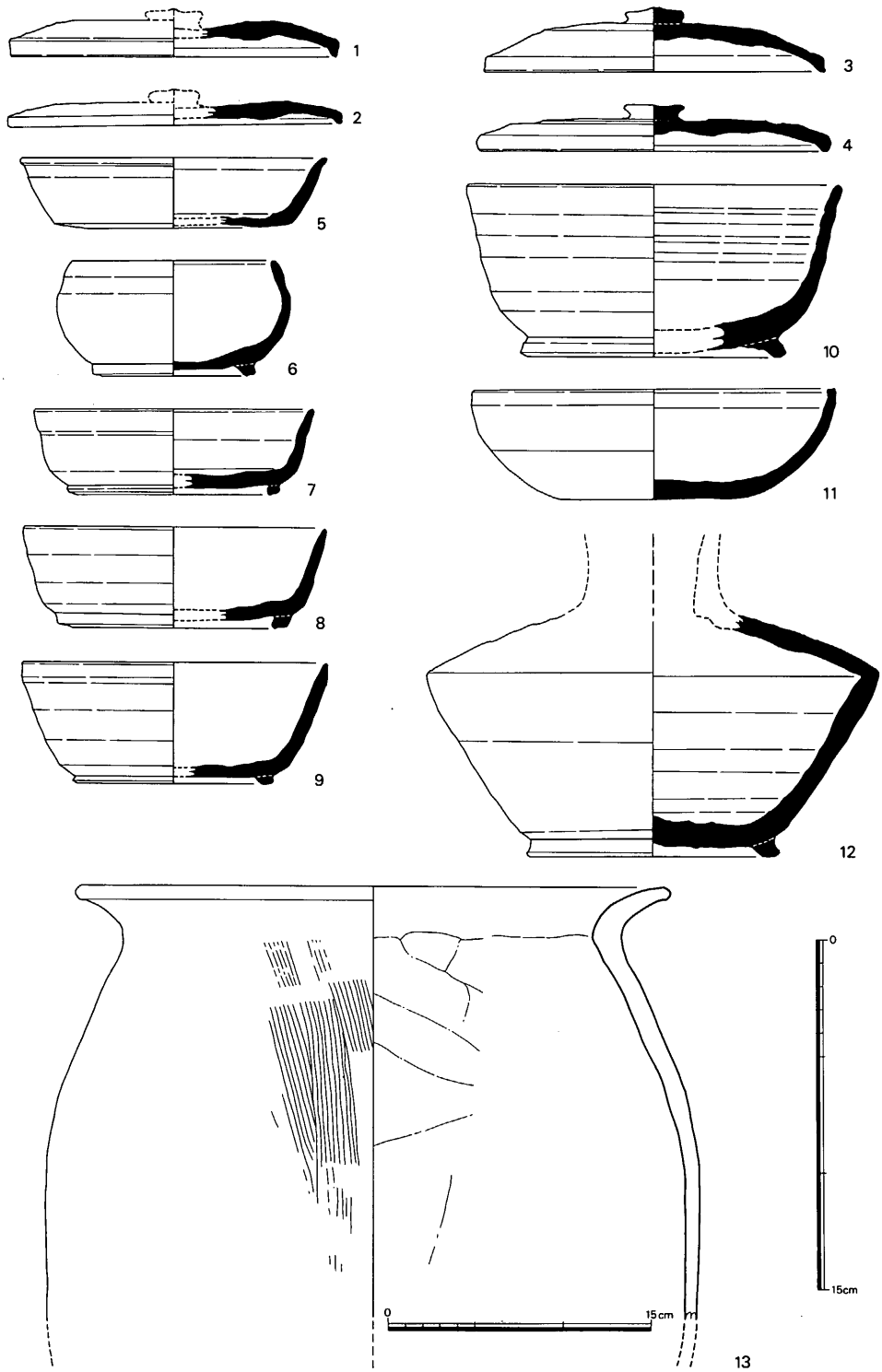
椀（10・11）　10は復元口径14.1cm、器高7.4cm。外面の体部下位は回転ヘラ削り調整し、丸味を帯びる。断面四角の高台は開き安定感がある。11は体部が丸く内弯するものでこれまで杯として報告してきたが、ここでは椀とした。外面の底部と体部下半は丁寧な回転ヘラ削り調整を施している。断面四角の口縁端部は凹状になっている。胎土は非常に緻密で焼成・調整とも良好である。

長頸壺（12）　肩部と体部が屈曲し、明瞭な稜をなす長頸壺片である。底部から直線的にのびる体部はほぼ直角に屈曲し、肩部となる。体部中位以下は丁寧な回転ヘラ削りし、他はヨコナデする。胎土は精製されている。

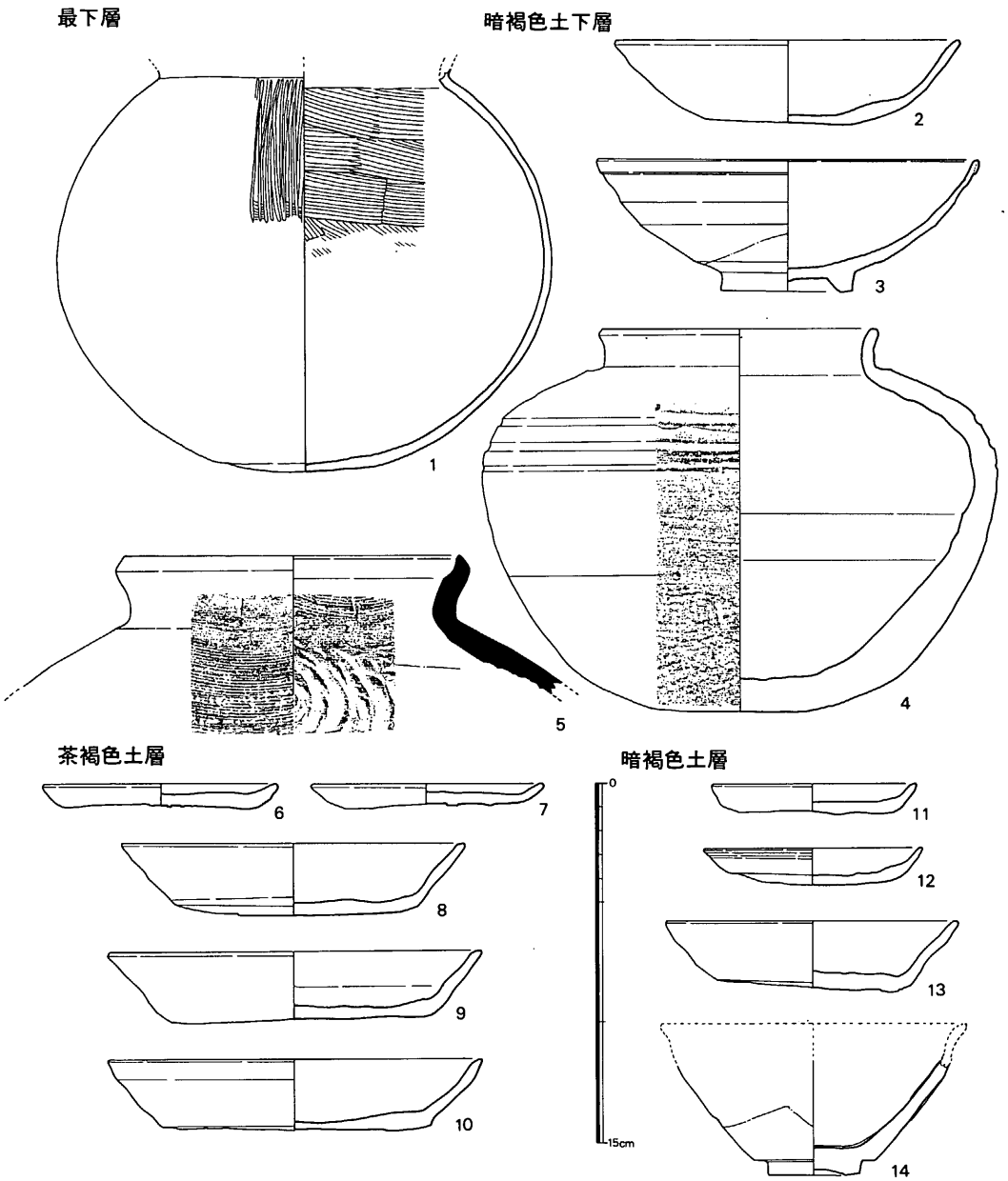
最下層出土土器（第40図　別表）

土師器

壺（１）　発掘区の東南隅部付近に掘られた現代の塵穴底面の整地層から出土した。非常に器肉がうすい壺片で、口頸部を欠失する。球形に近い体部と底部は外面上位は刷毛目調整後に



第39図　SX3682出土土器実測図



第40図　最下層・暗褐色土下層・茶褐色土層・暗褐色土層出土土器・陶磁器実測図

タテ方向のヘラミガキを施し、下位は刷毛目を横方向のミガキを加えて消している。丸底化している底部にはナデ風の擦過がみられる。内面は上位をヨコ方向刷毛目調整し、下位は刷毛目調整後ミガいて消している。古墳期のものである。

暗褐色土下層出土土器・陶磁器（第40図・図版46　別表）

土師器

杯（2）　口径14.3cm、器高3.4cm。外面の体部下位と底部はヘラ削り調整する。摩滅が著しく、ミガキの有無は不明。

須恵器

甕（5）　復元口径14.0cmの甕少片である。口縁部は短く外反し、内面を強いヨコナデで凹状にする。外面は叩きの後刷毛目調整する。

灰釉陶器

壺（4）　口頸部が直立する灰釉の短頸壺である。復元口径11.5cm、器高15.0cmで、最大径は体部上位にあり、径21.3cmである。底部は丸底気味で高台はもたない。体部の外面は上位でヨコナデ、中位には回転ヘラケズリ状の痕跡がみられ、下位から底部には正格子の叩き目がある。内面は口頸部から体部上位はヨコナデで中位以下と底部には当て具痕がある。胎土は灰白色で黒い粒子が混入する。灰緑色の釉は体部上位に薄くかかり、内面の底部付近にもみられる。

白磁

椀（3）　口縁部に小さい玉縁を有するII類の椀である。やや黄灰色味のある釉は全体に薄目に施され、素地がみえる。体部下位と底部は露胎である。

茶褐色土層出土土器（第40図　別表）

土師器

皿a（6・7）　口径9.7cm、器高1.0cm、底径7.8～8.0cm。いずれも糸切りで板状圧痕を伴なう。

杯a（8～10）　口径14.2～15.5cm、器高2.9～3.0cm、底径10.3～10.5cm。いずれも糸切り離しで、板状圧痕を有する。

暗褐色土層出土土器・陶磁器（第40図・図版46　別表）

土師器

皿a（11・12）　口径8.6～9.0cm、器高1.2～1.5cm。底部は糸切りで板状圧痕を伴なう。12の口縁部外面は強いヨコナデにより沈線状の痕跡となる。

杯a（13）　口径12.0cm、器高2.7cm。底部は糸切りで板状圧痕を伴なう。

天目（14）　灰白色の胎に暗茶色のガラス質の釉が厚くかかり、体部下半以下は露胎となる。釉下には暗紫色の下地釉が施されている。

瓦類

軒丸瓦19種51点（うち中世以降９種17点）、軒平瓦18種42点（うち中世８種10点）、文字瓦17点が出土している。

この地区でも老司Ⅰ式軒瓦の出土が最も多く、軒丸瓦で24点、軒平瓦は18点出土している。この他では軒平瓦で扁行忍冬唐草文軒平瓦６点が多いが、他種の軒瓦はすべて１～２点出土している状況である。

第122次調査で最も注目されたのは、SE3680の埋没過程で観世音寺創建に使用されたと思われる瓦群が出土したことである。SE3680から出土している土器の時期から８世紀第Ⅱ四半紀の前半頃に一括投棄されたものと考えられる。

出土瓦には、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦があり、完形となるもの、完形に近いものなどまとまりのある出土状況（図版18）であった。

SE3680出土瓦（第41～48図・図版47～50）

軒丸瓦（第41図・図版47）

３種が出土している。１は老司Ⅰ式の軒丸瓦で２点出土している。瓦当は、厚さ1.5cm程で、裏面は下半部周縁が堤状に高くつくられている。丸瓦部は欠損しているが、老司瓦窯の出土瓦から推測すれば玉縁式の丸瓦と思われる。瓦当面径、18.1cm。

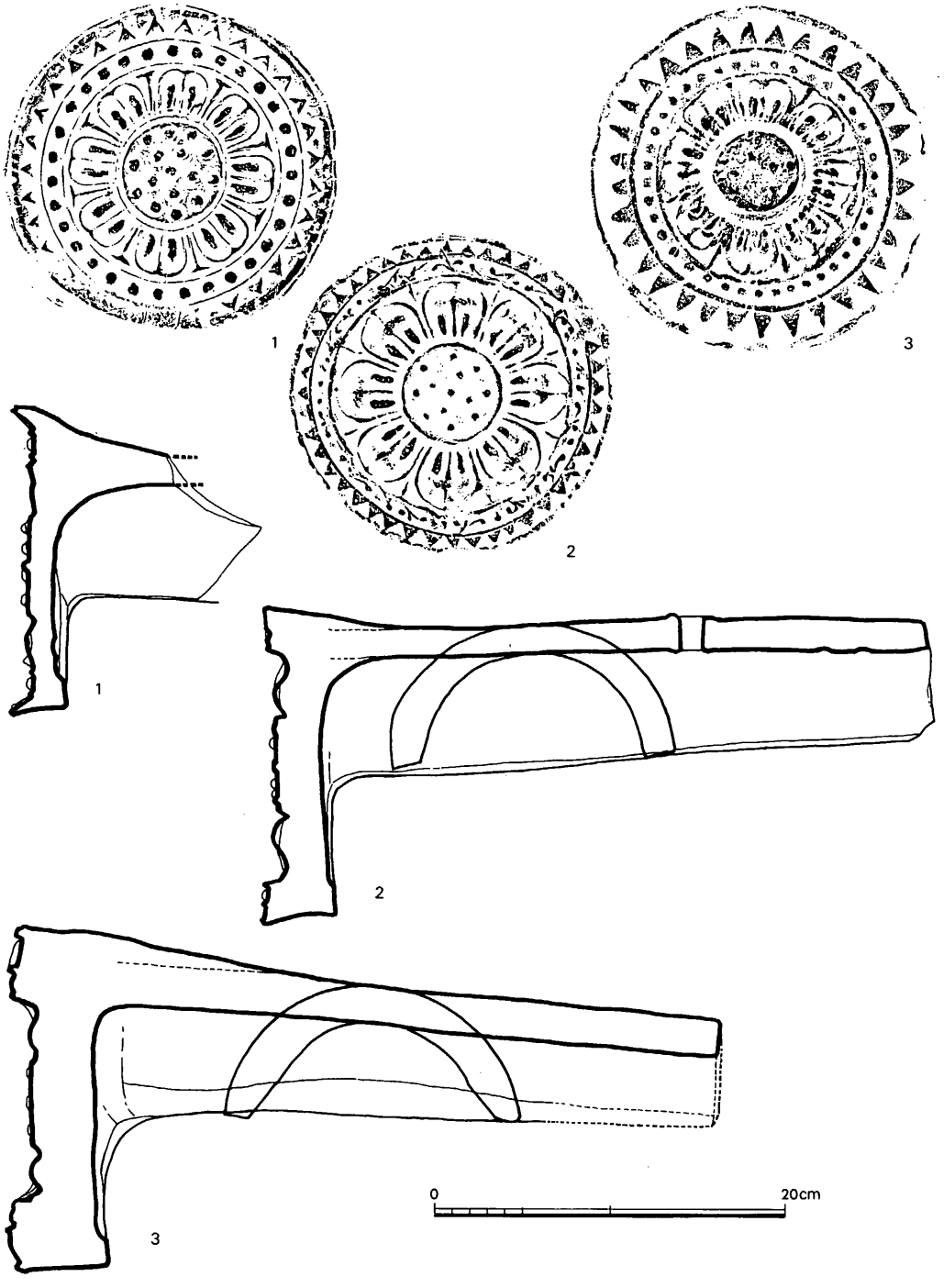
２は、外区内縁に唐草文が配置されている軒丸瓦で均整のとれた瓦当文様で彫りも深い。瓦当は2.5cm程とやゝ厚いが、瓦当裏面の状況は１と同じである。丸瓦部は粘土板の合せ目を残す行基式の丸瓦で、釘穴が焼成前に穿たれている。１・２ともに少量の砂粒を含むものの良質の粘土を用い焼き上りも良い。瓦当面径18.3cm、全長38.4cmを測る。

３の瓦当文様は外区外縁の凸鋸歯文が、やゝ大ぶりに作られているため、瓦当文様全体としてはやゝバランスを欠いた感じを受けるが、内区に配置された複弁蓮華文などは極めて整ったものである。２と同様瓦当文様の彫りは深い。瓦当は4.0cmほどと厚いが、裏面下部の作り方は１・２と同様である。丸瓦部は内面に粘土板の合せ目を残す行基式であるが、重い瓦当面を維持するためにやゝ厚目に作られている。１・２に比較して胎土に多めの砂粒を含む。瓦当面径19.9cm、長さ40.8cmである。

軒平瓦（第42図・図版47）

２種出土している。老司Ⅰ式軒平瓦１点と扁行忍冬唐草文３点が出土している。

老司式軒平瓦は、老司式軒丸瓦と同様選ばれた粘土を使用している。やゝ長めの段顎が作られ、厚さ３cmの平瓦部にうつる。平瓦の側面は２面の面取りがされている。凹面は横方向にナデつけられており、凹面から瓦当面にかけて丹が付着した痕が認められる。平瓦部凸面は顎に近い部分が横方向になでつけられているが、それ以下の部分に正方形に近い格子目の叩打痕が認められる。この叩打痕は叩打具の横端部を残しており、格子目はこれに45度の方向をとって



第41図　SE3680出土軒丸瓦拓影・実測図

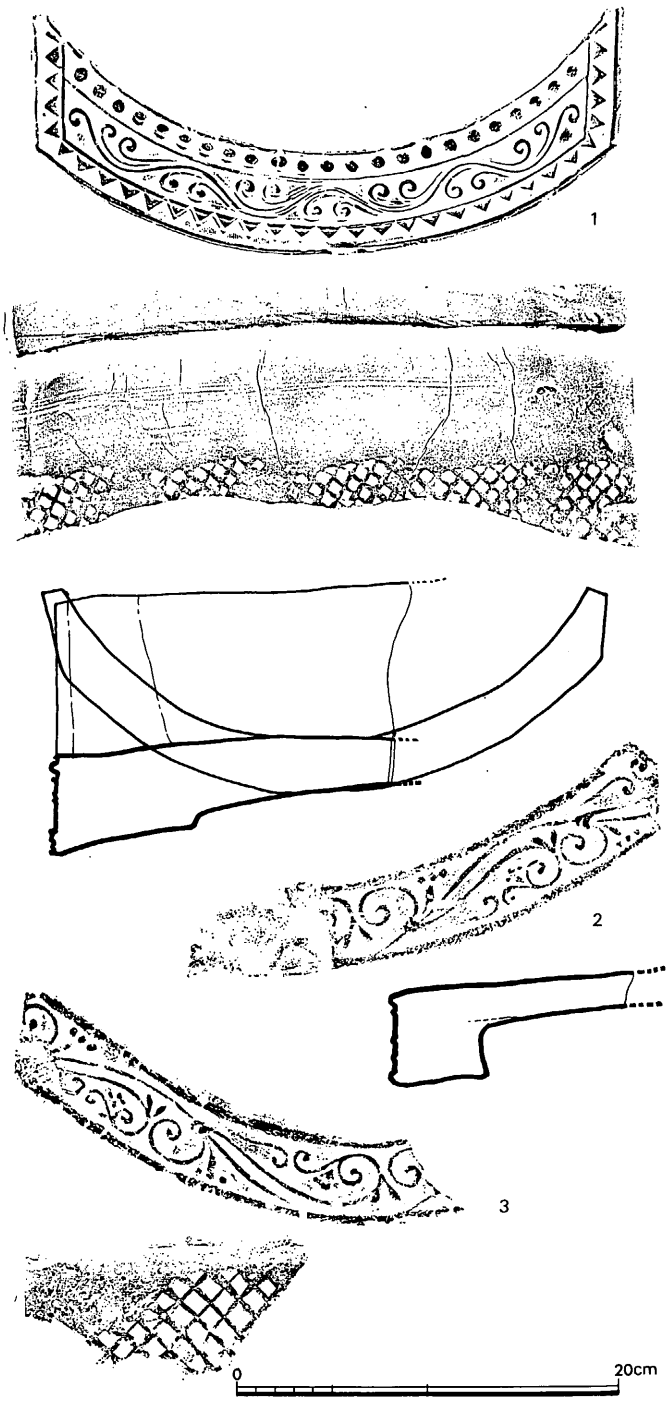
いるから斜格子文と呼ぶべきものと思う。格子目は一辺５㎜ほどの正方形に近い。

扁行忍冬唐草文軒平瓦３点のうち１点は小破片であるが、２点はそれぞれ右半、左半の瓦当文様を残しているから、文様全体を知ることが出来る。小郡市井上廃寺に同種の軒平瓦があるが、観世音寺例が左から右に扁行唐草文が流れるのに対し、井上廃寺例はその逆である。また、瓦当文様の横巾が観世音寺例が広いのに対し、厚みは井上廃寺例が厚い。３の資料が格子目の叩打痕を残すが、老司式軒平瓦の格子目に比較してやゝ大ぶりで、１辺６～８㎜の正方形の格子目である。粘土は少量の砂粒を含むものの良質であるが、焼き上がりは２点とも不良である。

丸瓦（第43・44図・図版48）

ほとんどが破片資料であるが、行基式のものと玉縁式のものの２種があり、それぞれ粘土板によるものと、粘土紐によるものとに分けられる。

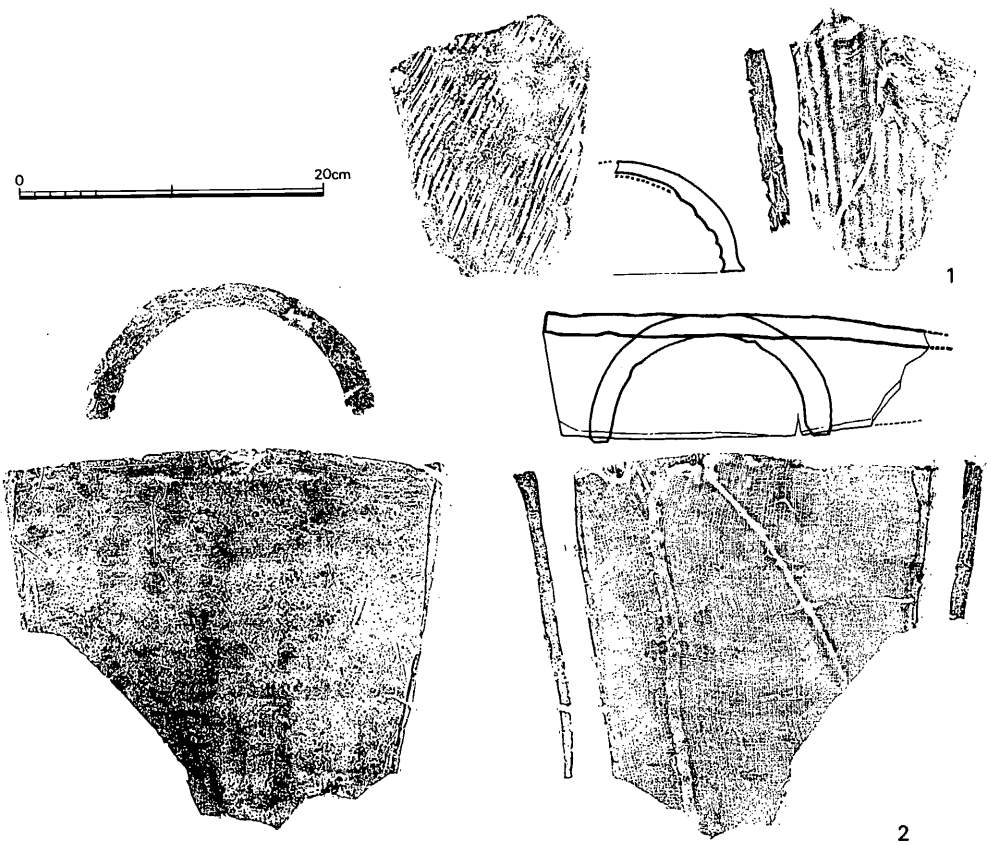
第43図は、行基式の例で１・２ともに破片資料である。１は比較的薄い粘土板で作られている。内側に竹状の模骨痕を残すことから、行基式丸瓦と判断できる。表面には平行線の叩打痕



第42図　SE3680出土軒平瓦拓影・実測図

を残している。百済系の単弁軒丸瓦と共伴することで知られていることから[註1]、観世音寺においても百済系単弁軒丸瓦（第20図－１）との関連が予想される。少量の砂粒を含み黄橙色に堅く焼き上がり、土器の焼きに近い。２も破片資料であるが、丸瓦の外形から考えて行基式丸瓦と判断した。内面に粘土紐の痕を残している。ために瓦は1.7cmほどとや、厚目である。表面は横方向になでつけられ叩打痕は残っていない。側面は三面の面取りがなされている。少量の砂粒を含み暗灰色で須恵器的な焼き上がりである。

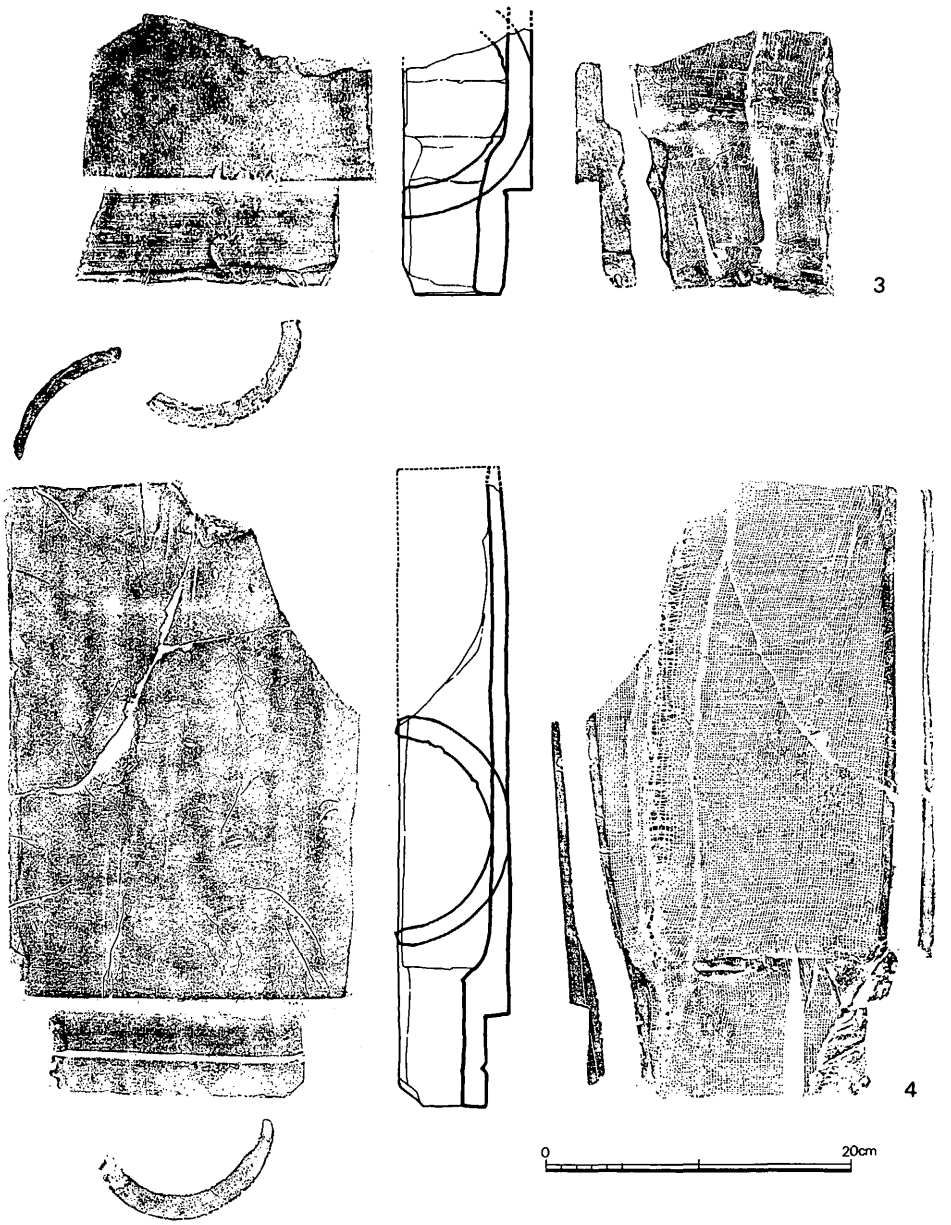
第44図は、玉縁式の丸瓦である。１は粘土紐の痕を内面に残している。外面は横方向のナデである。厚さ1.9cmほどとや、厚く、側縁の内側、玉縁端部内外に面取りがなされている。少量の砂粒を含み灰白色で焼きも良い。２は丸瓦で長さのわかる唯一の資料である。粘土板によるものと思われる。内面に布の合せ目、紐の圧痕などを残している。外面は横方向のナデである。側縁部は３面の面取りがなされている。玉縁は、端部を削っている。玉縁の部分で特徴的なのは一本の沈線を入れていることで、老司瓦窯で生産された可能性が強い[註2]。長さ42.5cm、厚さ



第43図　SE3680出土丸瓦拓影・実測図(1)

1.2cmとやゝ薄く作られている。少量の砂粒を含むが良質の粘土が選ばれ、暗灰色で焼き上がりも良い。

平瓦（第45～48図・図版49・50）完形に接合されたもの５点と、大きめの破片とで15点をサ



第44図　SE3680出土丸瓦拓影・実測図(2)

ンプリングしたが、これは一括投棄された平瓦の７割程にあたる。叩打痕が老司式軒平瓦（第42図－１）と同様に叩打具の側端と格子目の関係が45度の方向であることから、すべて叩打痕は斜格子文と呼ぶべきものと思う。

末尾の平瓦分類表にサンプルとしてとり上げた15点の平瓦の計測値、特徴を示した。

平瓦は、まず叩打痕の差異により二つにわけられる。

Ⅰ　１辺5㎜程の正方形の格子目文が残る平瓦　３点

Ⅱ　１辺６～９㎜程の格子目文が残る平瓦　12点

このうちⅡは、格子目文が正方形に近いものと菱形に近いものとがある。

Ⅱ－ａ　格子目文が正方形に近い平瓦　６点

Ⅱ－ｂ　格子目文が菱形である平瓦　６点

次に15点の平瓦群の製作技法について見ると、粘土紐桶巻き作りによるものと、粘土板桶巻き作りによるもの、不明なものとに分けられるが、Ⅰの格子目の瓦では、２点が粘土紐桶巻き作りで、１点はナデなどの整形により不明である。

Ⅱ－ａの格子目の瓦では、５点が粘土の合せ目痕や糸切り痕を残すことから、粘土板桶巻き作りと判断され、１点は粘土紐桶巻き作りであった。Ⅱ－ｂでは、４点が粘土板桶巻作りで、２点が不明であった。製作技法が不明な平瓦３点はあるものの、この基準によって分類すれば

Ａ　凸面にⅠの格子目文を残す平瓦　３点

Ｂ　凸面にⅡ－ａの格子目文を残し、粘土板桶巻き作りによる平瓦　５点

Ｃ　凸面にⅡ－ａの格子目文を残し、粘土紐桶巻き作りによる平瓦　１点

Ｄ　凸面にⅡ－ｂの格子目文を残す平瓦　６点

の４群に分類される。この分類によって４群の特徴をひろえば

Ａ　Ｂ・Ｄ群よりも長さが４～５㎝程短かい。Ｃとはほゞ同じ長さである。側面は２面の面取りを特徴としているものと思われる。

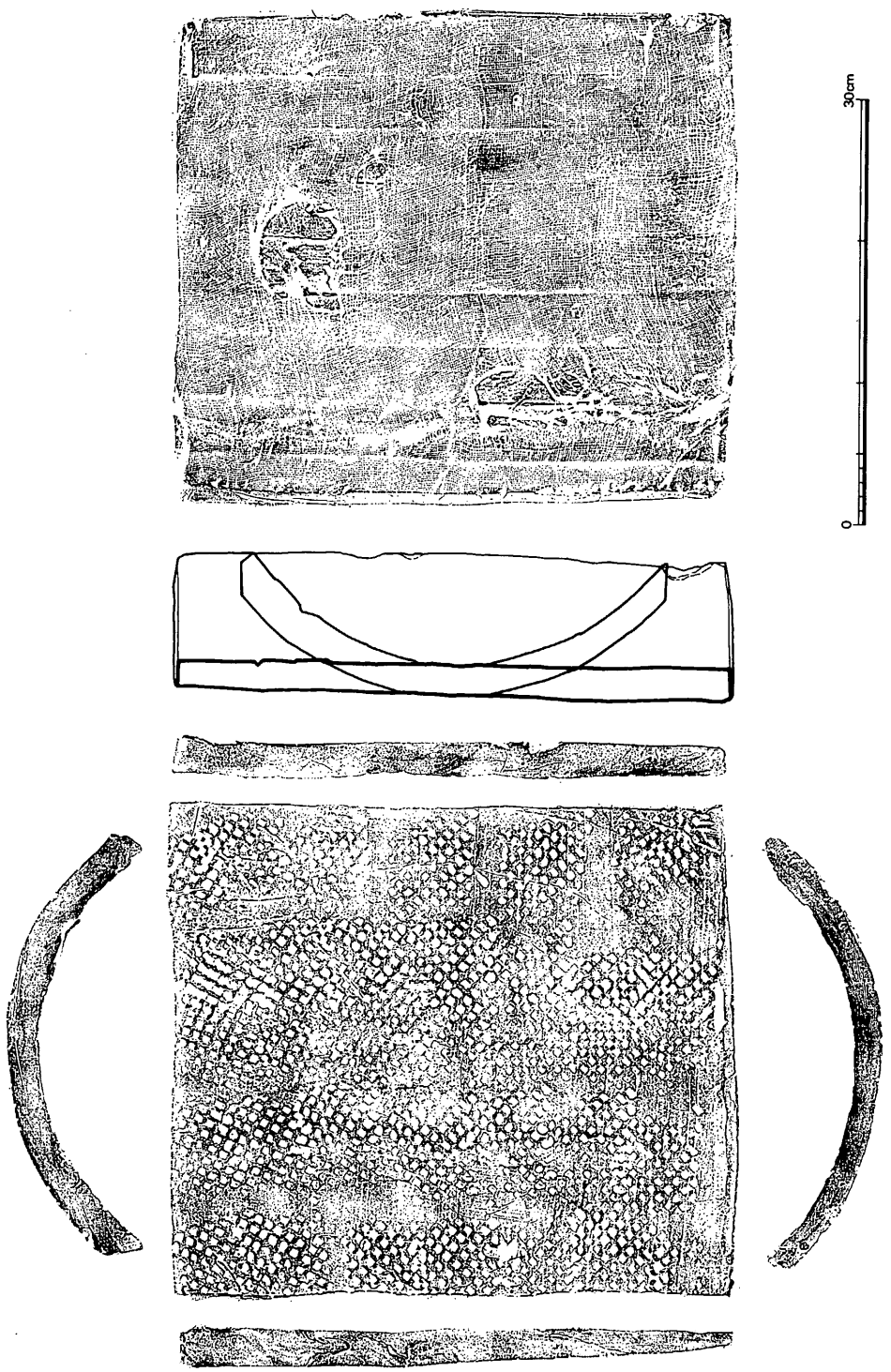
Ｂ・Ｄ　Ａ・Ｃ群よりも長さが長く、側面の仕上げは３面に削ることを基本とし、凸面は叩打したまま、凹面は布目をすり消している。

Ｃ　長さはＡに近く、側面・凸面・凹面の仕上げはＢ・Ｄに同じである。

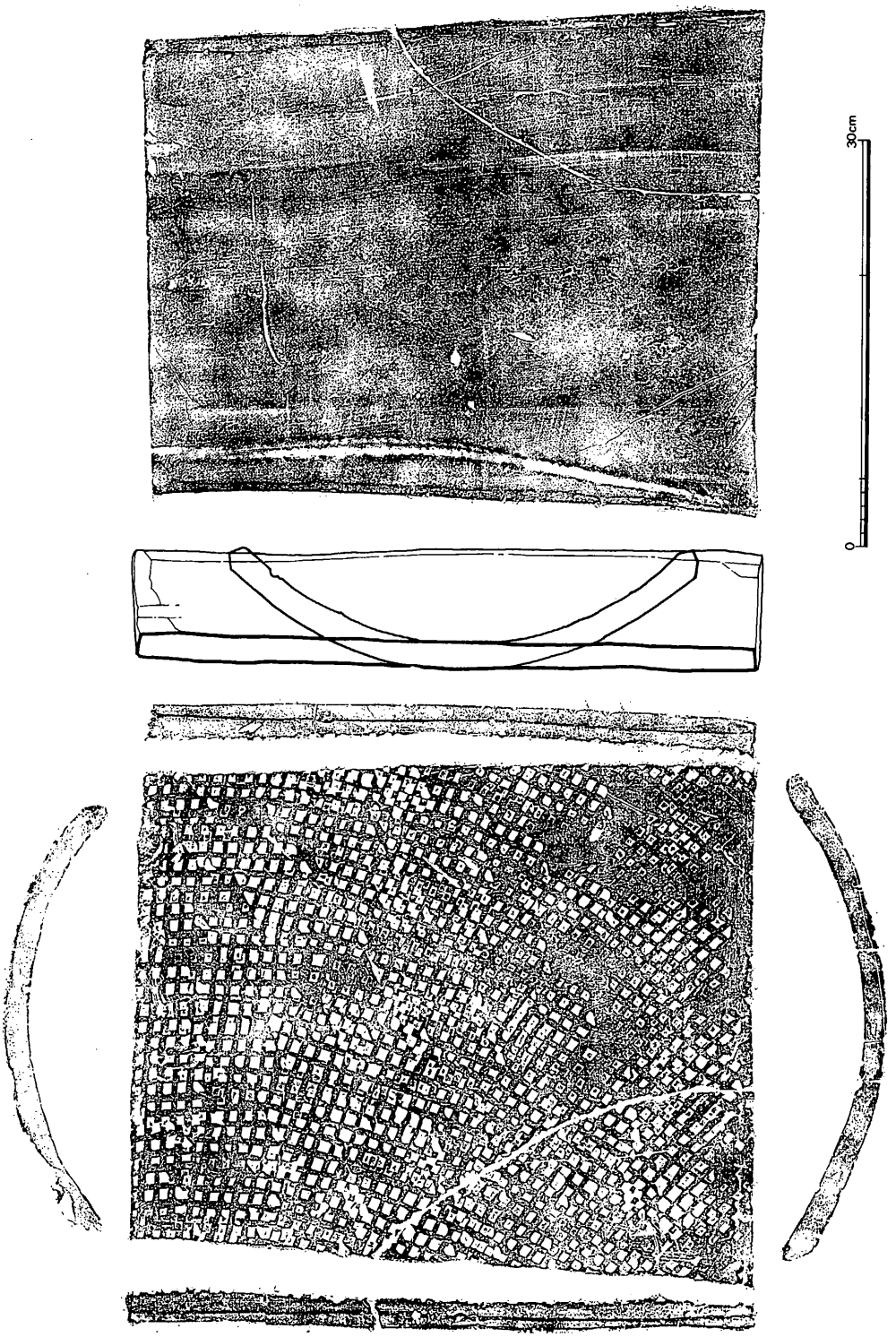
以上SE3680の埋没過程で、一括投棄された瓦類についての概要を記したが、以下の点を付記しておきたい。

１．軒丸瓦では、丸瓦第43図－１の出土により、百済系単弁軒丸瓦が一括出土した軒丸瓦の一群に入れうる可能性が高い。

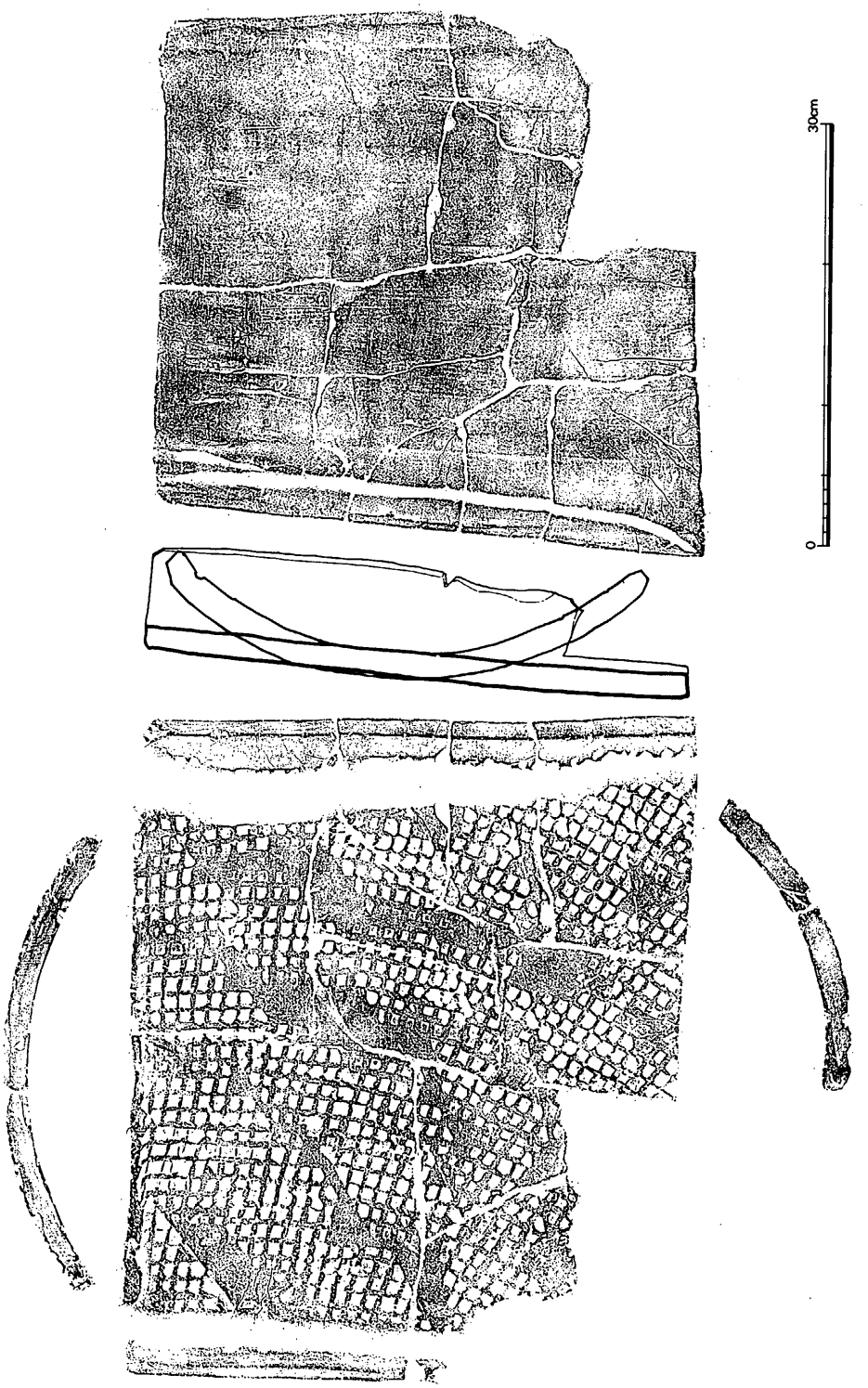
２．軒丸瓦３種のうち老司Ⅰ式軒丸瓦は、丸瓦部が玉縁であるものと思われる。他の２種の丸瓦部が行基式丸瓦であることは、丸瓦に行基式・玉縁式の２種があることと矛盾しないが、対応関係は不明である。



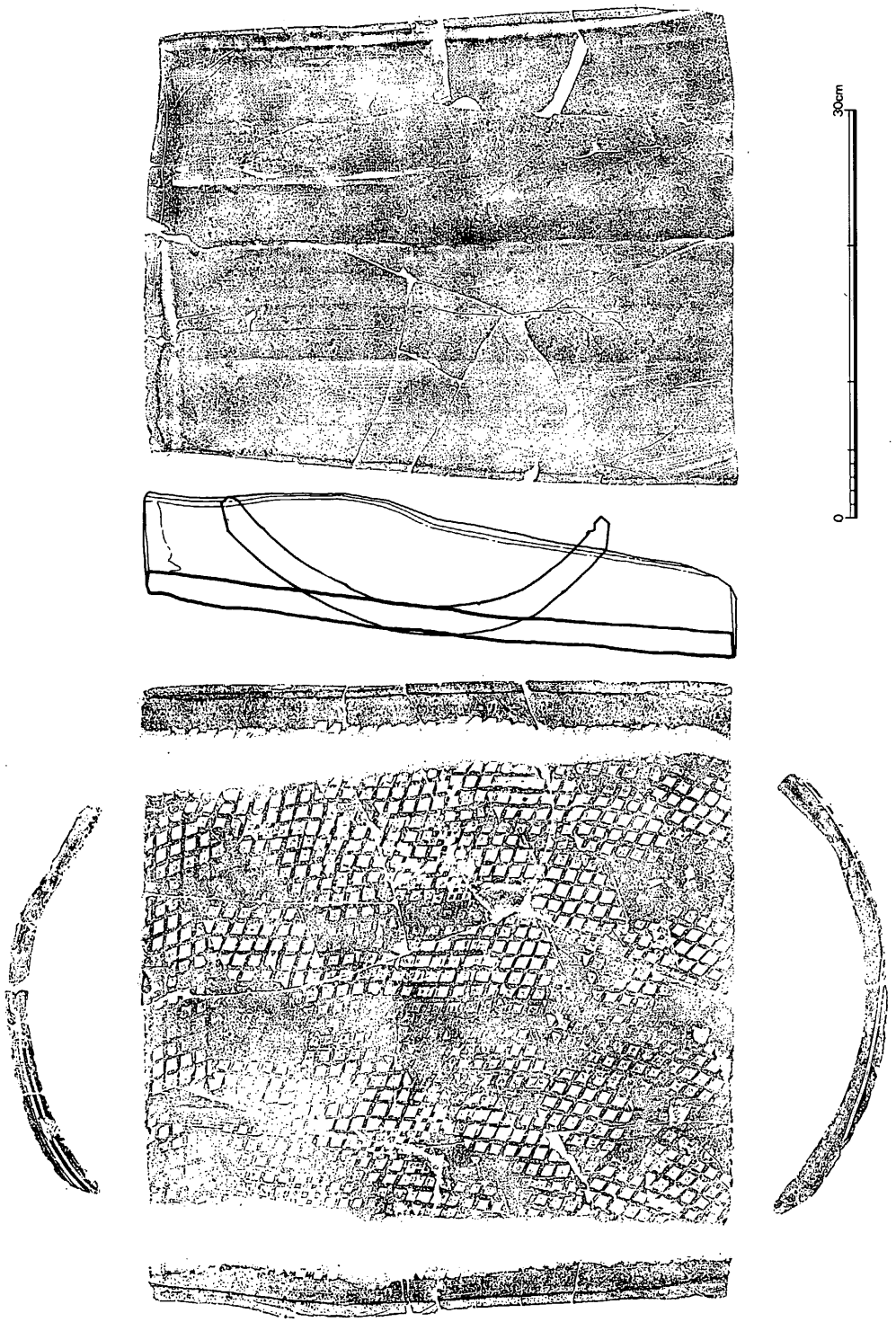
第45図　SE3680出土平瓦A拓影・実測図



第46図　SE3680出土平瓦B拓影・実測図



第47図　SE3680出土平瓦C拓影・実測図



第48図　SE3680出土平瓦D拓影・実測図

3．軒平瓦2種は平瓦凸部にそれぞれ別の格子目文を残すが、老司Ⅰ式軒平瓦は、平瓦Aの格子目文と同一のものと判断されることから、この老司Ⅰ式軒平瓦も粘土紐桶巻き作りによる可能性がある。

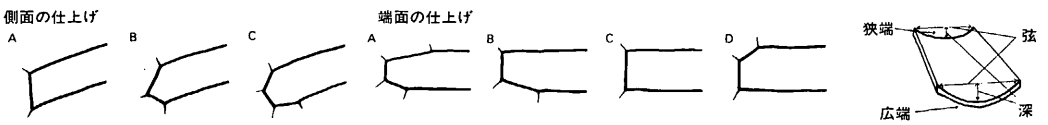
また扁行忍冬唐草文の軒平瓦の格子目文は、平瓦Bの格子目文と同一と判断できそうである。他例をまって確定する必要がある。

4．丸瓦で4種、平瓦で4種の存在を認めたが、叩打具・製作技法等から、これ等の製作工房への見通しを立てたいところであるが、現状では今後に資料の増加をまつこととしたい。ただ玉縁式丸瓦の粘土板によるものは、老司瓦窯のものとして良いだろう。

5．軒瓦の瓦当文様・丸瓦・平瓦のそれぞれの特徴は、一括投棄された瓦群の年代観が、土器から、8世紀前半もおそくない頃と考えられるが、このことは一括出土した資料の相対的な年代観とは矛盾していない。従って観世音寺創建期に使用された瓦群の断面ととらえることが出来よう。

SE3680出土平瓦の計測値および観察表

資料No.	叩打痕による分類		製作技法	計測値 長さ	広端弦	広端弧深	狭端弦	狭端弧深	厚さ	凸面の仕上げ	凹面の仕上げ	側面の仕上げ	端面仕上げ 広端	狭端	備考
1	Ⅰ 叩打痕が1辺が5㎜ほどの正方形		粘土紐	39.3cm	30.3cm	7.2cm	29.3cm	7.6cm	2.1cm	局部ナデ	ママ	B	C	D	第45図、図版49－A　粘土紐痕
2			粘土紐	38.9			27.6	6.7	1.9	局部ナデ	スリ消シ	B	C	B	粘土紐痕
3			?						1.7	ナデ	スリ消シ	打欠キ		B	
4	Ⅱ	a 叩打痕が1辺6～8㎜ほどの正方形	?	45.4	34.4	7.2	31.2	5.8	2.0	局部ナデ	スリ消シ	C	C	B	第46図、図版49－B　凹面に紐状の圧痕
5			粘土板	45.3	35.2	7.0	33.0	6.3	2.0	ママ	スリ消シ	C	B	B	分割突起痕、糸切り痕
6			粘土板	44.0			36.5	5.9	2.1	ママ	スリ消シ	C	B	B	分割突起痕、糸切り痕
7			粘土板	43.3			30.3	5.3	2.3	ママ	スリ消シ	C	C	C	粘土板合せ目、糸切り痕
8			粘土板						2.3	ママ	スリ消シ	C		B	糸切り痕
9			粘土紐	39.4			31.6	6.5	2.0	ママ	スリ消シ	C	C	C	第47図、図版50－C　粘土紐痕
10		b 叩打痕が1辺7～9㎜ほどの菱形	粘土板	43.2	31.9	6.9	28.4	5.7	1.4	ママ	スリ消シ	C	C	B	第48図、図版50－D　分割突起痕、糸切り痕やきによる変形
11			粘土板	44.4	35.2	6.8	32.2	6.6	2.0	ママ	スリ消シ	C	C	C	糸切り
12			粘土板						2.0	ママ	スリ消シ	C	B		糸切り痕　やきによる変形
13			粘土板	41.2					2.1	ママ	スリ消シ	B	C	B	糸切り痕　やきによる変形
14			?				29.8	6.6	1.9	ママ	スリ消シ	C		B	
15			?						1.7	ママ	スリ消シ	C		B	



木製品

SE3680出土木製品（第49・50図・図版51・52）

椀（1）　口縁部にかけて欠損する。全体をロクロで挽き出した大形の椀。縦木取りによるもので、木地には漆の痕跡がないところからみて白木作りと思われる。

槌のこ（2）　丸太材を切断し一方の端は周縁を削る。遺存状況が悪く身の中央部分は荒れが著しい。両端ははつり痕がよく残る。

横槌（3）　広葉樹心持ち材の幹を用い、一端を細く削って柄とし、頭部は簡単に削って整えるだけで大半は自然面を残したままである。頭部の一面は中央が凹んでいる。また、表裏面には刃物の打ち込み痕も走っている。加工台としても使用されたものか。

鰹節形木器（4）　板目材を丁寧に削り出し、反りをもたせた縦長のもの。全体の形状は鰹節に似るが、一種鳥形ととれないこともない。孤状をなす外側は平坦に削る。中央断面は五角形に近い。他の部材と組み合わせて用いるものではなく、これ自体で形態を整えているが、用途は定かでない。全長22.7cm、中央幅5.3cm。

角柱製品（5・6）　5の板目材の周囲を削って横断面が多角形となるようにしたもの。両端は切断しているままである。一方の端は細い。全長8.1cm、身幅5.4cm。6は心持ち丸太材の約1/5は樹皮を残し他を削って四角柱に近い形状に整えたもの。両端の木口は斜めに削り落し、尖らせる。両木口面は直角近くその方向を違える。広葉樹柾目材。全長24.2cm。中央最大幅8.6cm。

箕縁木（7）　細い心持ち材をたわめて、ちりとり形の箕の枠としたもの。樹皮をいまだ残したところもあるが内側を部分的にはつった箇所もある。両端は削りを入れ篭身を縛るための切り欠きを設ける。なお、数カ所篭身を縛った痕跡か、浅く溝状にくぼんだあたりがある。出土位置が井戸の最上層であり、あるいは上層のSK3677に伴なうのかもしれない。

輪状製品（8）　板目材を輪状に削り出したもので一方の端は斜めに削り落とす。他端は中途で欠損している。この欠損箇所にむけて徐々に幅を広くする。外縁は粗く削って平坦にしているだけだが、内縁は中央が突出するよう丁寧に削り出す。両側面を面取りして山形にしさらに浅い段を巡らせる。また、内縁には長さ2.3cmにわたって浅い切り欠きを一箇所いれる。

丸棒製品（9・10）　広葉樹心持ち材の外縁を縦方向に削って樹皮を剝いだもので、9の先端は粗く尖らせる。10は両端とも欠損している。

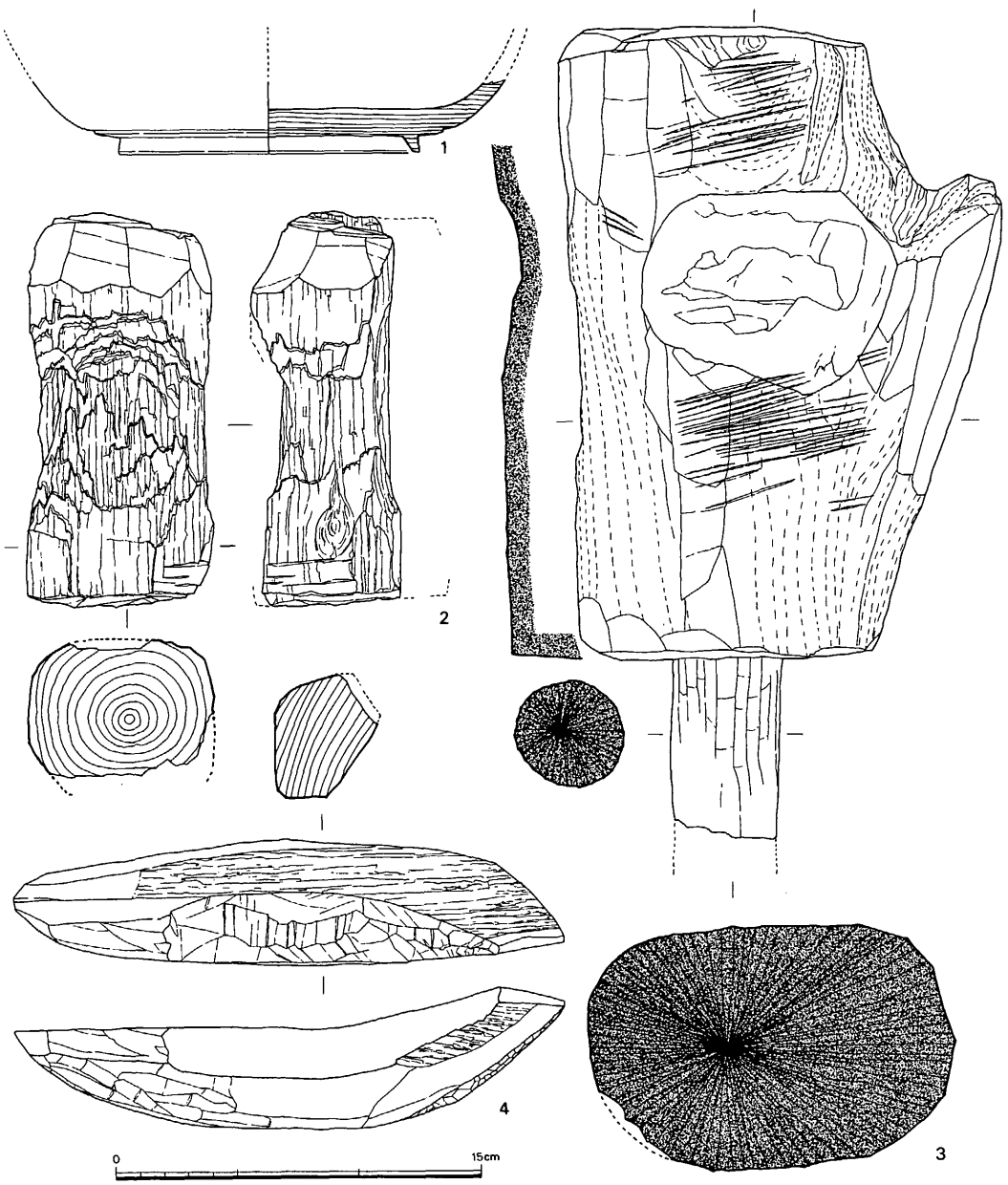
容器（a）　保存状態が悪く全形を摑みえない。材を枡状に刳ったもの。内底部は平底であるが、外底部は現状では丸味をもっている。内側の側面は斜めに立ち上がる。外面は粗く削っただけのようである。内面に焦げ跡がひろがっている。白木作



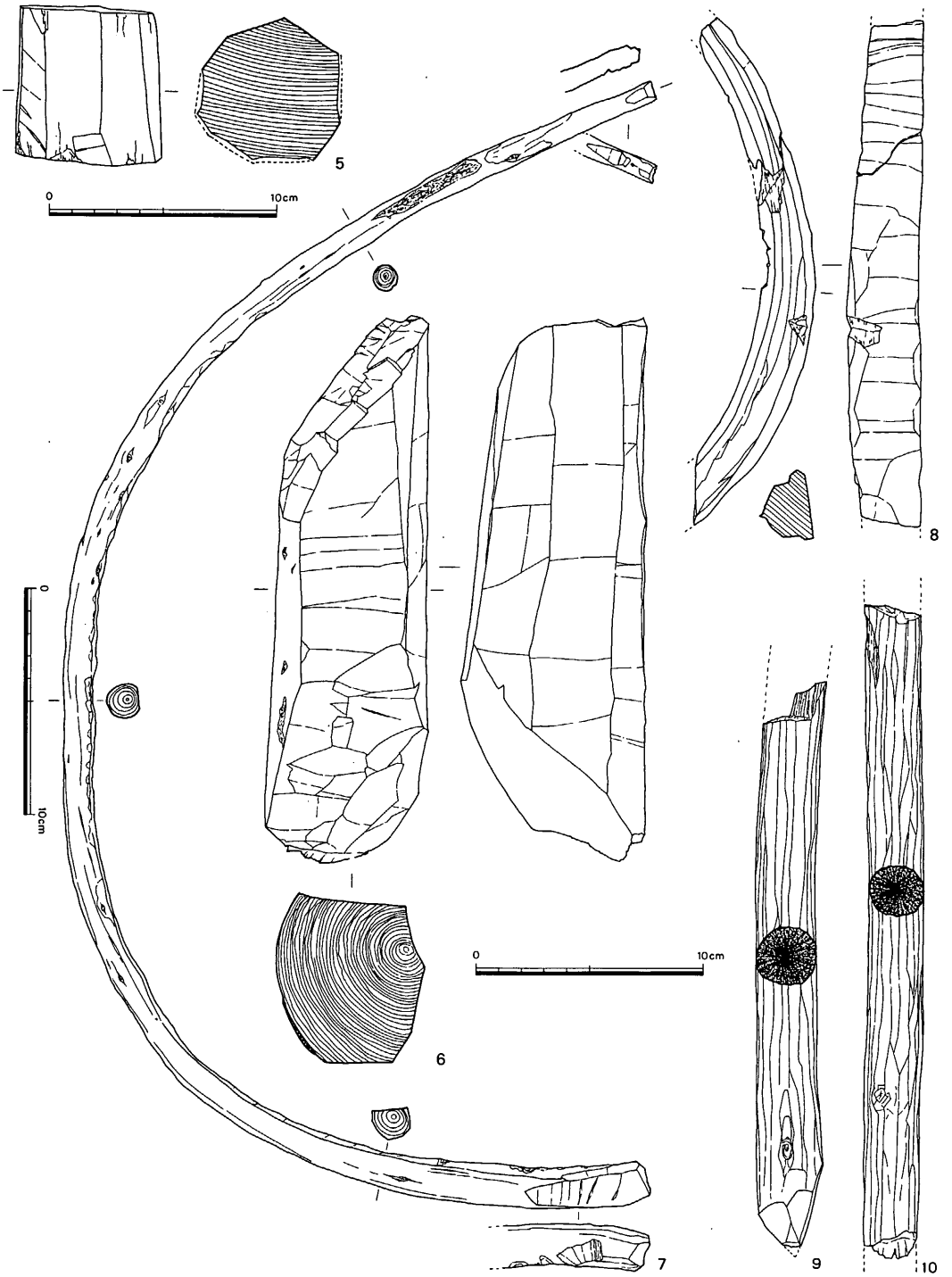
縄出土状態

り。横木取り。

加工材 (b)　丸太材を輪切りにした偏平なもの。上面中央に浅いえぐりがある。置き台として使用されたものか。



第49図　SE3680出土木製品実測図(1)



第50図　SE3680出土木製品実測図(2)

索（c）　径３㎝程の藤蔓を用い、樹皮を残したまま２本撚りをかけたものである。牽引等に利用されたロープと思われる。観世音寺建築時に使用されたものか。この他に、樹種は不明であるが、ツタ類に同様の撚りをかけた縄も合せて出土している。

土製品（第51図・図版53）

鈴（１）　長さ4.5㎝、最大幅3.3㎝、紐孔径0.4㎝。裂口部の両端は丸く切り込む。暗褐色土層より出土。

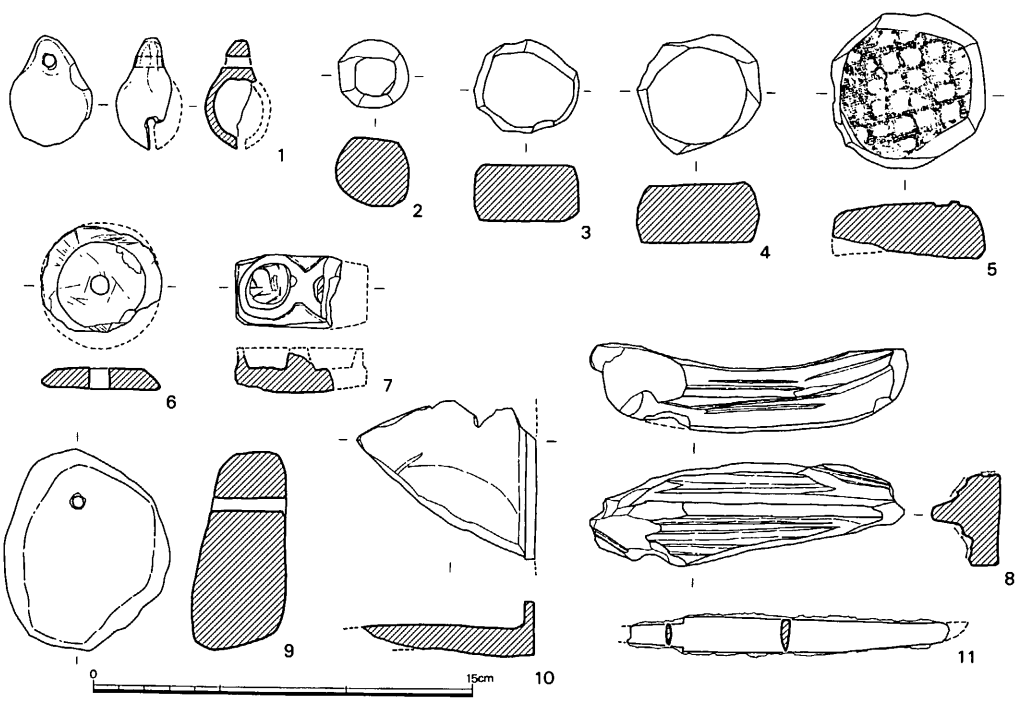
円盤状土製品（２～５）　平瓦の再加工品である。周縁は打ち欠いて円形に整える。大きさは径2.7～6.0㎝まで様々である。５には格子の叩きが残る。それぞれSX3691、表土、SX3694、SK3672より出土。

石製品（第51図・図版53）

滑石製有孔円盤（６）　上端径3.4㎝、下端径4.0㎝、厚さ0.9㎝の円盤の中央に、径0.75㎝の孔を穿つ。全体に磨かれ光沢をはなつ。SK3672出土。

滑石製容器（７）　二連のもので長方形の台がつく。台部の厚さは1.0㎝。器面は平滑にみがかれるが、容器の内底部にはノミ痕が残る。現存長4.2㎝、現存高1.6㎝。暗褐色土層出土。

滑石製有溝製品（８）　滑石製石鍋口縁部の再加工品である。背面には石鍋のカーブが残り、



第51図　各遺構・層位出土土製品・石製品・金属製品実測図

両端は削って平坦面をつくりだす。鍔の付根部分には横方向の擦過によってできた凹線が数本はしる。表土出土。

軽石製有孔製品（9）　長さ8.0cm、幅6.5cm、最大厚4.7cmをはかる。上方には径0.5cmの孔を穿つ。暗褐色土層出土。

石製硯(10)　方形硯。大部分を欠失する。陸部と海部の境は不明瞭である。粘板岩製。SD3663出土。

金属製品（第51図・図版53）

刀子（11）　背が直線的になるもので、切先・茎は欠失する。現存長12.7cm。関は明瞭である。SX3691出土。

小結

以上、各遺構・遺物についてその概略を記したが、ここではそれらを整理し若干の検討をしたい。

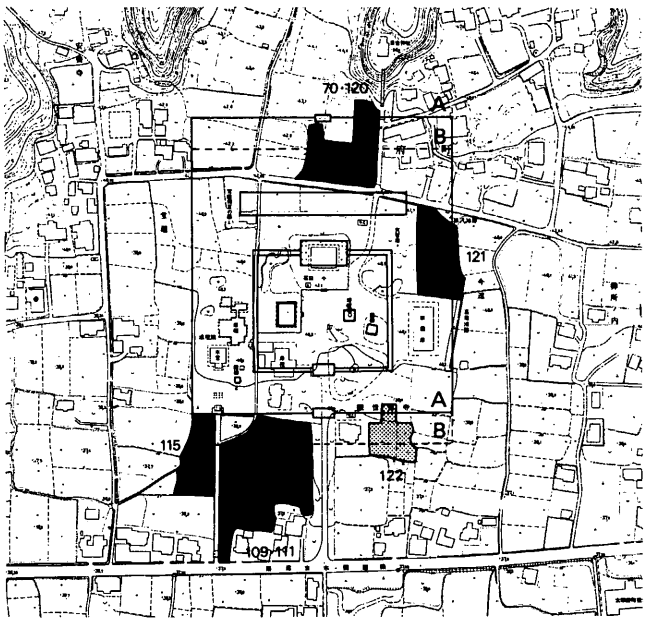
今回、検出した主な遺構は掘立柱建物5棟、井戸4基、溝7条、土壙等である。これらは年代的なものから3期に区分することが可能である。

第Ⅰ期　SB3660・3665、SE3680がある。掘立柱建物SB3660・3665は同位置に建てられており、SB3660が古期に属する。この新旧2時期の建物は規模的には全く同じであるが、柱間寸法や中心の柱列の有無等、構造的には若干相違がみられる。SB3660の梁中心の柱列は束柱の可能性があり、これは床張り構造のものであったと考えられる。そして、SB3665では床張りはなされていなかったと推定される。この両者の建物の廃絶年代についてはSX3682埋土中から出土した土器がその手掛りになろう。建物の東南隅の柱掘形はSX3682埋土除去後に検出したもので、建物の廃絶はSX3682と同時もしくはそれ以前と云うことになる。SX3682出土土器は8世紀前半～中頃に位置付けられる。このことからSB3660・3665はおそくとも8世紀前半代のある時期に廃絶していたと判断できる。次にSE3680についてみてみよう。この井戸は廃棄時に枠のほとんどを抜き取った後一気に埋め戻されている。井戸埋土中から出土した土器は7世紀末～8世紀前半代の早い時期のものである。また、井戸枠中の最下底から出土し土師器杯は井戸構築時と関連するものである。このことから、井戸の構築年代は7世紀末で、その廃棄は8世紀第Ⅱ四半期の早い時期とみられる。

SB3660の構築年代とSB3665の廃絶年代はSE3680と同時とみて大過なかろう。この両者の建物は主軸が6度と大きく東偏していること、柱穴の径が20cm前後と小さいこと、柱間寸法が不規則で一定していないこと、さらに、井戸中から出土した木製品には建築部材や建築に使用する道具や藤葛を編んだ縄策等がみられることから、観世音寺の建設に際してもうけられた仮設の寺務所的性格のものであったとも推定されようか。

第II期　SE3685、SK3678がある。出土遺物から11世紀後半代に比定される。第I期終焉から第II期にはこの地は空閑地に近い状況であったようである。

第III期　SB3670・3675・3698、SD3666・3668・3669、SE3690、SK3672・3677・3679がある。第II期に比較すると遺構が密集してくる。建物の年代については必ずしも詳らかでないが、SB367とSB3675とは方位の関係から同時と考えられ、SB3698はそれより遅れる。溝・土壙から出土した土器は14世紀代のものが集中しており、盛期をその頃に比定できる。



第52図　観世音寺伽藍配置想定図

おわりに、今回主眼とした南辺築地について検討する。築地跡については過去に第70・70補・109・111・115・120・121次の7回の調査を実施している（以下、第52図参照）。「観世音寺資財帳」（延喜5年）による築地規模は東西570尺、南北650尺であり、従来これをもとにAの推定線が得られている。しかしながら、これまでの調査からはAの推定を確定し得るような遺構は検出していない。平成元年度に実施した第70次補足調査によって幅2mの東西溝を検出しこれが北辺築地に関する遺構ではないかとの予測を得るに至った。この推定線をもとに「資財帳」の南北幅650尺をとると南辺のB推定線が得られる。B推定線は今回の調査地のほぼ中央部付近に設定されるが、先述のようにそれにあたる遺構は検出していない。また、第109・111・115次調査でも同様な結果であった。

以上の調査結果から、築地跡の確定には従来のA推定線と新らたに設定したB推定線を含め、「資財帳」の再検討等を行なうことにより、南門推定地等の今後の調査に負うところが多い。

註1　小田富士雄「百済系単弁軒丸考・その2」『九州考古学研究　歴史時代篇』1976
小田氏は、法鏡寺跡、野森窯跡、木山廃寺などの百済系単弁軒丸瓦と竹状模骨が併存することに着目された。この他では、百済系弁軒丸瓦と共存する例で椿市廃寺、天台寺跡などがあり、山田1号窯、三宅廃寺では竹状模骨の行基式丸瓦だけが出土している。このことから単純には、両者がセットであるとは言いがたい点もあるが、天台寺跡では、百済系単弁の軒丸瓦の丸瓦部に竹状模骨の痕跡を残していた例もある。観世音寺では、百済系単弁軒丸瓦と竹状模骨を残す丸瓦が共存していることから、両者が同時存在である可能性は高いと考える。

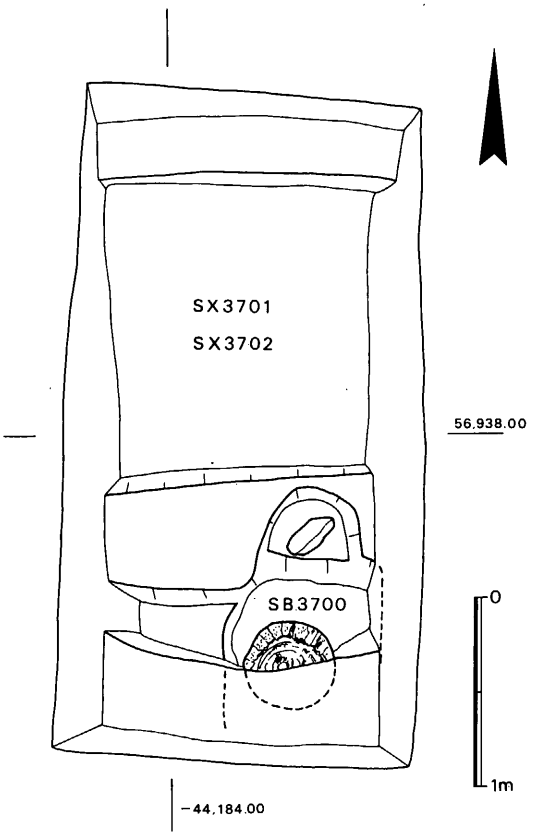
註2　小田富士雄「老司瓦窯跡」『九州古瓦図録』1981　九州歴史資料館編

第123次調査

調査地点は観世音寺北側にある日吉神社の参道東側に接した個人住宅内である。地権者より浄化槽埋設の申請がなされたことが調査の契機である。地番は太宰府市大字観世音寺字山ノ井847－１。

付近は観世音寺寺域内の僧房地区にあたる。すぐ南の市道を挟んだ地点は昭和51年度の第43次調査の結果、東西に長い４間×19間以上の礎石建物を検出し、僧房（大房）跡を確認した。また、参道を隔てた西側では昭和55年の第70次調査と平成元年度の第120次調査地点がある。こうした過去の調査結果を踏まえて、今回狭い範囲ではあるが遺構の広がりを解明すべく調査を実施することとした。

調査は平成２年８月10日に浄化槽埋設部分に２×3.6mのトレンチを設定して実施し、翌日出土した柱根を取りあげて終了した。



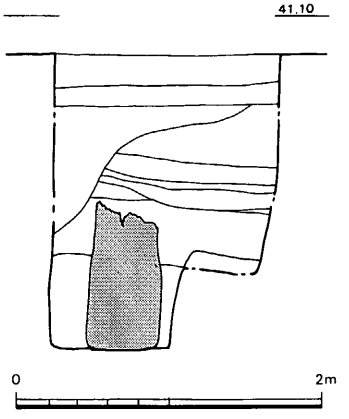
第53図　第123次調査遺構図

検出遺構

調査地点の現標高は42.80m前後、大野城（四王寺山）から派生する丘陵の南麓にあたる。盛土と表土・床土を剝ぐと暗褐色土があらわれる。さらに、この下には青灰色シルトと粗砂が堆積していたが、この層からは遺構は検出していない。これら包含層中からは近世から近代の遺物が出土した。この下層でまずSX3701を検出し、SX3701を掘り下げたさらに下層でSB3700・SX3702を検出した。

掘立柱建物

SB3700　トレンチ南壁にかかって検出した柱穴。SX3701の下層で検出した。掘形全形を知り得ないが一辺0.8m前後の方



第54図　SB3700柱掘形断面図

形状のプランとなろう。トレンチ内ではこれと連続するような柱穴は検出していない。掘形の西壁寄りに柱根が遺存していた。現存径0.5m前後、現存長0.95m。皮を剥いだ丸太材がそのまま据えられていた。浄化槽がこの柱根を外しては埋設できないことになったため、調査終了後に取り上げている。

溝状遺構

SX3701　トレンチのほぼ全域にわたって広がる粘土層と砂層が互層をなす溜まりである。溝とも土壙とも判断がつきかねる。ただ、トレンチ中央部分で浅く溝状にくぼんでいること、堆積土が砂層を主体とすることからみて溝の可能性が高い。なお、埋土中より16世紀前後の遺物が出土した。

SX3702　トレンチの北半でSX3701の下層から検出した東西方向に延びる溝状遺構である。南北の幅1.5m、深さ0.2m。底面は地山に達している。砂層が埋積し、この砂層からは8世紀後半代の遺物が出土した。

出土遺物

SX3701出土土器・陶磁器（第55図・図版54）

土師器

皿b（1）　口径9.6cm、器高2.0cm、底径6.2cm。体部の開きが強く、調整はヨコナデのみで、ナデ仕上げを施さない。そのため外底部に板状圧痕を伴わない。糸切り。

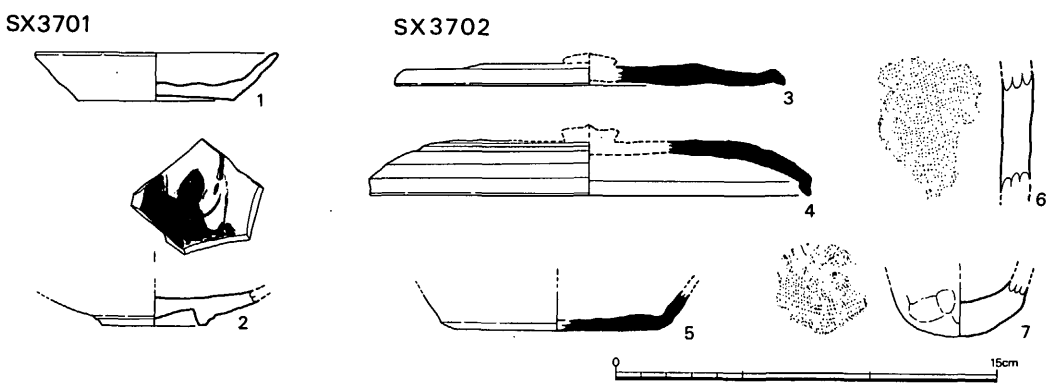
染付け

皿（2）　明青花皿。高台畳付部は露胎である。

SX3702出土土器（第55図・図版54）

須恵器

蓋（3・4）　復元口径15.3cm。3は天井部が低いタイプで口端部は丸くしただけである。

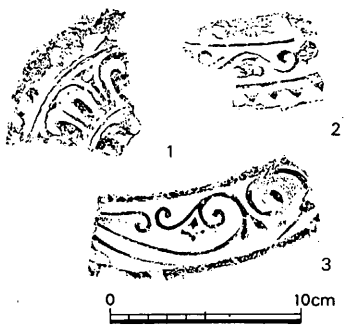


第55図　SX3701・SX3702出土土器・陶磁器・塩壺実測図

外天井部はヘラ切り離しのまま。4は1/16以下の小片からの復元である。口端部は長めに屈曲し、外天井部は回転ヘラ削りを施すなど3に較べて古相のもの。

杯（5）　復元底径7.9cm。外底部はヘラ切り未調整。内外面に墨が付着する。

塩壺（6・7）　型づくりによる成形で、内面に布目圧痕、外面に指押え痕がある。共に円筒形になるものか。6は赤褐色を呈し、金雲母の混入が著しい。7は底部のみを残す。淡灰色を呈す。



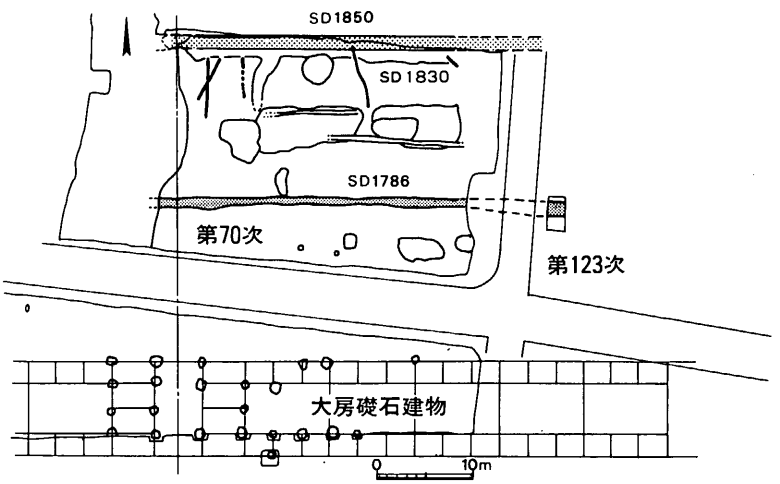
第56図　出土軒瓦拓影

瓦類（第56図）

軒瓦3点の出土があった。1は、老司Ⅰ式軒丸瓦である。2は、大宰府系軒平瓦の一種であるが、観世音寺においては出土点数は極めて少ない。3の軒平瓦は、観世音寺では比較的出土例の多い瓦である。

小結

今回の調査で検出した遺構と出土遺物は極わずかにすぎない。面積が狭小であった為、大きな成果は上げていないが、これまでに周辺で実施した調査の成果と照し合わせてみると、溝状遺構SX3702は、第70次調査の東西溝SD1786と連続するものと判断できる。ところでこの一画は僧房建物が配置していたと考えられるが、溝SD1786は右図のように大房礎石建物と推定北面築地外側の溝SD1830・1850とのほぼ中間を画する位置にある。これら三者は振れを等しくする点で密接な関係にあり、また、SD1830・1850とは掘削の時期は明らかにしえないが、存続・廃絶の時期が共通する点も考慮しておく必要があろう。ただし、東面築地付近の調査ではこれらと整合する南北溝は検出しておらず、東西隅部も未調査であり性格についての最終的な判断は将来にゆずることとする。



奈良・平安時代遺構配置図

第124次調査

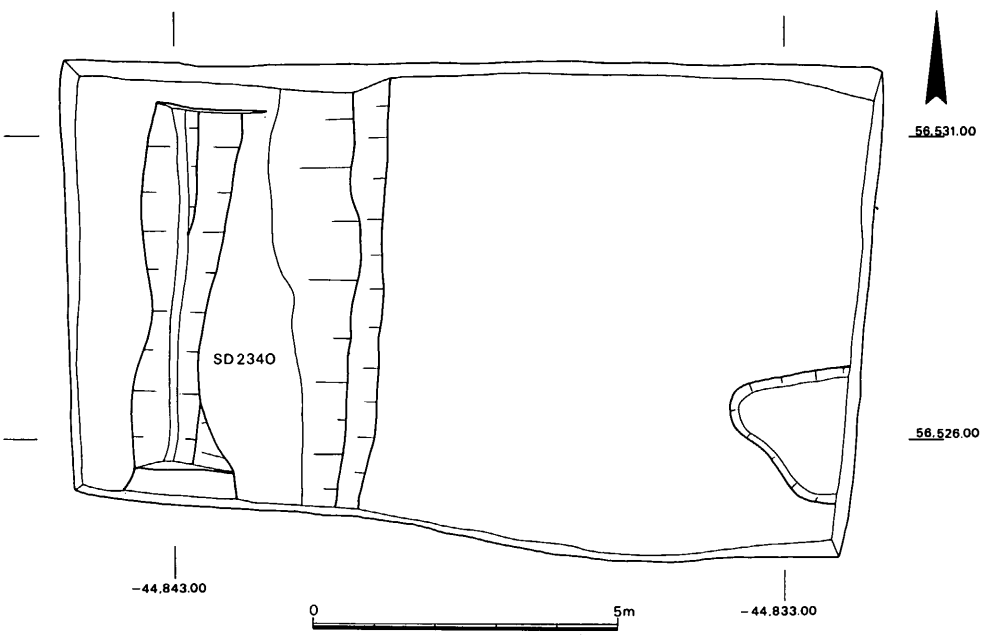
当該地は地権者より住宅建て替えの申請がなされたため、事前に調査を行うこととなった。調査地の地番は太宰府市大字観世音寺字不丁300－３。付近の現標高は35m前後。約102㎡を対象として調査を実施した。

これまで周辺では第84次、85次、87次、98次等の調査を実施しているが、その結果当地より北側には北から南へ流れる溝SD2340の存在が明らかである。この溝SD2340は大宰府政庁前に広がる広場と、広場の西側に集中する官衙群の両地域を画する性格の溝である。また、この溝からは多量の土器・陶磁器とともに天平紀年銘の木簡や、紫草に関わる木簡等が出土している。当地がこの溝の南側延長部分に当たることからこれまでの成果を踏まえて調査に臨んだ。

調査は平成２年10月11日に旧表土・床土の除去から開始した。なお、上部の客土は重機を用いて除去した。13日には溝SD2340を調査区西寄りで検出し、18日には溝の発掘を含め作業が終了した。19日から写真撮影、遺構実測等を開始し23日に全作業を終了した。

検出遺構

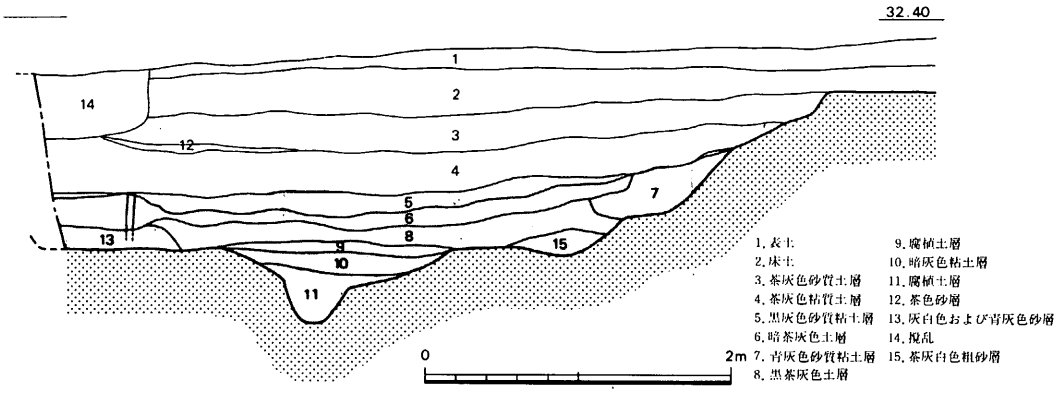
遺構面には旧表土と床土が覆っているだけで包含層は堆積していなかった。調査の結果検出した主な遺構は溝SD2340のみである。溝の東側では遺構は検出していない。



第57図　第124次調査遺構図

溝

SD2340　発掘区の西よりで南北７m分を検出した。溝はさらに南側に延びている。西側上端は発掘区外にあたるので、幅は東西5.2mを測るのみである。底面までの深さは1.55m。溝肩から１mほど緩やかに下がったところでフラットな溝底を形成しているが、中央はさらにえぐられたように一段落ち込む。位置関係や溝の堆積状況からみて先行する別の溝とは考えられない。これまでの調査ではこうした溝底のえぐれは検出していない。おそらくこの地点の地山が、黄褐色粘質土から溝底の深さでは黒色腐植土に変わっているために形成されたものと思われる。溝埋土はこのえぐれた部分に黒色腐植土と暗灰色粘土が互層をなしている。これを溝の最下層とし、これより上部はさらに上・中・下３層に分けることができる。遺物はいずれの層からも出土したが特に最下層から木簡が今回も出土した。なお、北壁際で上段溝底に杭が打ち込まれていた。遺存していたのはこの１本だけであったが護岸のためのものと見てまちがいなかろう。



第58図　SD2340土層断面図

出土遺物

SD2340出土土器（第59～61図・図版55）

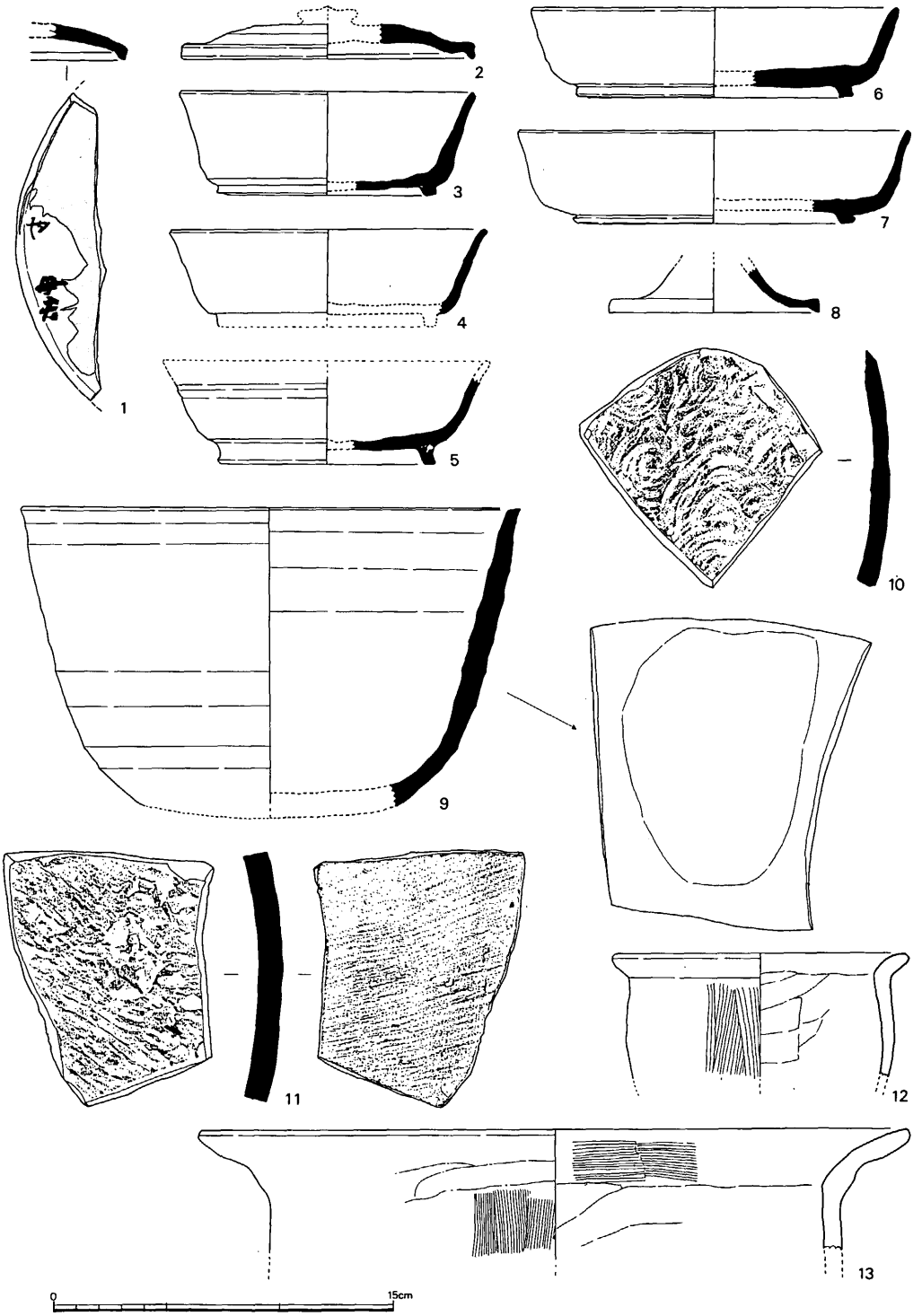
溝の埋土を前述したように上・中・下層とさらに最下層とに分け、遺物を取り上げている。ここでは各層位毎に記述する。尚、出土土器は細片化したものが大多数であった。極力図化に努めたがそのため、復元口径は若干の出入りが予想されることを付記しておく。

最下層出土土器

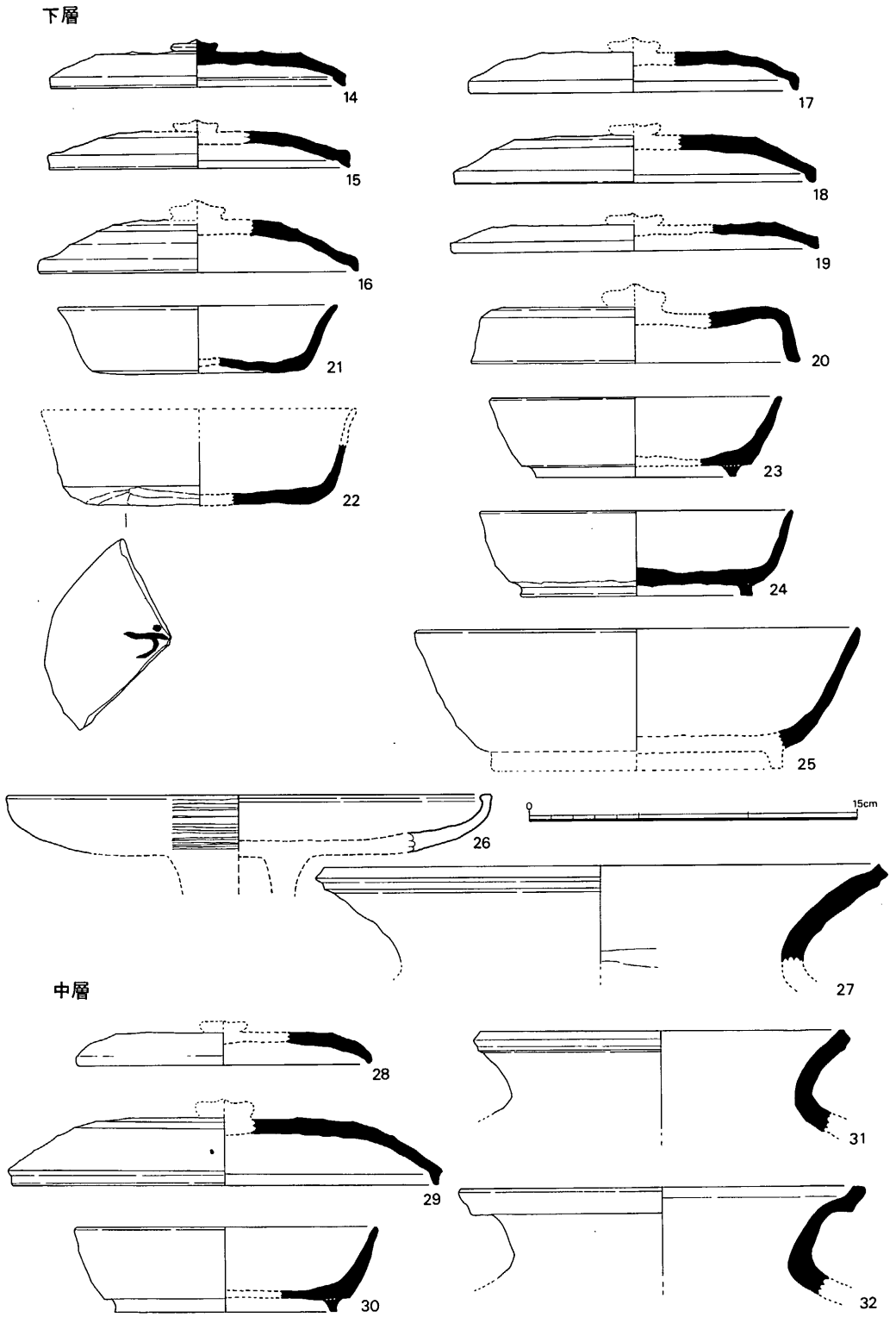
土師器

甕（12・13）　12は口径12.0cmの小型のもので、口縁部が肥厚しつつ外方に短く伸びるタイプである。外面は刷毛目、内面は強いヘラ削りを施す。なお、煤は付着していない。13は復元口径31.2cm。口縁部が体部に比べてさほど肥厚せずに大きく外反するもので、外面は刷毛目、

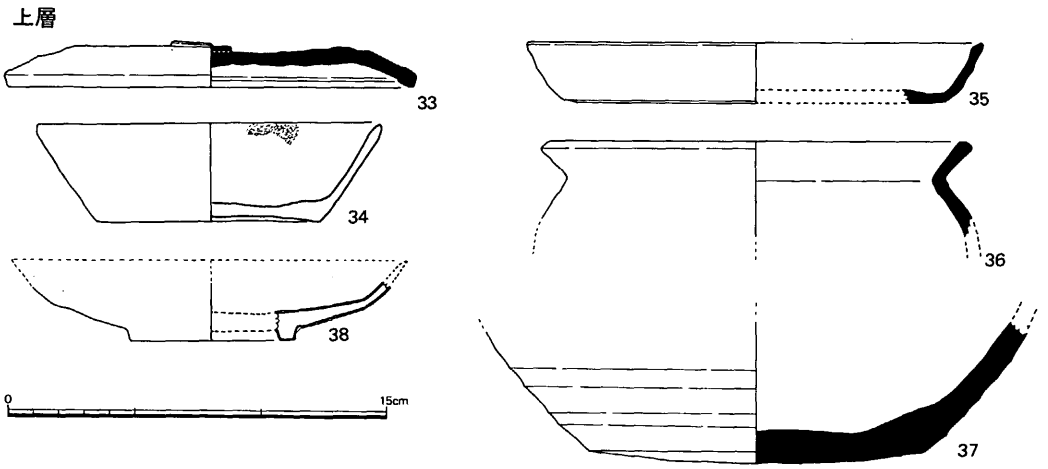
最下層



第59図　SD2340出土土器実測図(1)



第60図　SD2340出土土器実測図(2)



第61図　SD2340出土土器・陶磁器実測図(3)

内面は体部がヘラ削り、口縁内面には刷毛目を施す。口縁内面に煤が付着している。

須恵器

蓋（1・2）　口端部は1が三角形、2はより下方へ引き出す。ともに外天井部は回転ヘラ削りし、硯に転用されているため、内面には墨痕が付着し、よく擦れている。1には「母志」・「也」の習書がなされている。

杯（3～7）　すべて高台を有する。口径は13.0～17.2cm。器高は4.0～4.6cm。外底部は5～7が回転ヘラ削り調整を施し、3はヘラ切り離しのままである。また3の外底部には墨痕が認められる。

高杯（8）　脚部の破片で、端部は屈曲し、端部を三角形状につくる。内外面ともヨコナデを施す。脚部径9.2cm。

硯（9～11）　9は鉢の体部片を利用したもので、体部と底部の境の屈曲する内面を海部として使っている。内面はよく擦れている。外面下半に回転ヘラ削りを加える他はヨコナデ調整である。10・11は甕の破片を利用したもので、内面に墨が付着している。11の内面は平行・輪花状の当具痕が認められ、外面は細かい平行叩きを施している。

下層出土土器

土師器

高杯（26）　復元口径23.2cm。外端部はやや内側に肥厚する。杯部外面は回転ヘラ研磨を施す。内外面に墨が付着している。

須恵器

蓋（14～20）　復元口径13.8～16.8cm。14～19は杯もしくは皿の蓋、20は壷蓋である。杯・皿の蓋は口端部形態から3つに分けられる。外唇部がくぼむ14・15・18、長めに屈曲する17、三角形状に丸く突出する16・19である。外天井部はすべて回転ヘラ削り調整を施す。14・17の

内面には墨が付着する。20の外天井部も回転ヘラ削りを施す。外面に灰を被る。

杯（21～24）　復元口径12.8～14.2cm。21は外底部回転ヘラ削り調整を施す。22は胎部の下方から外底部全体に手持ちヘラ削り調整を施す古式のもの。外底部に墨書があるが判読不明。23・24の高台は外周よりやや内面に貼付する。24の外底部は回転ヘラ削りを施す。

椀（25）　復元口径20.4cm。内外面ともヨコナデ調整。底部とも体部の境は丸みを帯びる。

甕（27）　中型甕の口縁部。復元口径25.4cm。内外面ともヨコナデ調整。口端部外面の凸線は削り出し。

中層出土土器

須恵器

蓋（28・29）　復元口径13.6cmと19.5cm。ともに外天井部は回転ヘラ削り調整。29の口端部は下方へ突出する。28の内面はよく擦れ墨が全面に付着している。硯に転用された物か。

杯（30）　復元口径13.8cm、器高3.9cm、高台径10.1cm。高台は外縁より内側に貼付し、外底部はヘラ切り未調整。

甕（31・32）　ともに小型の甕で口縁端下方凸線をつくる。復元口径17.2～18.6cm。

上層出土土器・陶磁器

土師器

杯（34）　復元口径16.7cm、器高3.9cm、底径9.1cm。内外面とも摩滅が著しく調整不明。口縁部内面には油煙が付着している。灯火器として使用か。

須恵器

蓋（33）　扁平な撮を有するもので口端部はわずかに下方へ肥厚する。外天井部は回転ヘラ削り、内面はよこなでを施す。

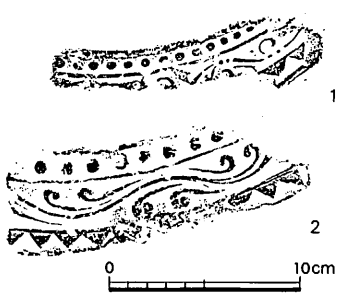
皿（35）　復元口径18.0cm、器高2.4cm、外底部は回転ヘラ削り調整を施す。

壷（36）　復元口径17.0cm。一見甕形に近く、口縁部がくの字をなす。内外面ともヨコナデを施す。

鉢（37）　底径13.2cm。深鉢の底部片で、体部外面と、外底部は回転ヘラ削りを施す。

白磁

皿（38）　刑州窯系のⅠ類。輪状高台の畳付部・外底部は露胎であり、他は白色の胎土に光沢のある乳白色釉。



第62図　出土軒瓦拓影

瓦類（第62図）

SD2340から軒平瓦4点の出土があった。うち3点は第62図2に示す老司Ⅱ式軒平瓦である。うち2点は、段顎で顎部まで縄目の叩打痕を残している。1は端正な大宰府系の軒平瓦である。両者ともこれまでの

SD2340から出土している。

木簡（図版56・57）

今次の調査では、SD2340の下層から２点、最下層から12点の合計14点の木簡を検出した。このほか、木簡の一部であったと推定できるような木片も多数見られたが、いずれも原形をとどめていないし、墨痕も認められなかったので、ここではすべてを割愛することにした。

はじめに、この14点について概括的に整理しておこう。

これらを形態的に分類すると、次のようになる。まず、長方形の材の上端近くの左右両辺に切り込みをいれたもの（032型式）が４点あるが、いずれも頭部に部分的な欠損が見られる。次に、長方形の材の一端の両辺に切り込みは認められるが、他端は折損あるいは腐蝕しているために原形を特定できないもの（039型式）が６点ある。そして残りの４点は、その原因はともかく、損傷などのために原形の判明しないもの（081型式）である。ただ、後述のような記載内容から推せば、このうちの１点は一端を方頭に作るが、他端の原形が失われている019型式に分類してもよいのではないかと思われる。

また墨書の状況からは、次のように分類される。その字数はともかく、少なくとも１字以上を判読できるものが７点あり、これには081型式の３点を含む。そのうちの１点には表裏に墨痕があり、一見したところ文字のようでもあるが、墨は薄く、不鮮明かつ断片的であるため判読できない。また同型式の１点には比較的に濃い墨痕が見られるが、その形状から見て単なる墨つきにすぎないと思われる。かすかな墨痕が見えるのみで、全く字形をなさないものが２点あるが、ともに039型式のものである。そして原因は明らかでないが、現状では墨痕を確認できないものが３点あり、039型式の形態をしているので、便宜的に木簡とみなした。

それでは、この７点について概要を報告し、あわせて若干の所見を述べることにする。

(1)・□□□（鳥鳥ヵ）□□□□（夫ヵ）□□」
　・□□□□□□□□」

081型式。柾目材。上半部を欠き、残存部はさらに半截されているが、それ以外は比較的丁寧に形成されている。現存法量は、長さ14.7cm、幅2.8cm、厚さ0.3cmである。表裏ともほぼ全面に墨書されているが、各文字は不鮮明であり、文字数はそれぞれの大きさなどから推定した。表面では、第２、３字が「鳥」ではないかと推定されるが、断定はできない。第４字は車部の文字と推定され、「轉」の可能性が考えられるが、旁の下半部に第５字の上端が重なっているので、確認できない。他の文字に比べて小さく、しかも左側に片寄っているが、その意味は明らかでない。第５字は「夫」と推定され、墨の状況から見て、その下の２文字とともに、追筆のようである。裏面の各文字はいずれも具体的な字形を想定できず、天地も分明ではないが、第３字の偏は「禾」と見られるので、図版にように判断した。このように、これの内容はほとん

ど明らかでないが、現状ではいわゆる習書の可能性が考えられる。とすれば、これの形態は一応081型式と分類したが、019型式としたほうがよいかもしれない。

(2) □□□

081型式。柾目材。上下両端を欠き、左右両辺も二次的に切断されていると判断される。現存法量は、長さ6.5cm、幅1.7cm、厚さ0.5cmである。3文字分の墨書が見え、かすかな墨痕にすぎない第2字はともかく、第1字は「月」あるいは「貝」、第3字は「毎」に近似するようでもあるが、切断されている可能性を考慮すれば、断定はできない。

(3) 「∨肥後國飽田(郡ヵ)□□□壹□□　□□□□

039型式。柾目材。下端部を欠いているが、記載内容からすれば、それはわずかであろう。また頭部などにも若干の損傷が見られるが、他はほぼ原形をとどめている。現存法量は、長さ23.7cm、幅3.4cm、厚さ0.7cmである。面がかなり腐蝕しているため、肉眼では「國」の一部が見えるだけであるが、赤外線写真では「肥後國」と「田」の輪郭をほぼたどることができ、「飽」は偏が判明し、その位置から肥後国の郡名を示すと考えられるので、飽田と判断した。第6字は赤外線写真でも不連続の墨痕が見える程度であるが、上位の文言から「郡」と推定され、残存字形もそれと矛盾しない。また第9字については士部の文字であることを確認でき、残存字形から「壹」と判断される。これらに対して、他の文字はいずれもきわめて断片的であるが、残存する墨痕を抽出してみると、字画的には第7、8字は、「調綿」、第10字は「佰」である可能性を想定できるようにも思われる。またこの直下では損傷のため墨痕を確認することはできないが、その下には小書きされた4字分程度の墨痕が見られる。このように、これについては検討すべき点がいくつか見られるので、後述することにしよう。

(4) 「∨□□□□五斤」

032型式。柾目材。頭部の左右両端を欠いているが、それ以外は原形をとどめている。その法量は、長さ13.1cm、幅2.9cm、厚さ0.4cmである。木肌が黒ずんでいるため、肉眼では第1字の偏がかすかに見える程度にすぎない。赤外線写真によれば、6文字からなり、第1字が人偏の文字であることなどは判明するが、それにしても旁部の字画は判別できないし、さらに全体的に不鮮明であるため、以下の文字を含めて判読できない。ただ第6字は「斤」とみなしうるし、とすれば、第5字は数字で、字形的には「五」が考えられるが、確認はできない。

(5) 乾(年ヵ)□魚七斤」

032型式。柾目材。上端部は右辺を欠損し、しかもその表面ははぎ取られたようになっているが、左辺上端には切り込みの痕跡が認められるので、032型式と判断した。また現状の頂部はささくれだっているが、先端は原形をとどめているとみなしてよいだろう。その法量は、長さ14.

2cm、幅2.3cm、厚さ0.3cmである。「乾」は上端部を欠くが、字形的に乙部の文字であることなどから判断した。第2字には消失した部分もあり、残存の墨も薄いので、断定を保留した。延喜主計式に中男作物として「火乾年魚」や「煮乾年魚」が見えることを考慮すれば、この木簡の場合は「乾」の上に「火」あるいは「煮」のいずれかの文字が存したのであろう。なお、同式では国ごとに輸すべき品目を列記しているが、西海道諸国島のそれにはこの両者とも見えない。品目と数量を記しただけであるので、これは荷札ではなく、何らかのかたちで大宰府に納められた年魚を保管するための付札であろう。

(6) ・「∨石□□□□」
・「∨一 □(籠ヵ) 」

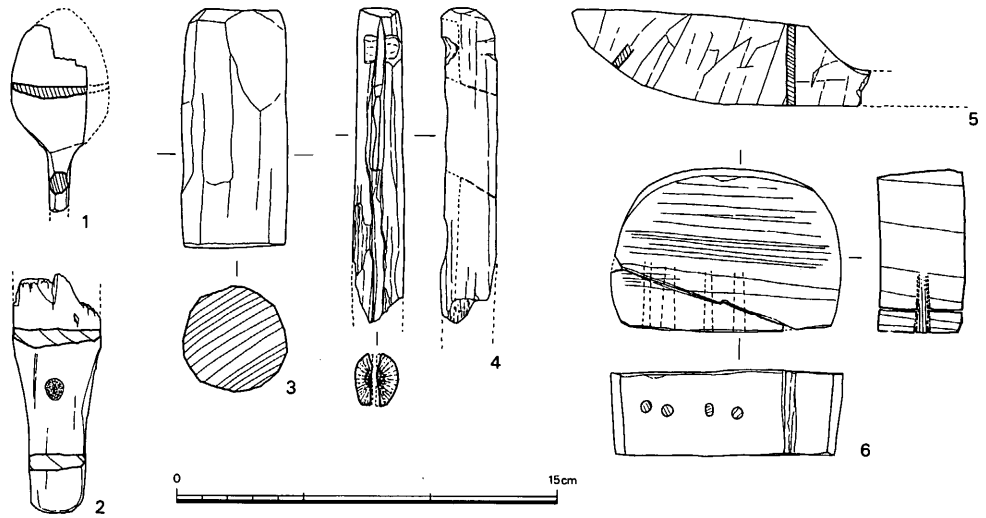
032型式。柾目材。頭部の右辺を欠いているが、それ以外に特記すべき損傷は見られず、全体的に原形を保っているとみなしてよいだろう。その法量は、長さ9.5cm、幅3.1cm、厚さ0.6cmである。木肌が黒ずんでいるので、判読は容易でなく、肉眼では表裏とも第1字は判別できるが、他は墨痕がみえる程度にすぎない。赤外線写真などを参照すれば、表面の第2字は旁が「頁」であり、字形的には「瀬」が想定されるが、偏部が不鮮明であるため断定はできない。かりに「石瀬」と判読できるとすれば、第3字の偏は「馬」のようにも見えるので、『延喜式』に見える石瀬駅との関連性も考えられるが、現在のところあくまでも仮定にすぎないので、この点は今後の検討課題である。ちなみに、石瀬駅は大宰府から鴻臚館に通じる官道上に位置する。裏面の第2字は赤外線写真でもかすかな墨痕が見える程度であるが、下半部の残存字形や「一」に続くことなどから「籠」の可能性を想定した。

(7) 「∨□□□七斤」

032型式。柾目材。頭部の左右両辺を欠き、下半部で2片に折れているが、ほぼ完全に接合するので、全体的には原形を保っているとみなしうる。その法量は、長さ22.2cm、幅2.8cm、厚さ0.5cmである。木肌が黒ずみ、肉眼では断片的な墨痕がかすかに見える程度にすぎない。赤外線写真によれば、「七斤」を確認できるほか、第2字が「木」偏または「手」偏、第3字が「魚」偏の文字と判断されるが、左半部では面の損傷が著しく、現状では墨痕を確認できないので、具体的な文字を想定することはできない。ただ第3字については、一般的な例や「七斤」に続くことなどから、「鮑」や「鰒」、あるいは「鮨」などの文字である可能性が考えられるが、上位の文字が明らかでないので、これ以上の特定はできない。

溝SD2340出土木製品（第63図・図版58）

匙形製品（1） 柾目板材を削って匙形としたもの。身と柄を共づくり。身は先端を欠損するが、長楕円形を呈し、一面を浅く弧状に削る。柄は水平に連続し、細長く削る。断面は多角形である。柄の調整は粗い。下層出土。尚SD2340からは同形態のものが87・90次調査で出土している。



第63図　SD2340出土木製品実測図

杓子状製品（2）　身部の大部分を欠損する。板目薄板材を削ったもの。柄は身にくらべて短かく、両者の境は不明瞭である。上面に火箸を押しつけたような焦げが認められる。スギかヒノキ。下層出土。

栓状製品（3）　板目材を削って円柱状になしたもの。一方の端をけずってやや細め、縁部を斜めに削る。下層出土。

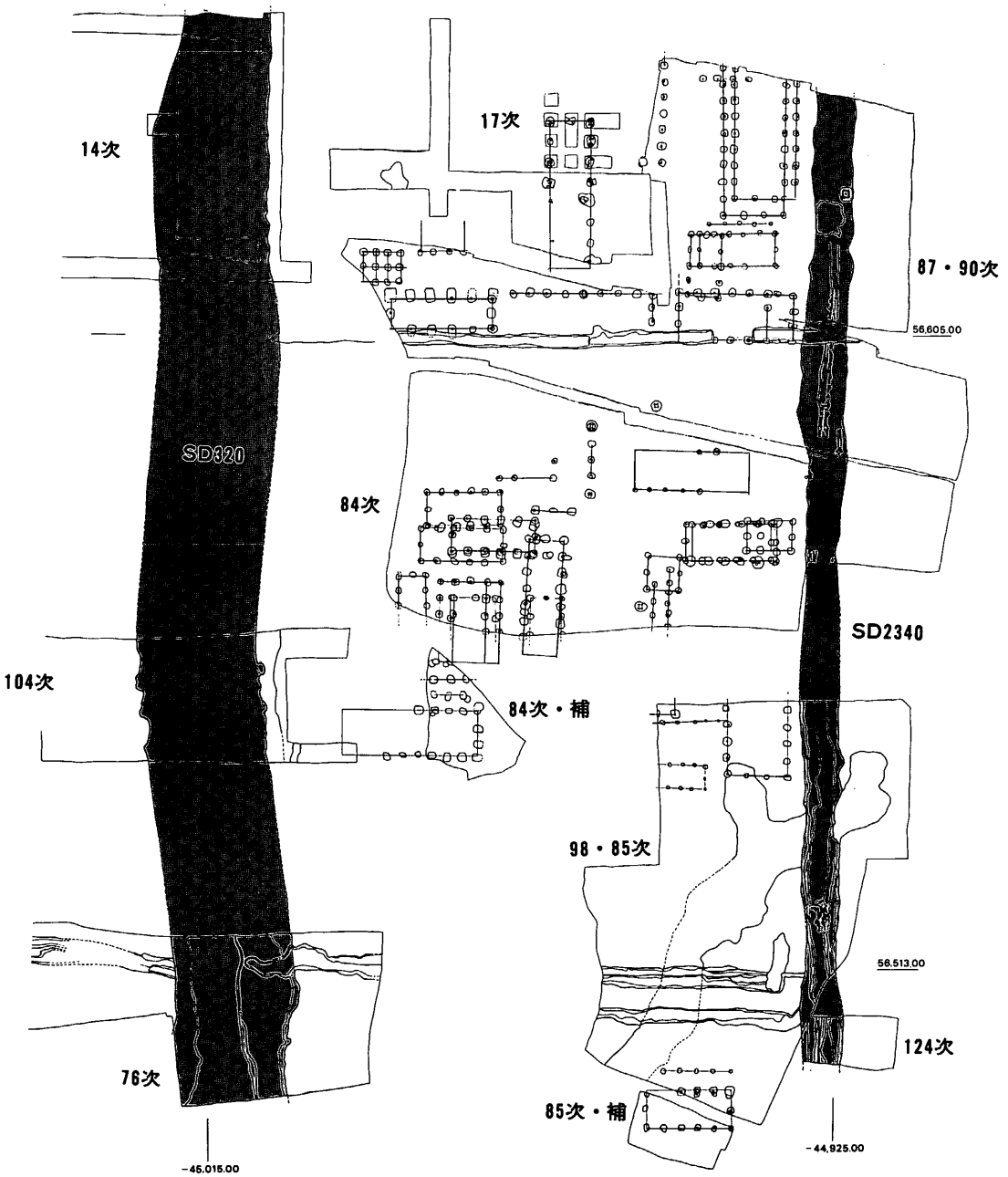
工具柄（4）　広葉樹心持材を利用した鎌の柄。柄尻にかけてを欠損する。柄元には刃の基部を着装するための長方形孔が、柄主軸に対して斜めにあけられる。着装孔より上部は締め具の当りと思われる凹みが認められる。遺存状態は悪く調整不明。下層出土。

部材（5）　スギかヒノキの柾目薄板材をていねいに削って整えたもの。一端（刀先）を孤状に削出して尖らせる。一方の側面に抉りを入れて削り込む。この箇所で切損する。

半月形製品（6）　柾目良材を半円状にかたどった完形品。周縁部はていねいに削って平滑に仕上げる。これに対し、両側面は裁断したのこぎりびきの痕跡をとどめている。なお、中途で破損しているが、そののち、木釘を打ち込んで修理している。木釘は底面から4本打ち込む。用途は不明。

小結

今回、南北溝SD2340の調査としては最も南にあたり総延長141mを確認したことになる。ここから10m近く南に下ると大宰府を東から西に貫流する御笠川へと至る。このSD2340の性格についてはこれまで幾度となく論じてきているのでここではくりかえさない。同時に溝の東側につ



第64図　不丁地区遺構配置図

いても、発掘区内では遺構は存在せず、包含層すら希薄であり、政庁前面に広場を想定したこれまでの見解を裏付けている。

出土遺物のうち木簡については後の項目でまとめ、ここでは出土土器について言及しておく。

これまでSD2340出土の土器は器種毎の数量を集計し、若干の検討を加えてきた。今回の出土土器は調査面積の制約上、これまでにくらべて少量であった。そこで明確な算出基準を設けずに細片を含め、全破片点数を集計してみた。この方法では接合資料も接合前の状態で数量化している為、大形の甕など、小形のものにくらべて有利に働いてしまった。その結果、異なる形態の構成比率を単純には比較できない。ただ、同一形態では層位毎の数量も同じ条件で算出しているから、その比較検討は可能である。ここでは特に供膳形態の同一層位中の須恵器と土師器の総量変化について注目し、他は参考程度に留めておく。尚、これまでの分層にしたがい、上層（上・中層）、中層（下層）、下層（最下層）におきかえて集計している。

供膳形態での須恵器の占める割合は下層74%、中層70%、上層62%と高い比重を占めるが、下層から徐々に減少している。この傾向は各層位の須恵器と土師器総量の比率がそれぞれ、72%、71%、63%と減少しているのに呼応している。このことは主要形態が供膳用で占められる官衙特有の背景があることを示している以上に、供膳用土師器の増加が、相対的に須恵器使用の割合を低下させたと換言できる。いずれにしても須恵器総量の平均が6割以上の高率を占める状況は、これまでの報告と同様である。この原因が時間的な構成比率を表わしているのか、あるいは大宰府内での地域差（占地状況）を反映しているのかさらに検討に値する問題である。

		須恵器			土師器		
		上層	中層	下層	上層	中層	下層
供膳形態	蓋	16		10	8		
	杯A	2	13	1	4	6	3
	杯B	14	1	6	4	2	2
	(あるいは皿)	7	5	2	4	1	1
	皿	1	2	1	3		
	高杯	1		3	2		
		41	21	23	25	9	8
貯蔵形態	壺	1	1	1			
	鉢	1	4	1			
	甕	29	11	11			
煮炊形態	甕				18	6	6
計		72	37	36	43	15	14
比率(%)		67			33		

出土土器　集計表

木簡　前述のように今次の調査ではSD2340から合計14点を検出した。そのうちの主要なもの7点については概要を報告し、あわせて若干の所見を述べたが、その際には触れていない点もあるので、ここであらためて簡単にまとめておこう。

ところで、このSD2340からは、昭和57年度の第83次調査において3点の木簡を検出して以来、昭和60年度の第98次調査までの6次にわたって合計172点の木簡を検出していた。そのなかには、染料である紫草に関するもの、あるいは西海道各地の国郡名を記したものなど、大宰府の機能を考える上で注目されるものが多く含まれていた。また天平年間前半代の年紀を記した

ものも見られ、時期的には730年代が想定された。それらの概要については、各当該年度の発掘調査概報『大宰府史跡』において報告したほか、第90次調査までに出土したものについては『大宰府史跡出土木簡概報（二）』にも再録しているが、大宰府木簡としては比較的にまとまった資料といえるだろう。

さて、今回の木簡に特徴的というわけではなく、SD2340出土木簡の全体に共通することでもあるが、いくつかの傾向を指摘できる。すなわち無傷のものは１点もなく、すべてに何らかの損傷が見られ、一部には人為的と判断されるものもあるが、多くは自然に受けたもののようである。すでに指摘したことでもあるが、これは出土遺構が溝であることと無関係ではなく、溝中を流されることによって損傷を受ける機会が多かったのであろう。また既出分ではいわゆる付札類が約３分の１を占めていたが、今回も14点のうちの10点がそれであった。また内容についてみれば、既出分で目立った紫草関係のものは１点もなかったが、特徴の一つとしてあげていた地名関係のものでは、結論を保留せざるをえない「石瀬」はともかく、新たに肥後国飽田郡を追加することができた。

ところで、今回の木簡の中でとくに注目されるのが(3)に掲げたものである。遺存状態がよくないので、現在のところ前掲のような釈文しか提示できないが、前述のように、調綿に関する木簡である可能性が想定される。その場合、あくまでも一つの試案にすぎないが、「肥後國飽田郡調綿壹佰屯　□□□□」という釈文が考えられるだろう。周知のように、平城宮跡では西海道諸国から納められた調綿に付けられていた荷札が多数出土し、これらには書式、材質、形態、書蹟などの点で国と年次をこえた共通性が見られるので、大宰府で一括して作成され、京進に際して使用されたものであると考えられている。[註1]

したがって、かかる木簡の出土そのものは必ずしも珍しいことではないが、これが認められるとすれば、大宰府史跡においては初見資料ということになる。しかし、問題がないわけではない。たとえば、その共通する書式として「某国某郡調綿壹佰屯」の下に「四両」と年紀を双行に記す点が指摘されているが、(3)には最下段の右側に小書きされた４文字程度の墨痕は見られるものの、その左側に墨痕を認めることはできないので、その書式を異にしていることになる。もちろん４文字についてはいまだ判読しえていないし、平城宮跡出土のものにも書式を異にするものが見られるので、一概にはいえないが、これは問題になる点であろう。また、SD2340出土の木簡はいずれも大宰府で作成されたものと推定されるが、この(3)が調綿に関するものであるとすれば、それが大宰府で廃棄された意味についても考えなければならない。

ともあれ、釈文そのものを確定しえているわけではないので、ここではこれ以上の言及を控えるが、いずれにしてもこの木簡は検討に値する内容を有していると考えられるので、今後の研究の進展に期待することにしたい。

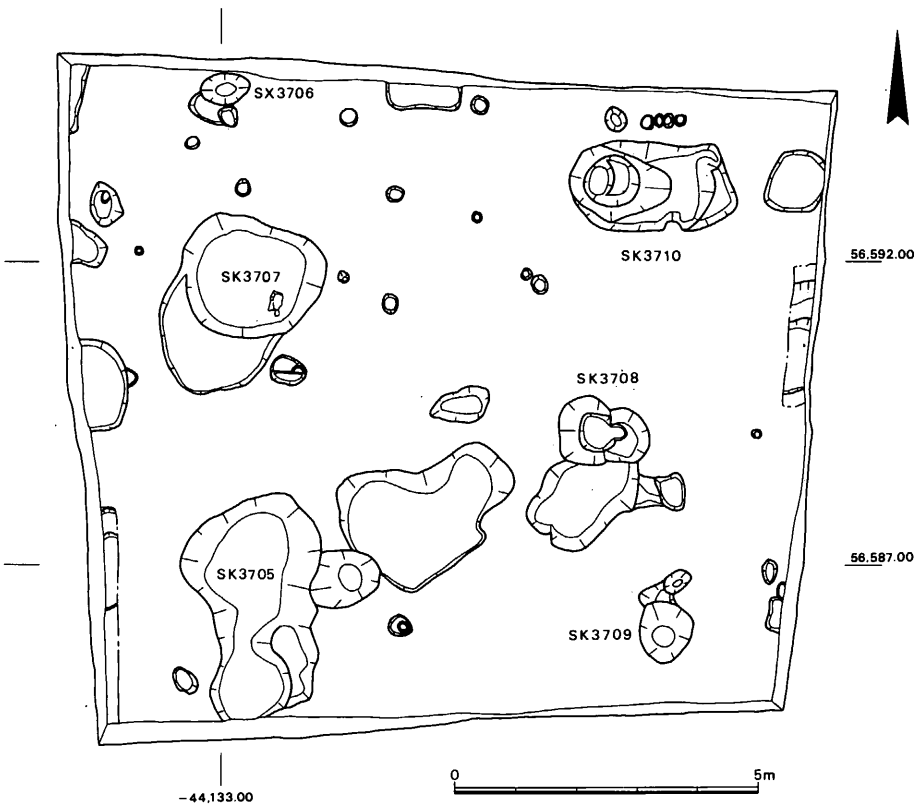
註１　今泉隆雄「貢進物付札の諸問題」奈良国立文化財研究所『研究論集』Ⅳ。

第125次調査

本調査は宅地建設に伴う事前の発掘調査である。地番は太宰府市観世音寺字大楠329－6番地である。調査対象面積は130㎡である。

本調査地は、昭和59年度に実施した第94次調査地の西に接する地域である。第94次調査では大楠地区建物群（官人居住域）の西を区画する南北溝が検出されており、第125次調査地はさらにその西側にあたる。大楠地区官人居住域とさらに西方に位置する広丸地区官人居住域に挟まれた地域については、昭和48年度に狭い面積の調査をおこなっているが、性格づけがなされるほど遺構は検出されていない。このようなことから、大楠地区官人居住域の西側の状況を知ることを調査の目的とした。

10月25日に国分寺の発掘調査現場より機材を搬入し、29日より調査に入った。遺構面を覆う遺物包含層が薄かったこと、遺構の密度が疎であったことから30日には遺構検出を終えた。翌



第65図　第125次調査遺構配置図

31日には写真撮影・実測をおこない調査を終了した。なお、表土除去および埋め戻し作業は重機を投入しておこなった。

検出遺構

土壙6基・ピット等を確認したが、遺構の密度は疎である。調査区の基本層序は盛土→耕作土→床土→灰褐色砂質土→茶褐色粘質土→茶灰色粘質土で、その下部が遺構面となる。表土からの深さは調査区北壁際で1.1mほどである。

土壙

SK3705　発掘区の西南隅部で検出した双円形の土壙。南北長4.65m、東西長は最大で2.6m、深さ0.3mをはかる。

SK3707　発掘区の西北部で検出した。南北長3.0m、東西長1.1m、深さ0.25mをはかる。南側にはテラスをもつ。底面はほぼフラットである。埋土は茶灰色の粘質土。

SK3708　発掘区の中央部東寄りで検出した径0.9m、深さ0.2mの円形土壙である。西・南側の土壙を切っている。

SK3709　発掘区の東南隅部で検出した径0.1m、深さ0.4mの円形土壙である。

SK3710　発掘区の東北部で検出した長円形の土壙である。南北長1.5m、東西長2.7m、深さ0.9mをはかる。東側にテラスがあり、西に寄って径0.9mの円形の壙が掘られる。形状から考えると井戸の可能性もある。

出土遺物

SK3705出土土器（第66図　別表）

須恵器

蓋（1～4）　1は口径15.1cm。天井部と体部の境は不明瞭である。口縁部は外反する。2は口径15.4cm、器高2.2cm、つまみ部の径は1.2cmをはかる。天井部と体部の境は不明瞭である。1・2とも明青灰色を呈する。3は口径18.0cm。口縁は外反する。色調は黄褐色を呈する。4は口径19.8cm。器高は低い。口縁部の屈曲は弱い。口縁端部はやや丸味をおびる。青灰色を呈する。すべて天井部に回転ヘラ削り調整をしている。

杯（5）　口径11.8cm、高台径7.3cm、器高3.5cm。口縁はやや外反気味に立ち上がる。体部と底部との境は明瞭である。高台は内寄りに貼付され、断面は四角形を呈する。内面に墨痕が付着する。

皿（6・7）　6は口径15.0cm、器高2.4cm。底部はヘラ切りのちナデ。内底部には墨痕が認められまた、摩滅している。転用硯。外面が灰色、内面は黄褐色を呈し、焼成は軟質である。7は口径18.3cm。口縁部は外反する。青灰色を呈する。

SK3707出土土器（第66図　別表）

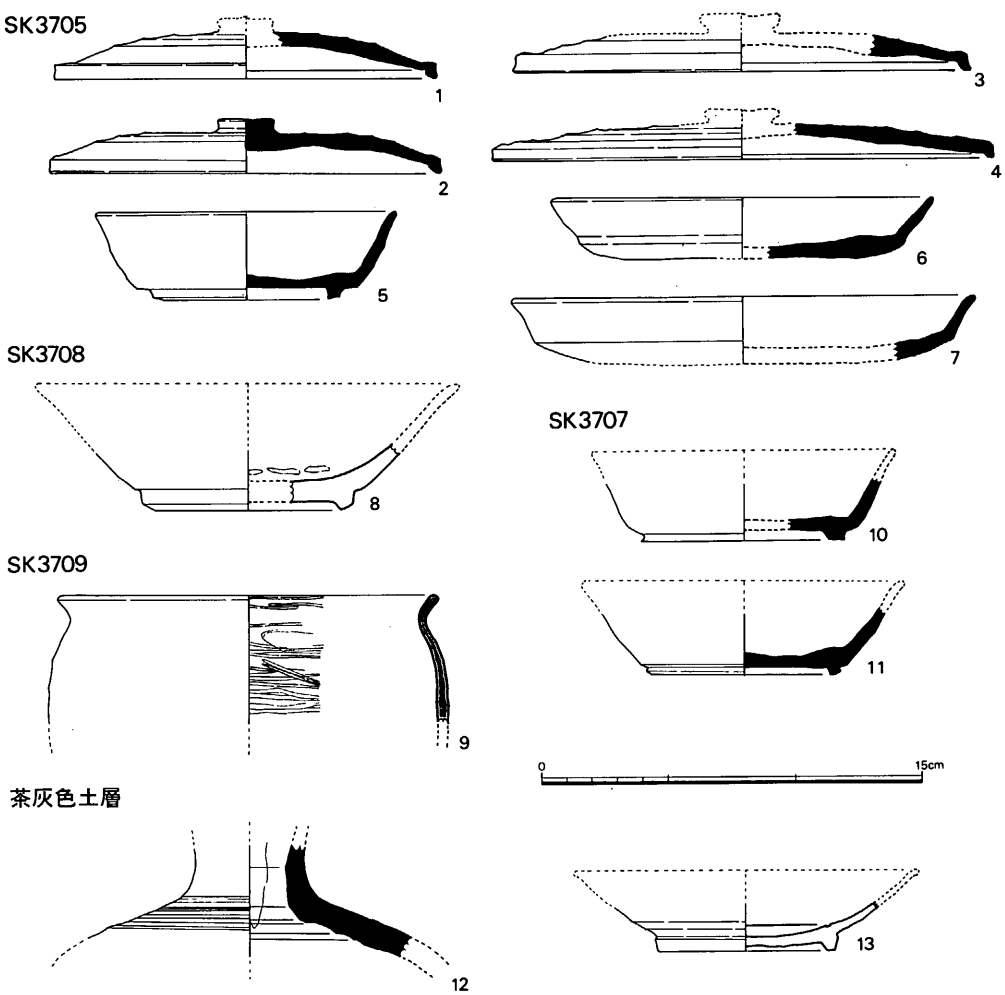
須恵器

杯（10・11）　ともに体部と底部の境は明瞭である。9の底部はヘラ切り未調整で、ヘラ状工具の先端による刺突痕がある。内底部はナデる。色調は8・9とも青灰色を呈する。

SK3708出土陶磁器（第66図）

青磁

椀（8）　越州窯系青磁。灰白色の胎土にやや茶色味をおびた緑釉をかける。釉の発色は悪い。見込みには重ね焼きによる目跡がのこる。高台部径7.3cm。



第66図　SK3705・3707・3708・3709・茶灰色土層出土土器・陶磁器実測図

SK3709出土土器（第66図　別表）

黒色土器A

甕（9）　口径15.0cm、外面には煤が付着する。内面には横方向の細かなミガキが施される。胎土は精良である。

茶灰色土層出土土器（第66図　別表）

須恵器

壷（12）　頸部から肩部にかけてカキ目を施す。外面には自然釉がかかる。

緑釉陶器

皿（13）　灰色の緻密な胎土にやや黄味がかった淡緑色の薄い釉をかける。内面の体部と底部との境には浅い沈線がまわる。内面には施釉前にミガキを施す。高台畳付から底部にかけて露台となる。須恵質。

小結

第94次調査の結果と照らし合わせて第125次調査のまとめとしたい。

今回の調査で検出した土壙は8世紀後半代～10世紀前半代に位置づけられる。これらの土壙と少数のピットの他に顕著な遺構はなかった。第94次調査では大楠地区官人居住域の西を区画する溝SD2680を検出している。ここでは溝の東側にくらべ、西側では建物の存在を示すピット数がきわめて少なかった。今回おこなった第125次調査でも遺構の密度はきわめて疎であり、同じような状況であることが確認できた。また、第94次調査の発掘区南半部では9世紀後半～10世紀初頭の井戸が密集する部分があり、今回はその近接地であったため当該期の井戸、あるいは井戸に伴う施設の検出が予想されたが、確認することはできなかった。大楠地区官人居住域と広丸地区官人居住域に挟まれる部分についての性格づけは今後の調査の進展を俟ちたい。

別　表

器種	挿図番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
						ヘラ	糸		
SD3630（第121次）									
須恵器　蓋	7	1	(12.6)						
	〃	2	(16.2)						
	〃	3	(20.0)						
杯	〃	4	(12.8)	(7.7)	3.1				
鉢	〃	5	(21.6)						
壺	〃	6		(10.0)					
土師器　皿a	〃	7	7.6	5.9	0.9		○		○
	〃	8	8.6	6.0	1.0		○		○
	〃	9	(9.3)	(7.0)	1.2		○	○	○
脚付皿	〃	10	(13.2)		2.7		○		
杯a	〃	11	(13.4)	(8.1)	3.0		○	○	○
	〃	12	(14.6)	10.0	2.5		○	○	○
	〃	13	15.6	11.2	2.6		○	○	○
瓦器　小椀	〃	14		4.0					
SD3619									
土師器　鉢	9	1	(9.2)		3.7				
甕	〃	2	13.9						
須恵器　杯	〃	3	(17.4)	(9.8)	(6.2)				
短頸壺	〃	6	(15.5)						
SD3629									
須恵器　杯	9	7	(12.8)	(9.6)	4.0				
SD3649									
土師器　杯a	9	10	12.0	8.0	3.0		○	○	○
	〃	11	(12.1)	(8.2)	2.5		○	○	○
	〃	12	12.2	8.5	2.6		○	○	○
	〃	13	12.2	7.3	3.0		○	○	○
	〃	14	12.5	7.9	3.0		○	—	○
	〃	15	12.6	8.7	2.5		○	○	○
	〃	16	12.6	7.6	2.6		○	○	○
	〃	17	(12.7)	(9.0)	2.8		○	○	○
	〃	18	(12.9)	(8.8)	3.1		○	○	○
SD3644									
土師器　皿b	10	1	(6.1)	4.9	1.7		○	○	○
	〃	2	(6.6)	4.6	1.6		○	○	○
	〃	3	6.9	4.6	1.5		○	○	○
	〃	4	7.1	4.7	1.8		○	○	○
	〃	5	(7.4)	(5.2)	1.8		○		
	〃	6	7.7	5.5	1.2		○	○	○
	〃	7	7.9	5.4	1.2		○	○	○
	〃	8	8.0	6.0	1.4		○	○	○
	〃	9	8.2	5.5	1.3		○	○	○

器種	挿図番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
						ヘラ	糸		
土師器　杯a	10	10	11.8	8.0	3.2		○	○	○
	〃	11	12.0	8.3	2.7		○		○
	〃	12	12.0	7.4	2.5		○	○	
	〃	13	12.0	7.0	3.0		○	○	○
	〃	14	12.1	8.2	2.5		○	○	○
	〃	15	12.1	7.6	2.9		○	○	○
	〃	16	12.1	7.0	3.1		○	○	○
	〃	17	12.2	8.0	3.0		○	○	○
	〃	18	12.2	7.4	3.1		○	○	○
	〃	19	12.2	8.1	3.1		○	○	○
	〃	20	(12.4)	8.2	3.1		○	○	○
	〃	21	12.5	7.2	2.8		○	○	○
	〃	22	12.6	8.0	2.6		○	○	○
	〃	23	(12.6)	(7.8)	(2.7)		○	○	○
	〃	24	12.6	8.3	2.9		○	○	○
	〃	25	12.6	7.4	3.1		○	○	○
	〃	26	12.6	8.4	3.1		○	○	○
	〃	27	12.7	8.4	2.8		○	○	○
	〃	28	12.7	8.0	2.9		○	○	○
	〃	29	12.8	8.0	2.6		○	○	○
	〃	30	12.8	8.0	2.8		○	○	○
	〃	31	12.8	7.8	2.8		○	○	○
	〃	32	12.8	8.4	2.9		○	○	○
	〃	33	(12.8)	(8.0)	3.0		○	○	○
	〃	34	12.8	7.8	3.1		○	○	○
	〃	35	12.8	8.2	3.3		○	○	○
	〃	36	12.9	7.2	3.1		○	○	○
	〃	37	(12.9)	8.0	3.2		○	○	○
	〃	38	(12.9)	8.4	3.3		○	○	○
	〃	39	13.0	9.0	2.8		○	○	○
	〃	40	(13.1)	8.0	(2.9)		○	○	○
	〃	41	14.8	10.3	2.9		○	○	
SK3614									
須恵器　蓋	11	1	(20.4)						
杯	〃	2	10.6		3.5				
SK3634									
土師器　杯	〃	3	(11.8)	11.6	5.8				
須恵器　蓋	〃	4	(19.1)						
	〃	5	(15.4)						
皿	〃	6	(10.0)	6.6	2.1				
杯	〃	7	(13.2)	(10.5)	4.1				
	〃	8	(16.0)	(10.2)	5.5				
甕	〃	9	18.0						

器種	挿図番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し ヘラ	切り離し 糸	内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
SK3643									
土師器 杯a	11	15	12.1	7.7	3.0		○		○
	〃	16	12.2	7.5	2.8		○	○	○
	〃	17	12.4	8.4	2.8		○	○	○
	〃	18	12.4	7.5	2.9		○	—	
	〃	19	(12.5)	8.0	2.6			—	○
	〃	20	12.6	8.3	2.9		○	○	○
	〃	21	(12.7)	7.5	3.3		○	—	○
SK3646									
土師器 皿b	〃	10	6.8	4.8	1.6		○	○	○
	〃	11	6.8	4.4	1.8		○		○
	〃	12	6.8	4.3	1.7		○		○
SK3657									
須恵器 蓋	〃	13	14.6		3.8				
杯	〃	14	(14.0)	9.6	4.3				
SX3618									
土師器 杯	12	1	(10.1)	6.6	3.2	○			
	〃	2	(11.0)	6.8	2.8	○			
	〃	3	(11.1)	6.0	3.4	○			
	〃	4	11.8	(6.0)	3.6	○			
	〃	5	(12.6)	7.8	3.4	○			
	〃	6	12.9	6.9	3.8	○			
皿	〃	7	13.3	8.8	1.9	○		○	○
須恵器 蓋	〃	8		11.0					
SX3632									
土師器 皿	〃	11	14.4	10.6	2.3				
須恵器 蓋	〃	12	(12.8)						
	〃	13	(16.2)						
SX3635									
土師器 杯	〃	20	12.5	8.3	3.9	○			
	〃	21	13.4	7.4	3.4	○			
	〃	22	13.5	6.6	3.6	○			
皿	〃	23	23.6	20.0	2.7	○			
須恵器 蓋	〃	24	(16.2)						
	〃	25	(16.7)						
杯	〃	26	(13.2)	7.2	3.4				
	〃	27	(12.8)	8.4	4.5				
	〃	28	12.5	8.2	3.5				
	〃	29	(12.6)	(7.2)	4.2				
	〃	30	(14.3)	(7.9)	5.0				
皿	〃	31	15.2	11.2	2.0				

器種	挿図番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し ヘラ	切り離し 糸	内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
SX3639									
土師器 皿a	12	14	7.6	5.2	1.3				
	〃	15	7.7	5.3	1.3			○	
	〃	16	(7.8)	(5.7)	1.5			○	
杯a	〃	17	(11.8)	8.0	2.7		—	○	
	〃	18	12.0	7.4	2.6		—	○	
	〃	19	12.1	7.1	2.7		○	○	
SX3638									
土師器 椀	13	1	7.8		3.0				
SX3652									
須恵器 甕	〃	3	22.8						
SX3650									
土師器 皿a	14	2	7.6	5.8	0.9		○	○	○
	〃	3	8.4	7.0	1.1		○	○	○
	〃	4	8.4	6.4	0.9		○		
	〃	5	8.7	6.6	1.2		○	○	○
	〃	6	8.9	6.6	1.0		○	○	○
	〃	7	9.0	7.5	1.0		○	○	○
	〃	8	9.2	7.0	1.3		○	○	○
皿b	〃	1	7.0	4.3	2.0		○	—	○
杯a	〃	9	13.6	9.3	2.3		○	○	○
	〃	10	(13.4)	(9.0)	2.3		○	—	○
	〃	11	14.2	9.8	2.6		○	○	○
	〃	12	14.6	9.0	3.0		○	○	○
	〃	13	15.4	10.6	2.7		○	○	○
	〃	14	16.5	12.0	3.1		○	○	○
須恵器 甕	〃	15	(18.0)						
SX3655									
土師器 皿	15	1	(11.5)	(7.6)	(1.6)	○			
杯	〃	2	(10.2)	6.9	3.3	○		○	
	〃	3	10.3	6.6	3.3	○			
	〃	4	10.4	6.5	3.3	○		○	
	〃	5	10.4	7.4	2.8	○		○	
	〃	6	10.4	6.0	3.5	○			
	〃	7	10.4	6.7	3.5	○			
	〃	8	10.5	7.6	3.1	○		○	
	〃	9	10.5	5.0	3.4	○			
	〃	10	10.5	6.5	3.4	○			
	〃	11	10.5	7.0	3.2	○			
	〃	12	(10.6)	7.4	3.2	○			
	〃	13	10.6	5.7	3.4	○			
	〃	14	10.6	5.5	3.4	○			

器種	挿図番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
						ヘラ	糸		
杯	15	15	10.7	7.6	2.8	○			
	〃	16	10.8	6.9	2.9	○			
	〃	17	10.8	7.7	3.1	○			
	〃	18	11.0	7.5	3.3	○		○	
	〃	19	11.0	7.0	2.9	○			
	〃	20	11.0	5.5	3.7	○		○	
	〃	21	11.0	7.6	3.3	○		○	
	〃	22	11.0	7.2	3.2	○		—	
	〃	23	11.2	7.0	3.0	○			
	〃	24	11.4	6.3	3.5	○			
	〃	25	11.4	7.0	2.8	○			
	〃	26	11.9	7.4	3.6	○		○	
	〃	27	12.0	7.1	3.6	○		○	○
	〃	28	12.0	7.0	3.8	○			
	〃	29	12.0	7.6	3.6	○			
	〃	30	12.0	7.8	4.0	○			○
	〃	31	12.0	8.0	3.9	○			
	〃	32	(12.0)	(6.8)	(3.8)	○			
	〃	33	12.0	7.5	3.8	○			
	〃	34	12.1	6.9	3.9	○			○
	〃	35	12.2	6.0	3.7	○			
	16	36	12.2	7.5	3.6	○			
	〃	37	12.2	8.3	3.3	○			○
	〃	38	12.3	7.4	3.4	○			
	〃	39	12.3	8.0	3.5	○			○
	〃	40	12.3	7.3	3.6	○		○	○
	〃	41	12.3	7.4	3.7	○		○	○
	〃	42	12.3	6.5	3.8	○			
	〃	43	12.4	7.6	3.5	○			○
	〃	44	12.4	7.8	3.6	○			○
	〃	45	12.4	7.0	3.6	○			
	〃	46	12.4	8.0	3.7	○		—	
	〃	47	12.4	7.5	3.7	○			
	〃	48	12.4	7.0	3.9	○			
	〃	49	12.4	7.4	3.9	○			
	〃	50	12.4	7.5	4.3	○			
	〃	51	(12.5)	6.8	3.7	○			○
	〃	52	(12.5)	(7.2)	3.8	○			
	〃	53	12.5	7.0	3.9	○			
	〃	54	12.6	8.2	3.6	○			○
	〃	55	(12.6)	8.8	3.9	○			
	〃	56	12.6	7.2	3.7	○		—	○
	〃	57	(12.6)	7.2	4.0	○			
	〃	58	12.6	7.3	4.0	○			
	〃	59	12.6	7.3	4.1	○			
	〃	60	12.6	7.0	4.2	○			
	〃	61	12.0	7.0	4.2	○			

器種	挿図番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
						ヘラ	糸		
杯	16	62	(12.7)	7.1	3.7	○			
	〃	63	(12.7)	7.8	3.8	○		○	
	〃	64	(12.7)	8.8	3.9	○			
	〃	65	12.7	7.9	4.0	○			
	〃	66	12.7	7.4	4.1	○			
	17	67	12.7	7.9	3.8	○		○	○
	〃	68	12.7	7.0	4.0	○			○
	〃	69	12.8	8.5	3.3	○			
	〃	70	12.8	7.5	3.8	○		○	
	〃	71	12.8	6.9	3.8	○			
	〃	72	12.8	7.5	4.0	○			
	〃	73	12.8	7.2	4.3	○		○	○
	〃	74	12.9	7.8	3.7	○		○	○
	〃	75	12.9	7.2	3.6	○			○
	〃	76	12.9	8.4	3.7	○			
	〃	77	13.0	8.3	4.1	○		○	○
	〃	78	12.9	7.3	4.3	○			
	〃	79	13.0	7.8	3.8	○			
	〃	80	13.0	7.7	3.9	○			○
	〃	81	13.0	7.7	3.9	○			
	〃	82	13.1	7.7	3.7	○		○	
	〃	83	(13.1)	6.6	3.7	○			
	〃	84	(13.2)	(8.7)	3.7	○		○	○
	〃	85	13.2	7.0	3.8	○			
	〃	86	13.2	7.8	3.9	○			
	〃	87	13.2	7.0	4.5	○		○	○
	〃	88	13.2	7.4	4.2	○			
	〃	89	13.3	7.3	3.5	○		○	○
	〃	90	13.3	8.6	3.5	○		○	○
	〃	91	13.4	7.2	3.5	○			
	〃	92	13.4	7.8	3.9	○			○
	〃	93	13.5	8.4	4.1	○		○	○
	〃	94	13.6	8.3	4.2	○			
	〃	95	14.0	8.0	4.9	○			
椀	〃	96	(14.8)	8.1	5.8			○	○
茶褐色土層									
土師器　杯	18	1	(15.6)	8.4	3.8				
須恵器　杯	〃	2	(10.4)	4.1	6.4				
皿	〃	3	(17.9)		2.7				
濁茶色土層									
土師器　皿	19	1	(10.9)	7.0	1.0	○			
杯	〃	2		6.8				−	
	〃	3	9.8	7.1	3.1	○			
	〃	4	12.5	7.4	4.0	○			
	〃	5	12.6	7.2	3.9	○			

器種	挿図番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
						ヘラ	糸		
杯	19	6	(12.6)	7.6	4.0	○			
	〃	7	12.5	7.5	3.7	○			
椀	〃	8	(14.3)	8.0	6.5	○		○	
須恵器 杯	〃	9	(11.6)	(6.8)	3.6				
	〃	10	(17.2)	(11.0)	(6.1)				
黄灰色土層									
須恵器 杯	〃	12	(11.5)	(6.2)	3.9				
SB3675（第122次）									
土師器 皿a	32	1	(12.2)	8.0	2.8		○	○	○
	〃	2	15.6	8.8	3.8		○	○	○
SD3663									
土師器 杯	33	3	6.9	4.8	1.1		○		
SD3664									
土師器 皿	〃	1	10.2	6.8	1.5	○		○	○
須恵器 蓋	〃	2	6.9		2.7				
SD3666									
土師器 皿a	〃	4	7.0	4.6	1.5		○		
	〃	5	6.1	3.7	1.1		○		
土師器 杯a	〃	6	13.2	7.7	3.2		○		
SD3668									
土師器 皿a	〃	9	7.4	5.2	1.6		○	○	
	〃	10	8.2	5.4	2.4		○		
皿b	〃	8	6.6	4.8	1.7		○	○	
杯a	〃	11	13.0	9.0	3.2		○	○	○
SE3685									
土師器 皿a	〃	12	8.7	6.9	0.8		○	○	○
SE3680									
土師器 皿	34	1	16.0		4.0				
甕	〃	2	(12.7)	6.3	14.0				
	35	12	27.4		29.1				
須恵器 蓋	34	3	15.1		2.4				
杯	〃	4	(15.4)	(11.2)	5.5				
	〃	5	(17.0)	(12.6)	4.5				
甕	35	11	28.4						
	〃	13	33.5						
SK3672									
土師器 皿a	36	4	8.0	5.9	1.2		○	○	○
	〃	5	8.0	6.3	1.3		○	○	○

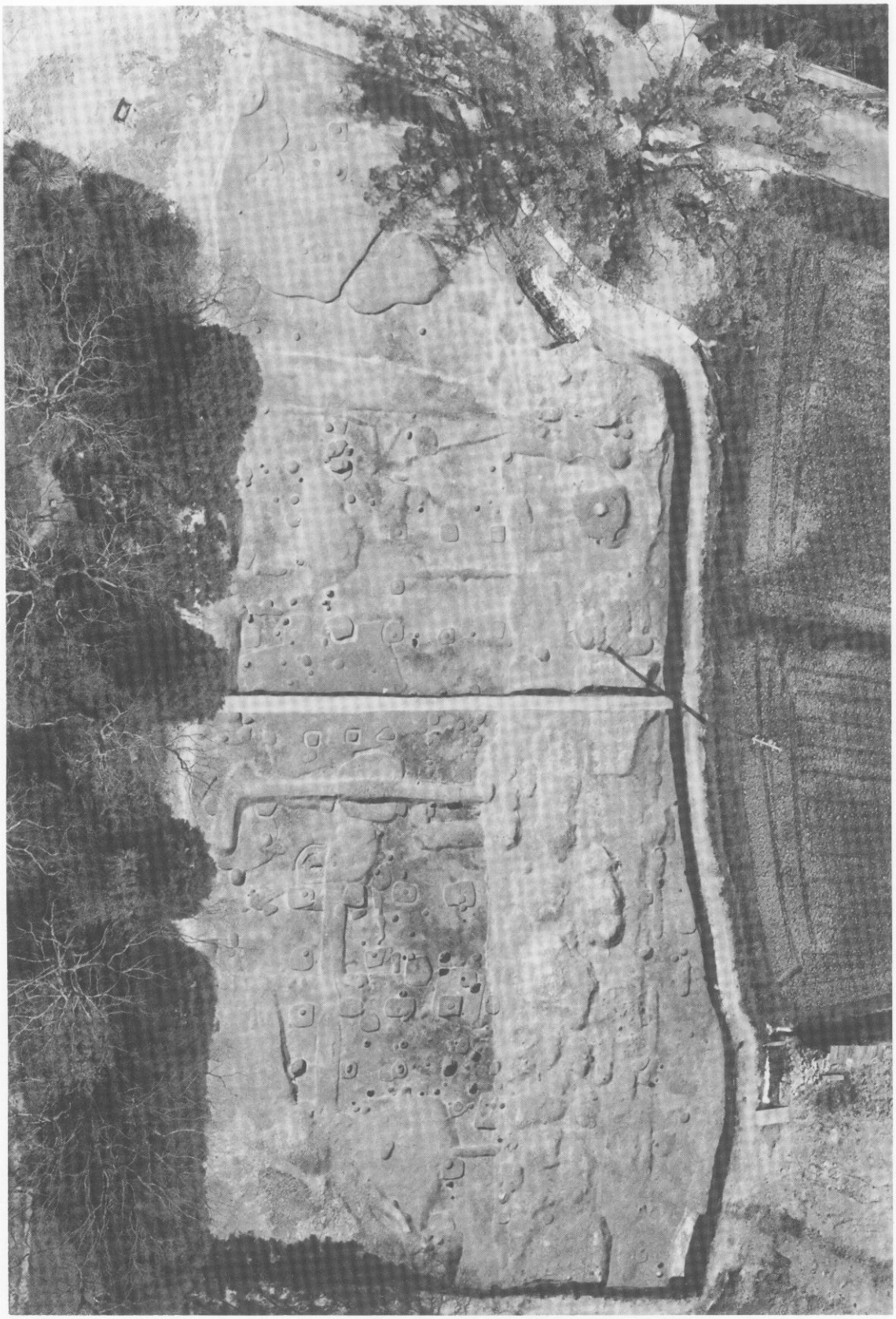
器種	挿図番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し ヘラ	切り離し 糸	内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
皿a	36	6	8.0	5.8	1.3		○	○	○
	〃	7	8.0	5.7	1.4		○		
	〃	8	8.0	5.7	1.5		○	○	○
	〃	9	8.1	5.5	1.3		○	○	○
	〃	10	8.1	5.8	1.5		○	○	○
	〃	11	8.2	6.0	1.2		○	○	○
	〃	12	8.2	6.0	1.2		○	○	○
	〃	13	8.2	6.3	1.3		○	○	○
	〃	14	8.2	6.3	1.5		○	○	○
	〃	15	8.3	6.2	1.3		○	○	○
	〃	16	8.4	6.3	1.4		○	○	○
	〃	17	8.4	6.0	1.3		○	○	○
	〃	18	8.4	6.4	1.2		○	○	○
	〃	19	8.4	6.3	1.3		○	○	○
	〃	20	8.6	6.2	1.0		○	○	○
皿b	〃	1	6.6	4.5	1.6		○	○	○
	〃	2	7.0	4.6	1.7		○	○	○
	〃	3	8.0	4.9	2.0		○	○	
杯a	〃	21	11.3	7.0	2.6		○	○	○
	〃	22	12.0	7.3	2.8		○	○	○
	〃	23	12.2	8.7	2.7		○	○	○
	〃	24	12.2	8.0	3.0		○	○	○
	〃	25	12.4	8.8	2.6		○	○	○
	〃	26	12.4	9,0	2,9		○	○	○
	〃	27	12.5	7.5	3.1		○	○	○
	〃	28	12.5	8.6	2.4		○	○	—
	〃	29	12.6	8.1	2.8		○	○	—
	〃	30	12.5	8.3	2.9		○	○	○
	〃	31	12.6	8.9	2.8		○	—	—
	〃	32	12.6	8.3	2.9		○	○	○
	〃	33	12.6	8.9	2.8		○	○	○
	〃	34	12.8	8.9	2.7		○	○	○
	〃	35	13.3	9.2	2.8		○		○
	〃	36	12.8	9.0	2.9		○	○	○
	〃	37	12.8	8.5	3.1		○	○	○
	〃	38	13.0	8.0	2.7		○	○	○
	〃	39	13.0	8.7	2.9		○	○	○
	〃	40	13.0	8.4	2.7		○	○	○
	〃	41	13.2	9.5	3.0		○	○	○
	〃	42	13.2	9.1	3.1		○	○	○
	〃	43	13.2	9.5	2.8		○	○	—
	〃	44	13.2	8.9	3.0		○	—	○
	〃	45	13.4	8.3	3.0		○	○	○
	37	46	13.4	8.4	2.8		○	○	○
	〃	47	13.6	10.0	2.9		○	○	○
	〃	48	17.3	12.0	3.7		○	○	○
	〃	49	(17.8)	12.7	4.1		○	—	○

器種	挿図番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し ヘラ	切り離し 糸	内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
SK3678									
土師器 丸底の皿	38	1	8.9		1.2	○			○
	〃	2	8.9		1.4	○			○
杯a	〃	3	13.6	9.5	3.0	○		○	○
丸底の杯	〃	4	13.8		2.9	○			○
	〃	5	14.1		3.0	○			○
	〃	6	14.8		3.5	○			○
	〃	7	14.8		3.6	○			○
	〃	8	15.2		3.0	○			
	〃	9	15.6		3.7	○			○
	〃	10	15.6		3.8	○			
	〃	11	15.6		4.0	○			○
	〃	12	15.7		3.3	○			○
	〃	13	15.8		3.6	○			
	〃	14	15.8		3.7	○			
	〃	15	16.5		3.4	○			
	〃	16	17.4		3.3	○			○
杯c	〃	17	12.6	5.0	3.9				
SK3697									
土師器 皿	〃	18	8.8	6.8	1.0		○	○	○
杯a	〃	19	14.1	9.6	2.7		○		
SX3682									
須恵器 蓋	39	1	(14.0)						
	〃	2	(14.2)						
	〃	3	(15.6)		2.8				
	〃	4	(14.8)		2.0				
杯	〃	5	13.2	10.2	3.0				
	〃	6	8.7	7.0	5.0				
	〃	7	12.0	9.0	3.7				
	〃	8	(13.0)	(9.8)	4.3				
	〃	9	(13.1)	(8.6)	5.2				
	〃	11	(15.6)	(8.3)	4.7				
椀	〃	10	(14.1)	(7.4)	10.8				
暗褐色土下層									
土師器 杯	40	2	14.3		3.4	○			
茶褐色土層									
土師器 皿a	〃	6	9.7	8.0	1.0		○	○	○
	〃	7	9.7	7.8	1.0		○	○	○
杯a	〃	8	14.2	10.3	3.0		○	○	○
	〃	9	15.4	10.4	2.9		○	○	○
	〃	10	15.5	10.5	2.9		○	○	○

器種	挿図番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
						ヘラ	糸		
暗褐色土層									
土師器 皿a	40	11	8.5	6.6	1.2		○	○	○
	〃	12	9.1	7.0	1.5		○	○	○
杯a	〃	13	12.0	7.5	2.7		○	○	○
SD3701（第123次）									
土師器 杯a	55	1	(9.6)	6.2	1.9		○		
SX3702									
須恵器 蓋	〃	3	(15.4)						
	〃	4	(17.4)						
杯	〃	5		7.9					
SD2340 最下層（第124次）									
須恵器 蓋	59	2	(13.0)						
杯	〃	3	(13.0)	9.7	4.6				
	〃	4	(14.0)						
	〃	5		(9.6)					
	〃	6	(16.2)	(12.2)	4.0				
	〃	7	(17.2)	(12.4)	4.1				
土師器 甕	〃	12	(13.0)						
	〃	13	(31.2)						
SD2340 下層									
須恵器 蓋	60	14	(13.8)		2.2				
	〃	15	(13.8)		2.2				
	〃	16	(13.8)						
	〃	17	(15.1)						
	〃	18	(16.6)						
	〃	19	(16.8)						
	〃	20	(15.1)						
杯	〃	21	(12.8)	(9.7)	3.1				
	〃	23	(13.4)	(9.2)	3.7				
	〃	24	(14.2)	(10.6)	3.9				
	〃	25	(20.4)						
土師器 高杯	〃	26	(23.2)						
須恵器 甕	〃	27	(25.4)						
SD2340 中層									
須恵器 蓋	〃	28	(13.6)						
	〃	29	(19.5)						
杯	〃	30	(13.8)	(10.1)	(3.9)				
甕	〃	31	(17.2)						
	〃	32	(18.6)						

器　種	挿図番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
						ヘラ	糸		
SD2340　上層									
須恵器　蓋	61	33	16.2		1.8				
杯	〃	34	(16.7)	(9.1)	3.9				
皿	〃	35	(18.0)	(15.0)	2.4				
甕	〃	36	(17.0)						
SK3705（第125次）									
須恵器　蓋	92	1	(15.1)						
	〃	2	(15.4)		2.2				
	〃	3	(18.0)						
	〃	4	(19.8)						
杯	〃	5	(11.8)	(7.3)	3.5				
皿	〃	6	(15.0)		2.4				
	〃	7	(18.3)						
SK3709									
黒色土器B　甕	〃	8	(15.0)						

図　版



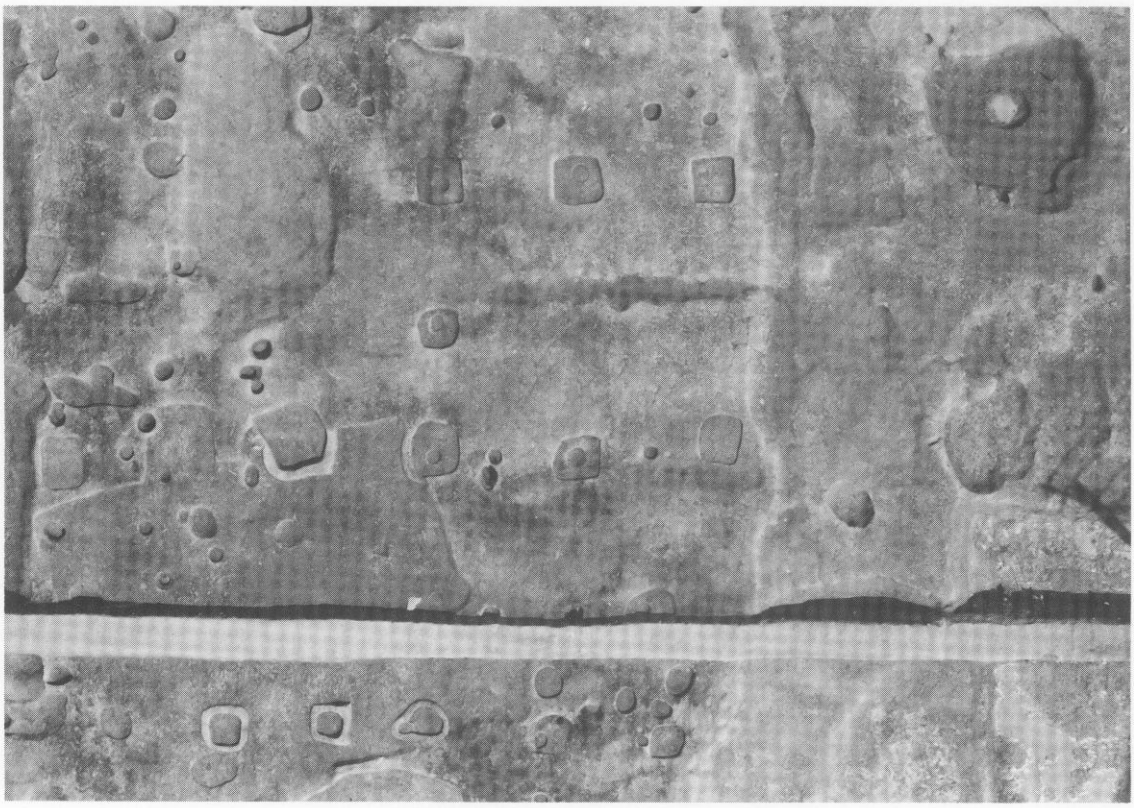
第121次調査区全景（空中写真）



第121次調査区中央部(空中写真)



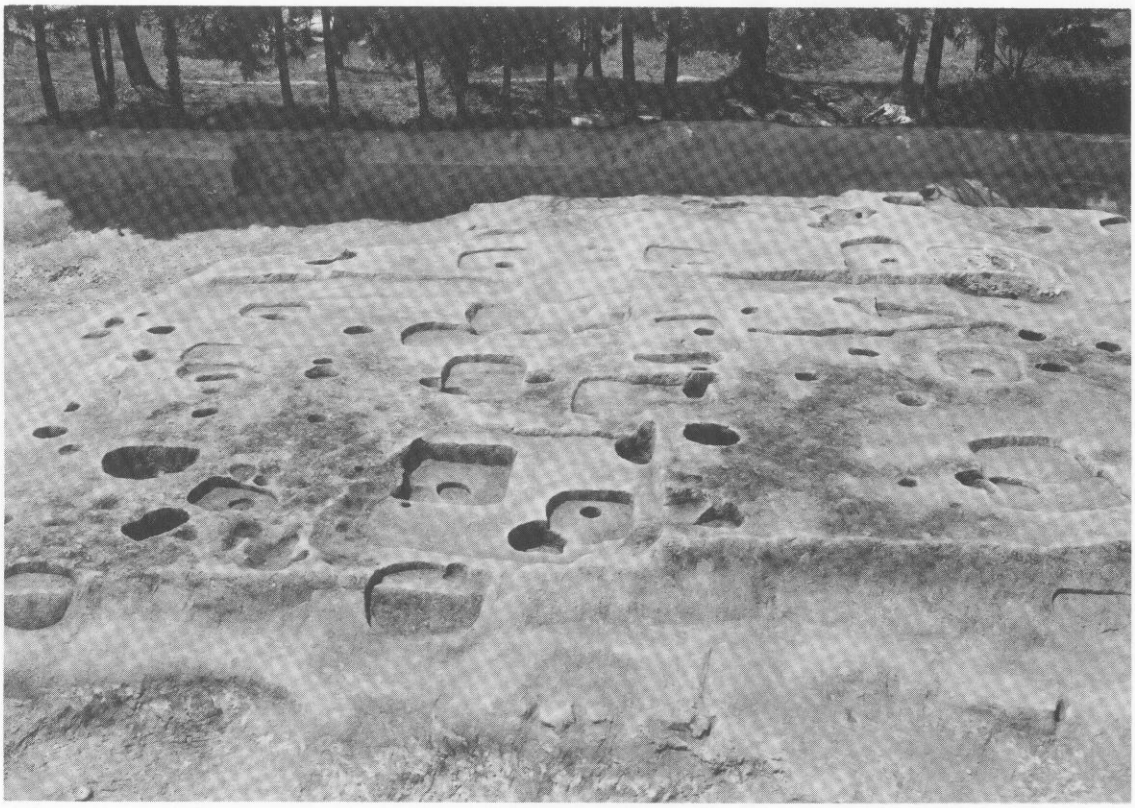
掘立柱建物SB3610（空中写真）



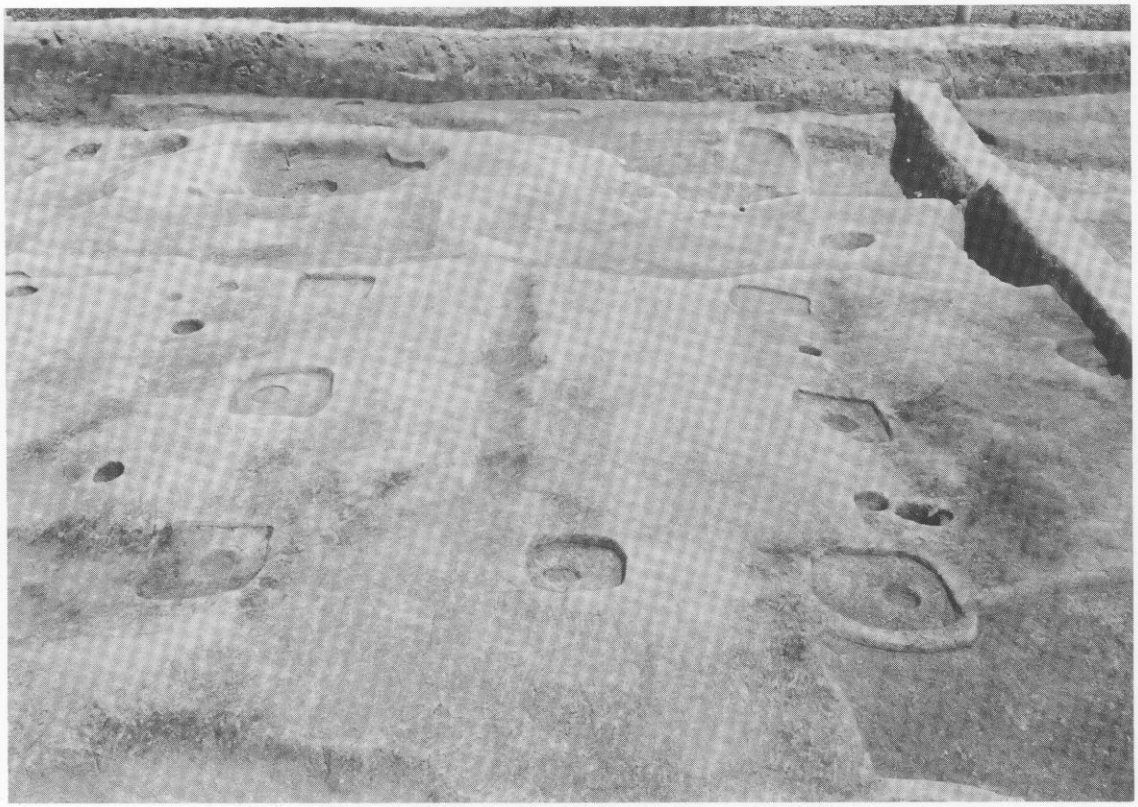
掘立柱建物SB3615・柵SA3623（空中写真）



第121次調査区全景(北から)



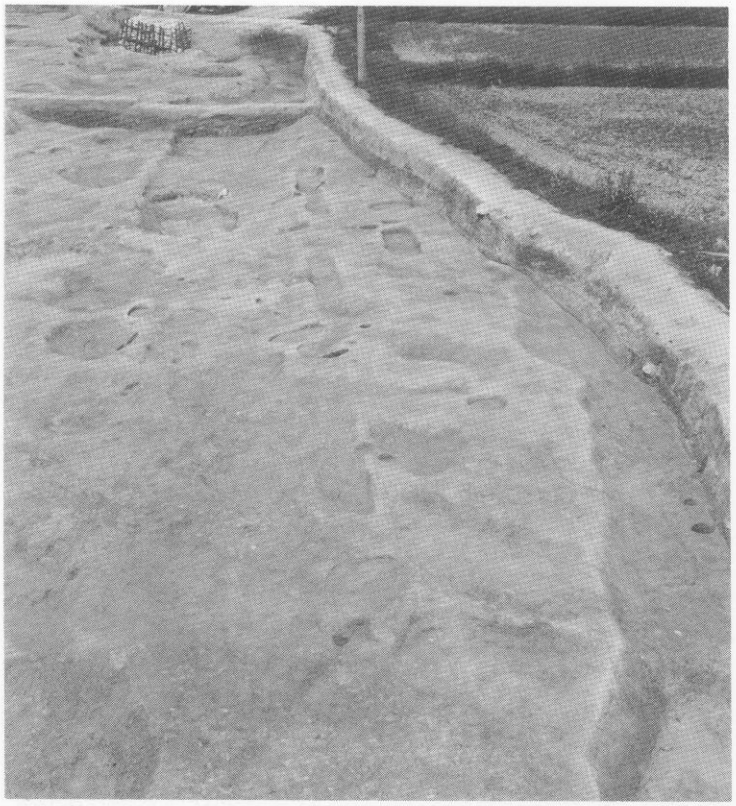
掘立柱建物SB3610(東から)



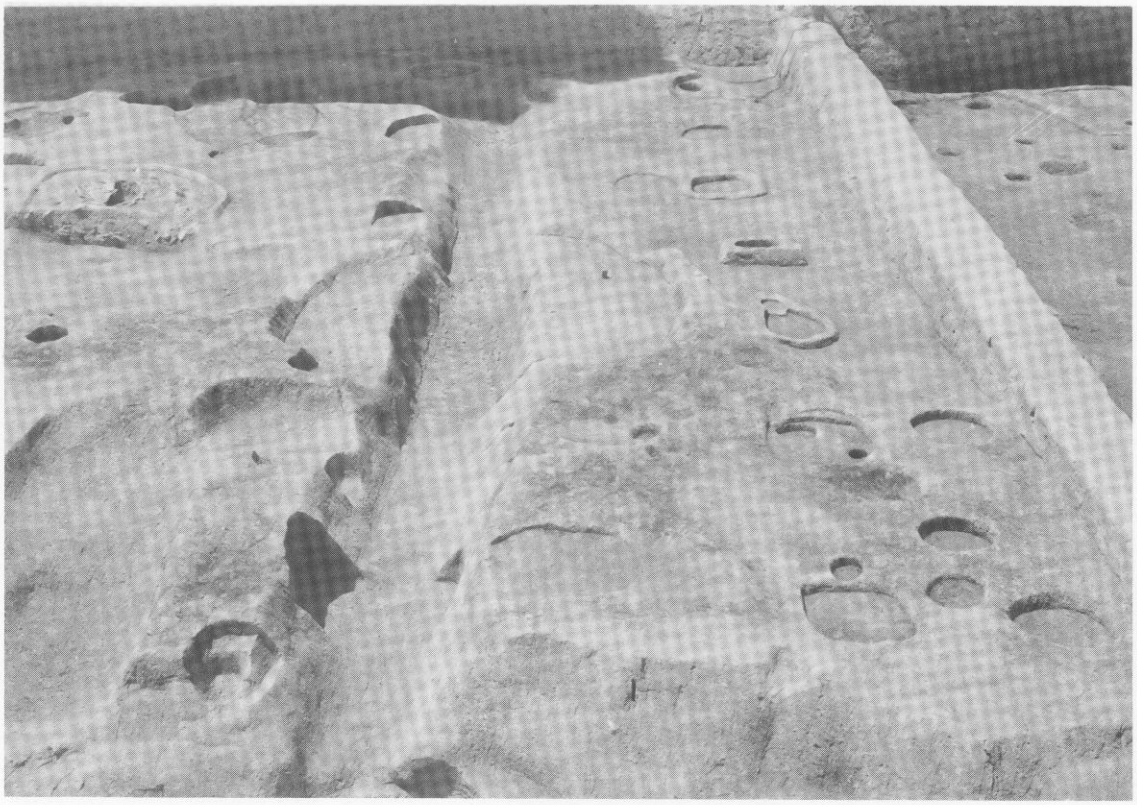
掘立柱建物SB3615（西から）



掘立柱建物SB3620（南から）



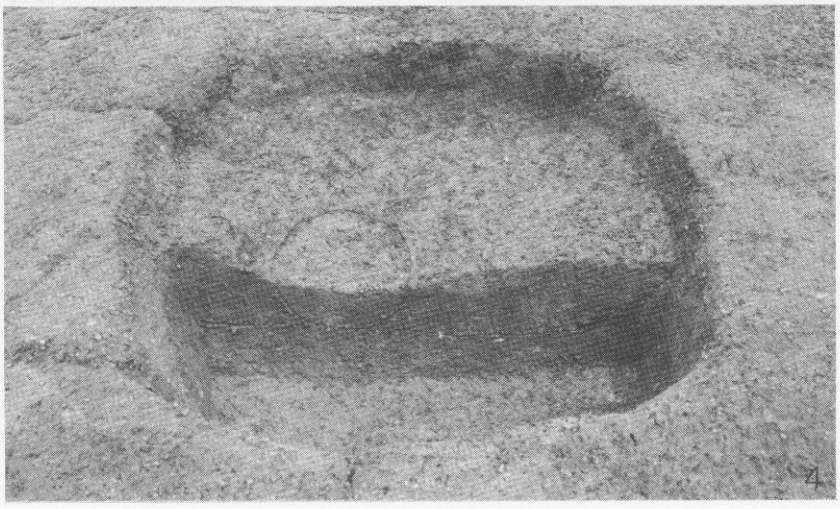
柵SA3625（南から）



柵SA3623・3622（東から）



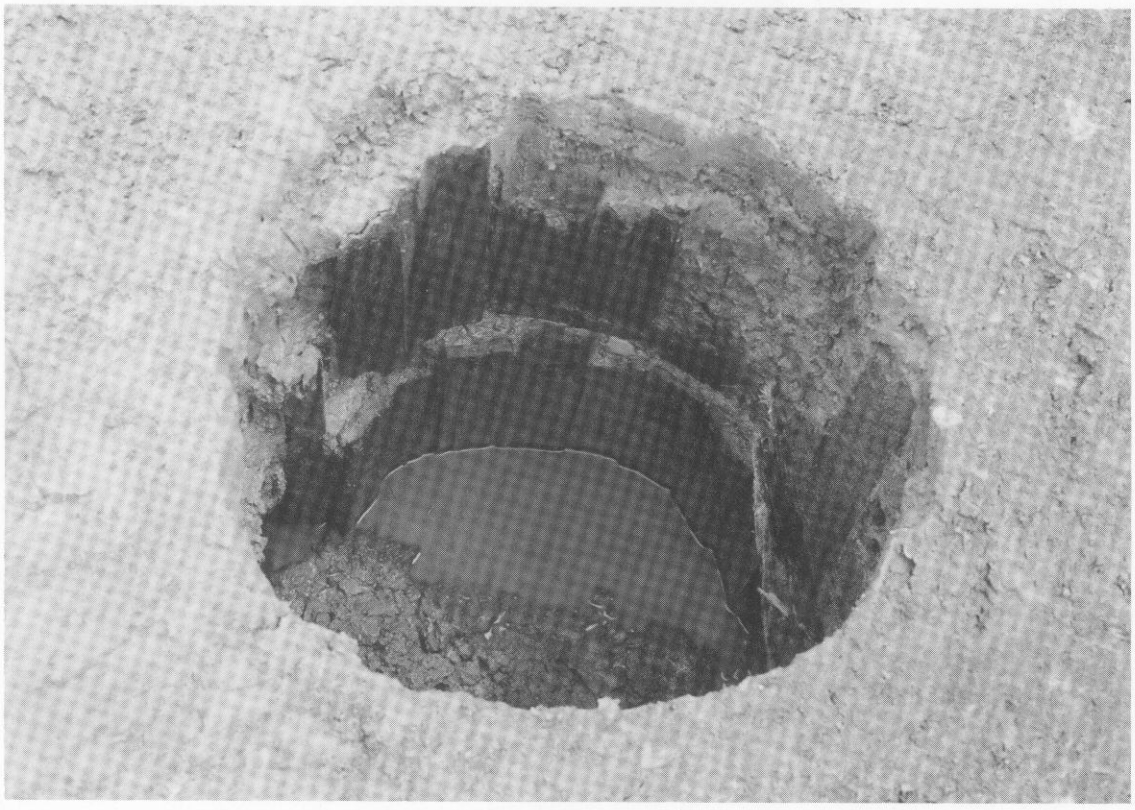




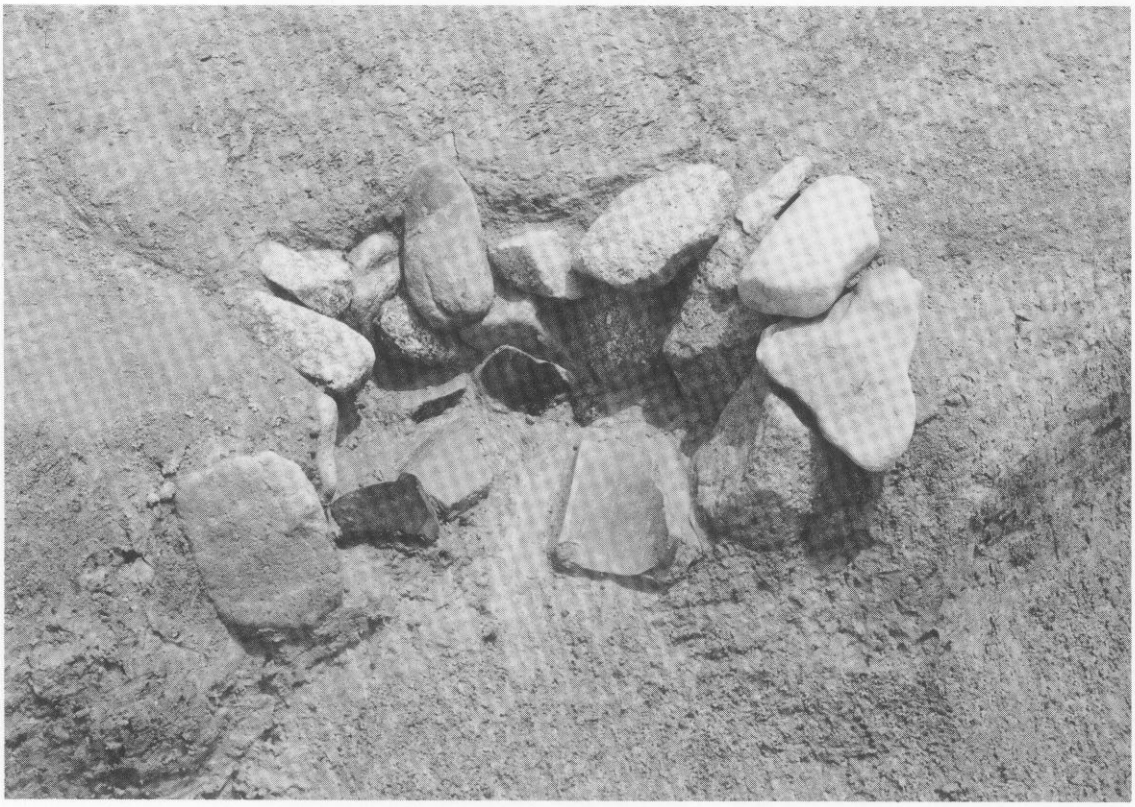
掘立柱建物
SB3620(2・3)
SB3615(4)　柱掘形



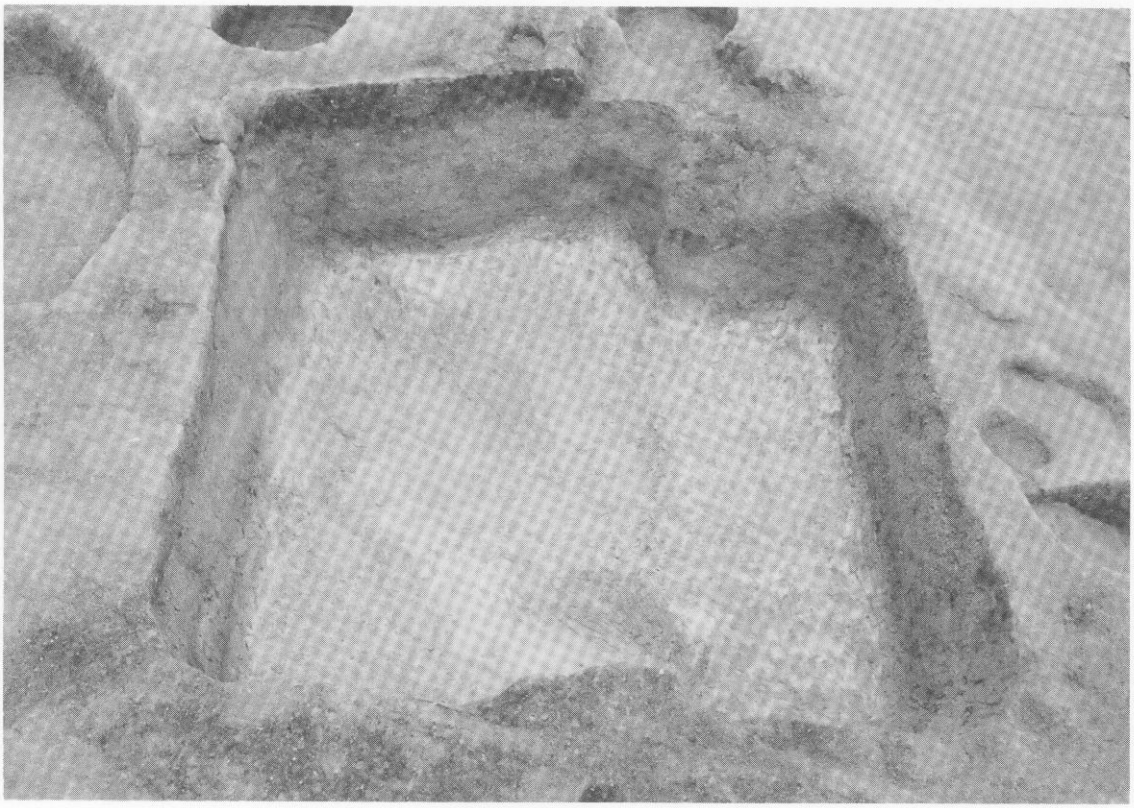
溝SD3630（南から）



井戸SE3645（北から）



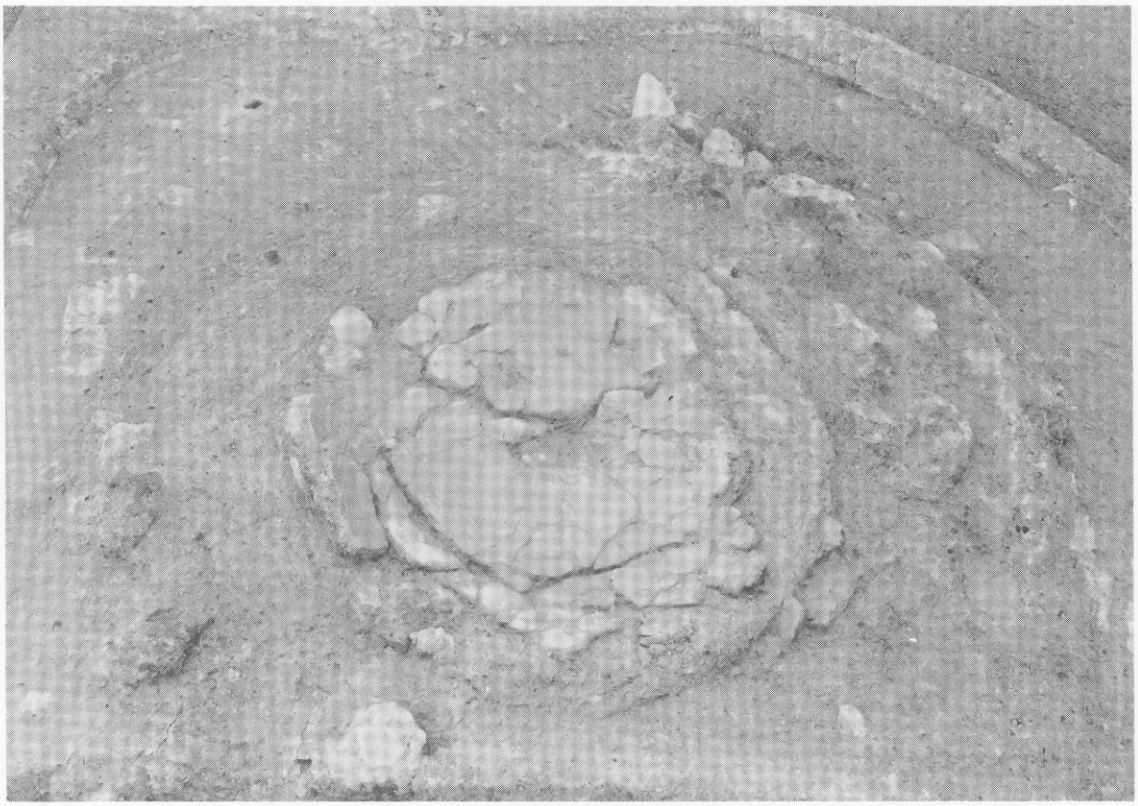
井戸SE3658(西から)



土壙SK3648(南から)



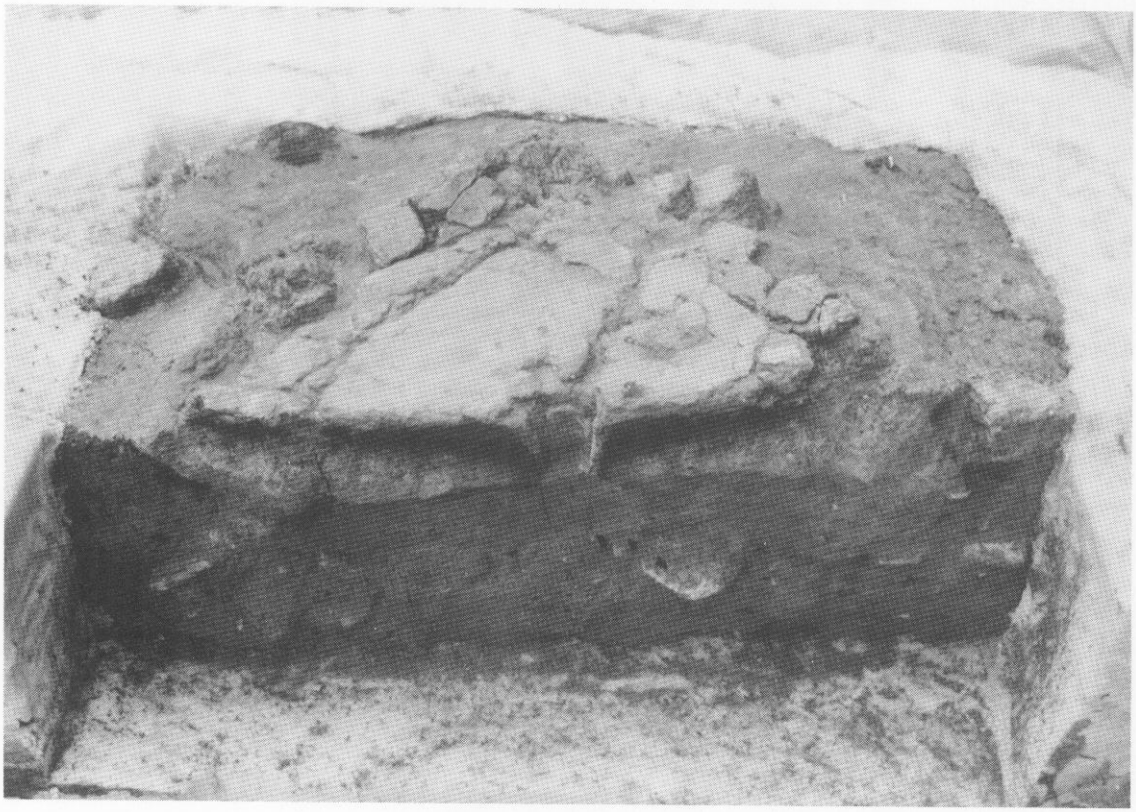
鋳造遺構SX 3640（東から）



同上近影



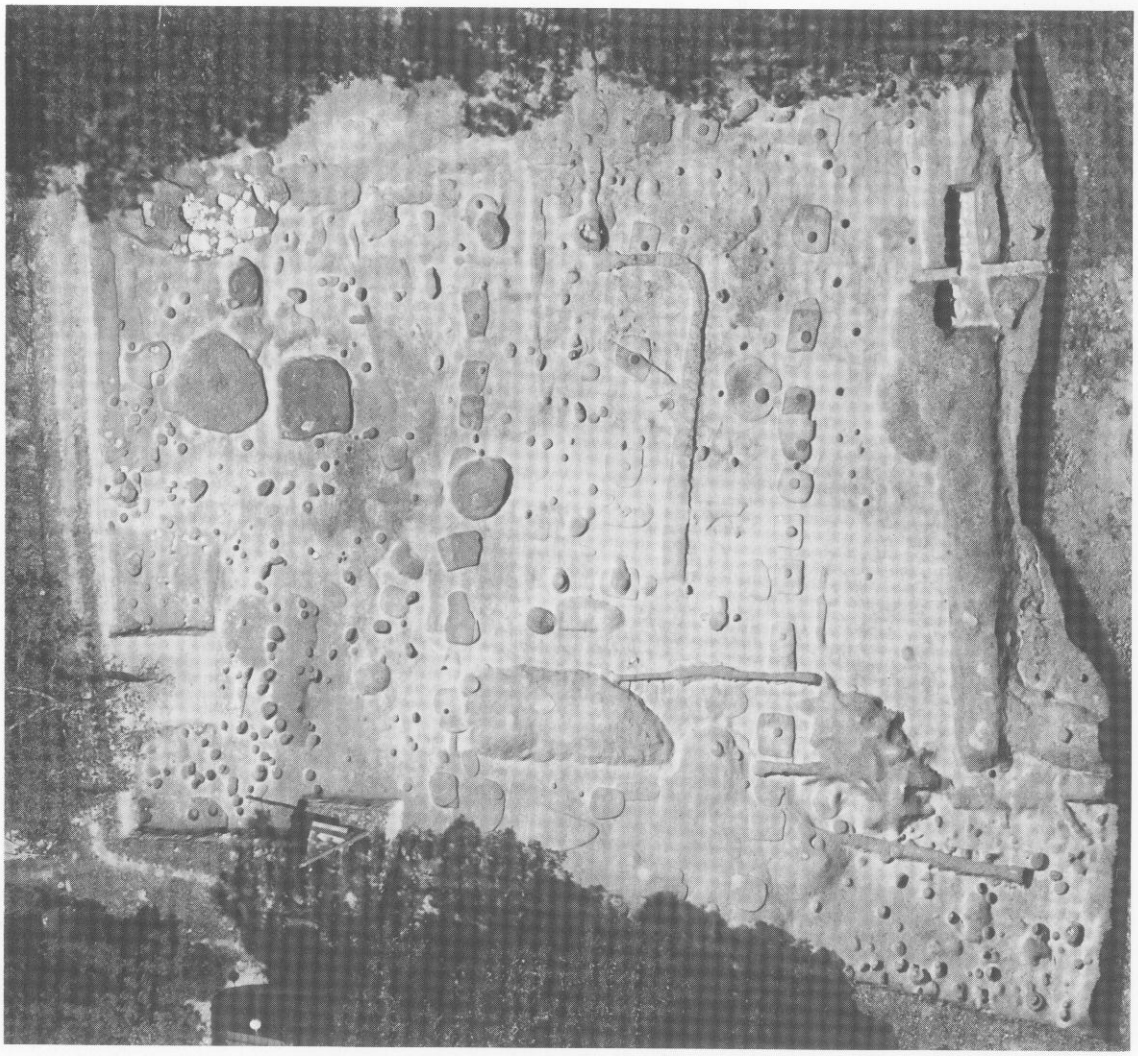
鋳造遺構SX3640断面（東から）



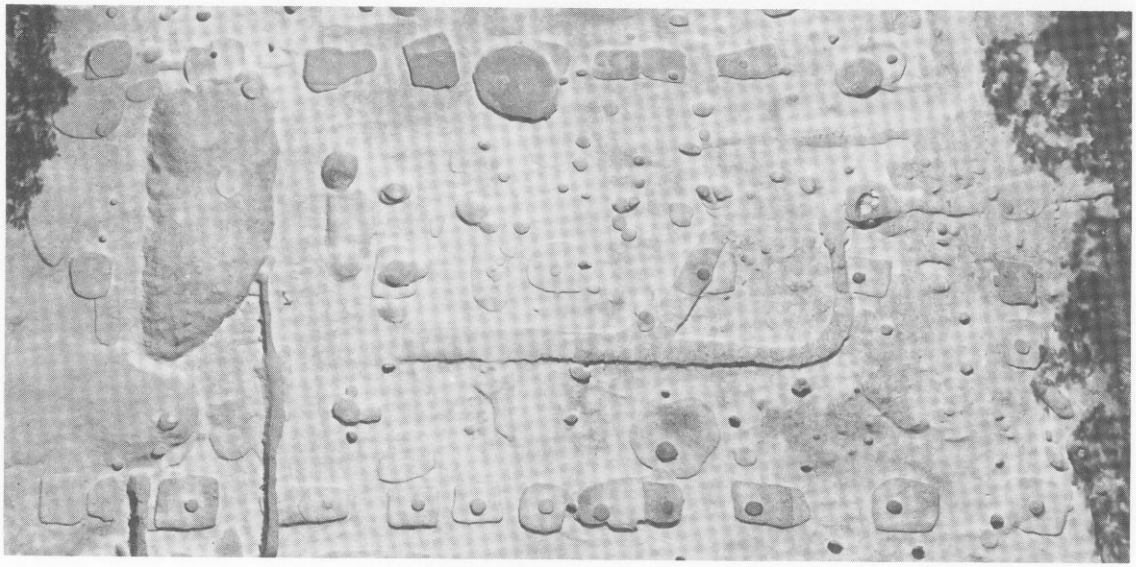
鋳造遺構SX3640（遺構切り取り後）



第122次調査区と観世音寺境内（空中写真）



第122次調査区全景（空中写真）



掘立柱建物SB3660・3665（空中写真）



第122次調査区全景（東から）



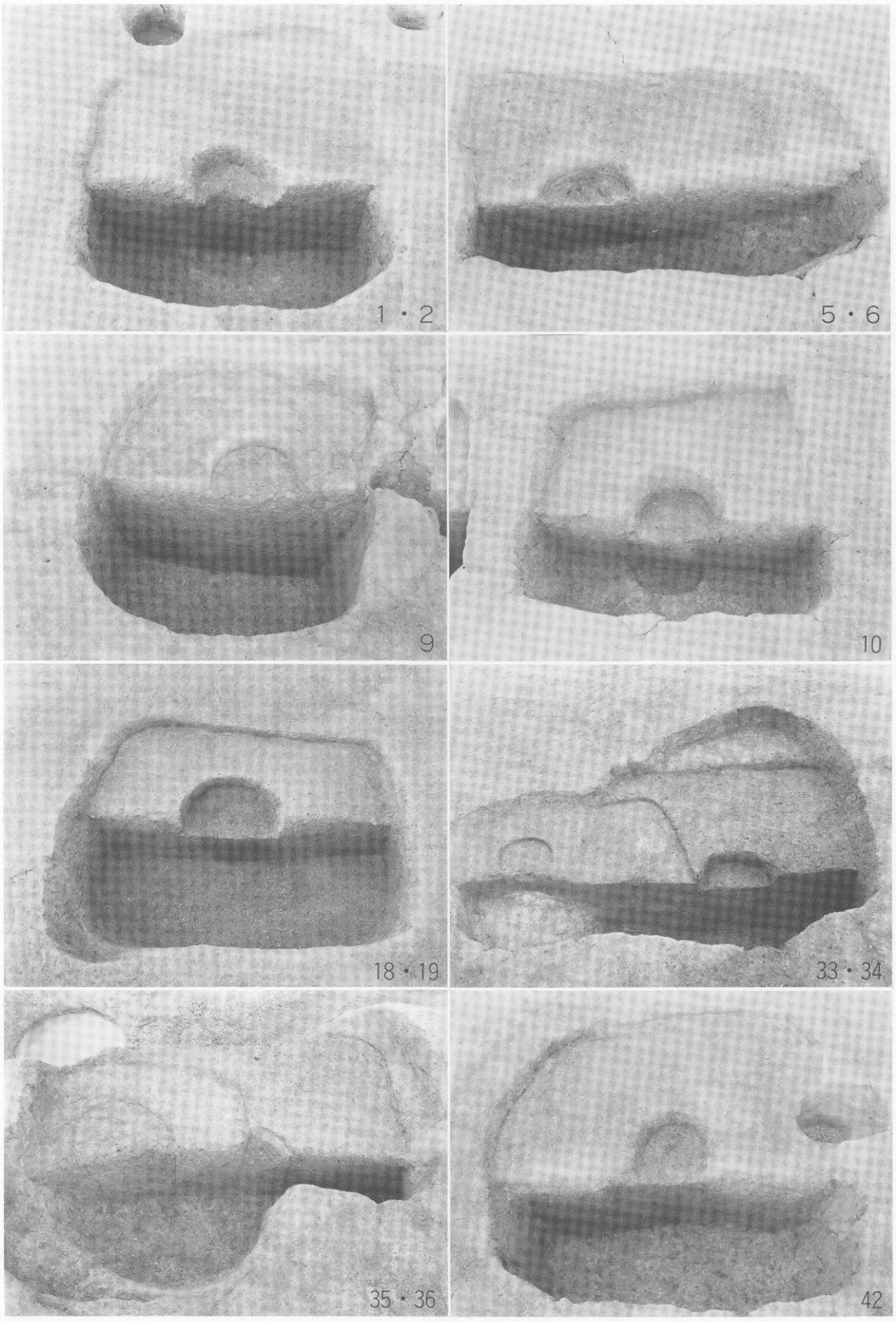
同上（北から）



掘立柱建物SB3660・3665(北から)



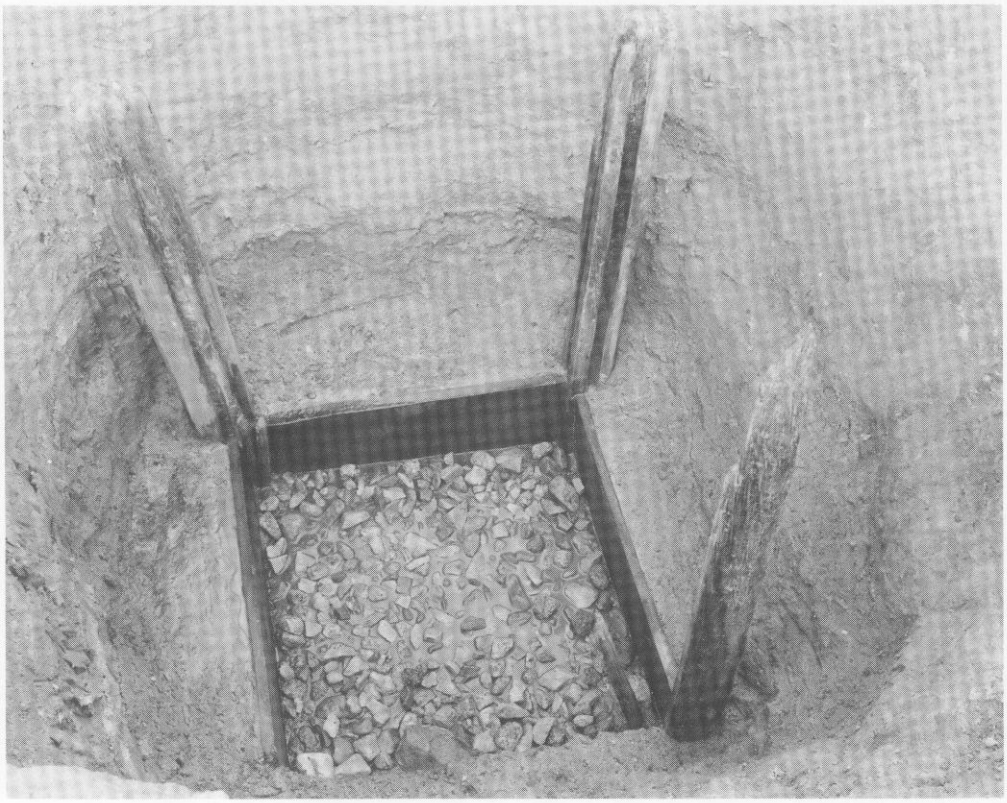
第122次調査区北側拡張区(南から)



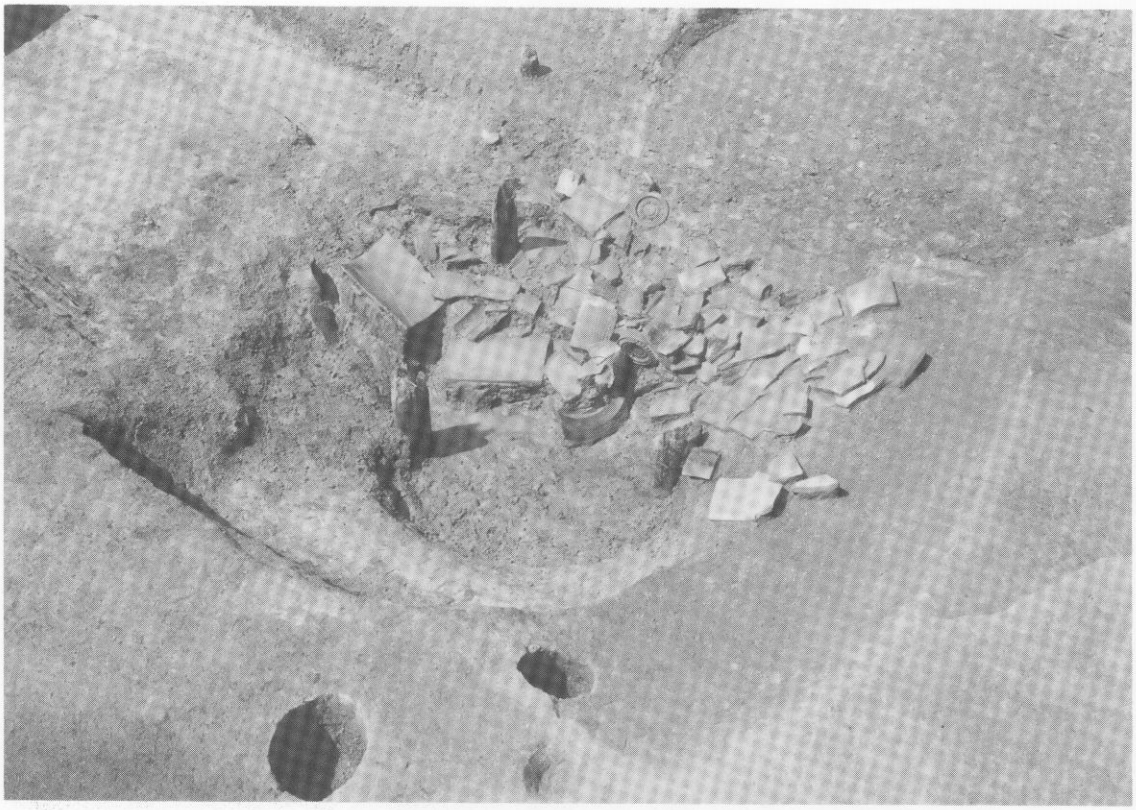
掘立柱建物SB3660・3665柱掘形



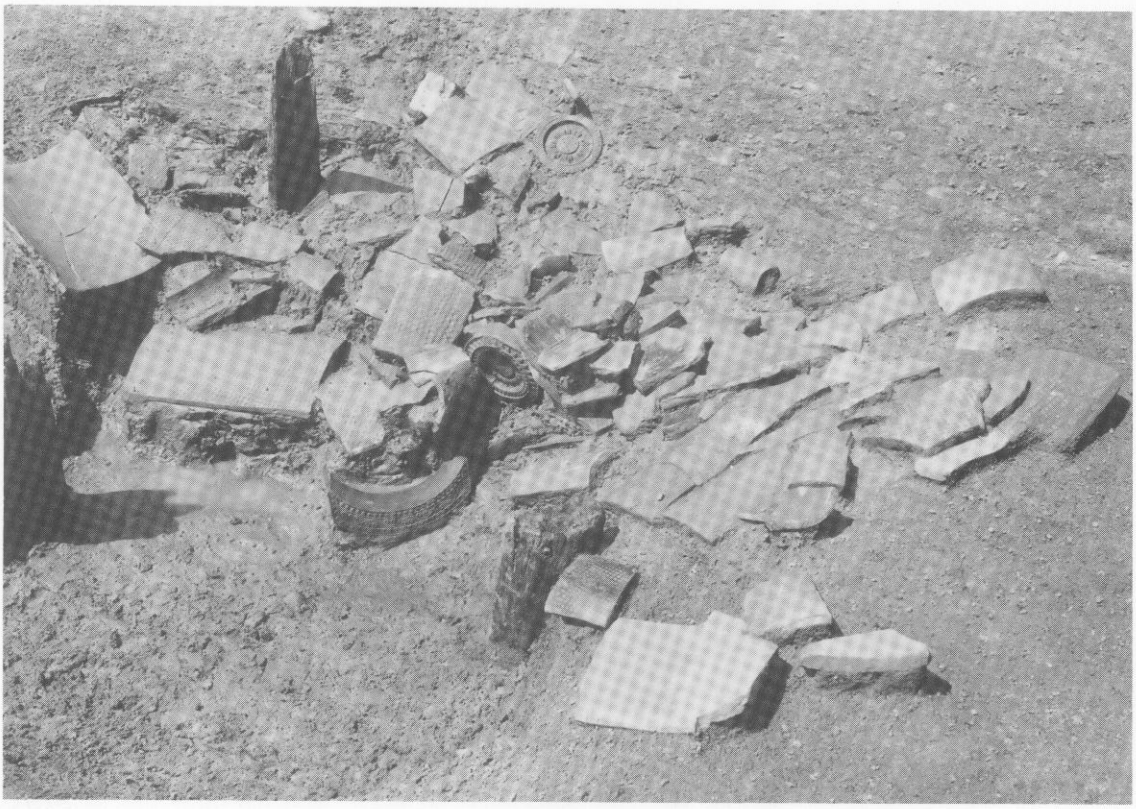
溝SD3666・石列遺構SX3662(北から)



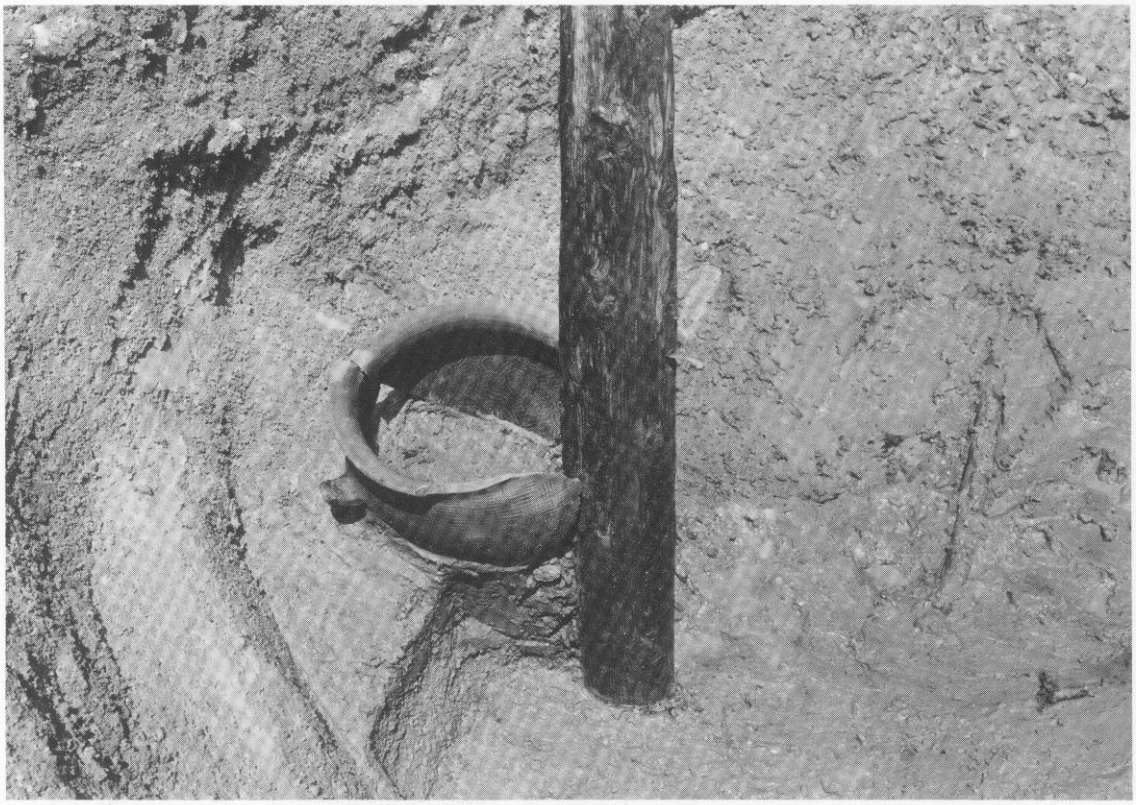
井戸SE3680(西から)



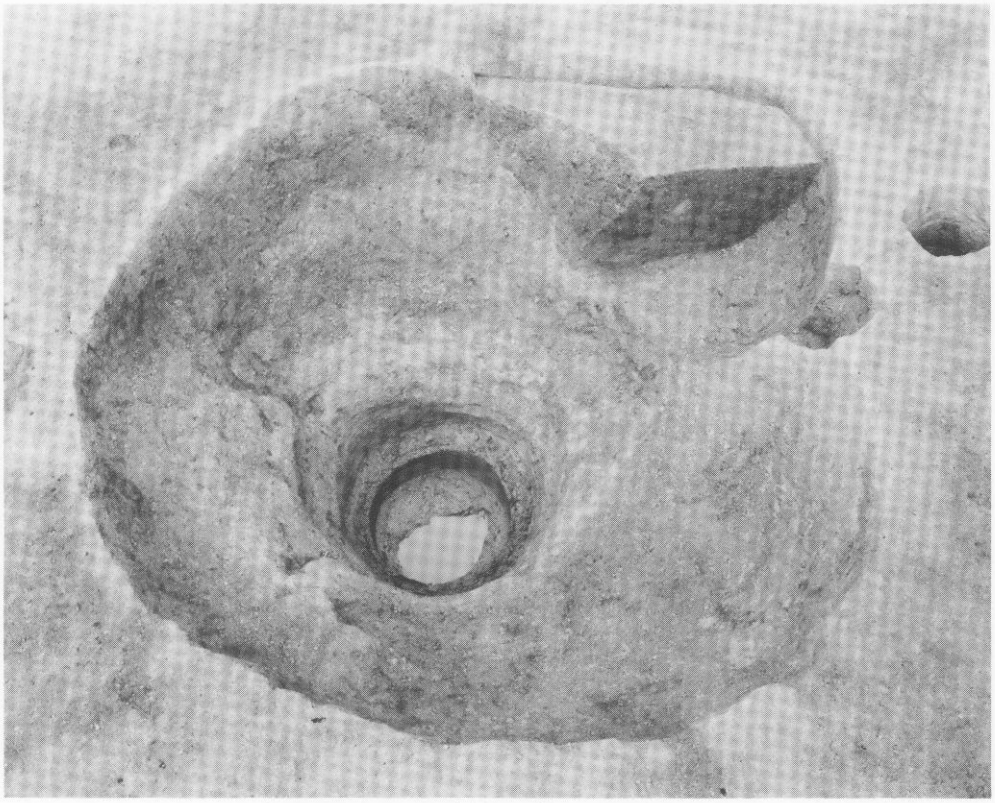
井戸SE3680上層の投棄された瓦の状況(北東から)



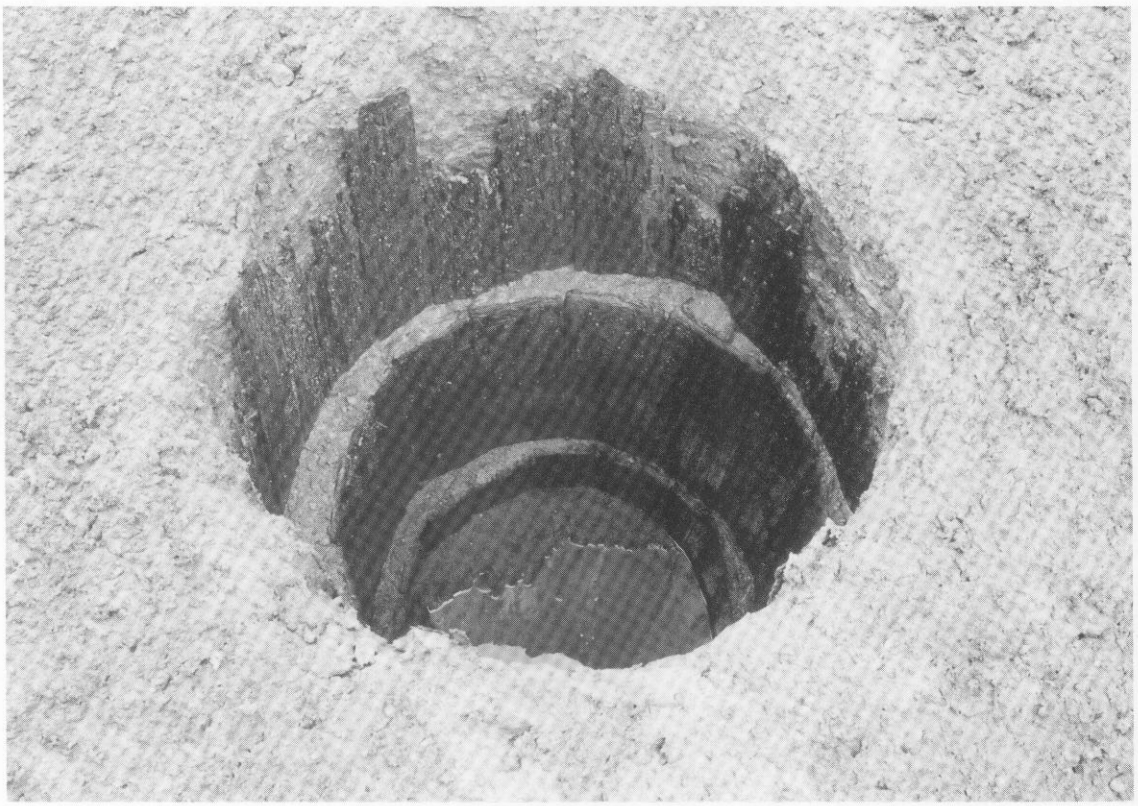
同上近影



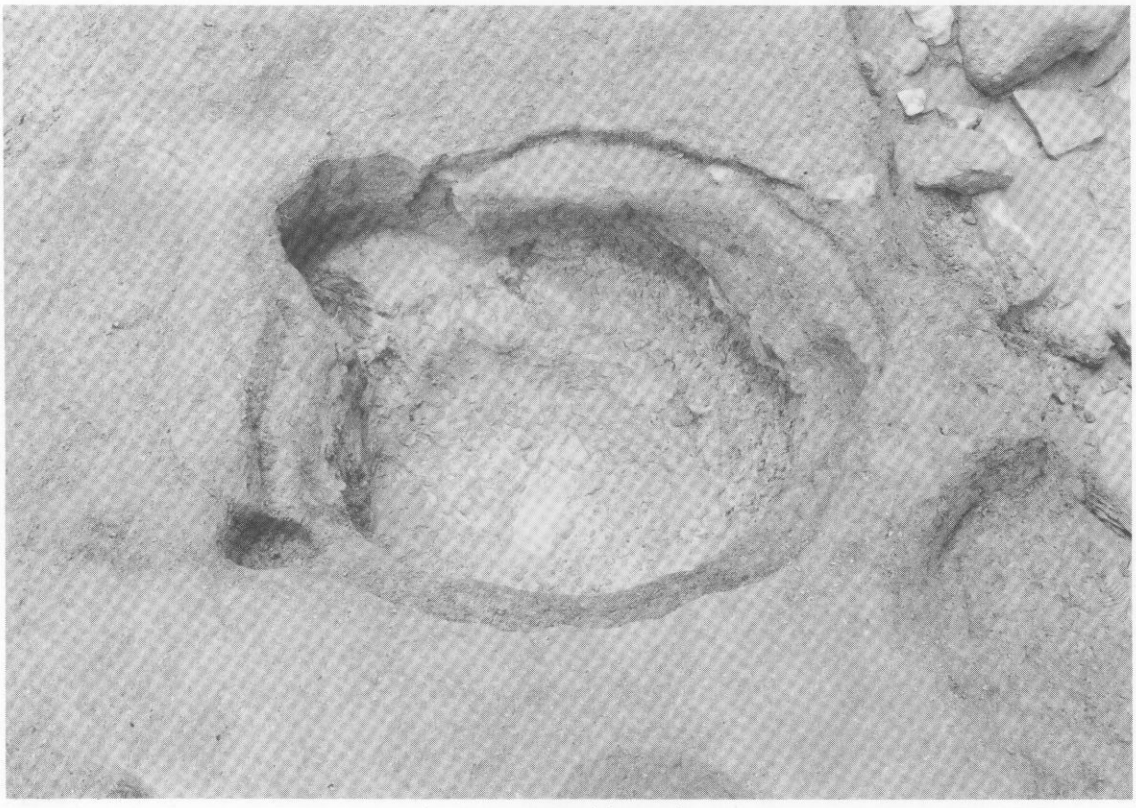
井戸SE3680からの甕出土状況（南から）



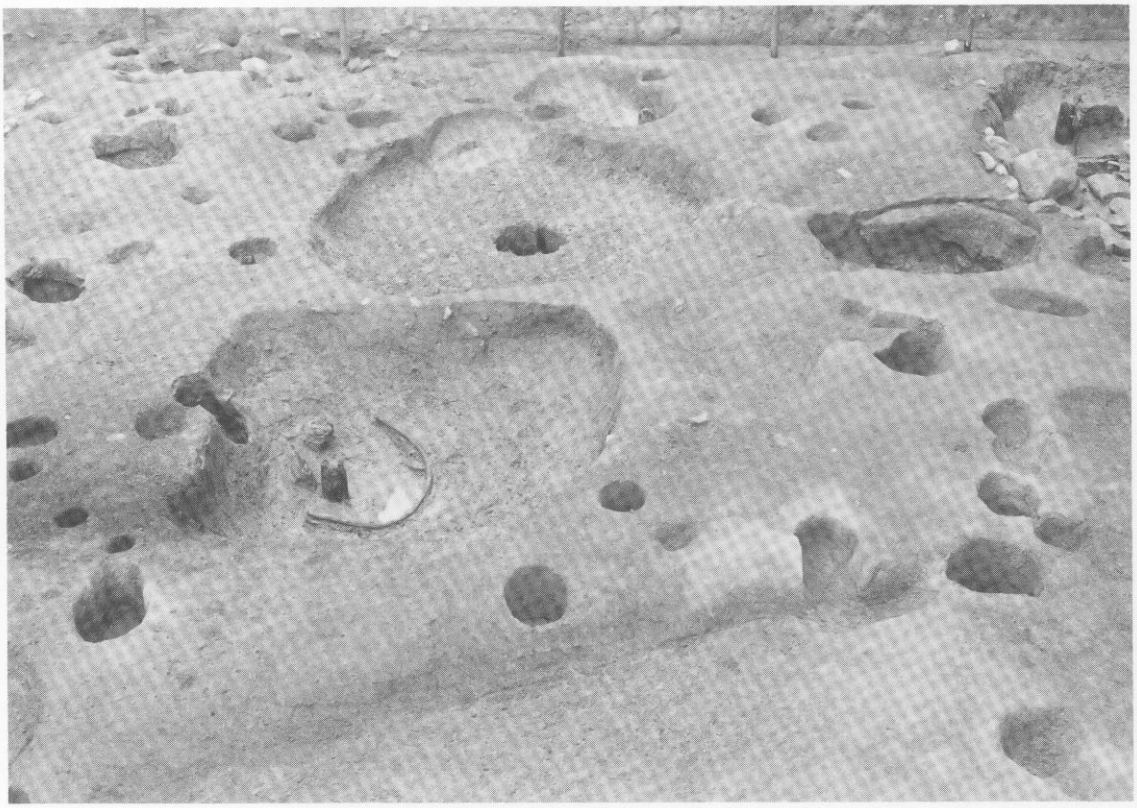
井戸SE3685（東から）



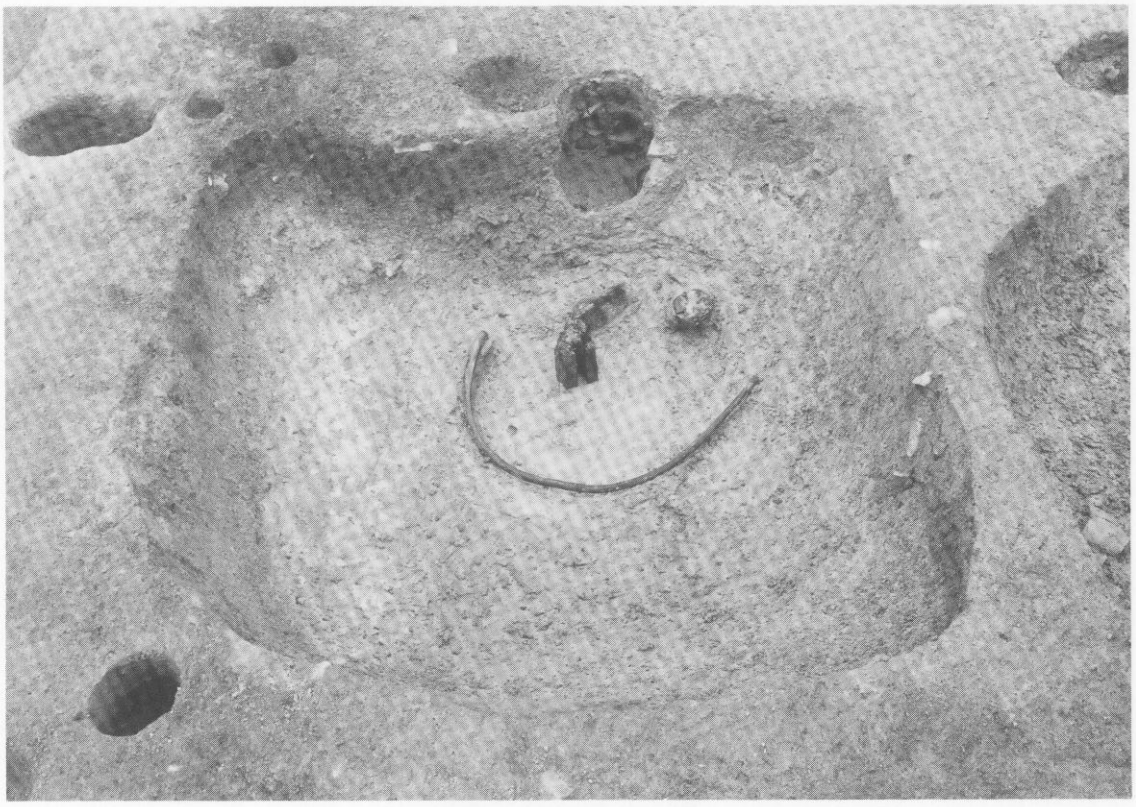
井戸SE3690（南から）



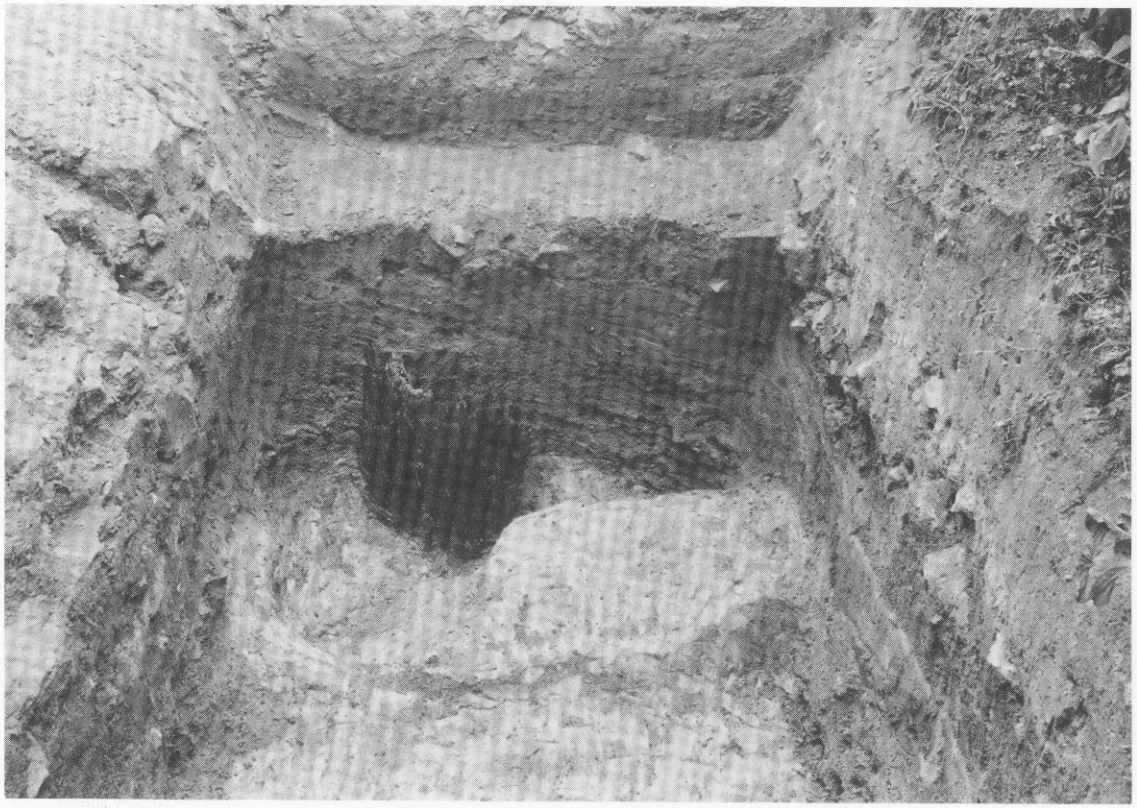
井戸SE3695（東から）



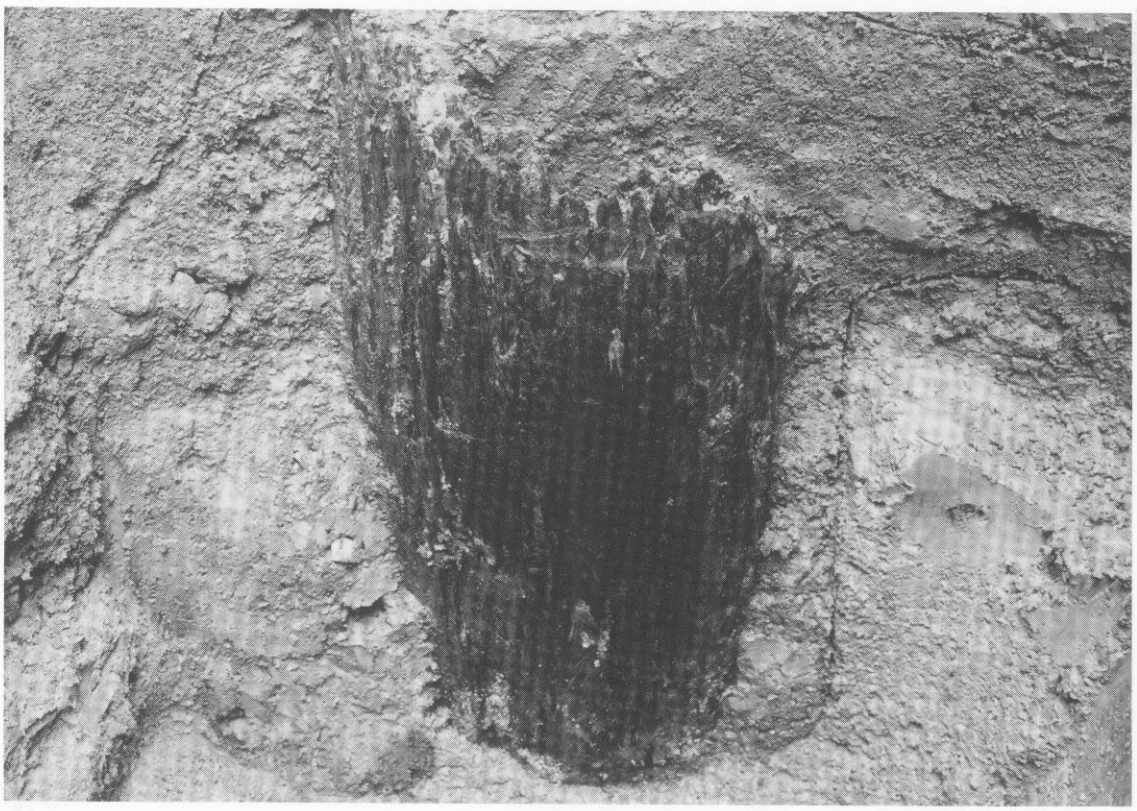
井戸SE3690・3695・土壙SK3677（東から）



土壙SK3677（北から）



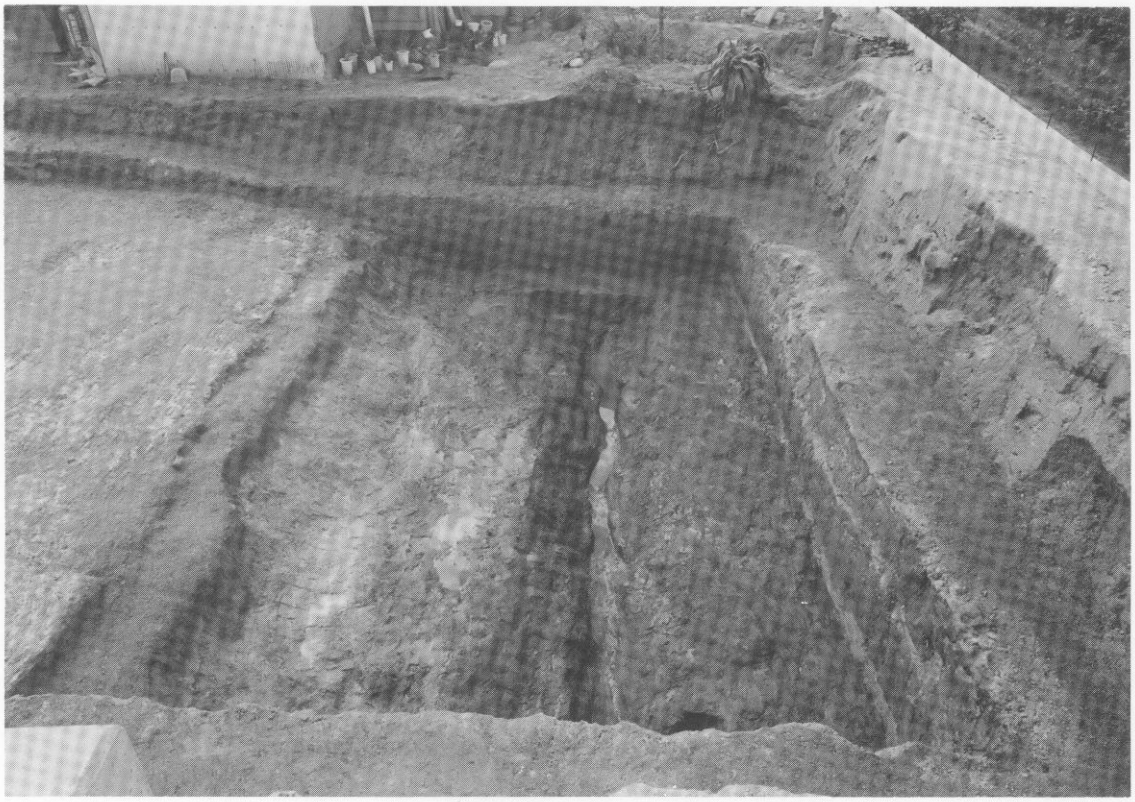
第123次調査掘立柱建物SB3700柱根（北から）



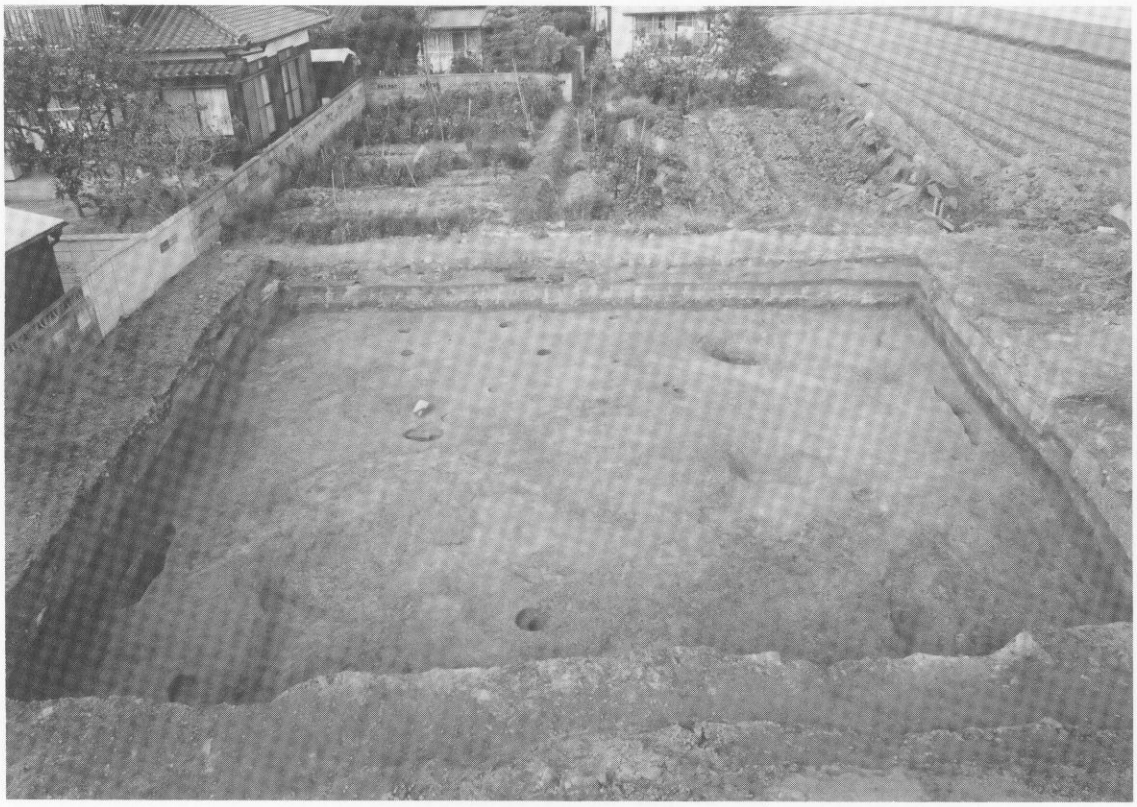
同上近影



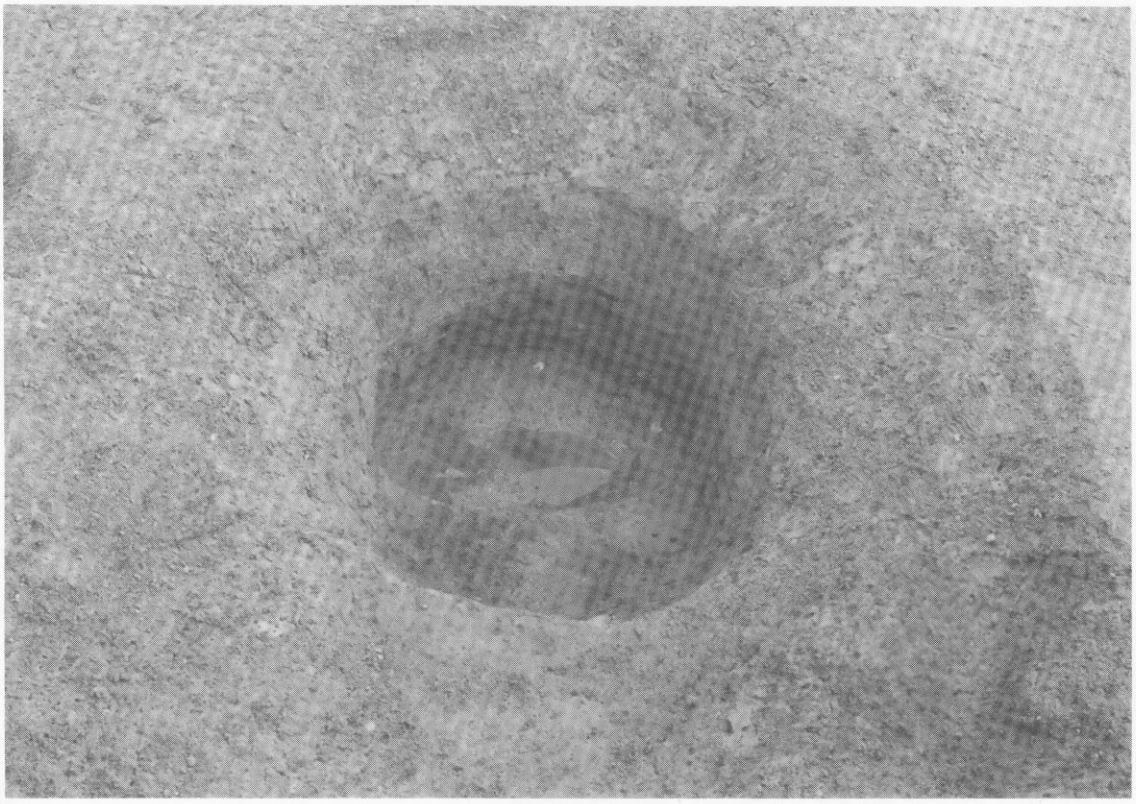
第124次調査区全景（東から）



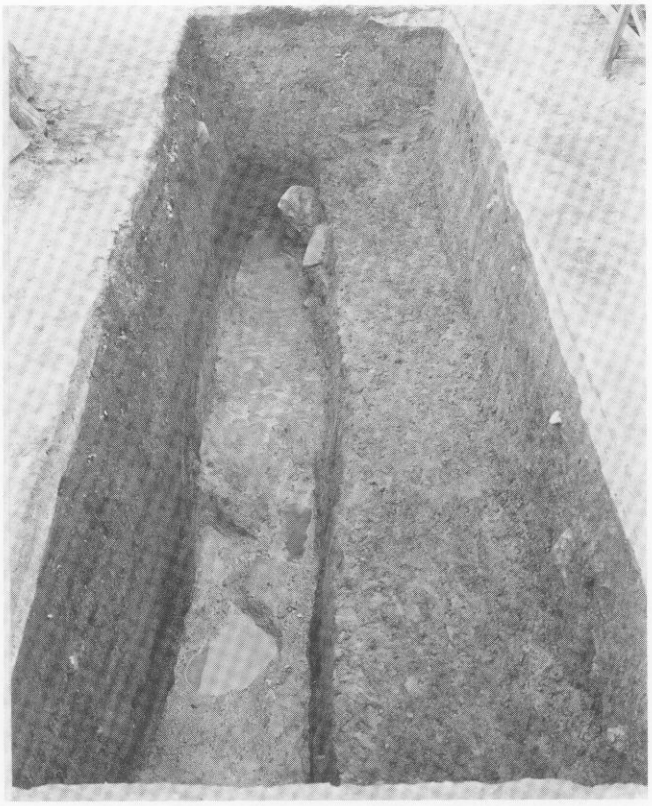
溝SD2340（北から）



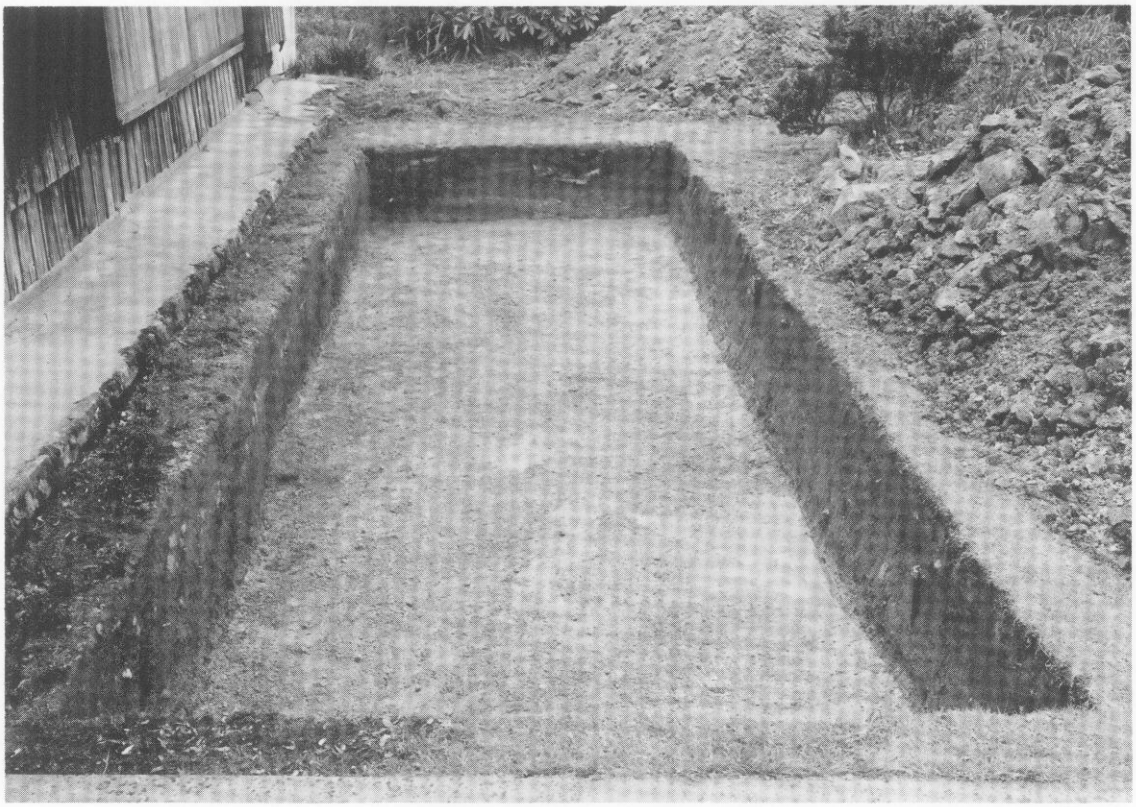
第125次調査区全景（南から）



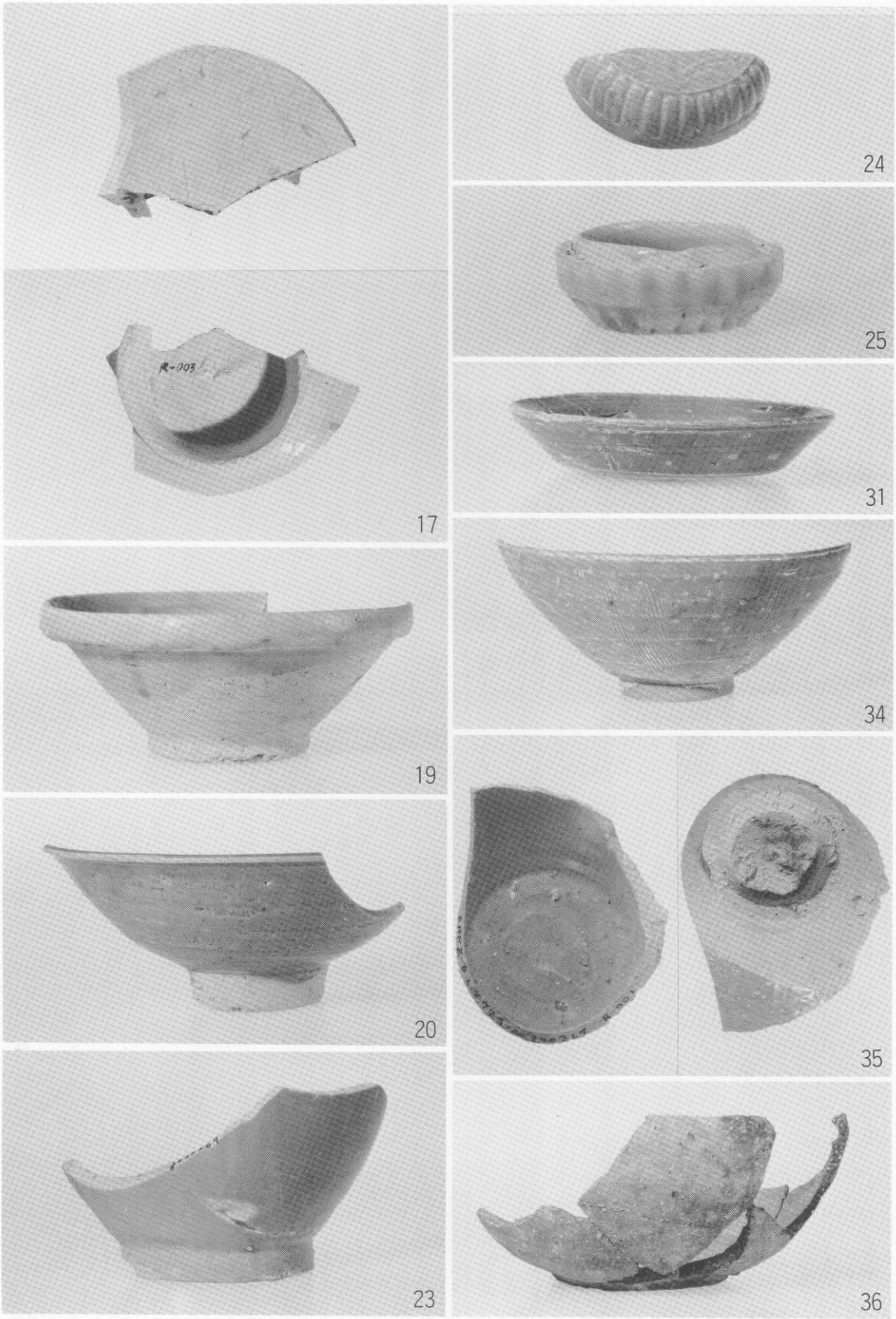
土壙SK3710（西から）



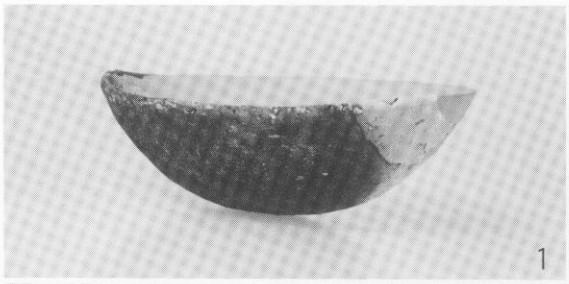
第127次調査区全景（南から）



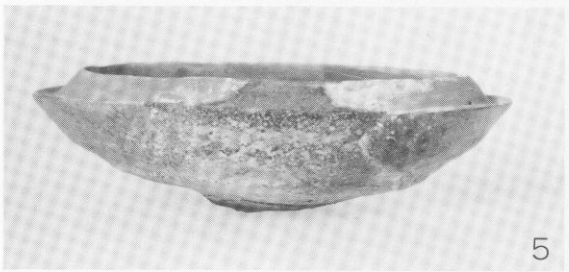
第128次調査区全景（南から）



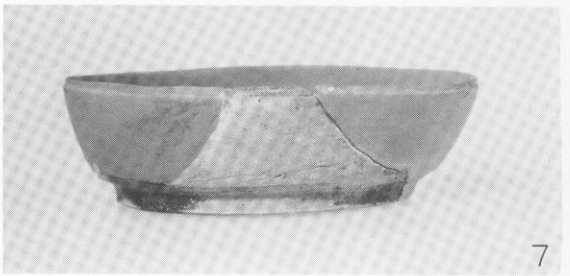
第121次調査　SD3630出土陶磁器

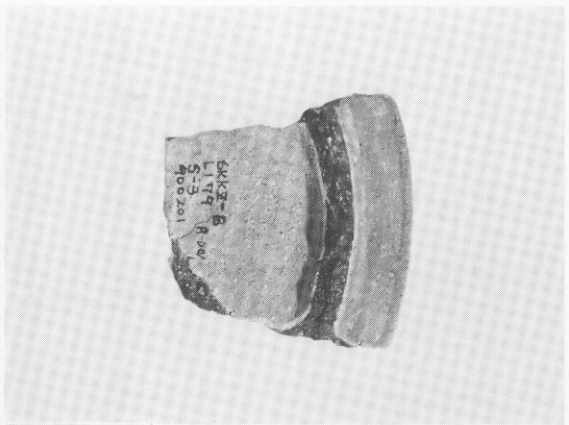

1

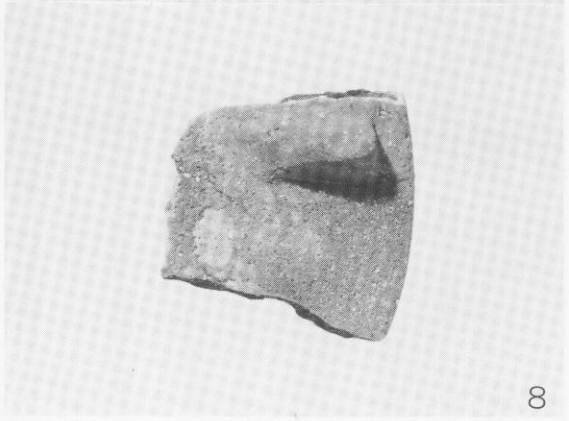

2

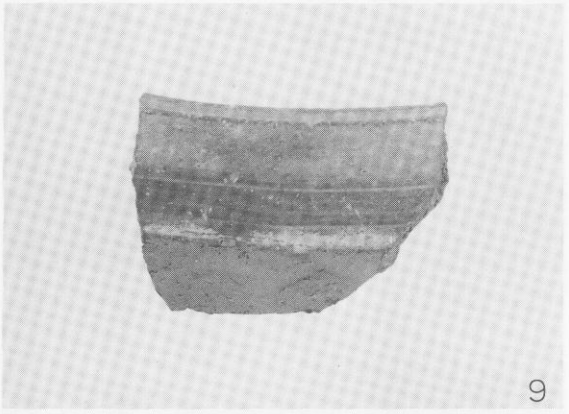

5

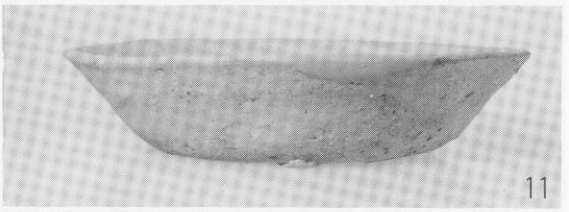

6

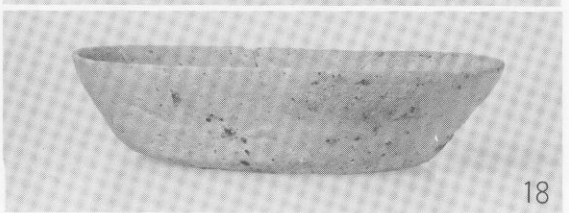

7



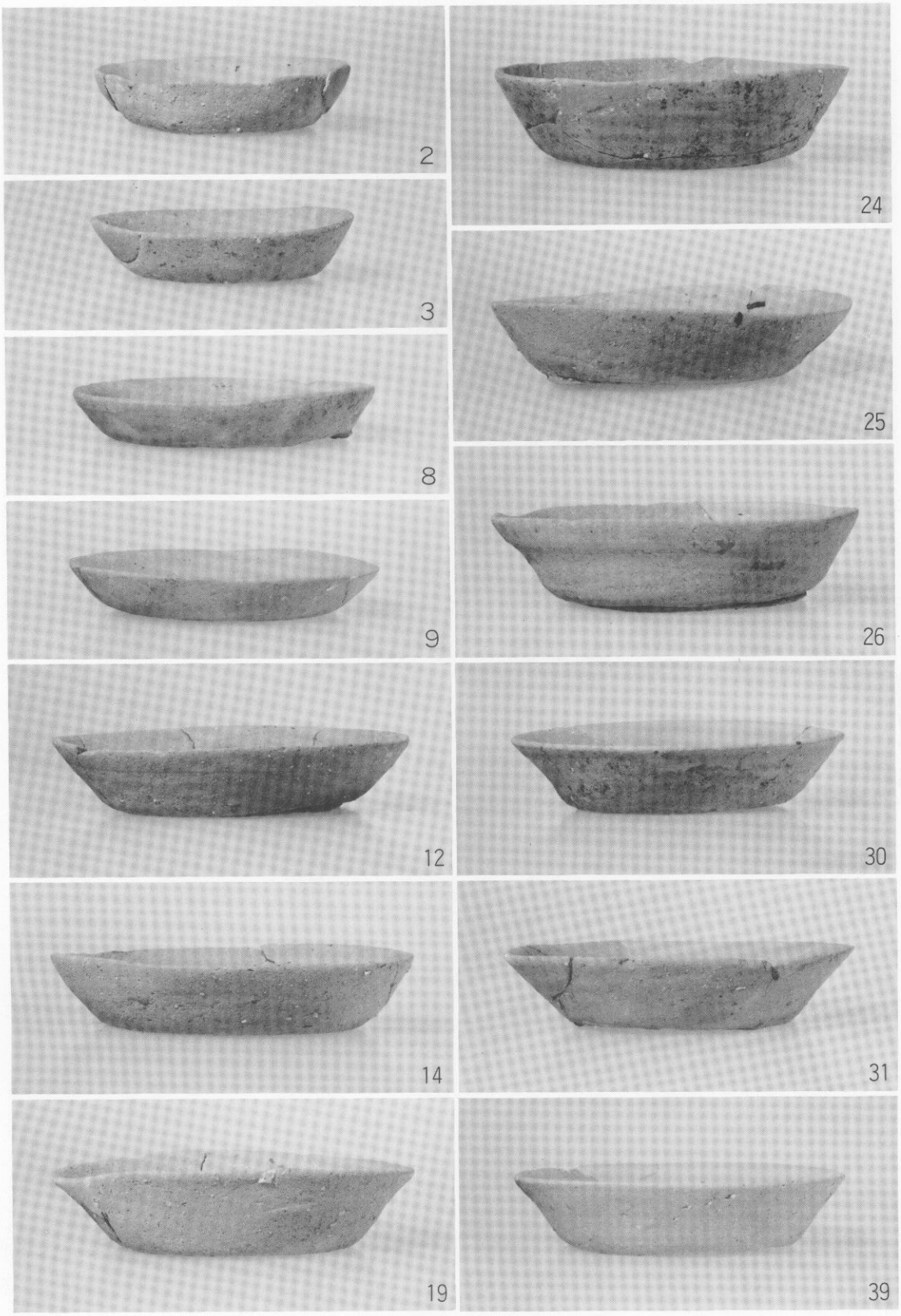

8


9

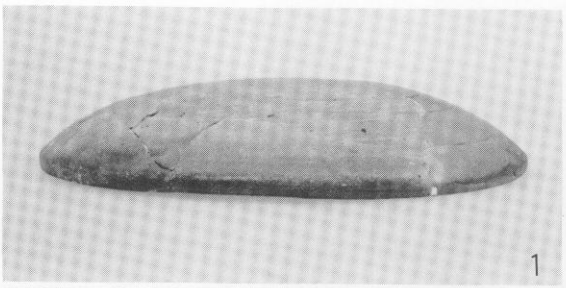

11

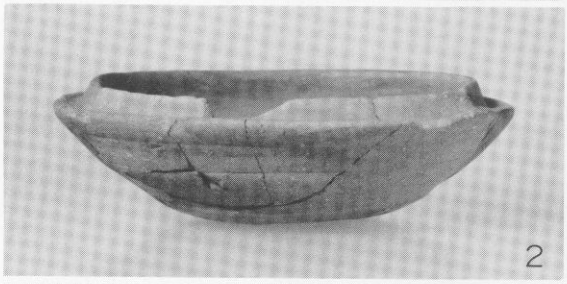

18

第121次調査　SD3619(1・2・5・6)・3629(7)・
3637(8・9)・3649(11・18)出土土器



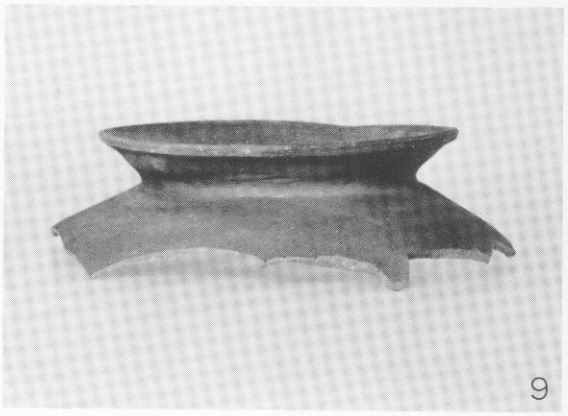
第121次調査　SK3644出土土器

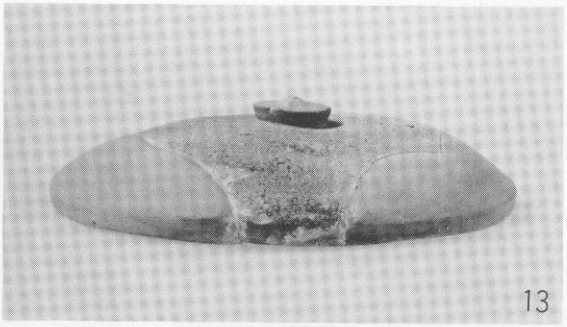

1

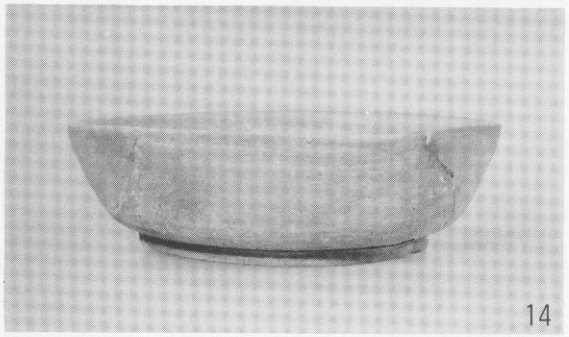

2


3

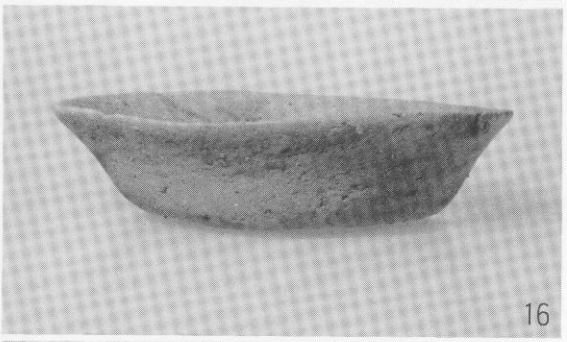

6


9


13

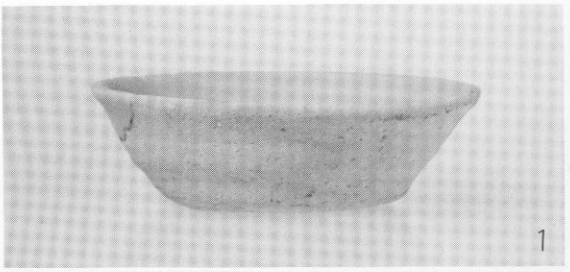

14

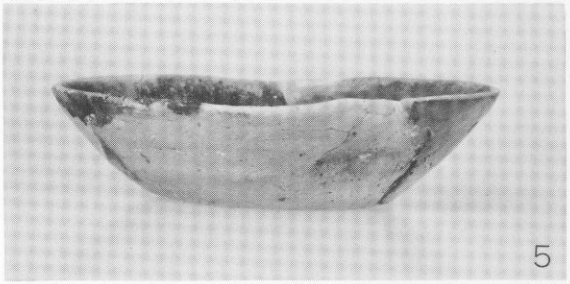

15


16


22

第121次調査　SK3614(1・2)・SK3634(3・6・9)・3643(15・16・22)・3657(13・14)
出土土器

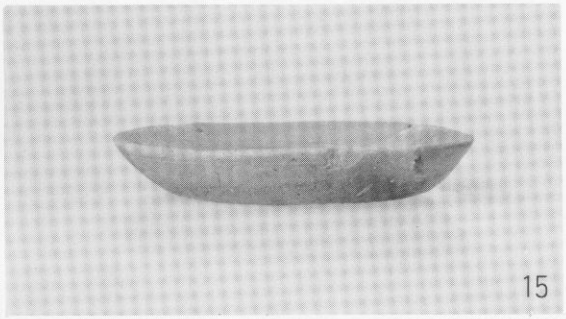




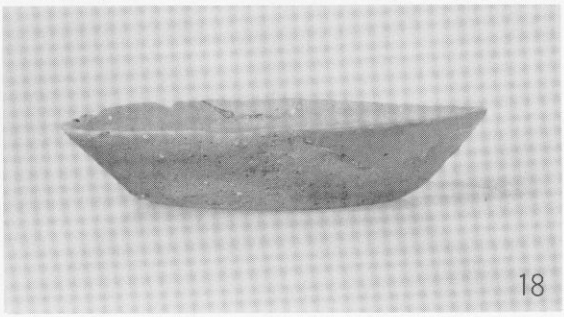


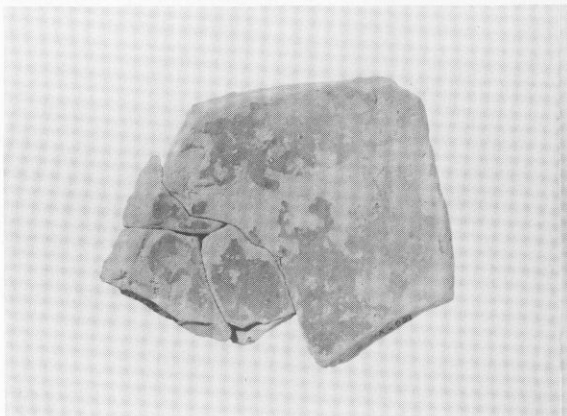


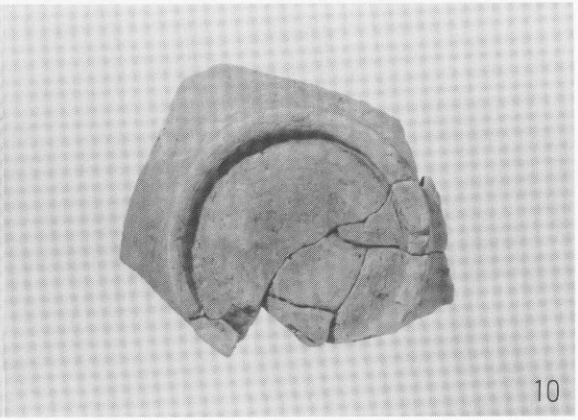












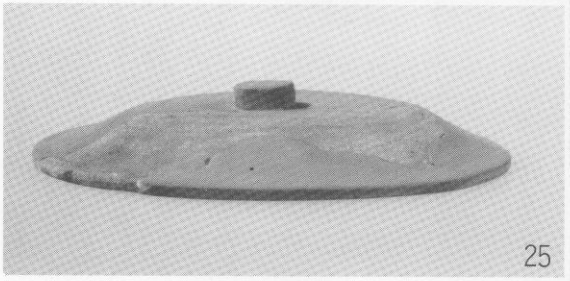
第121次調査　SX3618(1・5・7・9・10)・SX3639(14・16・17・18)
出土土器・陶磁器


20

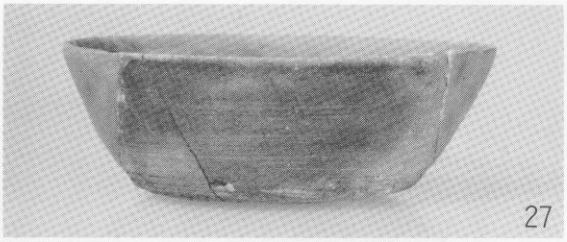

21

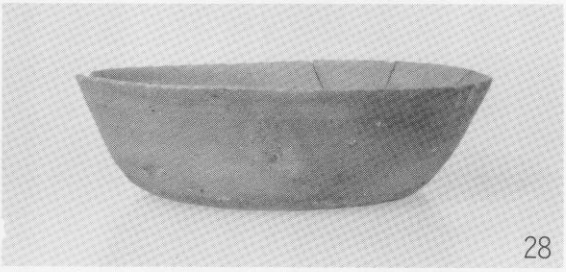

22

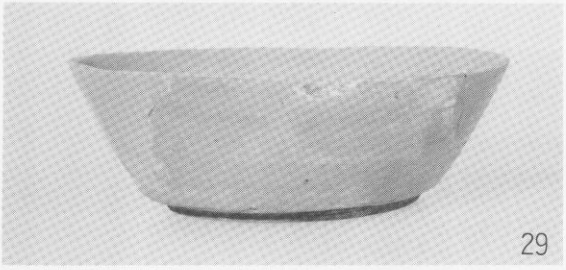

23


25


26


27


28

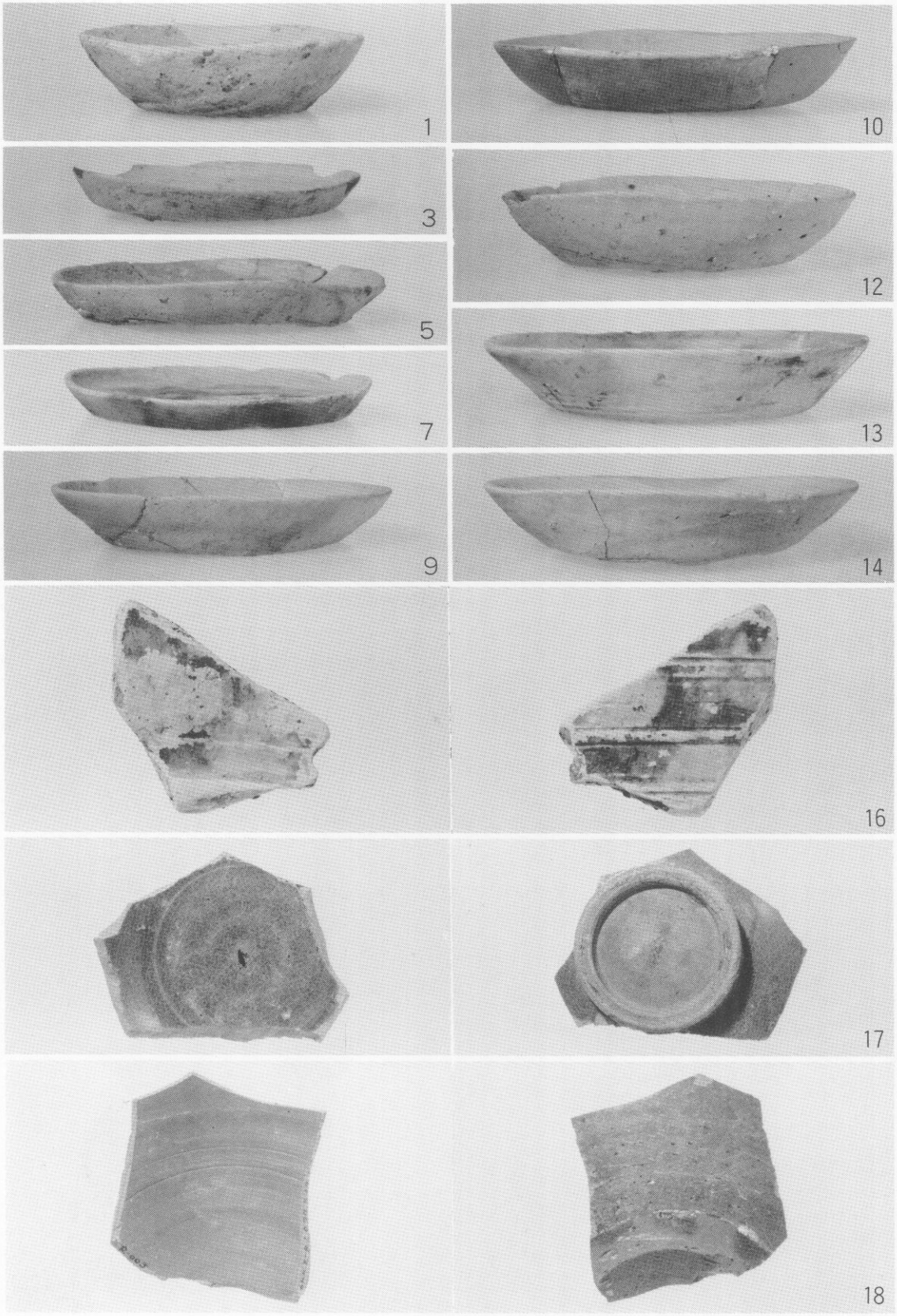

29


30

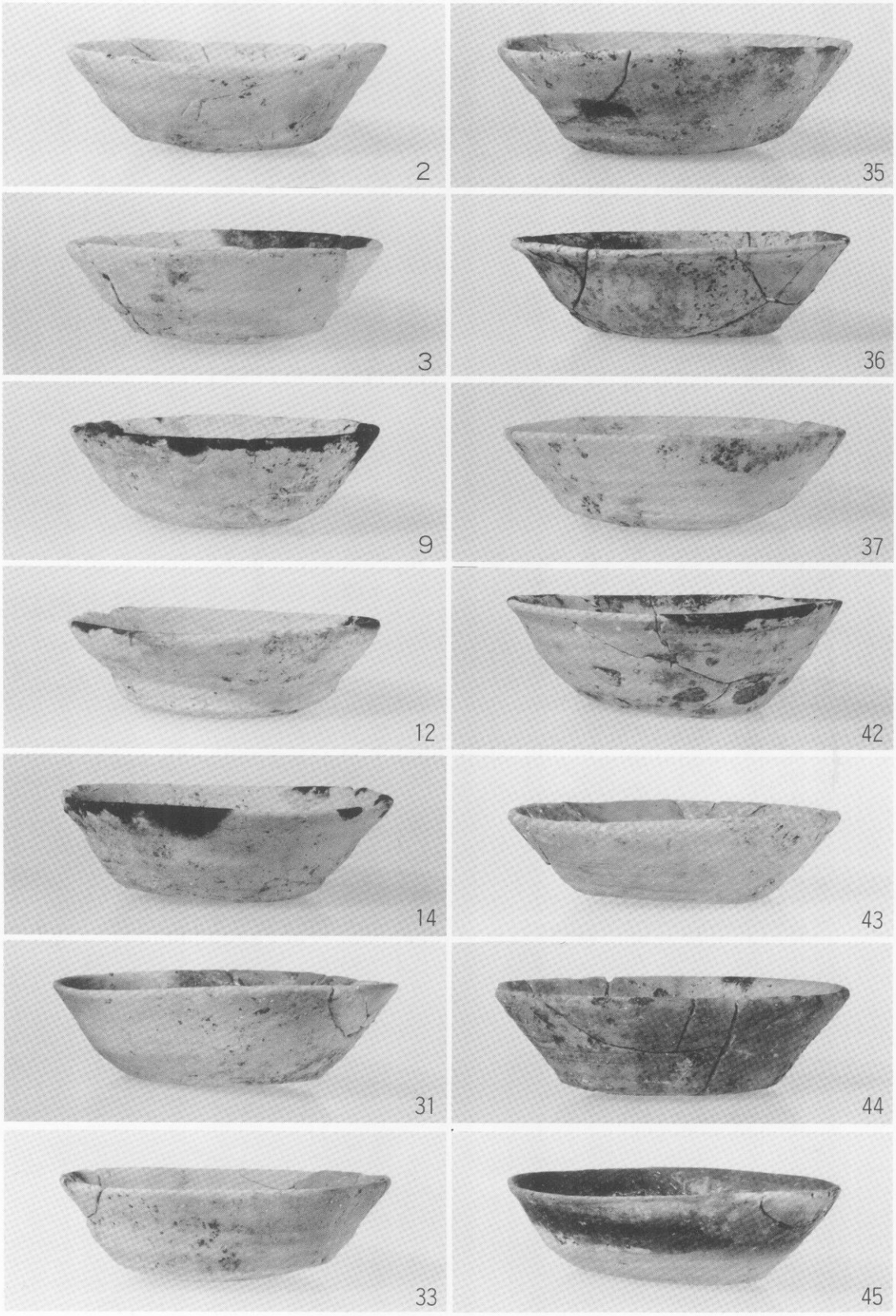

31


2

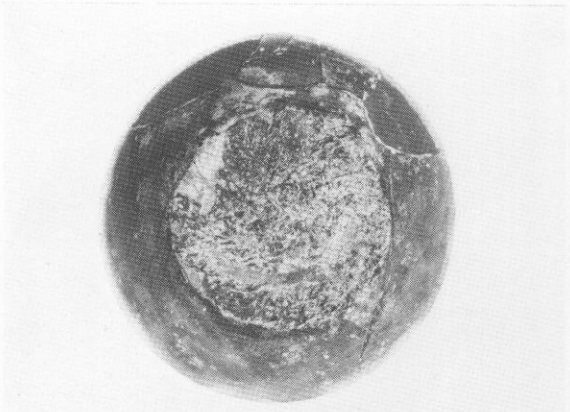
第121次調査　SX3635(20～23・25・26～31)・SX3652(2)
出土土器



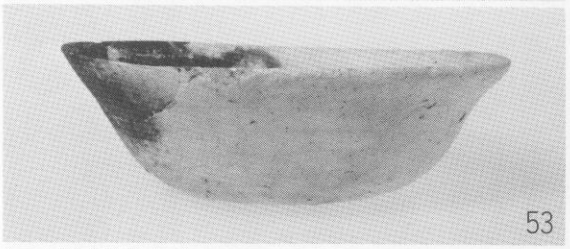
第121次調査　SX3650出土土器・陶磁器



第121次調査　SX3655出土土器

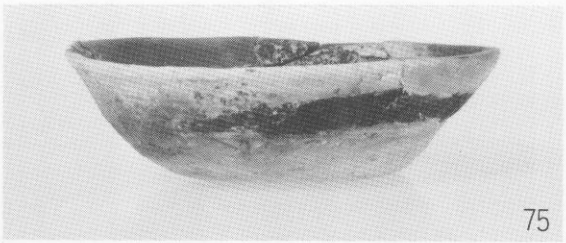


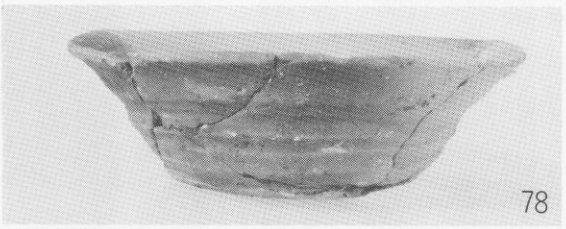


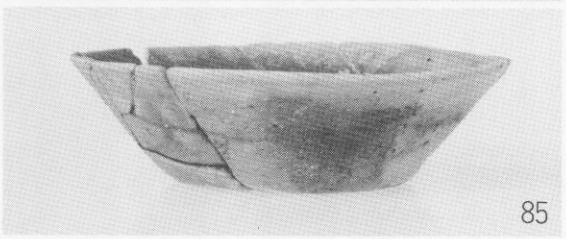


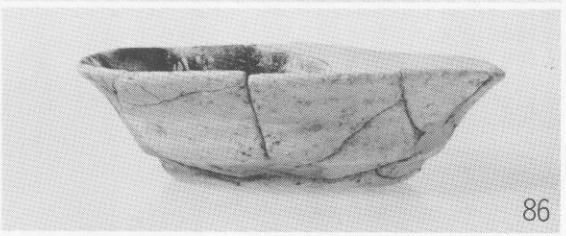




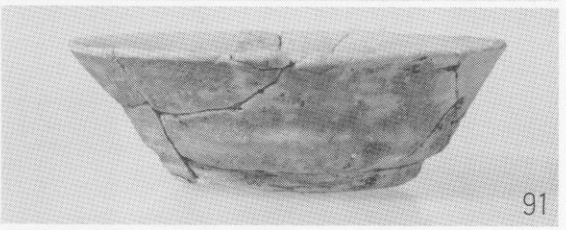






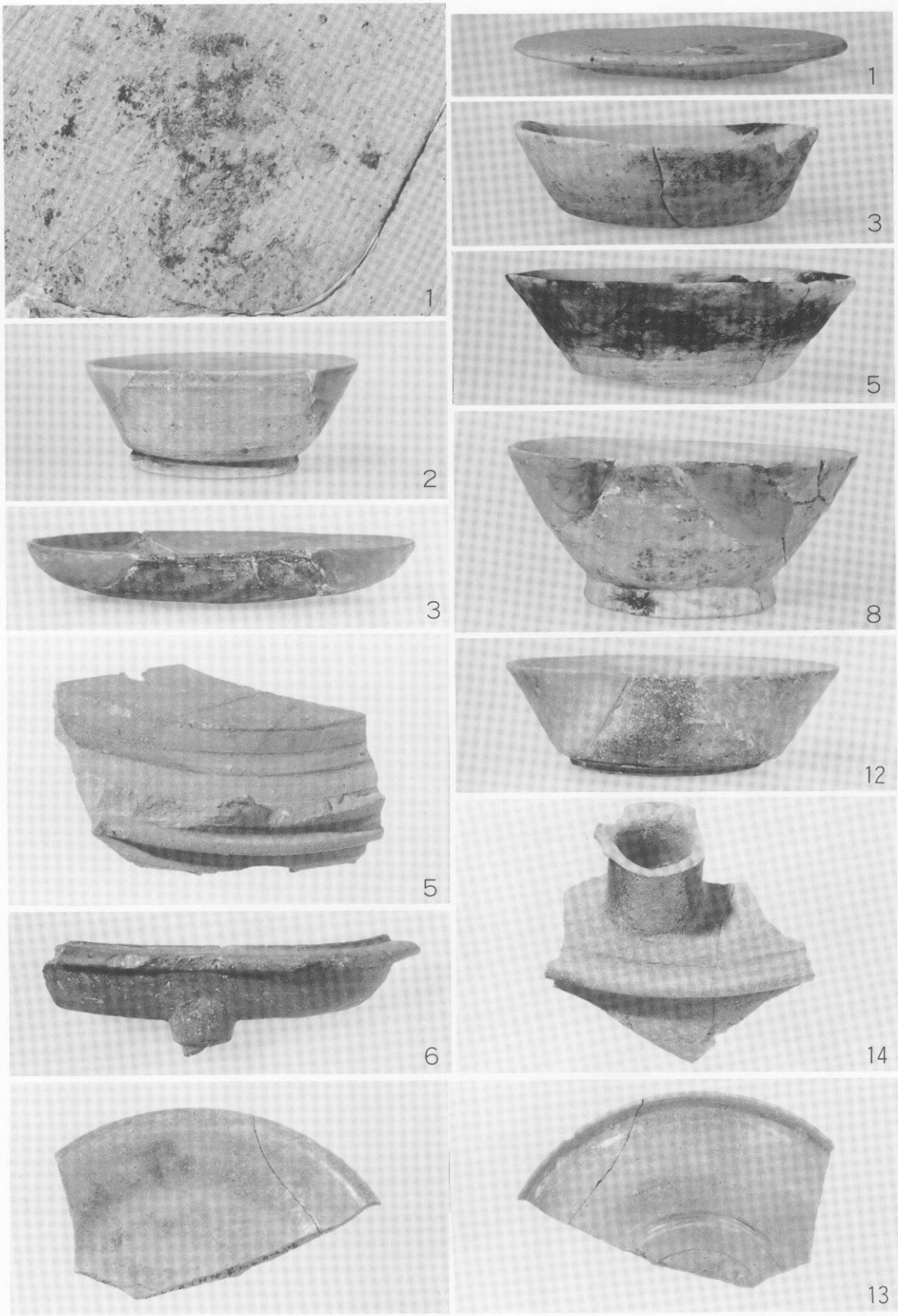




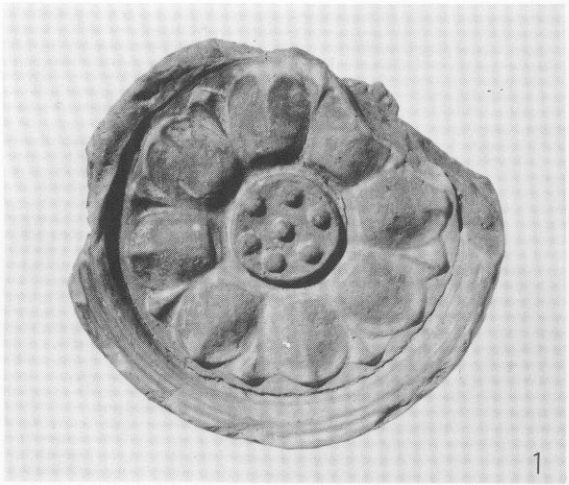




第121次調査　SX3655出土土器



第121次調査　茶褐色土層(1・2・3・5・6)・濁茶色土層(1・3・5・8)
黄灰色土層(12・13・14)出土土器・陶磁器

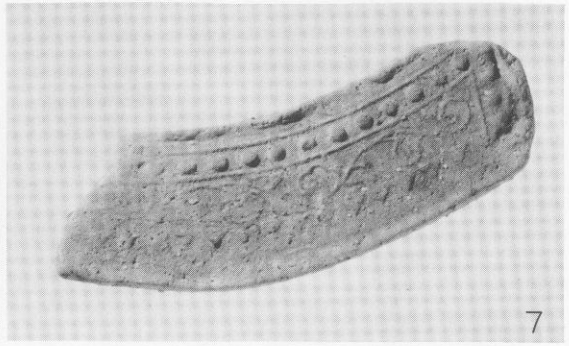

1


2


3

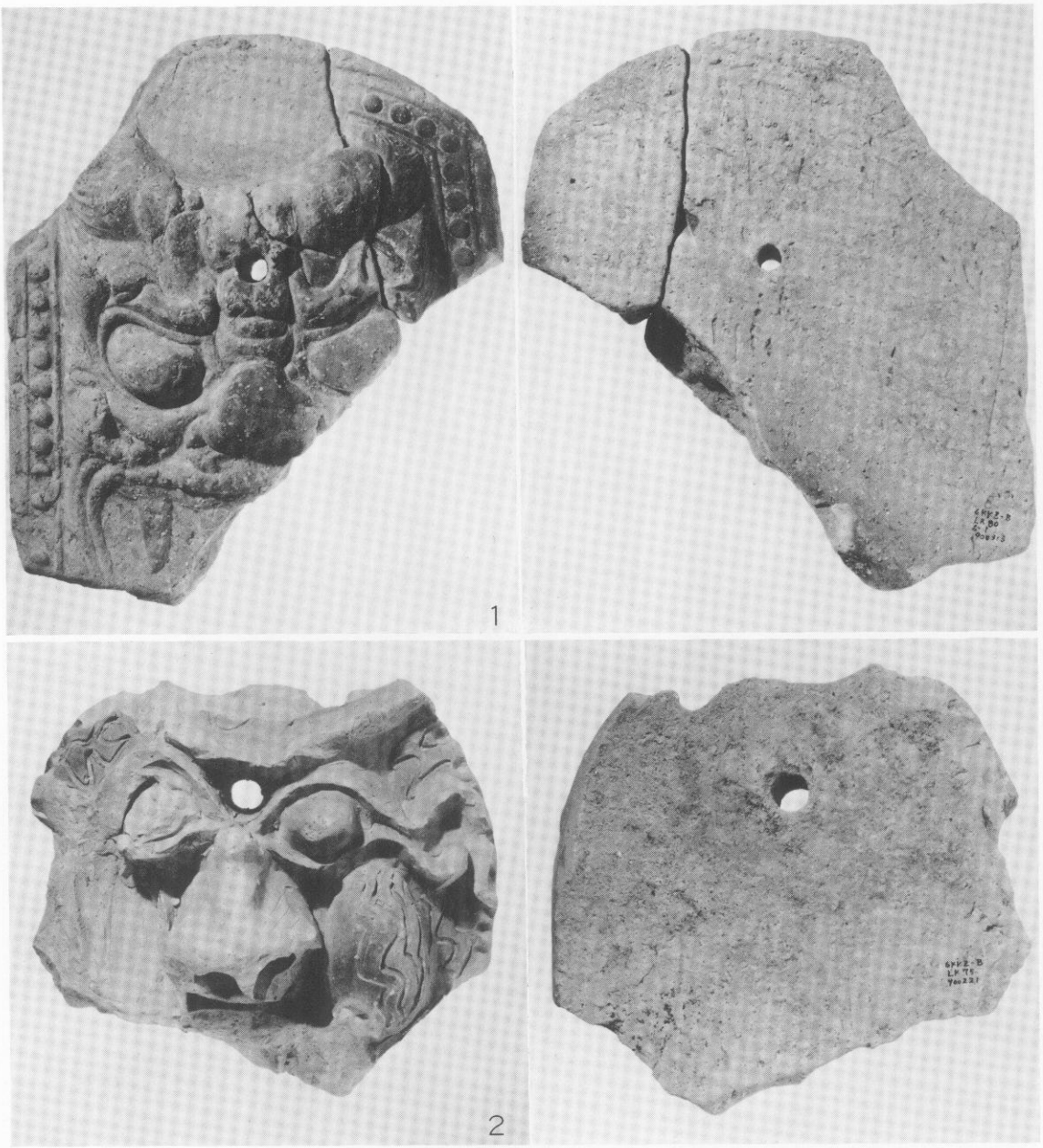

4


5

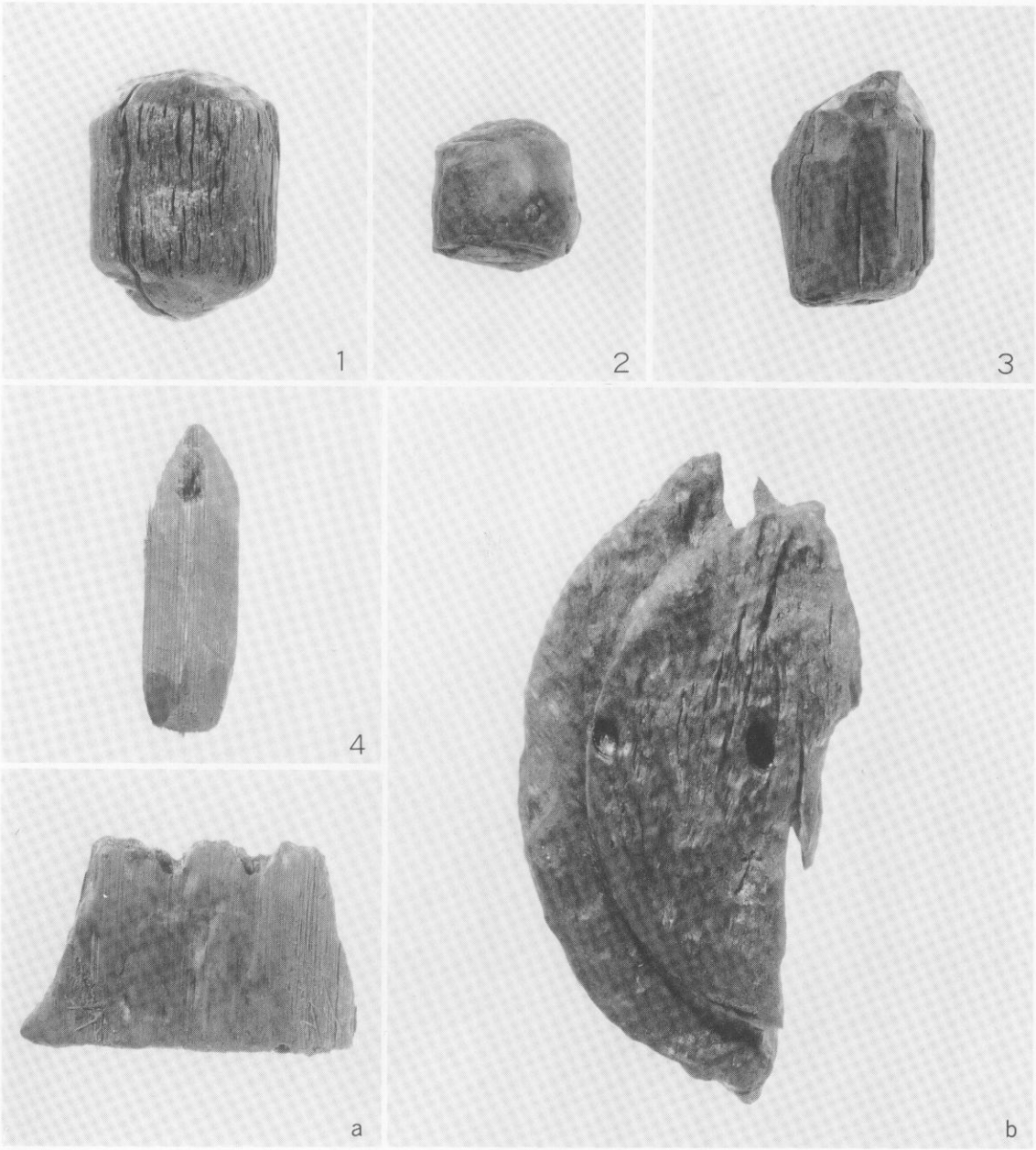

7


6

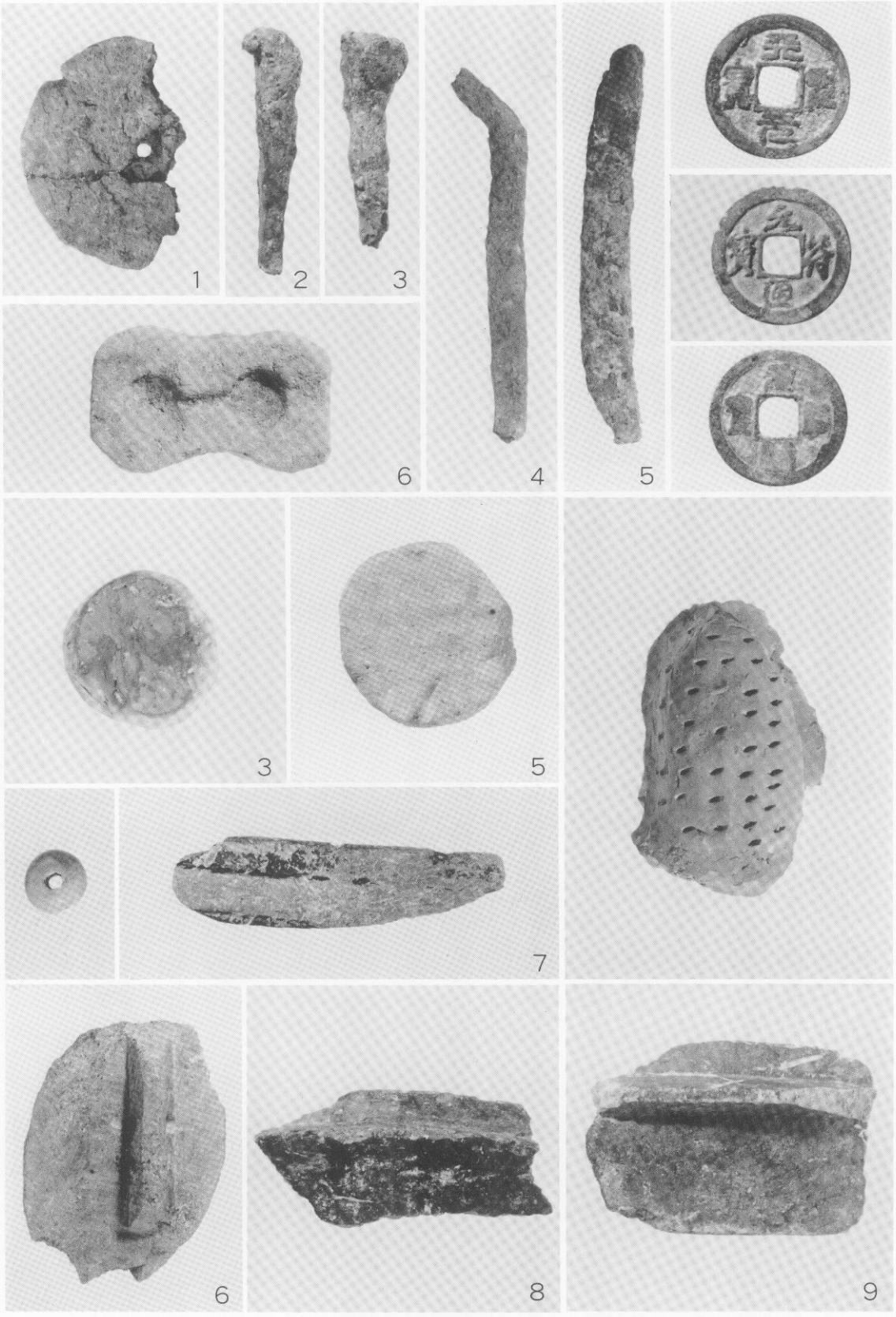
第121次調査　SX3635出土軒瓦



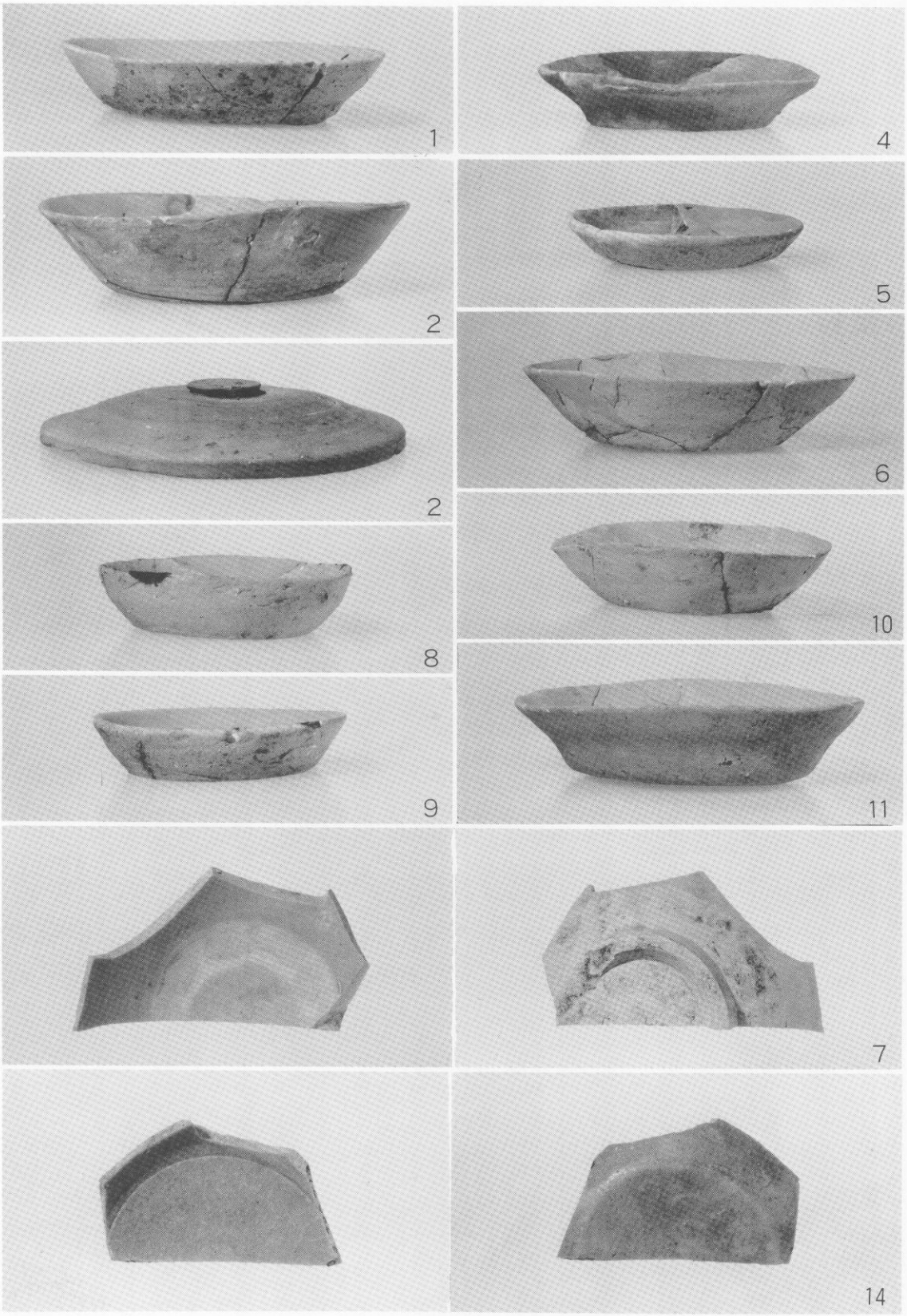
第121次調査　出土鬼瓦



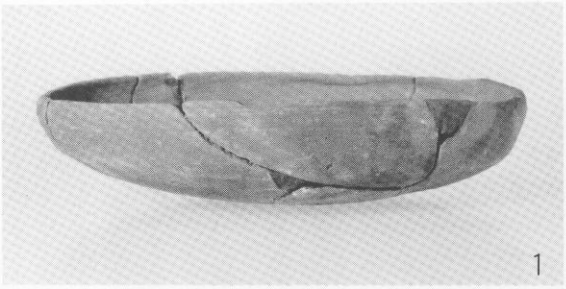
第121次調査　出土木製品

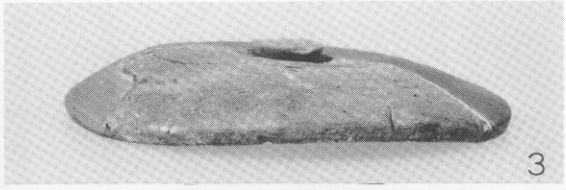


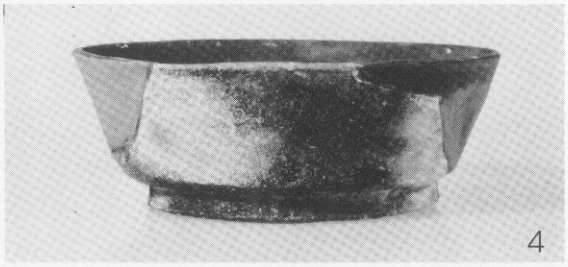
第121次調査　出土金属製品・銭貨・土製品・瓦製品・石鍋・石製品・ガラス製品



第122次調査　SB3675(1・2) SD3664(2) SD3666(4・5・6) SD3667(7)
SD3668(8・9・10・11) SE3690(14)出土土器・陶磁器

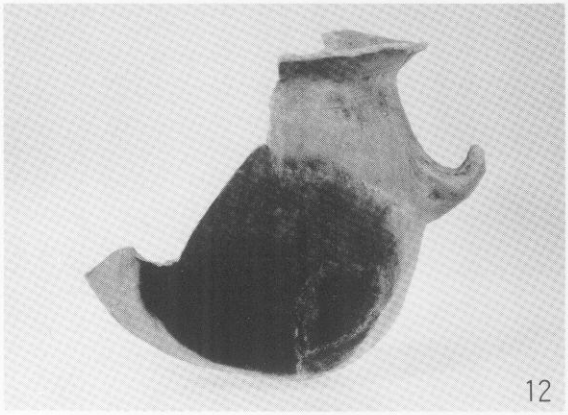

1


3

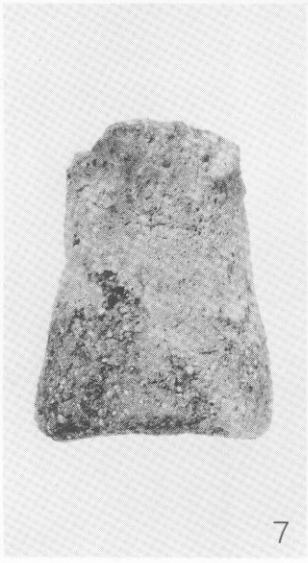

4

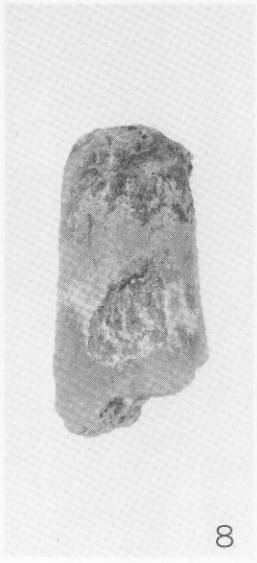

2


5


12


13

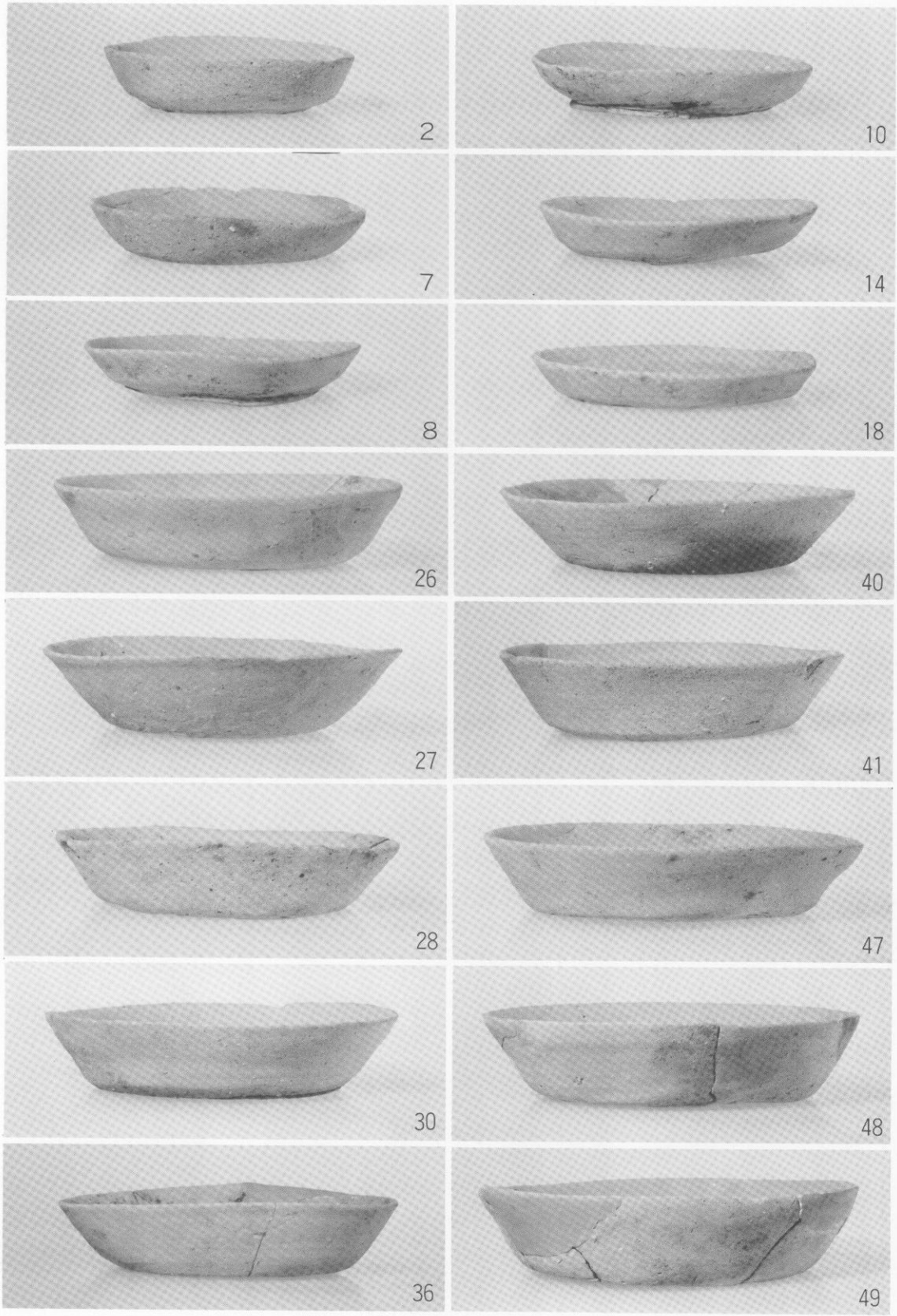

7


8

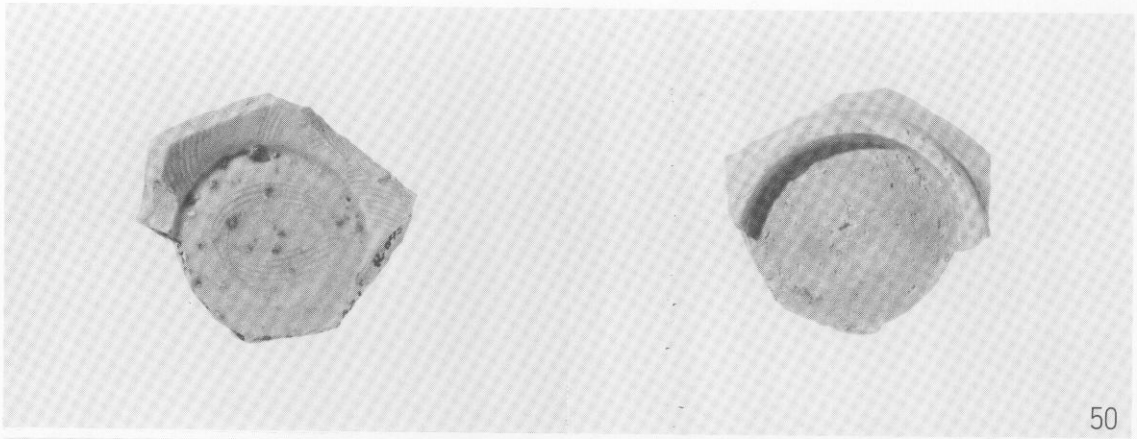

9

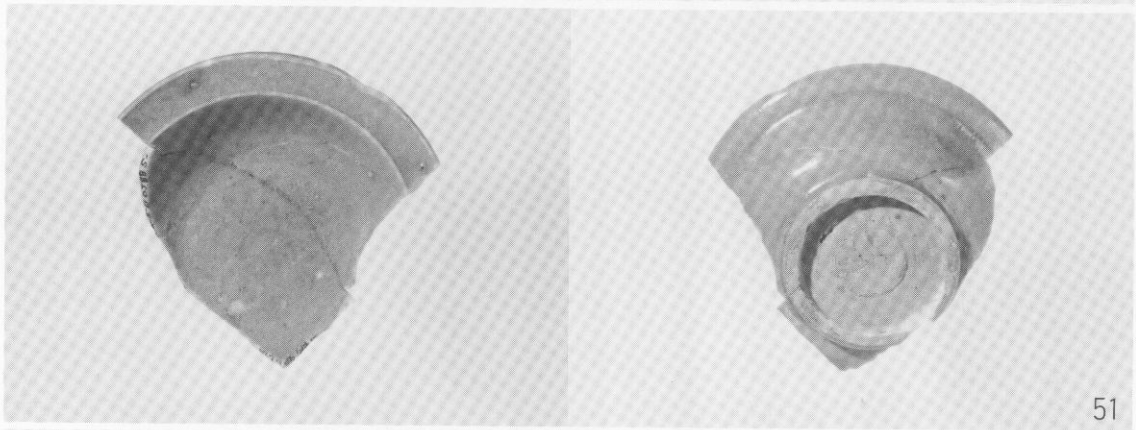

10

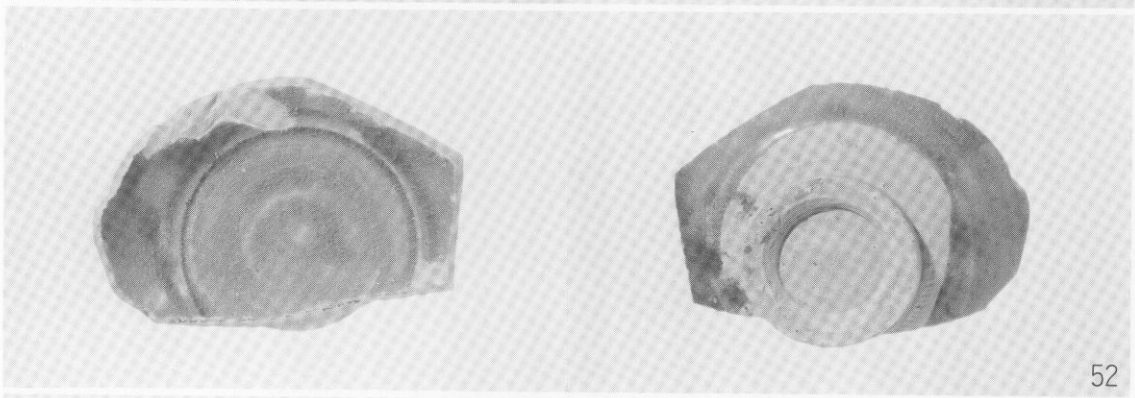
第122次調査　SE3680出土土器・鞴羽口

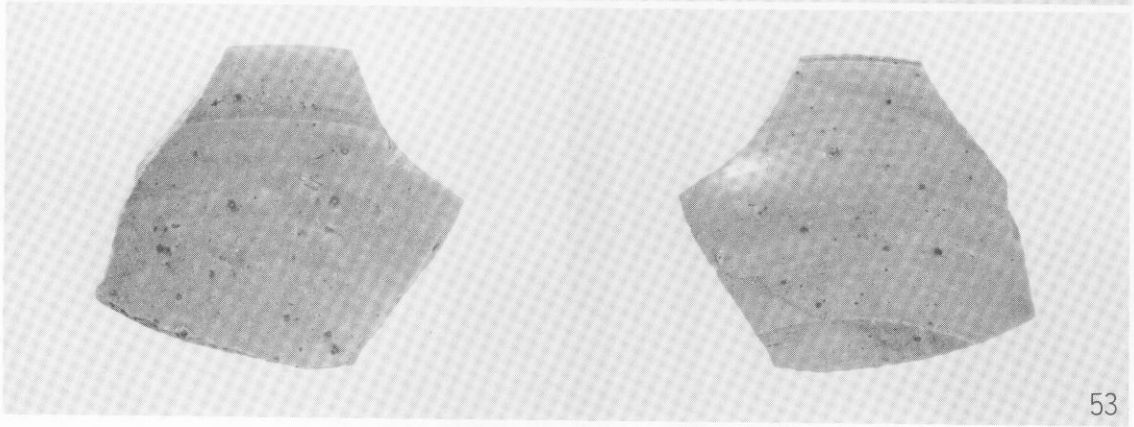


第122次調査　SK3672出土土器

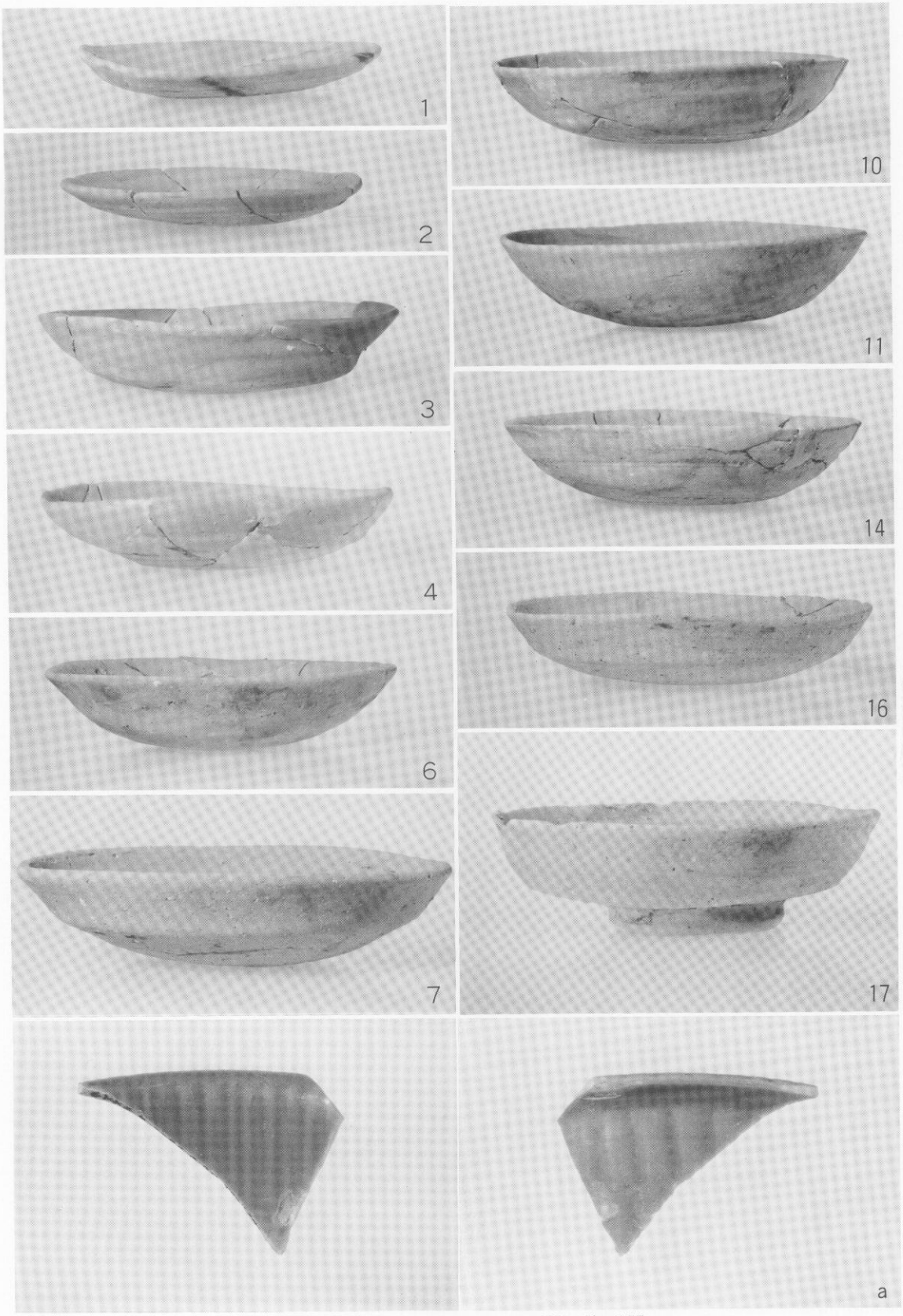








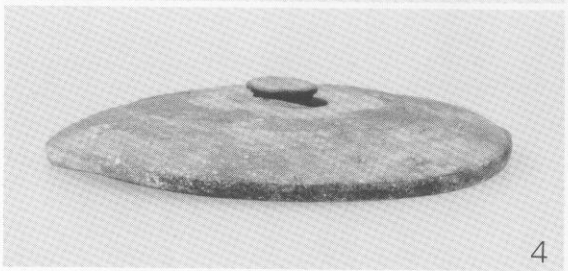
第122次調査　SK3672出土陶磁器



第122次調査　SK3678出土土器・陶磁器


2


3


4


11


12

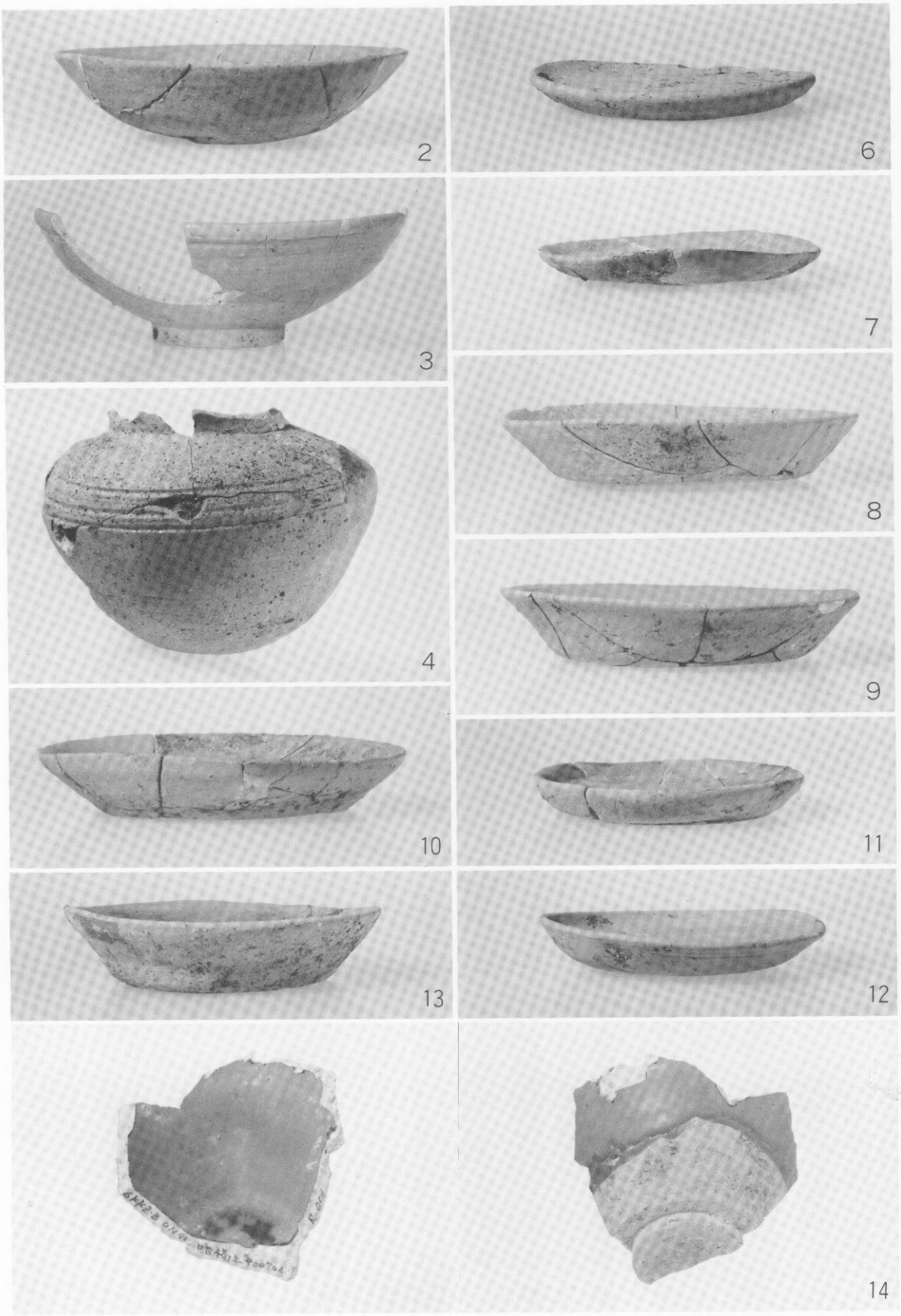

6


7


9

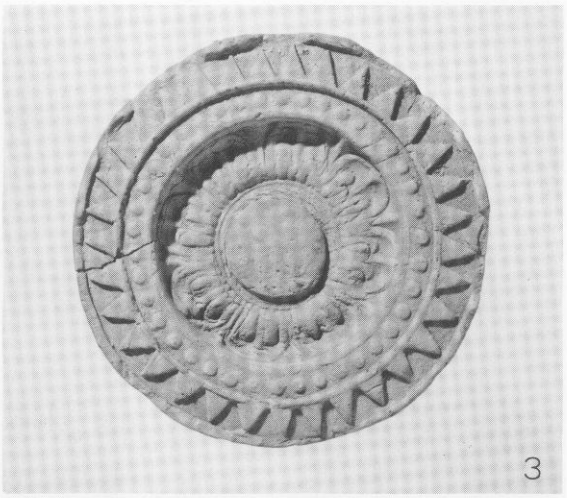

13

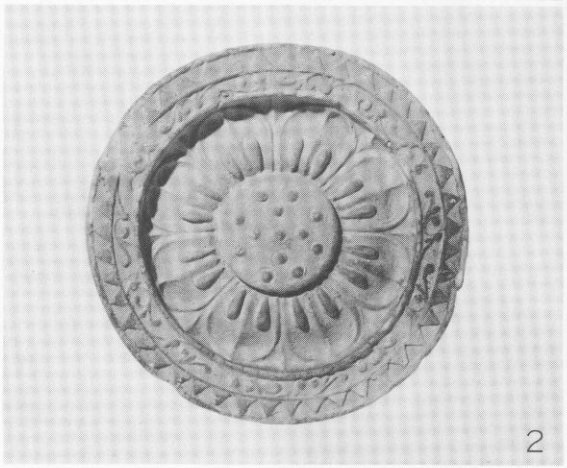
第122次調査　SX3682出土土器



第122次調査　暗褐色土下層（2・3・4）・茶褐色土層（6～10）・暗褐色土層（11～14）
出土土器・陶磁器


1

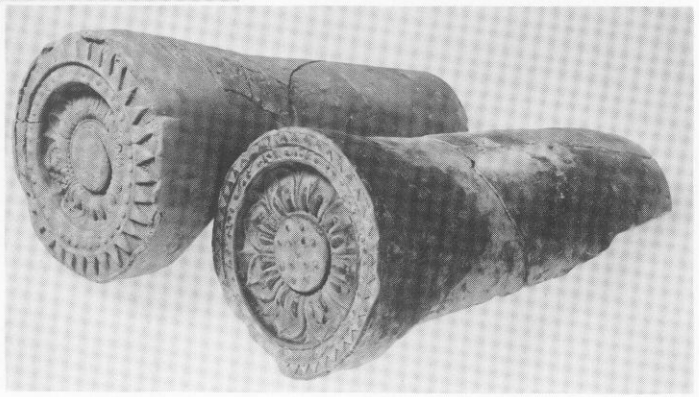

3


2

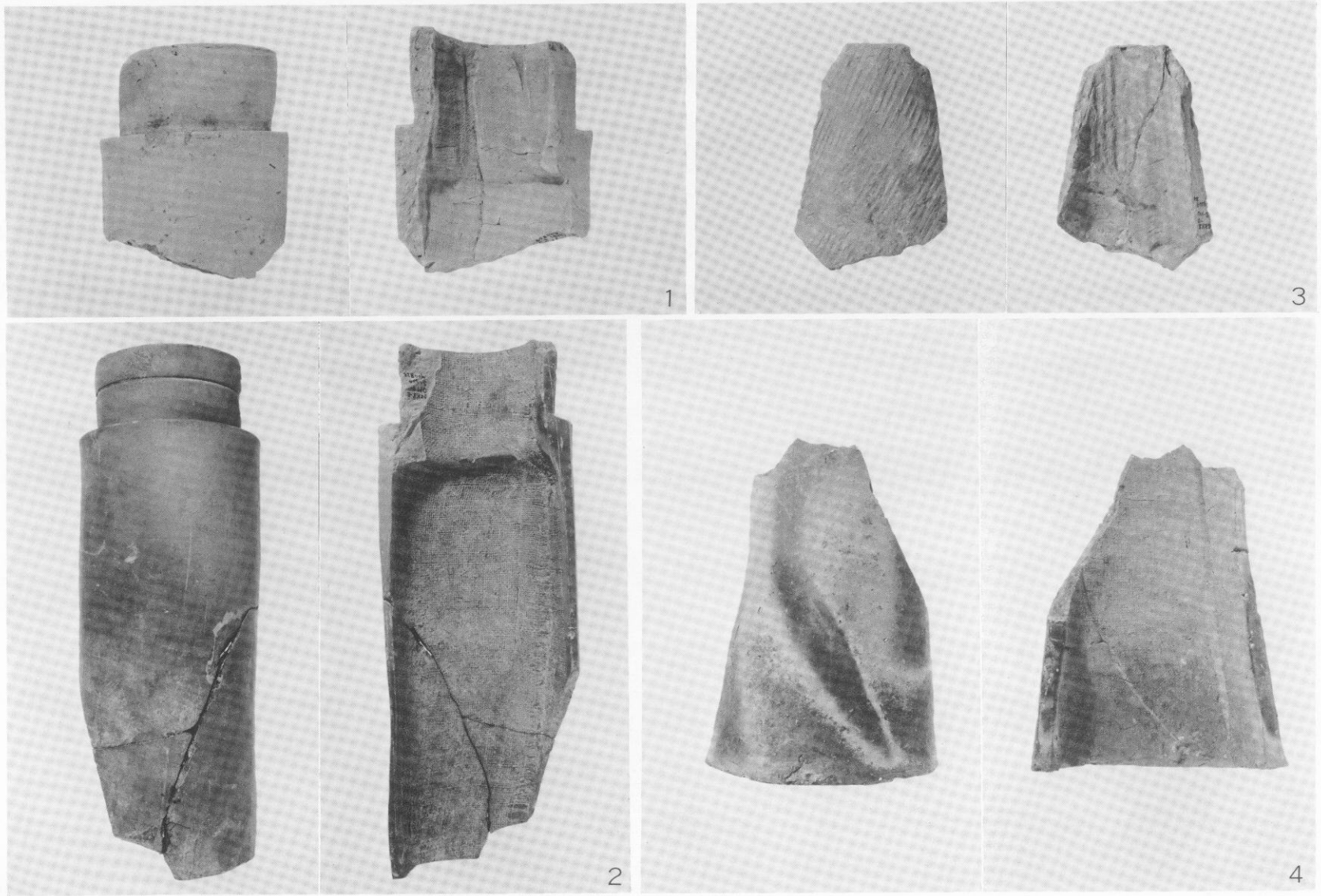

3


1

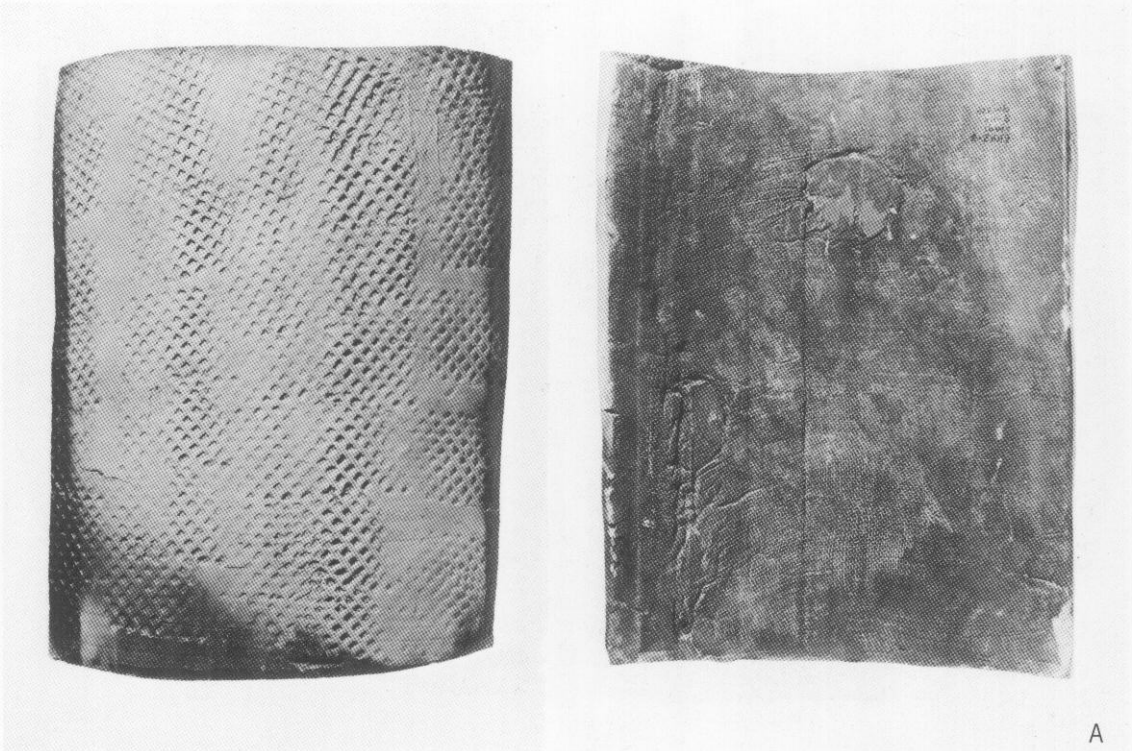
第122次調査　SE3680出土軒瓦



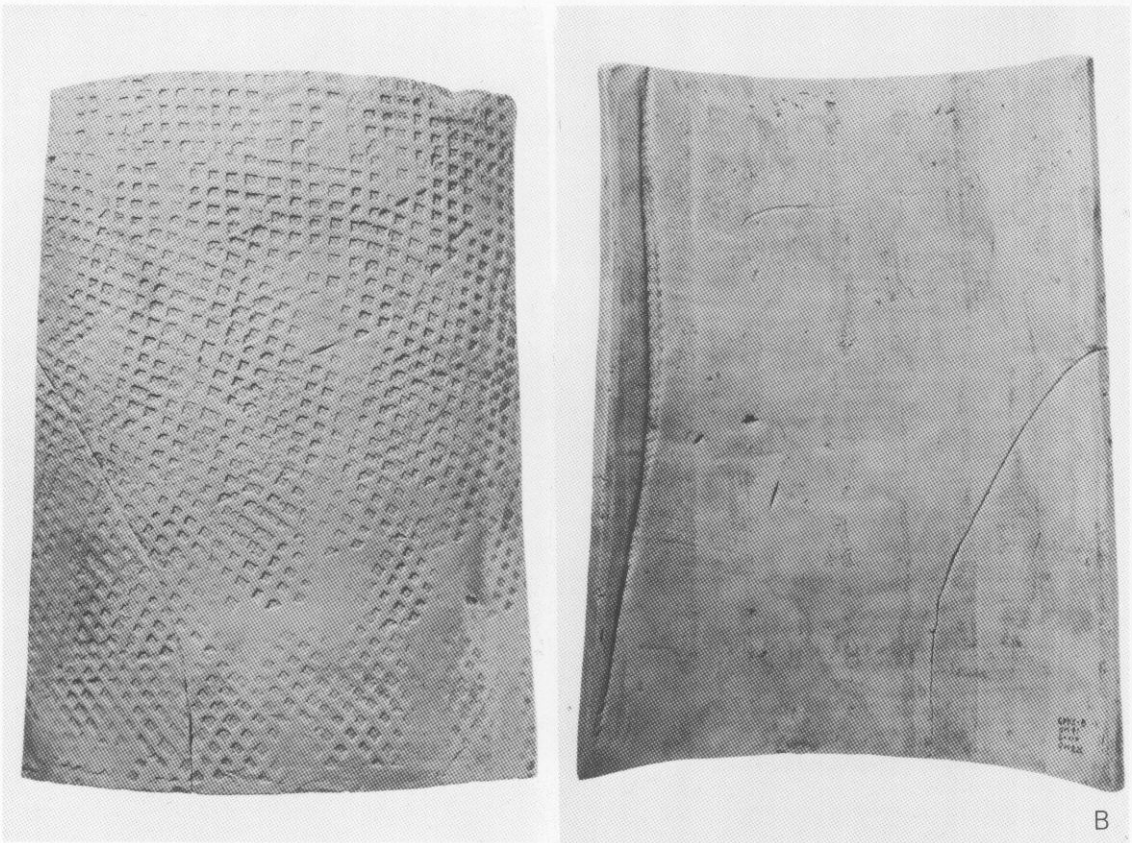
SE3680出土軒丸瓦２・３の丸瓦部



第122次調査　SE3680出土丸瓦

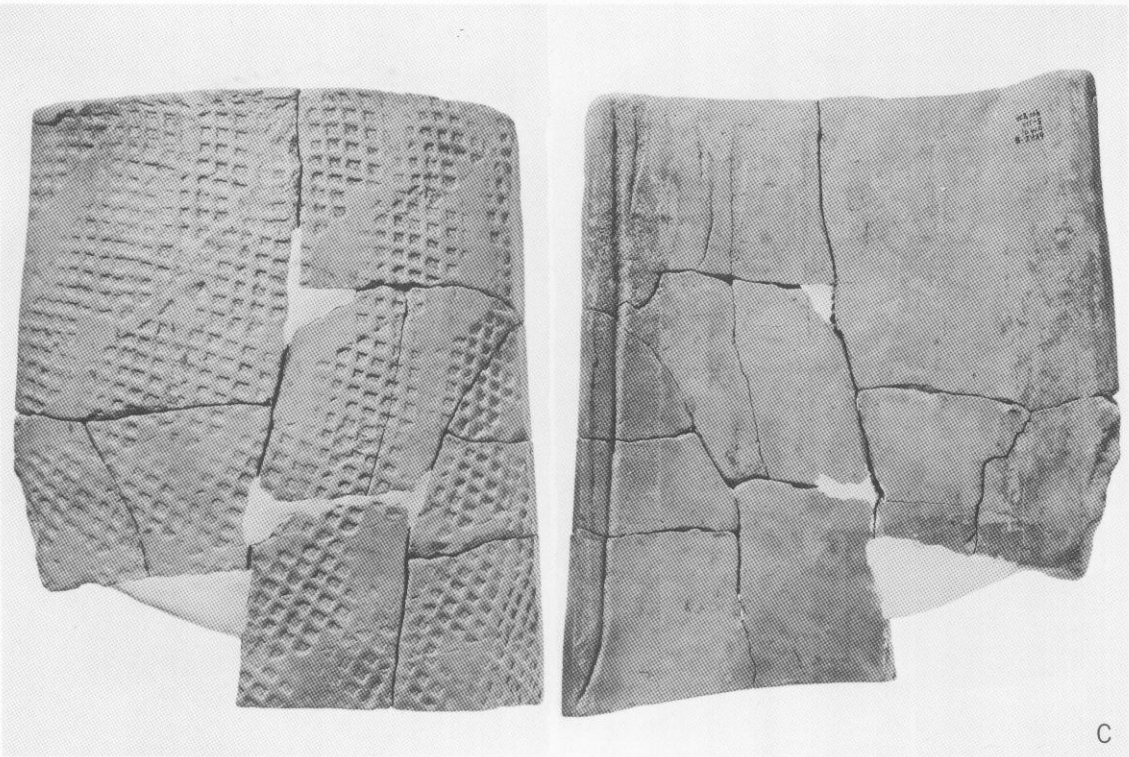


A

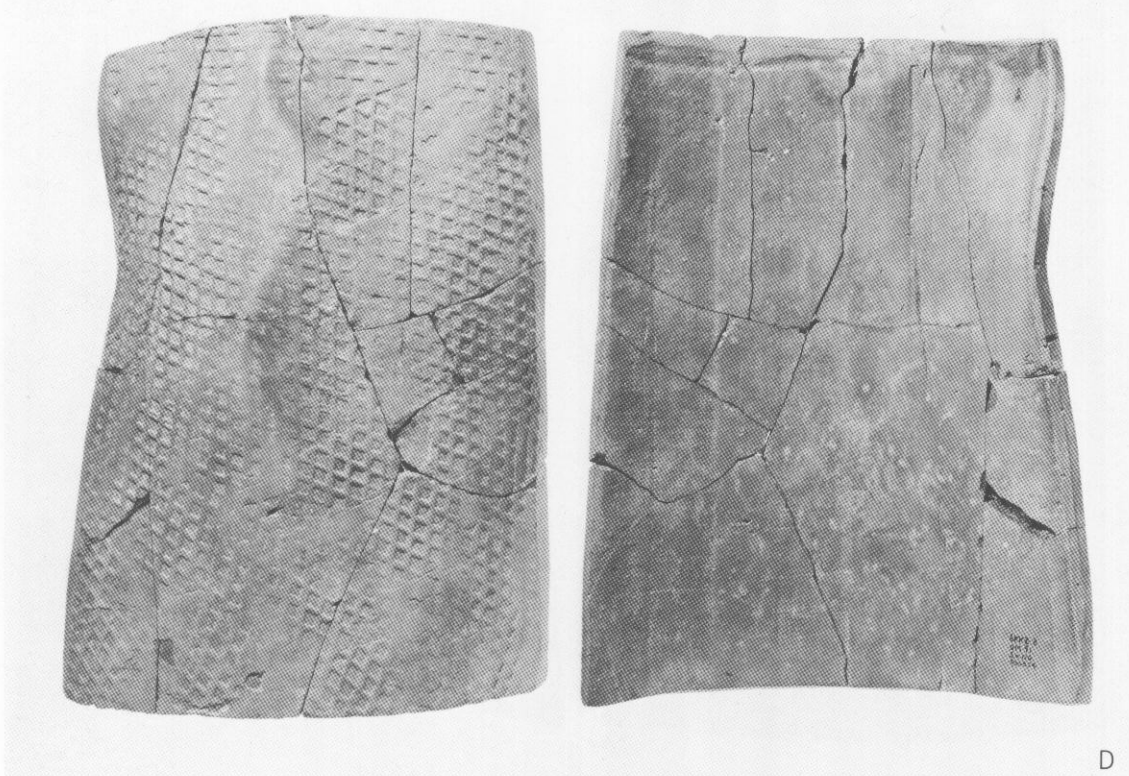


B

第122次調査　SE3680出土平瓦

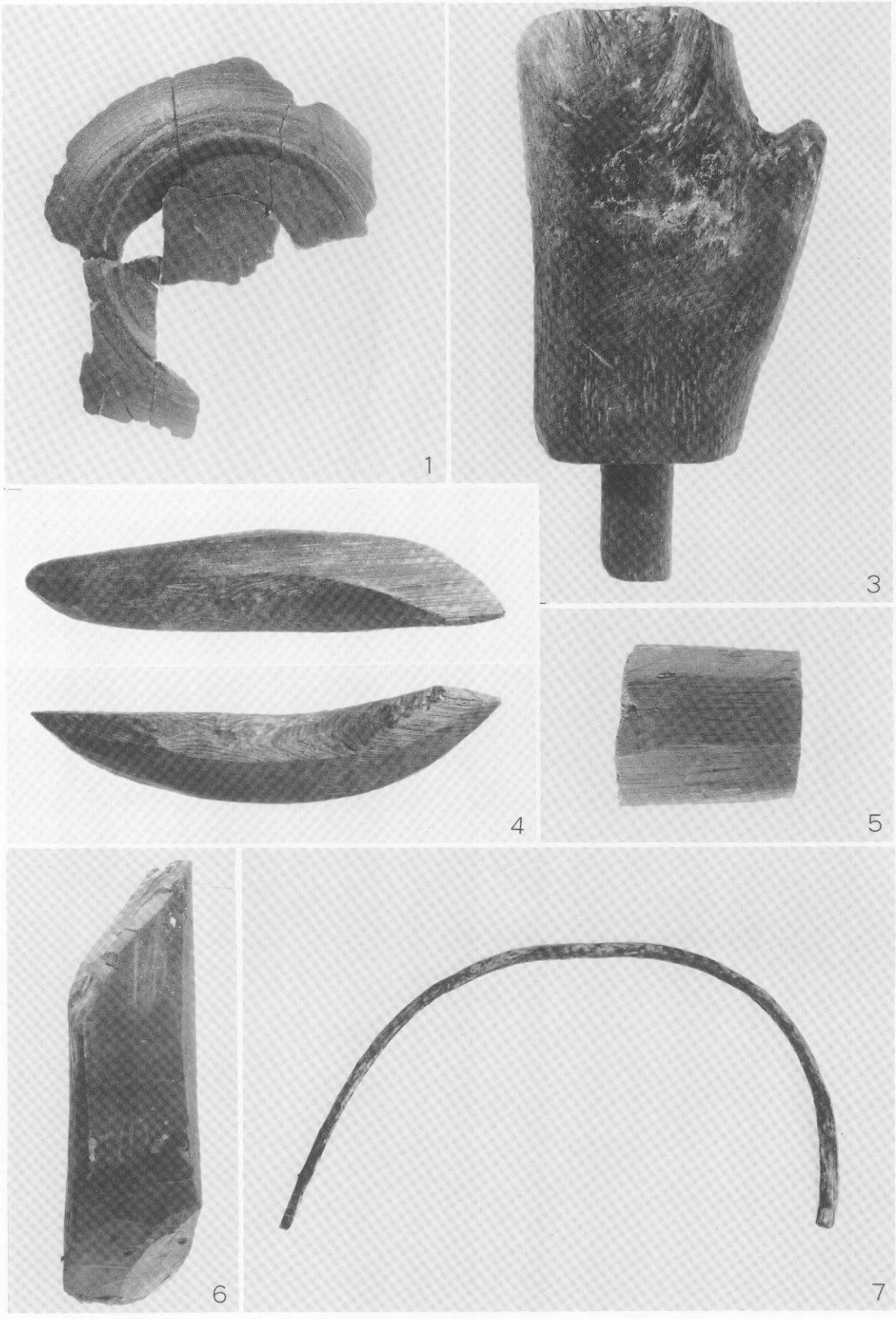


C

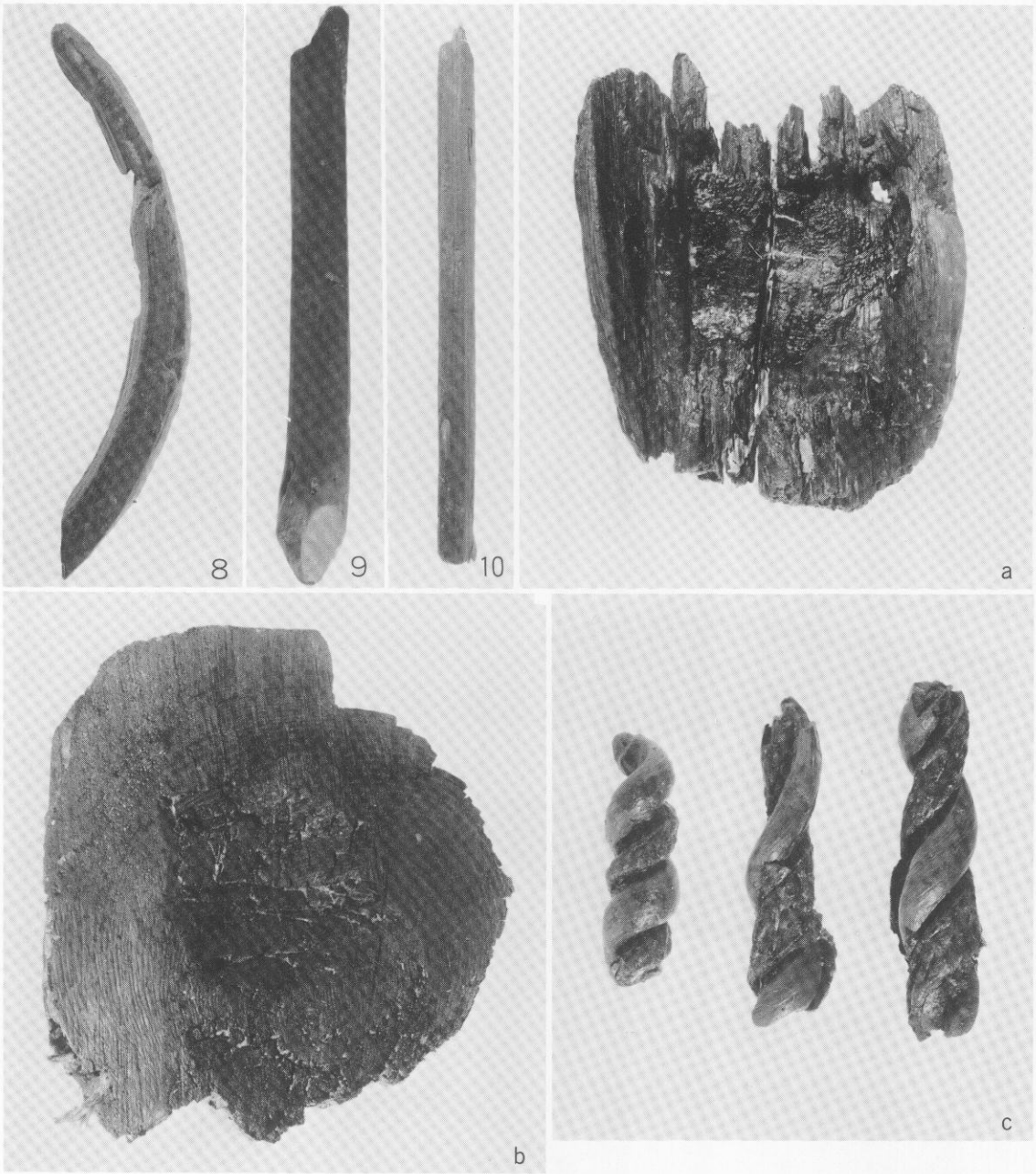


D

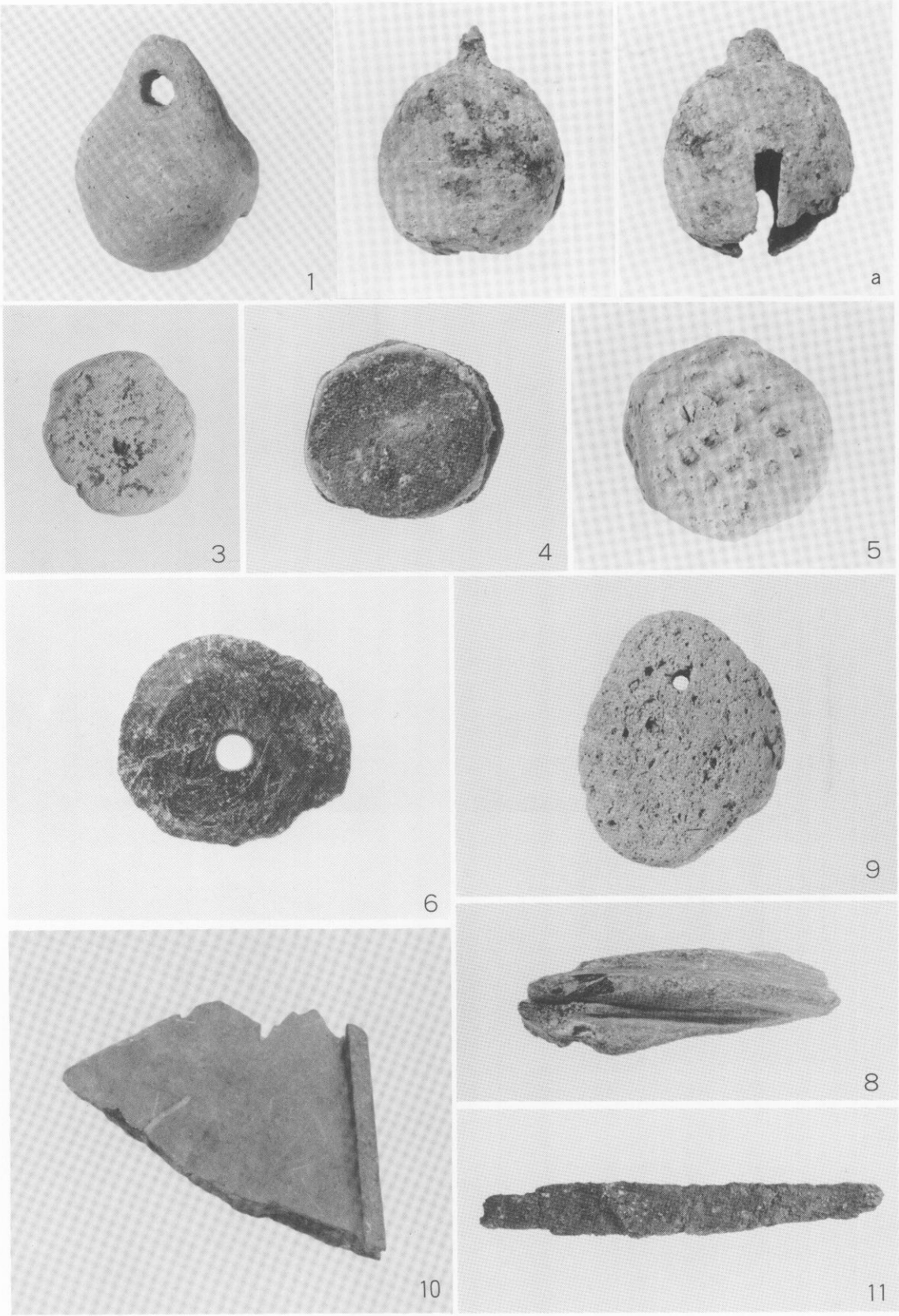
第122次調査　SE3680出土平瓦



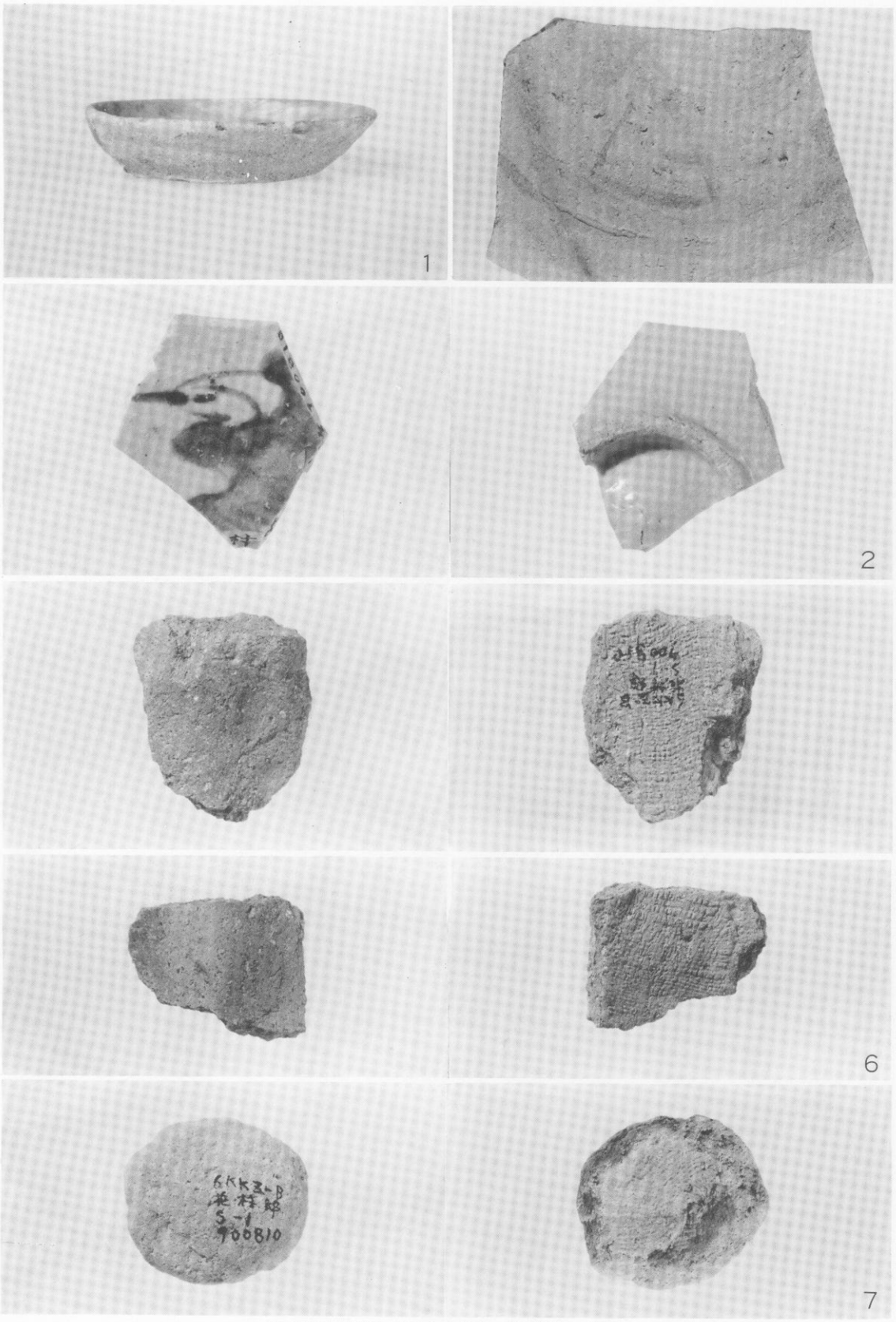
第122次調査　SE3680出土木製品



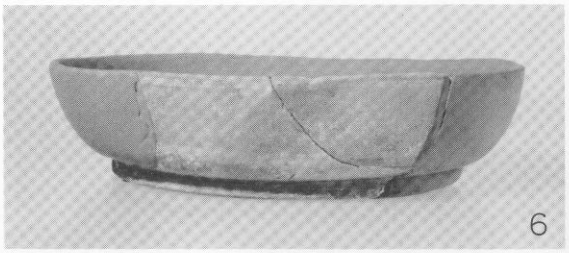
第122次調査　SE3680出土木製品

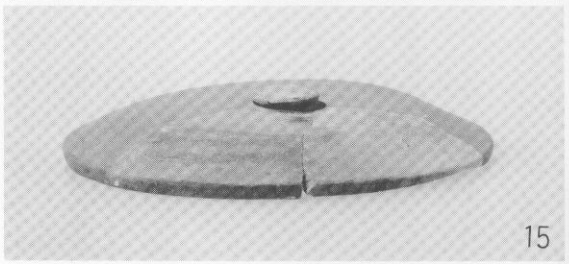


第122次調査　出土土製品・石製品・金属製品

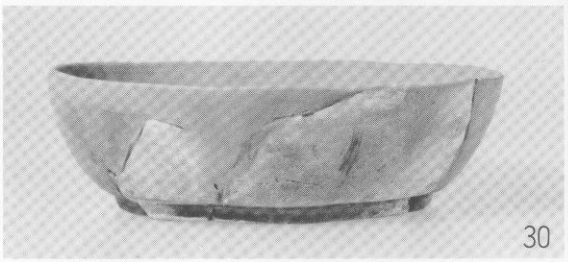


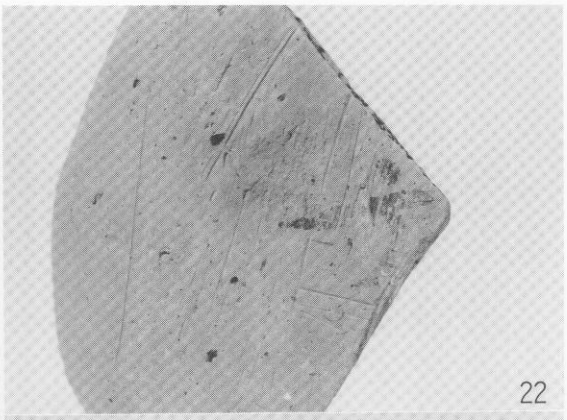
第123次調査　出土土器・陶磁器・塩壺

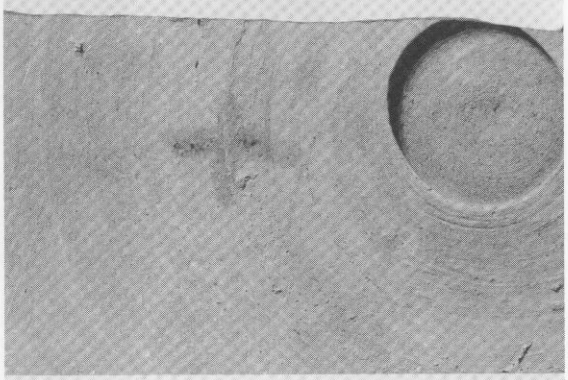




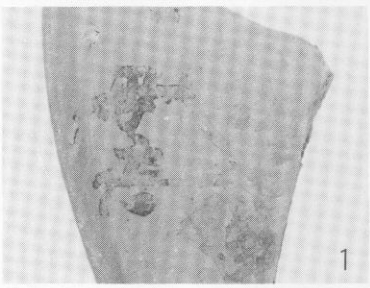


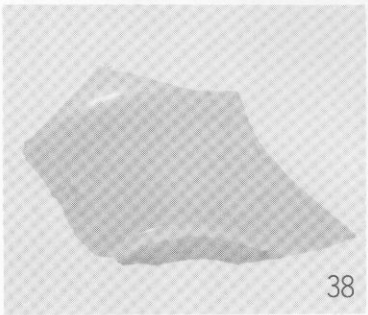


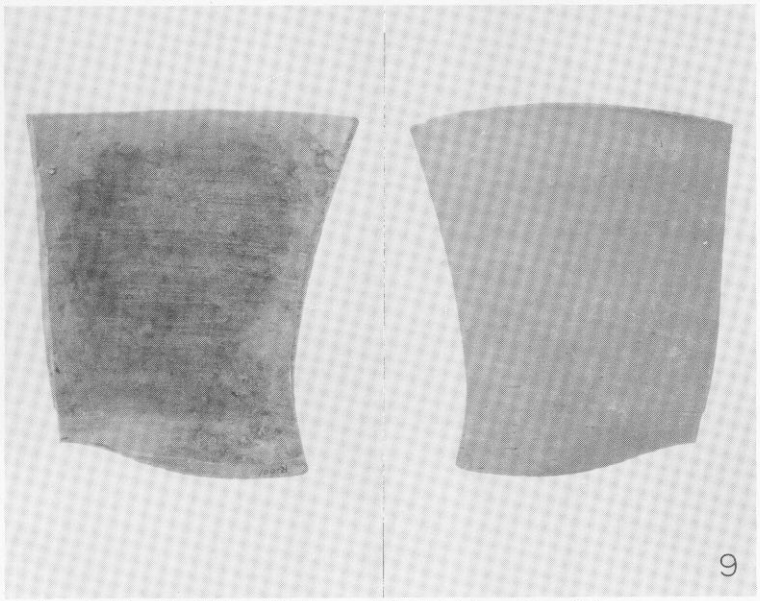




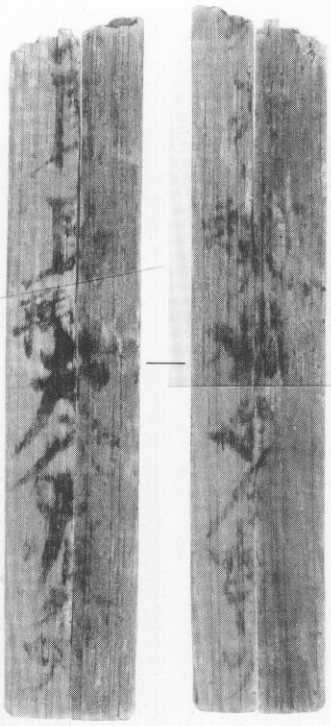




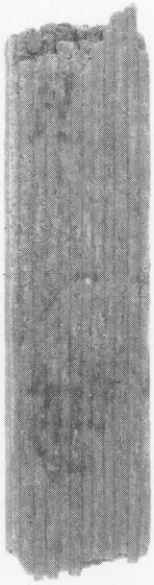




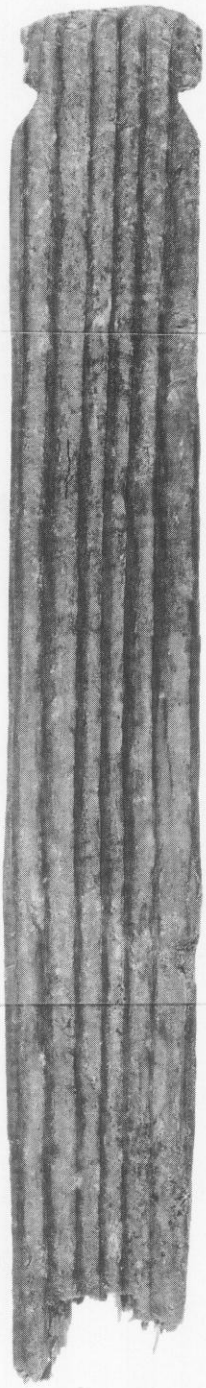
第124次調査　SD2340出土土器・陶磁器・鞴羽口　最下層(1・6・9)・
下層(15・17・22)・上層(33・38)・中層(30)

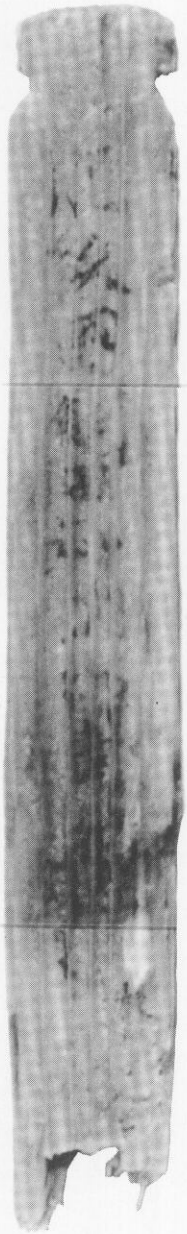


1



2





赤外線テレビ

3





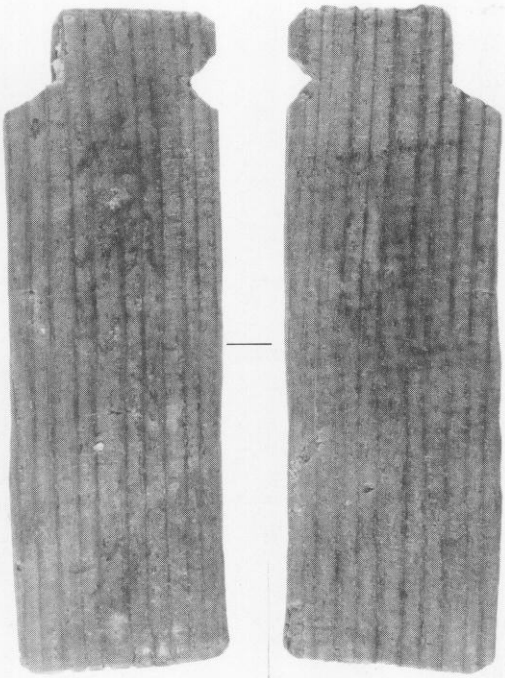
赤外線テレビ

4

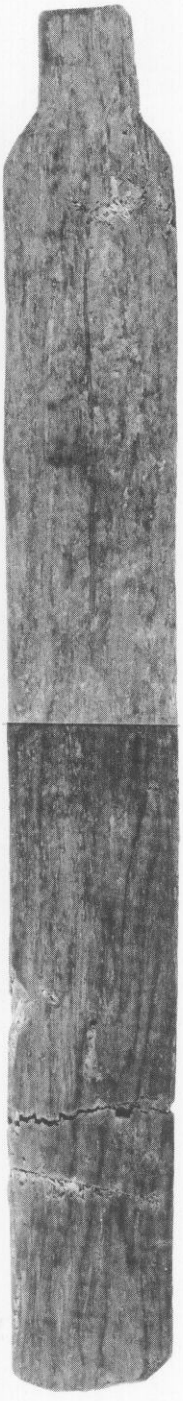
第124次調査　溝SD2340出土木簡



5



6



7



赤外線テレビ

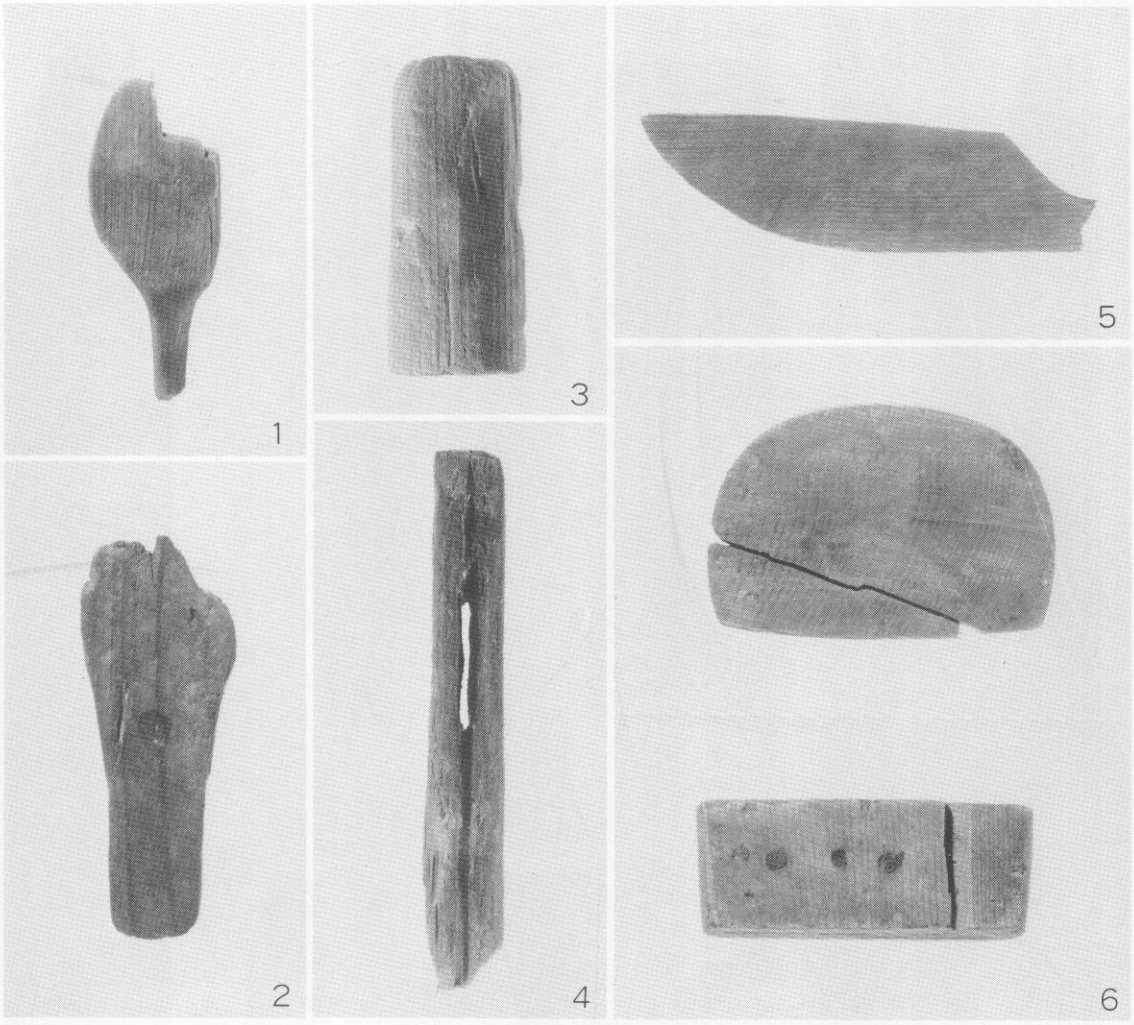


赤外線テレビ



赤外線テレビ

第124次調査　溝SD2340出土木簡



第124次調査　出土木製品

大　宰　府　史　跡

平成2年度発掘調査概報

平　成　3　年　3　月

発　行　　九　州　歴　史　資　料　館
太宰府市石坂4丁目7番1号

印　刷　　赤　坂　印　刷　株　式　会　社
福岡市中央区大手門1丁目8－34